

手を、に、握り締めるんです。もう、もう、力が、力が、ないんです。(泣き崩れる) 綱帯。この手だね。(かう云つたかと思ふと、手に持ったハンケチで、自分の眼をおさへ) 畜生、涙みたいなものが出て来やがる。(間) 眼鏡。僕は、かう見えて、人一倍、物事を考へるたちなんです。この決心をするには、それだけの理由があるんです。

綱帯。これちや、なるほど、無理もない。君に取つちや、生きてゐるといふことは無意味だ。そこへ行くと、僕なんかは、なんと云つても、まだ、問題はこれからなんだ。つまり、僕は、自分の立場を悲觀的に解釋してゐる。そこなんです、事の起りは。僕が、許嫁の心持を忖度するにしても、考へやうによつては、もつと、積極的に、有利に、素直に、考へて見ること出来るわけなんです。自分の存在が、相手の幸福を妨げるといふ考へ、これちや、もう、理窟ぢやない。自分がさう思つても、相手はさう思つてゐないかも知れない。現に、この手紙です。(ポケットから一通の手紙を取り出し) まあ、読んで御覽なさい。

眼鏡。(それを受け取る。聞いて讀まうとする) なたとしては、やつぱり、その方を自由にしてあげる義務がありますね。それでよく事情がわかりました。あなたは、生きてゐちやいいない。

綱帯。(その邊を歩きまはりながら) どうして、世の中の女は、もつと冷徹に出来てゐないんでせう。君の、此の娘さんにしても、僕の、此の許嫁にしても、あんまり温かすぎる。僕たちを苦しめるのは、その温かい心なんです。少くとも、その思ひ出なんです。

眼鏡。さうとばかりも云へません。随分冷たい心をもつた女もいます。綱帯。さういふ女は男を悩ませない。男がなやまされたい。一度或る女の、温かい心に觸れたら、その女が、どんなに冷徹な態度を示さうと、男の心は、その女から離れきることが出来ない、それはつまり、女といふものが、優しすぎるんです。生れつき温かい心の持主なんです。僕はつくづくさう思ひました。さうして、その女のうちでも、僕の許嫁は特別な女なんです。まあ、此の手紙をしまひまで読んで御覽なさい。

眼鏡。ええ、もうわかっています。綱帯。わかっているでせう。わからなければ讀

が、よく見えない) 綱帯。見えませんか。(手紙を見ずに) かう書いてあるんです。「お手紙拜見いたしました。あなたに誤解をいらつしやるんです。それちや、あのときは、ただ何となく涙が出ました。泣くといふことが、それほど単純な気持ちからだと思つていただけでは困ります。一番心配してゐたあなたの御眼が、元の通り完全に見える、さうなつたことだけでも、泣きたいほどうれいのです。お顔の疵がなんです。あなたの肉體が、若し、わたくしに取つて大切なものであるなら、それは、ただ、あなたのお心が、そこにあるといふ目印としてなのです。」

「お別れしてゐた五年間、二十の春から二十五の秋まで、わたくしは、あなたの御寫眞を一度も出して見ませんでした。今だから申します。それは、物を言はない癖、心に觸れない姿が、どんなにつまらないものかといふことを知つてゐたからです。あなたは、やつぱり獨逸にいらつしやる。伯林大學の研究室で、せつせと勉強していらつしやる。さう思つてゐるだけが、せめてもの慰めだつたのです、時たま下さる、あの電報のやうなあの

だ。何と書いてあります。一あなたが御自分の姿を、それほど醜いと思召すなら、わたくしも、自分が醜くなるやうに努めます。世間に對してならば、どんなことでもします。炭を顔に塗つて外へも出ます。しかし、わたくしは、女です。少しでも美しく、さう思つて大事にする見目かたちは、ただあなたへのささやかな心盡しなのです。わたくしが美しくないといふことは、あなたに才能がないといふことほど、恐ろしいことなのです。二人にとつて恐ろしいことなのです。それ以外のことは、ただ心と心との問題です。わたくしの、空っぽな頭を、あなたは軽蔑もしず、にみて下さる。あなたのお顔や、お姿を、それが、わたくしに敬意を示したものでせうなければ、何んで、美しいとか醜いとか申しませう。」どうです。ここに至つて、僕はもう返す言葉がない。僕は、これでも不幸でせうか。僕は何を苦しんでゐるのだ。僕は、なぜ死ななければならぬんだ。

眼鏡。そこが、男の意地です。與へるといふものを、受け取つてはならないことがある。あなたは、世間の男のやうに、エゴイストではない。エゴイストでありたくない。さうい

お讀書、あれが、あなたのお聲、あなたからの愛の言葉だつたのです。あなたと云ふ方は、わたくしには、一つの神祕な存在です。いつでも、何か考へておいでになる、あのお顔は、決して、女に親しみを感ぜさせる顔ではありませぬ。ですから、わたくしは、あなたが、あなたのお書翰で、何かお仕事をなさる、その時を選んで、あなたの後姿を、いつも見に行くことにしてゐました。両手で頭をかかへて、本を讀んでおいでになる、その頸筋から肩へ、肩から腰へ、その餘念のない後姿を、そこから感じられる落ちついた息づかひ、お笑ひになつてはいやですわ、ただそれだけが、わたくしのものといふ気がしたので、それと、あのお聲、今もちつとも變らないあのお聲、「美しいちゃん、お茶」つておつしやるあのお聲……。あれもわたくしのものよ。」(だんだん聲がうるんで来る) ここだけ、「よ」で結んである。

眼鏡。實に感心な方ですね、その方は。然しどんなものですかね、そいつをそのまま受け取るのは、なるほど、蟲がよすぎますね。聞いてゐても胸がつまる。それだけ、その手紙の一句一句には苦しい努力が凝されてゐる。あ

ふ信念をもつてをられればこそ、かういふ決心ができたんです。しかし、實に偉大ですよ、そのへんは。

綱帯。だが、君のやうに、純な氣持ぢやない。そこが、僕自身も不満なんです。「堪忍して頂戴……」桃割の少女が、死に臨んで、若い戀人の胸もとに囁いたこの一句は、男一人の命には代へられない。君が——それは何時のことか知らないが——今夜まで生きのびてゐたこと、そのことが既に不思議なくらゐる。幻を追ふものは山を見ず、谷を見ず……まして汽車くらゐなんだ。

「サンキュー」ああ、サンキュー、サンキュー、こればかりは、幾度聞いても聞き飽きません。あの毒一つで、口が一杯になるらしいんです。「サンキュー」が、時とすると「サンキュー」と聞いたり、「サンキュー」と聞いたりするんです。それから、また、それを云ふ口つきです。ああ、たまらない、たまらない。僕は、それが面白さに、どれだけ毒を食べさせたでせう。

（問）「獨言のやうに」無茶だね……。

（長い沈黙）

眼鏡。さう、云はば僕は自由なんです。ただ自分の氣持だけなんですからね。それが、あんなの場合だと、苟くも一人の女を、これから幸福にするか、不幸にするかの問題なんだから、まるで、決心のつけ方が迷ひますよ。さう云ふ風なら、事は早い方がいいですね。

（やや長い沈黙）

眼鏡。然し、やつぱり、話は聞いて見ないとわからんもんです。眼鏡。さつき、泣いたもんですから、どつかへ行つちまひました。

（問）眼鏡。今夜は、偶然、君といふ人に會つて、いろいろ話をしたが、兎に角、死ぬといふことは理窟ぢやいかんのだし、これから次の汽車を持つにしても、また後先の争ひが起るにきまつてゐるんだから、どうです、その邊で一杯やつて、何れそのうち、別々にやることにしようやないか。

眼鏡。別々にね。（問）なんなら、今夜は、あんたがおやりになつて、僕が見届け役になつてもいいな。

（問）眼鏡。見届け役か、そいつはいいな。どうだい、君が先にやつちや。

（問）眼鏡。しかし、笑ひごとぢやない。

（長い沈黙。兩人笑ふ）

眼鏡。こんなことをするのにや、見物はない方がいいだらう、いくら御商賣が御商賣でも……。

眼鏡。つまらんことになるもんだなあ。

眼鏡。かうなると命なんていふものは、誰のものんだかわからなくなるね。

眼鏡。人のものでないことは憶かだ。

眼鏡。たしかですか、それが。（問）

眼鏡。まあ、もう少し考へさせて下さい。（問）一體、僕は、何しに此處に来たんだらう。眼鏡。さあ、自分の命が人の命よりも大事だといふことを知りに来たんだね。眼鏡。僕はどうしても自分の命が、そんなに大事なものだとは思へない。

眼鏡。君にとつて、それよりもつともつと大事でない命が、もう一つ此處にあるわけなんだ。

眼鏡。さうか知ら。しかし、僕は、あれほど決心してゐたんです。

（汽笛。つづいて汽車の音が聞える）

眼鏡。ちや、その決心を斷行し給へ。さ、僕がゐて邪魔なら、僕は歸るよ。それとも、元氣をつけてあげようか。

（汽車の音、次第に近づく）

眼鏡。（しを／＼と起ち上り）その寫眞を下さ

い。（寫眞を受け取つて、つくづく眺めながら）さうだ、こんな意氣地のないことぢや駄目だ。（急に眼鏡をした男の手を取り）さあ、あなたも一緒に来て下さい。一緒に死にませう。

眼鏡。（引張られながら）さう云はずに、まあ君からやり給へ。僕は急ぐ必要はないんだ。い

ろいろ計畫もあるしするから……。

眼鏡。（無理矢理に相手を引掛り上げようとして）なんです、今になつて、卑怯な。

眼鏡。卑怯なのは君のことだ。（相手の手を振りはらつて、後ろへ廻り、腰に手をかけて土手の上に押し上げながら）愚圖々々してないで、さつさと行き給へ。

眼鏡。（押し上げられようとするからだと手と足で突つ張り）それや無茶だ。そんな法はない。

眼鏡。（かまはずに、どんどん押し上げる）

眼鏡。そ、そ、そんな馬鹿な……そこは痛いんだ、痛い、痛い、痛い……。

（汽車の音、いよいよ近づく）

眼鏡。（手を放し）さ、今だ。

眼鏡。（轉がるやうに駆け降り）あんまり亂暴ぢやありませんか。

眼鏡。（どつかと材木に腰を卸し）失敬、失敬。（汽車が、土手の上を通過する）

眼鏡。（黙つて、うつむいたまま、これも材木の上に腰をかける）

（長い沈黙）

眼鏡。もういいだらう、君。（起ちあがり、促すやうに）さ、そろそろ引上げよう。

眼鏡。（機械的に起ち上り、ふらふらと歩き出す）

眼鏡。（その後を追ふやうに、眼鏡をかけた男に寄り添ひ）僕はかう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男だ。（しんみり）しかし、なんですよ、今、君を死なせるくらゐなら、僕が先へ死にますよ。ほんとですよ。

——幕——

年譜

明治二十三年十一月二日、東京四谷に生る。
 同三十一年、四谷尋常高等小學校に入る。
 同三十三年、名古屋に轉住。織業小學校に入る。
 同三十五年、名古屋市立第二高等小學校に轉ず。
 同三十七年、日露戦役の起ると共に、父は野戦砲兵第三聯隊大隊長として従軍す。
 同年九月、名古屋陸軍地方幼年學校に入る。
 同四十年九月、東京陸軍中央幼年學校に進み、佛蘭西文學に興味をもちはじめ。
 同四十三年六月卒業、士官候補生として久留米歩兵聯隊に入隊。十二月、陸軍士官學校に入校、シャトوبرリヤン、ジャン・ジャック・ルソオを耽讀す。また、ツルゲエニエフの佛譯を讀み、露西亞文學の一端を知る。これより、露西亞小説の邦譯を漁り、同時に、佛蘭西近代作家の著作に親しみはじめ。
 同四十五年、士官學校を卒へ、見習士官として再び久留米聯隊に歸る。
 大正元年十二月、少尉に任官。
 同三年七月、勲員下令、補充隊附を命ぜられ、十

一月、凱旋と同時に、病と稱し軍職を去る。やがて東京に歸り、八方、自活の道を求む。偶々、當時、母校幼年學校教官たる縁故を以て、内藤瀧氏の門を叩き、佛文學研究の方針につき教を乞ふ。氏の紹介により、大宰府門氏の自宅教授を受く。
 同六年、帝國大學佛文科選科に入學す。
 同七年、白水社發行『佛和辭典』の編纂を手傳ひ、海外旅行の計畫を樹つ。
 同八年八月、日本を離れ、臺灣、香港、印度支那を経て、翌九年一月、巴里に着す。
 日本大使館囑託、埃伊國境劃定委員通譯、國際聯盟事務局囑託などの職を得、傍ら、演劇研究に没頭す。主として、ジャック・コポオ經營のヴィニウ・コロンビエ座、並にピトエフ夫妻の一座に出入、演出法を見學す。
 同十一年夏、試みに戯曲「古い玩具」を書き、ピトエフに示す。
 十一月、父の訃報に接す。
 十二月、突然、肺患の徴候を發見す。

同十二年七月、老母及年少の弟妹を見棄て離く、志半ばにして歸國す。
 八月、豊島與志雄氏の紹介にて、山本有三氏を訪ひ、「古い玩具」の一讀を乞ふ。
 同十三年三月、「古い玩具」を『演劇新潮』に、九月、「チルルの秋」を同誌に發表す。
 同十四年二月、「命を弄ぶ男ふたり」を『新小説』に、四月、「ぶらんこ」を『演劇新潮』に、五月、「紙風船」を『文藝春秋』に發表す。
 六月、房州館山に旅行中、肺患再發、八月、危篤に陥る。
 同十五年四月、「葉櫻」を『女性』に、六月、映畫脚本「セイマイの戯れ」を『改造』に、九月、「戀愛恐怖病」を同誌に、十月、「驟雨」を『文藝春秋』に、十一月、「村で一番の栗の木」を『女性』に發表す。
 昭和二年一月、「温室の前」を『中央公論』に、十一月、結婚す。
 昭和三年一月、「明日は天氣」を『改造』に、四月、「落葉日記」を『中央公論』に、十月、雜誌「悲劇喜劇」を創刊す。
 昭和四年一月、「長閑なる反目」を『改造』に、「牛山ホテル」を『中央公論』に發表す。

芋と指環
 マルクスの審判
 蠅の禮儀
 無禮な街
 ナポレオンと田蟲
 園へ出るトンネル
 街へ出るトンネル
 青い大尉
 眼に見えた
 日輪

横光利一

後に口鬼があらふ
 笑つておるやうな

横芝刈

上九華堂寶札製版

芋と指環

(芋と指)

川の上から微風が吹くと、萬の家の屋根の上では雑草が一齊に頭を振った。すると、軒に下つた洗濯物は乾き出した。萬の妻はまだ歩かない娘のまいを背負つてゐた。彼女は洗濯物に觸つてみると、ついでに柴を一束かかへて圓爐裏の傍へ持ち込んだ。米を磨がねばならぬが、ふと米のないのに気がついた。彼女は米箱を傾かせてとんとんと叩きながら、角へ入り溜つた米粒を手で計つた。

「二合はあるな。剛は割りに餘計なもんぢや。三合かな。三合とすると。」

彼女は明日の朝は米に水を澤山割り入れて間に合せようと考へついたら、

「ありやツ。」と云つて、背中の娘の足さきへ手をあてた。

「こいつ、また爲くさつた！」

彼女は娘を降ろすと、背中の下がべつとり濡れてゐて、それだけ色濃い端片を縫ぎたしたやうに見えてゐた。

「さアさア、厄介な小女郎ぢやなう。」

彼女はびんびん跳ねる娘の小さな足をひつ掴まへて、手早く布切れをひき抜いた。そこへ、良人の萬が黄色な小蜂の巣を一つ持つて歸つて来た。

「どこへ行つとつたのぢやな？」

「田螺とりぢや。」

「田螺なら、音がとつて来るぢやないの、それより檀那の所へ行つて、錢を貰うて来ておくれれば。今日はどうしてでも取つて来にや。」

萬は黙つてまた出て行きかけた。

「良いかいな。今日はどうしてでもとつて来にや。あいつ、いつまで待たすつもりぢやろ。」

「蜂の巣は食へるかなう？」

「それからな。音がそのあたり居つたら、直ぐ歸れつて云うとくれ。遊んでばつかりぬくさつて。」

「こいつ食へんかなう。」

「そんなもの食へるものか。」

「食へるつて云うとつたぞ。」

「早う行かない。明日の米がないぞな。」

萬は蜂の巣を捨て籠さうに眺めながら出て行つた。

妻は燈明だけは切らせてならないと考へた。立ち上つて圓爐裏の上の神棚の油壺を覗いてみた。

もし今日こそ、蠟を手傳つた良人の工賃が貰へないとしたならば？——彼女は表の方へ走り出た。實をつけた茶の木畑の上で、良人の頼りない歪んだ肩が揺れてゐた。

「良いかいなア。きつと貰うて来にやいかんぞなア。警察へ願ふ云うても、無理にとつて来にや、一寸でもくれつて、もう米がちよつぱりもないぞな、良いかな、醬油も油もないし。」

萬はリウマチスにかかつてゐるその不具な片腕を揉みながら、丘の方へ歩いていつた。

萬の妻は壺所へ戻つて来ると、醬油の瓶を振つてみた。それから再び米箱を自分の膝へ倒して見た。

「三合はあるな。三合あつたら、芋を入れたら五合になるわ。五合とすると、何アに。」

娘は急に泣き出した。萬の妻は娘の傍へよつて行つた。そして彼女の頭を撫でながら、

「ああさうか、みいを抛つておいたか、みいになア、ああよしよし。まアどうぢや。この子、頭ばかり大きくなつて。」と呟いた。

二

萬の膝には草の實がたかつてゐた。彼は幾のぬさうな河原の石垣を見つゝ土手の上へ出た。すると、他家の芋畑の中に蹲んでゐる息子の音の後姿が眼についた。

「音う。」
息子は蔓のついた芋を投げ出した。と、萬とは反対の刈田の方へ馳け出した。

「音う。」
息子は二度呼ばれると、走り停つて萬の方をくると向いた。

「お父うか。」
「歸んで来い。」

音はもとの所へ戻つて来ると、投げ捨てた芋を拾つて父親の傍へ寄つて来た。

「お父う、芋や。」
「よこせ。」

「赤芋や、うまいぞな。」
萬は息子から土のついた芋を一本受けとつた。それを二つに折つて一口咬んだ。

「赤芋や、お父う、うまかるが？」
「歸れよ。」

萬は芋の皮を吐き出しながらまた丘の方へ歩いて行つた。音は土手の蓬の中へ坐り込んだ。彼は腹這ひになり、仰向きに寝そべつて生手をかじり出した。風が吹くと頭を低める蓬の上から、音の露出した白い腹が空に向つて息をしてゐた、時々柿の木から柿の木へ渡る群雀が、彼の白い腹の上を波を打たせて渡つていつた。

三

丘へ登る坂路には、蜜柑の林が続いてゐた。坂の上には、白木の塙を繞らせた新しい家が立つてゐた。

今、その家の主人は、豪壯な風格で一人の客を送り出すと、玄關の香石を見下した。さうして、またも、有り合せ物の石塊が思つたごとく果して役に立つたと思つてゐると、瞬間、蜜柑の林と林の切れ目から、萬の黒い小さな顔がちらりと見えた。彼は膝でも踏むやうに一飛び横へ飛び下つて、それから奥の間へ馳け込んだ。

「おい、おい。」
都會で三味線と遊蕩兒を弄び馴れた手で、此の家の後妻は、箒を五月蠅さうに引き摺つて

現れた。
「阿呆萬がやつて来やがつたで、俺がをらん云うておけ。」

「また？」
「良いからさう云へ。」
「私もういやだわ。いつだつて私ぢやないの。」
「ぐづぐづ云ふな。」
「だつて、可哀想だわ、これで八度目よ。」
「不足なら、貴様、指環を萬にやれ。俺はどうでも良いのぢやからな。」

「けちんぼ！」
「何にッ。」
「おい、もう来るぢやないか。」
「知らん。」

妻女は良人の代りに箒を蹴倒すやうにして、ひとり茶の間へ戻つて来た。
主人は、萬の工賃の催促に來ることが七度目かそれとも八度目かと考へ合せながら、丸柄の火鉢の煙に灰を被せた。
丁度そのとき、萬と被れ違つて下つて來た客は、坂路の途中で、今朝見た噂のことを思ひ出した。
「八白、先勝、縁談吉か、ははア、俺には縁談

は縁がないわい。待て。あの後妻め、俺に今日は三度も奇妙な眼つきをしようたぞ。」
ふとそのとき、客は、自分の兩手が空虚のまま、持つて歸る可き輪物を忘れてぶらりと肩から下つてゐるのに氣がついた。
「おつと、待つた。」と、彼は頭へ手を乗せて再び丘の上へ引き返した。

四

萬は丘の家の玄關から大のやうに覗いてゐた。

「檀那、檀那はおいでですかいな。」
茶の間で待ち伏せてゐた美しい後妻は、萬を見るなり悲しげな顔をした。

「まアまア、今日も良人は不在ですよ。どうしませう。」
しかし、忽ち彼女は、その悲しみの中から微笑を花のやうに生々と開かせた。

「どうぞ、さア、お上り下さいな。あのね、いつも萬さんにお待たせして、すまないすまないつて申してをりますの。さア、そこではいけませんわ。」
「はア。」
「お氣の毒ですわねえ。」と、彼女はいかにも親

しげな顔をして、「この、それ、選舉でね、選舉があるでせう？」
「はア。」
「それでね、もうもう、そりや忙しがつてをりますの。」

「檀那はお出かけですかな？」
妻女は、今迄の心の張りか急に抜けると、

「まア、何んて馬鹿なんだらう。」と云ふやうに、

「ええ、朝からの、朝から出かけてゐますのよ。夜だつて、そりや遅いの。もうねえ、私、困つてしまひますわ。」

突然萬は頭を下げた。妻女はいぶかしさうに萬の顔を眺めてゐた。

「どこへいらつしやるの？」
「はい、また参じましょ。」
「もうお歸りになるの？」
「はい。」

「さうですか。それはそれは。」と、妻女は急に再び生々となり出した。さうして、萬が二度目のお辭儀をして歸らうとしたときに、

「あの、ちよつと萬さん。」と云つて彼女は萬を呼び止めた。
彼女は茶の間へ菓子を含みに立つていつた。その後へ、かの客は、強ひて周章でた風を装

ひながら戻つて來た。彼は萬のゐるのは眼にかげず、宛も主人が前には萬のやうに、
「どうも早や、稀に勝たせて貰ふとこれでして。」と呟きながら、頭を掻き掻き奥の間の方へ突進した。
奥の間では、主人はその足音を聞くと、火箸を持つたまま突き立つた。さうして、その豪壯な首筋を周章で押入の中へ突き入れようとしたときに、
「どうも早や、稀に勝たせて貰ふとこれでして。」

げらげら後で笑ふ聲に主人は振り返ると、客は、床の輪物を拾ひ上げて耳の横で振つてゐた。
主人はひと言何か言葉を云はねばならなかつた。しかし、彼には玄關にゐる萬の耳が恐かつた。そこで、彼は客の笑ひに應へるために、聲を殺して笑顔を押入の前で作つてゐた。
茶の間では、白紙包みを作つてゐた後妻は、客の話を奥の間から突然に上つたのを聞きつけると、良人の難澁が眼に見えた。で、客の去つた氣配を窺ふと、直ぐさま彼女はわざわざ奥の間の方を廻つていつて、客の話を對照が自分であると云ふことを、萬に知らせる

手段として、良人の聲を殺した笑顔をそのまま引き次いで、玄關の方へ出て行つた。
「まあ随分お待たせしましたわね。これはほんの少しなのよ。坊つちやんに上げて下さいな。遠い所をすみませんでしたのね、私、良人が歸つたら、さう申しておきますわ。ほんたうに幾度もね。」

「はい、ありがたうございましてな、はい。」
萬の姿が見えなくなると、後妻は、巧みに萬を追い返し、良人の危難を救ひ得た誇りと悦びで快活に主人の前へ戻つて来た。しかし、主人は、妻の不意から不意の闖入者に驚かされた鬱憤に苦かつた。彼は妻を見るなり聲を上げた。
「馬鹿ッ、貴様は、誰の番をしてたんだ！」

妻は賞讃の代りに受けた此の叱責の聲を聞くに腹を立てた。彼女は暫く良人の怒つた顔を見てゐたが、急に唾でも吐くやうに、
「勝手になさい。」と云つて横を向いた。
主人の顔は赤くなつた。
「もう一度云つて見る。」
「知らない。」
主人は俄れてゐた箸を取ると、妻の背中をひ

つ叩いた。振り返つた妻の顔は青くなつた。
「叩けッ、叩けッ。」

妻は肩を聳立てて良人の胸元へ詰めよつた。良人はその肩口を突飛ばした。妻の身体は踊子のやうに美しく裸の足を脱して轉つた。主人は、「これは過ぎた。」と思つたらしく、急に箸を投げ出すと、火鉢の傍へ悠々と片膝ついて煙管に煙草をつめた。しかし、一方妻の怒りは激しくなつた。彼女は顔をぐたぐたと搖がせながら起き上ると、手元にあつた葦石の箱を、良人の肩へ投げつけた。良人は無数の石を頭から浴びながら、口元に微笑を浮べてゆるゆると煙を吐いた。と、再び妻の投げつけた葦石の箱が、煙の中を降つて来た。良人は妻の方を一寸睥むと、
「こいつ。」と云つて立ち上つた。
妻も急いで一寸恐さうに立ち上つたが、なほ青ざめて良人の顔を睥んでゐた。その顔が良人にはいつの妻の顔よりも美しかつた。
「さあ来い。」

良人は角力を取りでもするやうに身構へると、妻の首と腕とに手をかけて、彼女を横に轆々と抱き上げた。
「知らない、知らない。」
びんびんと足を跳ねながら、妻は縮高く叫ん

で良人の頭を押しのけた。良人は妻を火鉢の傍まで抱いて来て、座蒲團の上へ人形のやうに坐らせた。
「怒るな、馬鹿め、貴様が萬を歸しきへすりや、誰があんなに狼狽するものか。」
「あなたぢやないの、あなたが悪いんぢやないの。」

「何が悪い！」
「悪いわよ。」
「お前が玄關に出てゐたら、誰が黙つて上つて来る。」
「私だつて用があるわ。七度も八度も通はせておいて、誰が手ぶらで歸せるものか！」
「何をやつたんだ？」
「知らない！ 私、あなたのやうなけいんぼぢやないわ。」
「まだ云ふな！」と、良人は云ふと妻を打つ眞似をして手を上げた。
「けちんぼ。」
「ようし。」

と、良人は云つて妻の手を捻ぢ上げながら、彼女の身体を膝の上へ引きよせた。妻は良人の手首に齒を立てた。
「痛ッ、痛ッ。」と良人は聲を立てると、噛まれ

た手首を振り振り妻の肩の痕を隠めてみた。これは過ぎた、と云ふかのやうに妻は良人の痛さうな顔を見ると初めて笑顔になつた。
「いい間だわ。」
「何が間だ。」
「けちつくからよ。」
「こいつ、人を馬鹿にするな。いつ俺はけちついた！ 萬にやるだけ貴様の指環を買つたんぢやないか！」

「あんなもの、入らないわ。」
「やつて了へ！」
「やるわよう。」
妻は叩かれた背中のおとを隠へながら茶の間の方へ立つていつた。

五

丁度、丘の家の奥の間で、主人と妻女の争ひが漸く主人の敗北となりかけたときであつた。蜜柑林の下では、葦客は坂路の途中で、足駄の嚙んだ石塊を抜きとるために蹲んでゐた。彼は木の根に足駄をかんかんと叩きつけながら、
「此の月の八白は、大したものぢや。何もかも、ぼろ勝ぢや。ぼろ勝ぢや。」と、唄のやうに云つてゐた。

そのとき坂を下つて来た萬は葦客に追ひつくと、立ち停つて彼の足駄を眺めてゐた。葦客は一寸萬の方を振り向くと、また足駄を叩きつけながら、
「萬さん、取れぬがどうぢや、取れぬがどうぢや。」と云ひ出した。
「樽那はどこへお出かせなしたかな！」と萬は訊ねた。
「わしか、あつこぢや。こいつ、なかなか。」
「山の樽那や？」
「あ、山のか。おたゐた。こいつめ、食ひついたら放さぬと云ふ奴ぢや。あはははははははは。」

延び上つて背中を叩きながら笑してゐる葦客の横で、萬は白紙包みをほり落した。包みの中からは、圓い黄色な蒸し菓子が飛び出ると、砂をつけてゐるところと坂路をころけていつた。
「こりやどうぢや。」と、葦客は云ふと、足駄を持つたままぼんやりと萬の顔を眺めてゐた。と、葦客は突然笑ひ出した。
萬はひとりまた坂路を下つていつた。

六

かいを背負つて鍋の下を焚きつけてゐる萬の妻女は、薄明りの中で、襦袢切れのやうに見える

てゐた。溜の上を渡つて来た夜霧は、茶の木畑の方から家の中へ流れて来た。音は母親の傍に坐つて、圍爐裏の灰の中へ芋を埋めた。
「お母ア、音はここへ芋を埋けたぞな。見いつて、お母ア。この芋、音のぢやぞ。」
母親は黙つて立ち上ると、神棚の燈明に火を点けた。それから彼女は夜の祈りを毎夜のやうにし始めた。先づ最初は娘のみの痘瘡と良人のリウマチスの一日も早く癒るやう、醫者にかかるとの出来るやう。自分の乳がなほ澤山に出るやうに、さうして、良人の仕事は早く手について彼の意気地なしの直るやう、音が良人に似ぬやうに。と、これだけは彼女の毎夜の祈りの言葉と同じであつた。が、次に、今日こそ、丘の家から良人がうまく工賃を買つて歸るやうと願ひ終つて、最後を彼女は何心なくかう結んだ。

「南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ私のお願ひをおとり上げなすりますやうに、お願ひいたしますでございませう。どうぞ、南無三寶あらたかな荒神様、もしこのお願ひをおとり上げ下さいませうなら、私の命を十年お早めなすつてもかまひませぬ。どうぞ、南無三寶あらたかな荒神さま。私のお願ひをお取り上げくださ

「いますやうに。」
 しかし、此の願ひは願ひ終つた彼女を責めた。もし、十年いのちが縮つたとしたならば、明日にも彼女のいのちがなくなるかも知らなかつた。もし明日彼女のいのちがなくなつたとしたならば、彼女の願ひのかつた日の悦びは彼女のために何んにならう。彼女は煮立つた割り粥の中へ、鹽をばらばらと振り撒きながら、
 「南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ五年にして下さいませやう。どうぞ五年にお直し下さりますやう。」と、口の中で呟いた。
 しかし、彼女は裏の井戸端で釣瓶の竹竿を繰り上げる頃には、なほますます恐怖に狩り立てられた。もし五年いのちが縮つたとしたならば、何はさておき音の出世も見られないやうに思はれた。
 「あらたかな荒神様、どうぞ音が嫁を買ふまでお延ばし下さいませやうに。どうぞあらたかな荒神様、せめて音が學校を出るまでも宜しゆございます。どうぞ私のいのちをお延ばしなされて下さりませ。」
 しかし、ふとまた彼女は、自分の恐の深さに気がついた。怒が深ければ、「御利益」の代りに、「御前」を買ふ。これが彼女を再び責め始める

と、最早や彼女は自分の仕事を手につかなくなつて来た。彼女はまた神棚の前へ戻つて最初から祈り直した。
 「南無三寶あらたかな荒神様、どうぞみいの瘡撃の一日も早う癒りますやうに、萬のリュウマチを一日も早う癒して下さいませやうに、お醫者さまにかかるとが出来ますやうにお願ひいたすでございませ。南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ私の乳を仰山にお出し下さいませやうに、萬の仕事が一日も早う出来ますやうにお願ひいたします。南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ萬の意氣地なしをお直し下さいますやうに、音が萬に似ぬやうにどうぞお願ひいたします。南無三寶荒神様、萬が今日はきつと工賃を買うて歸つて来ますやうにお手傳ひなされて下さりませ。南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ私のお願ひをおとり上げ下さりますやうにお願ひいたします。もしこのお願ひをおとり上げ下さりますなら、私のいのちを十年お早めなさつて下さりませ。南無三寶あらたかな荒神様、どうぞ私の恐深をお救しなされて下さりませ。」
 彼女は必死に祈り終つて頭を下げた。が、頭を上げると、神棚の燈明の光りが自分の壽命を

「のたれ死にちや！ 明日から乞食や！」
 「芋がないわア。」
 床の下では息子が大聲で泣き出した。
 「わしが男やつたら、あんな家、火つけて焚いてやるわ。甲斐性なしッ、極道者ッ、どうして食ふつもりぢや！ あ奴も、あ奴ぢや！ 鼻に食はれて、他人の金も拂ひくさらぬ我鬼ぢや！」
 「お母ア。」
 「くそやかましッ！」
 「芋がどこへやら行きよつたア。」
 「あア、もう、どうにでもなるわさ、知らぬことぢや、知らぬことぢや、知らぬことぢや！」
 妻は前掛の端で一寸眼を拭くと、がたがたと手拍を鳴らせて輪のきれたお櫃の中へ水を汲み分けた。
 音が泣きやんで庭から立ち上つたとき、家の中は、周囲から流れ込む霧のためにぼんやりと曇つてゐた。音は芋のことを思ひ切ると、爐の傍へ戻つて鍋の蓋をとつてみた。白い湯気が煮粥の上から勇しくもうもうと立ち昇つた。
 「お母ア、煮えたぞな。お母ア、お母アたら。」
 返事もせぬ母親の後姿は、湯気の向うでびりびりと震れて見えた。音は鍋の蓋をすると父親の傍へ寝轉んだ。彼は父親の眞似をして暫く

十年縮めてゐる魔のやうに思はれた。しかし、十年縮めた自分の壽命で、良人と息子と娘の幸福が、やがて来るにちがひないと思ふと急にまた彼女は晴やかになつて来た。さうして、此の大膽な祈りを二度までも繰り返して敢てしたといふ自分の熱心に對してさへも、どうして神は無慈悲のままであられようと思へば思ふほど、三人の上に降り下る幸福は、手にとるやうに判然と感じられた。と同時に、自分の縮つてゐる十年の命も、自分の知らぬ間にまた十年延ばされてゐるやうな氣持がして、彼女はなほも生々と安心した。

七
 霧はだんだんと濃くなつた。萬が歸ると、家の中では暗い水壺の傍で、手杓の水を飲み込む音の明瞭だけがごくごくと鳴つてゐた。萬は黙つて痛む右腕を揉みながら闇裏の傍へ寝た。
 「お父ア、そこな芋、音がぢやぞ。」
 音は手杓を投げ出して爐の傍へ馳け寄ると、灰の中から周章で芋を掘り出した。さうして、それを、両手の中で轉ばしながらふツツと吹いた。吹き吹き表の方へ馳け出していつたとき、彼は戸口に置かれた道具箱の端に隠れた。

片腕を揉みながら竹の天井を眺めてゐた。
 「南無三寶荒神様、南無三寶荒神様、お父ア、今日なア、天井から鼠の子が落ちよつた。ちゆうウツちゆうウツて鳴きよつたぞな。あいつお父ア、眼がありやせんぢやなア？」
 誰も音には答へなかつた。
 「手へ灸すゑてやらうか、え、お父ア？」
 「そんなもの、お父アぢやないわ。」と、母親は食器の音をさせながら強く云つた。
 音は母親の方へくると向いた。
 「何ぢやな、お母ア？」
 「お父アにきけ。」
 音は萬の方へくると向いた。
 「お父ア、なぜぢやな？」
 矢張り父親は黙つてゐた。音は父親の背筋に沿うて拳をぐりぐりと擦りつけながら、
 「お父ア、どうぢやないか？ 音は何んでもないわ。お父ア、音のを揉んでみい、音ら揉まないわ。」
 いつまでも父親が黙つてゐるので、音は仰向きになると天井の竹板を数へ出した。
 「お父ア、お父ア。鼠を役場へ持つて行くと錢が貰へるぢやなア？」
 誰も音には答へなかつた。

「男だと判事は思った。」
 「十九年と云ふと、お前の幾つ時からかね、二十？」
 「二十五の時からです。初めはちよいちよい失策をやりました。でも私で失策つたと思ひましても他人には解らずにすみしました。」
 「何ぞ被告がさう云ふことを自分から云ひ出すのか、よく判事には分らなかつた。」
 「私の失策と云ふと、つまりどう云ふんだね。」
 「列車の来る時が来ればシゲナルを見なくても少々遠くにゐても分りますが、考へごとをしてゐると直ぐ傍へ来なければ分りません。さう云ふときは失敗つたと思ひまして周章で鎖を引きますが、いつも半分程通つてからです。」
 「つまり考へごとをするといけないと云ふのか。」
 「はい、考へごとをするといけません。」
 「考へごとと云ふと、どんな種類の考へごとかな、どう云つたやうな？」
 「家内のことを考へます。」
 「家内がないと云つたぢやないか、ア、さうか、つまり三人の妻のことなのか、それでどの家内に一番心をひかれるね。」

「一番目の家内です。」
 「優しかったのか。」
 「いえ。」
 「お前が愛してゐたのだね。」
 「さう云ふわけぢやございませんが、何ぞだか最初のがよくに浮んで参ります。」
 「最初のがね、ふむ、その頃は楽しかつたと見えるな。楽しかつたかね。」
 「今から思ふとさう思ひます。」
 「此の頃はもう楽しみなことはないか。」
 「ありません。」
 「何もないか。」
 「はい。」
 「では、勤めもいやなことだらうね。」
 「はい。」
 「いやか、勤めは？」
 「はい、あまり好きではございません。」
 「ふむ、それでお前は何か、お前の踏切でお前の勤務時間以外にときに殺人があつても、お前に責任がないと云ふことを知つてゐるだらうね。」
 「はい、それはよく存じてをります。」
 「三日の夜の殺人は誤解してゐたと云ふが事實であらうな。」

「はい。」
 「ではそのときの様子を成る可く詳細に話してみよ。誰を云つてはならぬぞ。」
 「はい、さうでございますね、あのう十二時二十分の貨物列車の下つて来るまでは少々間がありましたので、それで、私は夕暮に植木を孟宗竹を見に行つたのです。」
 「ああ一寸待て、御り暮しになつてからどれほどになるな。」
 「四年になります。」
 「四年か、ふむ、植木は好きかな。」
 「はい、いたつて好きでございます。」
 「よしよし、それからどうした。」
 「それから何かしたいと思ひましたが、するところがなかつたので鎖を曳いて了いました。そこへ泥酔人が坂を下つて来て通せと云ふのです。」
 「そのとき貨物の音はしてゐたか。」
 「はい、もうしてをりました。」
 「通してやればよかつたではないか。」
 「はい、私はいつも一度鎖を引けば通る程の時間がございますも通さないことにしてをります。そのときも矢張り通しませんでした。するとあの男は、それぢや俺が通つてやると云つたのかね。」
 「いえ、酒を飲んでゐるなと思ひましたので、相手になりませんでした。」
 「ふむ、なる程。しかし、酒を飲んでゐると氣附いたなら、なほ鎖でとめると云ふことがいけないぢやないか。」
 「いえ、それはちがひますよ。鎖の方がとめやすうございます。普通の方はどなたもさうお思ひになりませうが、この道の者なら誰だつて鎖でとめると思ひます。それに、手でとめましては相手が相手ですから、なほ喧嘩になつてしまひますよ。」
 「それはさうだね。喧嘩になりさうだ。で、何かね、その男が誰だつたかお前は最初から知つてゐたかね。」
 「それは見覚えはございません。」
 「その男は最初に何とかお前に云はなかつたか。鎖でお前がとめるとき何とか。」

「私の引つ張つてゐる鎖の中程の所へ腹をあてて出ようとしたんです。私は必死の力で引いてゐたのですが、そのうちに私もそれについて二足三足曳かれてゆきました。そのとき、来たな、と思ひました。あなたさまは貨物列車の音を御存知でせうが、貨物の音は普通の客車とは違つて奇妙な音なんです。あの車の音は少し遠くにおゐるときも傍まで来たときも同じほどの激しきなんです。それに、あの夜は眞暗な所へもつて来て貨物列車が又眞黒な物ですから、どこまで来てゐたのかはつきりしなかつたんです。貨物はそれで一番恐ろしい感じがします。私はそのとき鎖を、かう必死に引つ張つたんですが、あの男はもう餘程線路の近くまで出てをりました。もつとも私が傍まで行つて突き飛ばすか引き戻すかしてやれば、あの男も助かつてゐたと思ひますが、何分そのときはもう度胸がぬかれてをりましたし、それに、あの貨物の音を眞近で聞きますと、そりやもう變な氣になつて了ふのです。何と云ひませうかね、もうただぼんやりして了ふのですよ。風に吸ひ込まれるやうな、何だか息がぐつとつまつて、眼まひがするんです。それでも私はよほどぐつと鎖をひつぱつたつもりなんですが、その中に、風が

「一番目の家内です。」
 「優しかったのか。」
 「いえ。」
 「お前が愛してゐたのだね。」
 「さう云ふわけぢやございませんが、何ぞだか最初のがよくに浮んで参ります。」
 「最初のがね、ふむ、その頃は楽しかつたと見えるな。楽しかつたかね。」
 「今から思ふとさう思ひます。」
 「此の頃はもう楽しみなことはないか。」
 「ありません。」
 「何もないか。」
 「はい。」
 「では、勤めもいやなことだらうね。」
 「はい。」
 「いやか、勤めは？」
 「はい、あまり好きではございません。」
 「ふむ、それでお前は何か、お前の踏切でお前の勤務時間以外にときに殺人があつても、お前に責任がないと云ふことを知つてゐるだらうね。」
 「はい、それはよく存じてをります。」
 「三日の夜の殺人は誤解してゐたと云ふが事實であらうな。」

「はい。」
 「ではそのときの様子を成る可く詳細に話してみよ。誰を云つてはならぬぞ。」
 「はい、さうでございますね、あのう十二時二十分の貨物列車の下つて来るまでは少々間がありましたので、それで、私は夕暮に植木を孟宗竹を見に行つたのです。」
 「ああ一寸待て、御り暮しになつてからどれほどになるな。」
 「四年になります。」
 「四年か、ふむ、植木は好きかな。」
 「はい、いたつて好きでございます。」
 「よしよし、それからどうした。」
 「それから何かしたいと思ひましたが、するところがなかつたので鎖を曳いて了いました。そこへ泥酔人が坂を下つて来て通せと云ふのです。」
 「そのとき貨物の音はしてゐたか。」
 「はい、もうしてをりました。」
 「通してやればよかつたではないか。」
 「はい、私はいつも一度鎖を引けば通る程の時間がございますも通さないことにしてをります。そのときも矢張り通しませんでした。するとあの男は、それぢや俺が通つてやると云つたのかね。」
 「いえ、酒を飲んでゐるなと思ひましたので、相手になりませんでした。」
 「ふむ、なる程。しかし、酒を飲んでゐると氣附いたなら、なほ鎖でとめると云ふことがいけないぢやないか。」
 「いえ、それはちがひますよ。鎖の方がとめやすうございます。普通の方はどなたもさうお思ひになりませうが、この道の者なら誰だつて鎖でとめると思ひます。それに、手でとめましては相手が相手ですから、なほ喧嘩になつてしまひますよ。」
 「それはさうだね。喧嘩になりさうだ。で、何かね、その男が誰だつたかお前は最初から知つてゐたかね。」
 「それは見覚えはございません。」
 「その男は最初に何とかお前に云はなかつたか。鎖でお前がとめるとき何とか。」

「さうですね、云ひました。何だか云つてたやうです。何をしやがる、ふざけるない、つてそんなことを云ひましたよ。」

「それだけかな。」

「いえ、まだ何とか云ひました。私は黙つてゐたのですよ。」

「何を云つた、その男は。」

「俺をとめるつてことがあるかい、俺はね、俺は通つてやるぞ、つてそんなことも云ひましたね。」

「ふむ、さうして、それだけか、まだ何とか云はなかつたか。」

「もう覚えてはをりません。何だかまるつきり他のことを餘舌つてゐたやうですが、何のことだかよく私には分りませんでした。」

「お前は日頃通行人を餘り早くから止めると云ふ評判だが、それはどう云ふつもりかな。」

「早くとめる方が安全で良からうと思ふのです。」

「事實それだけかな。」

「はい、それだけです。」

「止めることを面白いと思つたやうなことは一度もなかつたか。」

「さうでございませぬ、さう云はれますとそんなまで擴つてゐるとみえるね。」

「被告は黙つてゐた。」

「いつ頃か行かなくなつたのだね。」

「もう一年以上行きませぬ。」

「さうか、そして、その最後のときはどうだつた。つまりどんな日に會つたのかと云ふのだ。何かつまらないと思ふやうなことでもあつたのかね。」

「私が行くといやな顔をします。」

「ふむふむ、いやな顔をね、何とか云ふのか。」

「はい。」

「何と云つたのだ。」

「幽霊が来たと申します。」

「ふむ、それはどう云ふ意味のことだかお前知つてゐるのかね。もつともお前に關したことからうが、成る程、ははア幽霊か。」

「家内のことだらうと思ひます。」

「ふむ、成る程、それは困つたことだ。遠くの廓へ遊びに行けばよいではないか。それとも何か行かなくともいいやうな所があるのかね。」

「いえ、ございません。」

「ないのか、なくては困るであらう。夜はよく眠れるかな。」

「眠れませぬ。」

「さうであらう。夢を見るかな。」

「はい、夢はよく見ます。」

「どう云ふ種類の夢を一番よく見るか。」

「齒の抜ける夢をよく見ます。それから、熱柿のべたべた落ちる夢も時々見ます。」

「ははア、酔漢の通つた前夜はどんな夢を見たかな。」

「それはよく覚えてをりませぬ。」

「ふむ、覚えてはゐないか。お前はその酔漢を見たとき、どう思つたか、粹客だとは思つたらうね。」

「はい、いづれ遊興に行くとは思ひました。」

「その男は金持だつたかね。」

「はい。」

「お前はいつも粹客を見たとき、どんな氣持が起るかね。」

「慣れてゐますから、別にどうと云ふ氣も起りませぬ。」

「お前の勤務時間は夜の十二時だつたね。」

「はい。」

「それにしても、お前の勤め時間以外のときまで見張りをすると云ふのはどうしたことかな。」

「それは癖になつてゐるのです。眠れないとき

「何だか、この路は他の領分だと云つたやうな、そんな氣がするんです。」

「成る程ね、お前の職業はただ氣ばかり使ふだけで實の上らぬ仕事だから、面白くはなからうの。」

「はい。」

「疲れはせぬかな。」

「疲れます。」

「さうだらう。十九年もよく勤まつたな。病氣にはかかつたことがあるかな。」

「時々はかかりました。」

「ふむ、遊廓には行くかな。」

「行きたくはないのか。」

「行つてみたいこともございます。」

「では行けばよいではないか。」

「行つたつてつまらないんです。」

「どうしてだ。」

「つまりませぬ、馬鹿らしうて。」

「金がないのか。」

「金はございます。」と被告は云ふと、暫くして、「困りますよ。」と低く俯向いて云つた。

「ふむふむ、ちや何か、そのお前の噂が廓に

「さうでね、云ひました。何だか云つてたやうです。何をしやがる、ふざけるない、つてそんなことを云ひましたよ。」

「それだけかな。」

「いえ、まだ何とか云ひました。私は黙つてゐたのですよ。」

「何を云つた、その男は。」

「俺をとめるつてことがあるかい、俺はね、俺は通つてやるぞ、つてそんなことも云ひましたね。」

「ふむ、さうして、それだけか、まだ何とか云はなかつたか。」

「もう覚えてはをりません。何だかまるつきり他のことを餘舌つてゐたやうですが、何のことだかよく私には分りませんでした。」

「お前は日頃通行人を餘り早くから止めると云ふ評判だが、それはどう云ふつもりかな。」

「早くとめる方が安全で良からうと思ふのです。」

「事實それだけかな。」

「はい、それだけです。」

「止めることを面白いと思つたやうなことは一度もなかつたか。」

「さうでございませぬ、さう云はれますとそんな

「さうであらう。夢を見るかな。」

「はい、夢はよく見ます。」

「どう云ふ種類の夢を一番よく見るか。」

「齒の抜ける夢をよく見ます。それから、熱柿のべたべた落ちる夢も時々見ます。」

「ははア、酔漢の通つた前夜はどんな夢を見たかな。」

「それはよく覚えてをりませぬ。」

「ふむ、覚えてはゐないか。お前はその酔漢を見たとき、どう思つたか、粹客だとは思つたらうね。」

「はい、いづれ遊興に行くとは思ひました。」

「その男は金持だつたかね。」

「はい。」

「お前はいつも粹客を見たとき、どんな氣持が起るかね。」

「慣れてゐますから、別にどうと云ふ氣も起りませぬ。」

「お前の勤務時間は夜の十二時だつたね。」

「はい。」

「それにしても、お前の勤め時間以外のときまで見張りをすると云ふのはどうしたことかな。」

「それは癖になつてゐるのです。眠れないとき

「何だか、この路は他の領分だと云つたやうな、そんな氣がするんです。」

「成る程ね、お前の職業はただ氣ばかり使ふだけで實の上らぬ仕事だから、面白くはなからうの。」

「はい。」

「疲れはせぬかな。」

「疲れます。」

「さうだらう。十九年もよく勤まつたな。病氣にはかかつたことがあるかな。」

「時々はかかりました。」

「ふむ、遊廓には行くかな。」

「行きたくはないのか。」

「行つてみたいこともございます。」

「では行けばよいではないか。」

「行つたつてつまらないんです。」

「どうしてだ。」

「つまりませぬ、馬鹿らしうて。」

「金がないのか。」

「金はございます。」と被告は云ふと、暫くして、「困りますよ。」と低く俯向いて云つた。

「ふむふむ、ちや何か、そのお前の噂が廓に

「判事はかうも手易く誘ひ込まれて来た被告を思ふと、急に今迄の勝ち誇つた氣持が薄らぐのを感じた。そればかりではなかつた。彼は彼自身漸く握り得たと思つた疑ひの確證さへも再び前のやうに取り失つた。何せかと云へば、彼は自分の手段が自分ながらいかにも巧妙だつたと賞讃したい程であつたから、實際いかなるものと云へども、警へばもしも明らかに故意の殺人ではなかつたと知り得ることの出来る判事自身でさへ、被告の立場に置かれたとき、その巧みな判事の言葉のために被告と同じ悲しみの言動に落されぬ者はあつたであらうか。それと思ふと、判事の疑ひは却つて彼自身の辯舌の巧みに邪魔されてまた、盡く迷蒙の中に入つていつた。しかし、それかと云つて彼はまだ自分の疑ひを捨て去ることは出来なかつた。そこで彼は被告から最も信用すべき自白の言葉をきくためには、今一度被告に投げ與へた悲しみを逆に取り消して掛らなければならなかつた。

「お前は前にあの酔漢を見たか云つたね。」

被告は答へなかつた。

「よく知つてゐたのかな。」

被告は何かを飲み込むやうに「はい。」と云つた。

「あの男はいつも酒酔してゐたのかね。」

「はい。」

「お前は妻のあつたとき、廊へは行つたことがあつたかね。」

「ごさいません。」と被告は鼻聲で云ふと赤くなつた眼で判事を見た。

「ふむ、お前はあの男の妻が困つてゐたのを知つてゐたのか。あの妻は困つてゐたのだ。毎夜毎夜良人が夜遊びをして家を空けるので困つてゐたと云ふことだ。お前は何かね、あの男と妻とがいつも争ひをしてゐたのも知らなかつたのかね。」

被告は「はい。」と云つて鼻を拭いたが、直ぐまた頭をかかへて測れてゐた。

「あの男は妻から離縁を迫られてゐたさうだ。ああ云ふ放蕩者は實際の所を云ふと、死んでも別に差し問へがないのだが、本官は一應取り檢べる必要上お前を悲しませてみただけである。さう悲しまなくともよい。多分お前は列車の近づくのが分らなかつたのであらうな。」

被告は黙つてゐた。

「お前は最後までその男の出て行くのを引きとめてゐたのであらうな。」

矢張り被告は答へなかつた。

「そこが大切な所ではないか。どうだ。さうであらう。」

「はい。」

さう被告は低く答へると涙がまた頬を傳つて流れ出した。

自分の言葉のために被告の態度がどんなに變つてゆくかと云ふことを眺めてゐた判事には、被告の様子がまだいかにも悲しきやうに見えた。しかし、彼には被告の悲しみは自分悲しめられた名残りの悲しみであるのか、それとも被告自身の認められた行爲を意識しての悲しみであるのか明瞭に見極めることが出来なかつた。そして、最早判事は自分の疑ひを確證するいかなる方法をも案出することが出来なくなると、やむなくその日の審問はそれで終らなければならなかつた。

その夜判事は床へ入るとまたその日の審問を思ひ廻らした。——事實、被告は酔漢を突き飛ばしたものであらうか、それとも酔漢の死は被告の云つたやうに偶然の死であつたか——それにしても被告は自身に危険な言葉に對して、何せあれほど敏感であり得たか、それにも拘らず何せあれほど白々しく先手を打つて出て来た

なほこれ以上審問を續けて行くとなれば、被告の反感を拭いてかからなければならなかつた。判事は顔に微笑を湛へながら靜に優しく問ひ續けた。

「お前はあの醉死人に妻のあるのを知つてゐるだらうね。」

被告はまだ窓の外を見たまま答へなかつた。

「子供もたしかあつた筈だつたが、それを知つてゐるのかね。」

被告は矢張り黙つてゐた。

「少しもお前は知らないのかな。どうなのだ。」

「知つてゐます。」と被告は敵意を含んだ聲で強く云つた。

「さうか、知つてゐるのか。お前がもしそのとき酔漢を引きとめずに、素直に通してやつたら、あの男を死なさずに済んだであらうとは思はな

いかな。」

被告は黙つてゐた。

「もしお前がいつも通行人に對して、優しい心を持つてゐたなら、そのときだつて故意に鎖の權利で引きとめないで通しておいたと思ふであらう。無論死人も悪い。だが、お前にしても全然いいことをしたのではなからう。たとひお前

がどれほど正直であるにしろ、お前はあの踏切で、さう云ふ醉死人のないために置かれた番人ではないか、それにお前があの男の傍にゐなかつたらともかく、さうではなくてお前が現にその傍についてゐたのだからね。そればかりではない、お前がもしそのとき、そこにゐなかつたなら、却つてあの男も助かつてゐたらう。それにお前がゐたばかりにあの男は死んだのだ。あの男の妻はお前のことをどんな風に思つてゐるか考へたことはないかな。」

判事の方を見た被告の眼は急に光つて来た。

「お前は妻のあつたときは樂しかつたであらう。」

「はい。」と被告は小さく云つた。

「お前は妻と子のある立派な一人の男を殺したのだとは思はないか。お前には樂しいことが何もないと云つたが、それは成程よく分る。だが、あの男にはまだ樂しいことがあつたのだ。世の中が面白かつたのだ。さう思ふであらう。」

被告は黙つて俯向いた。

「あの男が死んだなら、妻と子供はどんなに困ると思ふ。お前はいい。お前はひとりで淋しく暮らねばならぬと云つてもそれは仕方がない。だが、残つたあの男の妻と子供は、何もわざわざ

ざ淋しく暮さなくてもよいものを一生淋しく暮さねばならぬのだ。お前はたとひ自分のしたことが正當だと思つても、死人の妻や子はいつまでもお前を恨んでゐるにちがひない。矢張りお前に殺されたのだと思つてゐるにちがひない。それはお前がいくら正當だと云ひ張つたにしろ、さうは思ふまい。矢張り殺したのはお前であつて他の誰でもないのだからな。」

判事は被告の頭がだんだん垂れ下つて行くのを眺めてゐた。

「ここだツ。」と判事は思つた。彼は勝ち誇つた氣持になつた。「お前はあの男を突き飛ばしたのであらう。」と云ひたかつた。が、そのとき、被告は急に頭を上げると怒つたやうな表情をして判事を睥んだ。すると、突然腹痛でも起つたかのやうに急に彼の顔が曇り出すと、涙が頬を傳つて落ち始めた。

「私が殺しました。殺しました。」

何かにひつかかるやうな聲で被告は云つた。判事は胸の分らぬ昂奮を感じて来た。

「お前はまだ踏切番がしたいかな。」と判事はまきり心にもないことを訊いて了つた。

被告は椅子の上へ腰を下ろすと頭をかかへ込んだまま答へなかつた。

か。この二つの反した態度を審問に感じて巧みに變化し得た被告を思ふと判事の疑ひは又深まりかけた。しかし、一方は落されまいとし、一方は落さうと努めなければならぬ場合があることに専念する被告の氣持はいづれ正當なものに違ひなかつた。所詮判事は畫の迷ひを迷ひ續ける以外に何の得る所もなくやつた。しかし、それかと云つて一度は判決を下さなければならぬ以上そのまま捨て置くわけにもいかなかつた。これは判事を苦しめた。が、こゝまで來れば、判事として最も正しい判決を下す方法は、遂に自分自身の心理に向つて審問してみることであると氣がついた。一物何故に自分は自分の疑ひを疑ひとして持ち始めたか。何故自分は疑ひを疑ひとして深めてゆくことに努めたか。何故に自分は自分の疑ひの正當である可きことを確信したか。と、さう彼は考へ始めたとき、彼は自分が近年ひどく疑ひ深くなつて來てゐることを發見した。それには永年の判事生活から來る習慣が手傳つてゐることは勿論であるとしても、しかしただそれだけではなく自分の洞察力に對する深い自信と、それになほ油をかける神經衰弱とが原因してゐた。此の外

にまだ大きな原因が一つあつた。それは彼が前に現下の最も人心の歸趨に多く關係を持つ思想と犯罪との接觸點を檢點しようとして、社會主義思想の書物を選んだ時、彼の手に入つたものは「マルクスの思想と評傳」と云ふ書物であつた。これを見ると、彼は世界の人心が目下の所、資産階級を撲滅しようとしてゐる無産階級の團流と、それに對峙して無産階級の力を壓殺しようとしてゐる資産階級の團流との二つの階級が、絶えず争つてゐるのを知つた。そのときから、十數萬圓の家産を持つてゐる判事の感情は、彼の理智がマルクスの理論の堂々とした正しさを肯定すればするほど、その系統に屬する一切の社會思想に反感と恐怖と敵意とを持つていたつた。この彼の感情は頻々として起る様々な社會運動の勃發する度に、極めて敏感に恐怖をもつて激しく揺れた。このため彼の正しくあらねばならなかつた審問と判決との上に、どれほど多くの影響を與へてゐたかと云ふことを考へたことはまだ彼には曾てなかつた。しかし、今判事の理智はその方へと向つて來た。彼は前に被告が傭員の時間短縮を鐵道局へ迫つた事件に關係してゐたと云ふことを知つたとき、直ちに自分の社會運動

を防衛したがる習慣的な恐怖が、審問の最初から自然被告を敵の立場に置いてかかつてゐたことに氣がついた。勿論役目の立場として被告に疑ひを向けてからなければならぬのは分つてゐるとしても、しかし事實自分の疑ひはただ單にそのためばかりに深められてゐたとは判事にも思へなかつた。それを知ると、被告の貧しい上に勢動が激しければ激しいほど、他人から時間短縮の訴へに誘はれれば激しいほど、他人に比例して、それだけ被告のその運動に熱情の出ることは別に何の不思議もないやうに思はれた。それは別に被告が無智であればあるほど富貴な高見に反感を持つたに違ひないとの前の自分の推斷は、論理に於て一見正しさうではあるが、その實、それは遂に無智であればあるほど相手の富貴が直接に影響を被告に與へてゐない限り、なほそれだけ相手に反感を持ち得ななさうに思へば思ふことが出來て來た。無論被告と酔漢とが争つた以上、そこに何かの反感のあつたことは疑へない事實ではあつた。だがそれとて、自分が被告に向けてゐた敵のやうな反感とはちがつて、被告の反感はただ自由な高見を羨むありふれたものであつたにちがひないと思はれ出すと、今迄自分にしつこくつき纏つて

「無罪にしよう。無罪だ。」
さう彼はひとり決定すると、決定したと云ふことで俄に却つてマルクスの脅威から解放された。と、彼は急に掌を返すやうに爽快な氣持になつた。
「こりや俺の罪ぢやないぞ。マルクスの罪だ！」
彼は突然に大聲で笑ひ出した。
「マルクスの奴め、マルクスの奴め！ いや、何、かまつたことではない。證據物件として何がある。高見よりも番人だ！」
今は判事も全く晴れ晴れとした氣持であつた。
暫くすると、彼は安らかに眠つてゐた。丁度、マルクスに無罪を宣言された罪人であるかのやうに。

眞夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄い紙の隅の蜘蛛の網にひつかかると、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れてゐた。と、豆のやうにぼたりと落つた。さうして、馬車の重みに斜めに突き立つてゐる藁の端から、裸體にされた馬の背まで這ひ上つた。

二

馬は一條の枯草を奥前にひつ掛けたまま、猫背の老いた駈者の姿を捜してゐる。駈者は宿場の横の御頭屋の店頭で、將棋を三番さして負け通した。「何に、文句を云ふな。もう一番ぢや。」すると、扇を脱れた日の光は、彼の腰から、四い荷物のやうな猫背の上へ乗りかかつて来た。

三

宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が馳けつけた。彼女は此の朝早く、街に勤めてゐる息子から危篤の電報を受けとつた。それから露に濕つた三里の山路を馳け続けた。「馬車はまだかなう？」「馬車はまだかなう？」彼女は駈者部屋を覗いて呼んだが返事がな

い。「馬車はまだかなう？」「至んだ疊の上には湯飲みが一つ轉つてゐて、中から酒色の香茶がひとり靜に流れてゐた。農婦はうろろと場庭を廻ると、御頭屋の横からまた呼んだ。「馬車はまだかなう？」「先に出ましたぞ。」答へたのはその家の主婦である。「出たかなう。馬車はもう出ましたかなう。いつ出ましたな。もうちと早よ来ると良かったの

四

「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」「二番が出るぞ。」

「出ますかな、街までは三時間もかかりません。三時間はたつぷりかかりません。俵が死にかけてゐますのぢやが、間に合はせておくれかなう？」

五

「知れたら火逃げるだけぢや。」と呟いた。宿場の場庭へ、母親に手を曳かれた男の子が指を衝へて入つて来た。「お母ア、馬々。」「ああ、馬々。」男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ馳けて来た。さうして二間程離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりヤツ、こりヤツ。」と叫んで片足で地を打つた。

馬は首を擡げて耳を立てた。男の子は馬の眞似をして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただ矢辭に馬の前で顔を擧めると、再び「こりヤツ、こりヤツ。」と叫んで地を打つた。馬は槽の手蔓に口をひつ掛けたが、又その中へ顔を隠して馬草を食つた。「お母ア、馬々。」「ああ、馬々。」

六

「おつと、待てよ。これは俵の下駄を買ふのを

「出ますか？」と若者は訊き返した。「出ませんか？」と娘は云つた。「出ますか？」と若者は訊き返した。「出ませんか？」と娘は云つた。「出ますか？」と若者は訊き返した。「出ませんか？」と娘は云つた。

て来る。若者と娘は宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。「持たう。」「何アに。」「重たからうが。」若者は黙つていかにも軽さうな容子を見せた。が、額から流れる汗は鹽辛かつた。「馬車はもう出たかしら。」と娘は呟いた。若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、「一寸暑うなつたな、まだぢやらう。」「誰ぞもう追ひかけて来てゐるね。」若者は黙つてゐた。「お母が泣いてゐるわ。きつと。」「馬車屋はもう直ぐそこぢや。」二人は黙つて了つた。牛の鳴き聲がした。「知れたらどうしよう。」と娘は云ふと一寸泣きさうな顔をした。種蓮華を叩く音だけが、闇かに足音のやうに迫つて来る。娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。「私が持たう。もう肩が直つたえ。」若者は矢張り黙つてどしどしと歩き続けた。が、突然、

「もう二時間も待つてますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつてゐますかな。九時になつてゐますかな。街へ着くと正午になりますやろか。」
「そりや正午や。と田舎紳士は横から云つた。農婦はくるりと彼の方をまた向いて、
「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」
と云ふ中にまた泣き出した。が、直ぐ饅頭屋の店頭へ馳けて行つた。
「まだかな。馬車はまだなかなか出ぬぢやろか？」
猫背の取者は將棋盤を枕にして仰向きになつたまま、黄の子を洗つてゐる饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。
「饅頭はまだ蒸さらんかいの？」

七
馬車は何時になつたら出るであらう。宿場に集つた人々の汗は乾いた。併し、馬車は何時になつたら出るであらう。これは誰も知らない。だが、もし知り得ることの出来るものがあるとなつたれば、それは饅頭屋の電の中で、漸

く腹れ始めた饅頭であつた。何せかと云へば、此の宿場の猫背の取者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつけると云ふことが、それほどの濃縮から長い月日の間、馬身で暮さねばならなかつたと云ふ、彼のその日その日の、最高の愚めとなつてゐたのであつたから。

八
宿場の時計が十時を打つた。饅頭屋の電は湯氣を立てて鳴り出した。
ザク、ザク、ザク。猫背の取者は馬草を切つた。馬は猫背の横で、水を十分飲み溜めた。

九
馬は馬車の車體に結ばれた。農婦は眞先に車體の中へ乗り込むと、街の方を見續けた。
「乗つとくれやア。」と猫背は云つた。
五人の乗客は、傾く踏み段に氣をつけて農婦の傍へ乗り始めた。
猫背の取者は、饅頭屋の黄の子の上で、輪のやうに腹らんでゐる饅頭を腹掛の中へ押し込む

と、取者臺の上にその背を曲げた。喇叭が鳴つた。腹が鳴つた。
眼の大きなかの一定の蛇は馬の腰の餘肉の匂ひの中から飛び立つた。さうして、車體の屋根の上にとまり直ると、今まさに、漸く蜘蛛の網からその生命をとり戻した身體を休めて、馬車と一緒に揺られていつた。
馬車は炎天の下を走り通した。さうして並木をぬけ、長く續いた小豆畑の横を通り、亞麻畑と桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、漸く溜つた馬の顔の汗に映つて逆さまに揺めいた。

十
馬車の中では、田舎紳士の饅頭が、早くも人々を五年以来の知己にした。しかし、男の子はひとり車體の柱を握つて、その生々とした眼で野の中を見續けた。
「お母ア、裂々。」
「ああ、裂々。」
取者臺では腹が動き停つた。農婦は田舎紳士の帯の頭に眼をつけた。
「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎました

かいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。
取者臺では喇叭が鳴らなくなつた。さうして、腹掛の饅頭を、今や盡く胃の腑の中へ落し込んで了つた取者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きな蛇が押し黙つた数段の梨畑を眺め、眞夏の太陽の光を受けて眞赤に染えた赤土の斷崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下して、さうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたときしみ出す音を聞いてもまだ續いた。併し、乗客の中で、その取者の居眠りを知つてゐた者は、僅かにただ蛇一疋であるらしかつた。蛇は車體の屋根の上から、取者の垂れ下つた半白の頭に飛び降り、それから、濡れた馬の背中に留つて汗を舐めた。
馬車は崖の頂上へさしかかつた。馬は前方に現れた眼隠しの中の路に従つて柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の脚と、車體の輻とを考へることが出来なかつた。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車體に引かれて突き立つた。瞬間、蛇は飛び上つた。と、車體と一緒に崖の下へ墜落して行く放埒な馬の腹が眼についた。さうして、人馬の悲鳴が高く

一聲發せられると、河原の上では、腰し重なつた人と馬と板片との鳴りが、沈黙したまま動かなくなつた。が、眼の大きな蛇は、今や完全に休まつたその羽根に力を籠めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいつた。

無禮な街

街は祭りだ。樹のない叫れかかった夜の街の
雨。賑には、泥濘の傍まで露店の天幕が並んで
ゐた。人波は汗ばんで甘い塵埃の匂ひがした。
私は人々の顔をきよきよと見廻しながら歩い
た。何を捜してゐたのか。逃げた妻がもし氣ま
ぐれにでも流れ込んで来てゐたら？ さう云
ふ私の感じは人波にもまれたときのいつものこ
とで今に限つたことではない。何か他に。私は
漠然と胸を捜してゐたのだ。胸の顔と云ふ
ものはどこかに面白味があるにちがひない。こ
れこそ人間の代表的な顔だと思へるものは胸の
仲間にありさうに思はれた。しかし、もう人々の
身体に突きあたつて行くのはいやだ。私は街
を外れた。人々は祭りにひきつけられてゐる露
路裏は空虚だつた。細い新月が圓の歪んだ扇の
上で蒼蒼として光つてゐる。泥濘には油が浮い
てゐた。私は空の煙筒を数へてみた。一本の煙
筒は細々と煙を横に吐いてゐた。暗い露路を離
形に幾つ曲つてもまだ月は追ひかけた。蒸し
つく晩だ。猫が私の家の上で首を擡げて黙つて

ゐた。暗い中で水道栓が鳴つてゐる。桐板の上
からは針の花薔薇が生々と覗いてゐた。
「一寸御覽なさいな。いいわね。私、此の薔
薇に香水をかけてやるの。」
妻のゐたとき、妻はさう云つて或る夜その薔
薇の鉢を快活に抱きかかへて歸つて来た。
私は家の中へ入つた。忘れた。花薔薇を買ふ
のであつた。私の汚い部屋の中にはいたる所
の花瓶や花筒に花薔薇が挿してある。その色と
りどりの花々はあながち孤獨な純情な生活に
よりいささかの生氣を放たなげばかりでは
なかつた。私は此のまる二年と云ふもの雌蕊の
夜眠りの研究に没頭して来た。妻は何ぞ逃げた
のか。私にもよきは分らない。恐らく貧困のた
めであらう。それ以外のことを考へると云ふ
ことは、とにかく考へ得られるにしてもあまり
に自分の妻を見下げるのだ。私は彼女を愛し
てゐる。何ぞか、愛してゐる。私が初めてスキ
ートビーを買つて来たとき、妻は寝衣に帯を締
めかけてゐた所であつた。

「あら、まア、スカートビーね。スカートビー
だわ。まア、綺麗だねえ。」
彼女は私の持つてゐる花束を奪ひとると、ば
らりと帯を捨てて高く兩手でその花束をささ
げながら云つた。
「あなた、これ一寸スカートビーよ。まア、美
しいわね。」
彼女は、直ぐ帯も締めずにはふはふはとそのま
ま流しよとの水の傍へ飛んでいつた。一束の花
にも、それほど心を奪はれる彼女であつた。敏
感と云ふことが、もし鈍感のやうに沈着に重々
しいものであつたなら、私の生活は寔に妻れ
ぬ一對の花のやうにいつまでも幸福であつたら
う。
私は花瓶に水を入れ替へるとその杓で冷たい
水を一口飲んだ。何もすまい、こぼれた花薔も
まだ昨日のままに散つてゐた。風情がある！
私の慰めとは、これだ。逃げられた男の恍惚
とは逃げた妻の美しい習慣を忘れぬことだ。
窓が閉まつてゐた。私は窓を開けて風を入れ
た。カーテンを買はねばならない。猫がひらり
何處かで飛び降りた。新月がひとり空に残つて
ゐる。
「笑ふべき現象だね。」と私は云つた。

とにかく誰に向つて云つたのかよく分らぬ
が、この蒸しつく窓から逃げられた男ひとり空
を仰いでゐると云ふことは！ 黙つてゐるのに
何ぞか私は瞬間と雖も黙つてはゐないやうに
思はれる。私は家の中から何か新しいものを
発見しようとして部屋の隅々を眺め廻した。ま
だ見たこともない節穴や木目の形まで檢べなが
ら。しかし、それももうさくさくなつた。私はバナ
ナの皮を削いて食べ出した。その匂ひがどこか
の誰かの愛人の匂ひのやうにまことに物本かで
香氣があつて、と私は考へると淋しくなつた。
「果實！」
さう私は何ぜともなく呟いた。遠く祭りの
ざわめきが聞えて来た。彼らは何をやるのか？
何かに耳を敬てるやうにふと私は心をそのこ
とに集中した。
「われわれは滅びて了ふ。」といきなり私は感じ
た。
私はバナナを食べた。悲しくもなければ淋し
くもない。ここには何か分らぬ眞理が傲然とし
てゐるに相違ない。
「これはバナナだ！」
夜が更けていつた。空氣が冷たく濡り出し
た。街の祭りのざわめきがだんだん低まつて来

た。私は脱けた柱の釘を黄銅鏡の交響で打ち
つけた。それから顯微鏡のレンズを脱して拭き
始めた。夜の私の仕事はいつもそれから明け方
まで續いて行く。ふとそのとき私は玄關から
物音をききつけた。
誰かな？
妻かな？
風かな？
「どなた？」と私は云つた。
私は玄關へ立つていつた。すると、見たこと
もない女が私に背中を向けて戸を締めてゐた。
「誰方ですか？」
女はこちらを向くと息をはずませて黙つてゐ
た。若い女だ。顔がひどく蒼ざめてゐて、彼女
は私の顔も見ずどこか私の周囲を見廻してゐ
た。何かに餘ほど脅かされてゐるらしかつた。
「間違ひでせう？」と私は云つてみた。
女は私を見て一寸笑顔になつた。
「上がつてもよくて？」
「どうぞ。」と私は云つた。
云ふや否や、女はもう下駄を脱ぎにかかつて
ゐた。左の頬に一つ眼に立つ黒子があつた。

私は奥へ入つて座蒲團をすすめた。女は早やべ
たりと坐つてゐて自分で締めた後ろの襖の隙間
を見詰めてゐた。私は何と云つてよいのか分ら
なかつた。何かの間違ひにちがひない。
「遅くなつて了つたわ。」と女は云つた。
「いや。」
「蒸しむしするのね。」
「どうかなすつたのですか？」
「あなた、ひとり？」
「ひとり者ですよ。」
「ア、血が。」と女は云つて私の手の指を指差
した。
いつの間にか私の指からは釘を打ちつけたと
きの痛まぬ傷口から血が出てゐた。しかし、此
の女は不思議にも馴々しい魅力があつた。女
は袂から紙を出さうとして周章してゐた。
「いいんですよ。どうかなすつたんですか？」
「さうぢやないの。」と女は云つた。
何ぞさう云ふ風なことを云ふのであるか。
私の疑ひ深さうな眼つきから考へて、私の考
察を訂正しようとするかのやうだ。全く私に
限らず彼女をひと眼見たものは、彼女のその態
度から賤しい生活の匂ひを嗅ぎつけたにちがひ
ない。しかし私にはそんなことがらが私の眼

色を變へさせたそれほど何の重大なかかはりがあるものか。ただ私にとつて興味があつたと云ふことは、此の不意に飛び込んで来た女の得體の知れぬ馴々しい色彩が、とにかく一寸黒い花でも見るやうな不安な魅力を感じたことだ。私は指の血を散つてゐたスキーボードの柔かい花舞で拭きとつた。女は壁に貼りつけてあるモナ・リザの版畫を眺めてゐた。その繪は妻が繪の中の女の微笑を見習ふためにわざわざ貼りつけたものである。

「あの繪、キリストさんのね。」と女は云つた。思ふにこれは何處かでマリヤの繪でも見て来てそれをキリスト教の何かと關係があるらしい説教を誰かに聞いたものに相違なかつた。聖母とリザとを間違へる程度の見識で、なほ全然私の世界に無習ではないと云ふことを示したい彼女の願ひに私は好意を持たう。が、私のしつかつめらしい鄭重な言葉が彼女の馴々しさに不似合な感じを持つて響いて行くのがあつた。これは私は夢想家だ！

女は何ぞだか「ふふ。」と笑つた。何ぞ私はさう云ふ可哀想なことを云ひ出したか。しかし、女は私のその侮辱も私の汚い變化にもさして氣にする所がなかつた。私が慰めようとして優しい言葉を捜してゐる暇に、彼女は人づつて来た襖の方を振り向いてそれはそはしく膝を動かしてゐた。しきりに戸の外が氣になるらしい。祭りの響は消えてゐた。女は誰かに追ひつめられて迷ひ込んで来たにちがひない。私の家は露路裏の袋の底のどん底だ。もし逃げるなら此の窓を飛び越すより仕方がなかつた。

「誰か来るのかね？」
「私、歸りたくないの。」
どうして若い女がただひとりの家へ飛び込んで来たのかまた私は知りたくなつた。前から私の家には若い男がひとりであると云ふことを知つて来たのか。それとも他の誰かの家へ来るつもりで偶然私の家へ入つて来たのか、また私のゐない前に此の家には彼女の知り合ひの誰かがゐたのであるか、そのどちらであるかをはずきりと知りたかつた。

「いつ？」
「一度、たつた一度きりよ。」
「僕のおるとき来たのかね？」
「あのとときあなたをたのびたの？」
「をかしい。これは私のゐる前に彼女が此の家へ来てそのとき彼女の知らない澤山の若者が集つてゐたのかも分らなかつた。」
「僕はそのときゐなかつたんだよ。」
「さうお。松山さんも？」
「松山さんで知らないがね。」
「あなた知らないの。」
「君は僕が此の家へ入る前の人のときに来たんぢやないかね？」
「女は一寸驚いたらしく口を開けた。」
「私、あなたを見たことがないわ。」
「そりやさうだらうとも。」
「ちや私、間ちがつたんだわね。」
「さうだよ。僕はあなたなんか見たことがないよ。」
女は黙つて眉を動かした、が、直ぐ晴れやかに笑ひ出した。

「困つちやつたわ。」
「これから遠くまで歸るんですか？」
「ええ。さやうなら。」と女は突然云つて頭を下げた。

下げた。

「君、外へ出ると困るんぢやないですか。困るのならここにゐたつていいんですよ。」
すると、女は歸りさうにもせず暫く黙つて部屋の中を見廻してゐた。どこかさう云ふときに限つてぼんやりする顔だ。圓く全く思慮の缺けた愛すべき顔つきで、その物腰に飄々とした不安定な動きがあつた。

「もう幾時頃かしら。」と女は呟いた。
「十二時少し廻つてゐるね。」
「さうだわね。」
女の顔には落ちついた様子がみえた。すると、彼女の顔は速に快活になり出した。
「あなた、花が好きなの？」
「いや。」
「澤山あるわね。」
「君は好きかね？」
「好きだわ。綺麗だわね。あの花もいいわ。直ぐ湖んでは了らない？」
「調むよ。」
「碗豆？」
「さう。」
女はまたくるくる部屋の中を見廻した。
「あ、蒸しつく。私、今頃から歸れない。」

上ければ泊つて行くがいい、と私は云はうとした。が、一組より蒲團がない。暫く黙つてゐると、女が袂で顔を探さながら、

「今夜ここにゐてもよくて？」と云つた。
「いいとも、だけど君の寝る蒲團がないのだが。ア、さうだ、借りて来よう。」
「いいわ。私、寝ないわ。あなた、もう寝るんでせう。」
「いや、寝ない。僕は夜は寝ないんだから。さうだね、僕の蒲團で寝るといいよ。」
「どうして寝ないの？」
「僕の商賣は人と違ふんだから、晝寝て夜起きると云ふやつなんだから、いいよ。誰か来たら、ゐないと云つておけばいいんですよ？」
「さう云つてよ。」
女は媚く袂を放して喜ばしさうな顔をした。矢張り何が恐いのだ。

「泊めて、ね？」
「どうぞ。」と私は軽く云つた。
「ありがたいわ。」
女は片方の袂の中からチョコレートを取り出すと銀紙を剥ぎ始めた。
「ここ變つたのね、前に来たときには支那人がゐたわ。」

「はア。」

此の女はその支那人とも何か關係があつたにちがひない。男の家から家へと泊り渡つてゐる特種の女らしかつた。それにしても一體何者が此の女を追つつけてゐるのだらう。それは私には問題となり出した。

「あなた、奥様があるの？」
「あるやうに見えるかね？」
「あんな饒幸なんか費澤だわ。」
「家内はあつたんだよ。」
「死んだの？」
「死なない。」
「ちや今はゐないのね。」
「逃げたんだよ。」
「ふーむ。」と女は不思議さうな顔をした。
「興味があるかね。」
「ひどいわね。」
「君もさう思ふかね？」
「だつてひどい女だわ。」
「さう云つてくれる者が一人ぐらゐ欲しいんだよ。」
「いつ逃げたの？」
「よほど興味があると思えるね。」
「でも、あなたが可哀想だわ。」

「良人を抱つたらかして逃げて行くなんて、面白くないね。」

「あなた一人なら部屋が汚くなる筈だわ。」

「そんなに汚いか。」

「汚いっつたらありやしない。」

「女は畳の上を歩いてみてゐた。」

「私、あとで掃除してあげてよ。こんなに塵埃がたまつてゐるんですもの。フツ、フツ。」

「吹いちゃいかんよ。」

「まあ随分ほこりがあつてよ。家も悪いんだわね。ざらざらしてゐるぢやないの。これぢや風が吹いたらたまらないわ。」

「私はすっかり忘れてゐた顕微鏡にレンズを入れた。」

「何に、それ？」と女は訊きながら寄つて来た。

「知らないか？」

「顕微鏡？」

「さうだよ。」

「大きく見えるんだわね。」

「うむ、さうだよ。花を見るんだよ。こんなのが僕の商賣なんだ。面白いかね？」

「見せてよ。」

「一寸待つた。」

鏡盤の上に置いて度を強めた。

「さア見た。」

「女は口を開けて顕微鏡の上へ顔を俯向けた。」

「雙だわね。」

「見えるかね。」

「何んだかぼやぼやしてゐるわ。」

「血が見えるだらう。」

「赤いのがさうなの？」

「白いのもさうだよ。雲のやうな形のもがあるでせう。」

「白いわね。」

「白いのも血だよ。」

女は黙つて顕微鏡の口の上で動かしてゐた。

「女の血を見ると、あの白い物の形が違ふんだよ。幾人男と面白いことをしたかつて云ふことだつて、あの形でちゃんと分るんだよ。どの男とさう云ふことをしたことも勿論分るし、面白いかね？」

「恐いわね。」

「女は顔を上げて私の顔を眺めてゐた。そのなげやりな表情には別に恐さうな所もなかつた。」

「あのね、澤山な男と一緒になると子供が出来ないの？」と女は突然そんなことを訊き出した。

どこかに何かを隠したやうな顔つきだ。

「そりや出来るさ。」

「出来なかつていつたけど、誰だわね。」

「そりや誰だ。」

女は黙つて片方の膝を動かしながらチョコレートの紙をもみ出した。私はその女の血球を顕微鏡に乗せてみたい興味があつた。私は前に一度妻の血球を調べて見ようとしたことがあつた。しかし、私は恐くてやめた。疑ふと云ふことは、疑ふ可き價值があつても罪悪である。私は考へた。總ての世の中の結核にもし顕微鏡が必要となつたなら、(恐慌の後に不安が来るだらう、人々はその恐慌の時代に自分自身を置くことを嫌ふ。時代の動力は巧利である。少くとも時代自身はまだ見えない時代の犠牲となること、明らかに進歩を来すにちがひないと思はれる時に於てさへ、なほ彼らは犠牲の苦しみを厭ふ。)と私は考へた。

「君、眠けりや僕のつき合ひなんかしなくつて眠るがいいよ。僕は眠かないんだから。」

「さうお。」

「眠いでせう？」

「どこで眠るの？」

「向うの部屋で寝る方がいだらうね。どこで

寝たつていいが。」

女は私の指差した次の三疊の部屋へ行かうとして立上ると、袂の中から残りのチョコレートを出して畳の上へ投げ出した。

「君は誰かに追つかけられてゐるんぢやないか？」

「女は振り向いて、

「何ぞ？ 誰よ。」と云つた。

「どうもさうらしい。」

「そんなことはないわ。」

「そはそはしてゐる。僕には心配なんかしなくつていいよ。先から變だ。」

「私、赤ちゃんを捨てて来たの。」女は平氣な顔をして云つた。私は一寸ショックを受けた。

「捨兒かい？」

「うるさいんですもの。」

「誰の子だ？」

「私の。」

「君の子を捨てたのか？」

「捨てちゃつたのさ。」

「女は赤い顔して大膽に頬をふくらせた。」

「そりやいかん！ いつだね？」

「さつき。」

「来る前だね？」

「ええ。」

「誰ついてるんぢやないか？」

「あちらに淵があるの？」

「どこだ！」

「なに？」

「赤ちゃんどこへ捨てたんだね？」

「八幡さんの中へ置いといたの。」

「坂の上の？」

「ええ。」

女は三疊の部屋へ入らうとした所で、襖を縦に腹へあてながら口を鳴らしてゐた。

「早く拾つて来るといい。今ならいいよ。」

「うるさいわ。」と女は云つた。

「いかん。」

私は直ぐ外へ出ようとした。

「邪魔つけぢやないの。今頃拾はれて了つてるわよ。」

私は外へ出た。歩きながら、私は何ぞか誰にひつかかつてゐるやうな氣持がした。露路を出て深溝の傍を通つていつた。しかし、誰にしても捨兒をしたと云ふ誰は誰らしくない誰であつた。あまり上手い。だが、もし本當だとすれば

いまだ少し女の舉動に何かの懸ひがある筈であつた。それが無い。恐ひの代りにいくらかの恐怖

はあつた。捨兒をして来た女が懸ひよりも恐怖を多く感じると云ふことはあり得るとして、しかしそれでもどこかのんきな所に誰だと思はず感じが残つた。無論それは捨兒をすることがあまり事件の性質として、突的な變態的な所が多いためであるかもしれなかつた。が、もし本當だとしても捨兒はそこにはゐないと云ふ感じがした。拾はれて了つたがためにゐないと思はれるのではなく、誰らしい事件の性質がそんな風に思はせた。

祭りの跡では露店の天幕が畳まれてゐた。濁つたやうな夜氣の中で醉漢が踏み歩いてゐた。獲かれて行く植木屋の車の上では賣れ残りの花が漂へてゐた。私は人通りのなくなつた橋を渡つて女の云つた境内の方へ歩いていつた。が、ふと私は困つた。一體その捨兒を拾つて来て、私はどうしようとするのか。兒を捨てようと思へて、さうして捨て得られた母親にその兒を再び強ひたとしてもその子も母も不幸であるのは分つてゐた。それかと云つて、私自身でその兒を育てて行く考への無い以上、私はその子を拾ひ上げたとしても仕方がない。それよりそのままにしておけばやがてはその兒を拾ふであらう人達の誰よりも恐らく愛を持たない私やその

母の手へその子が歸るより、われわれよりも子を欲するであらうそれらの人々の手へその子の落ちることこそは子にとつてより幸ひな運命となりさうに思はれた。實際拾兒に出逢つた人々は凡そ私と同じ氣持になつて見捨てるものとして見た場合、もしその兒を拾つた人があつたとすればその人はなみ通常の人情家であらう管はない。とにかく、その兒は早や母に捨てられたと云ふことに於て既に此の人生の出發點で不幸であつたのだ。しかし、それはまたいかにさやうであつたとしても私は今更引返すことは出来なかつた。さう云ふ事實に今明瞭に出逢つたと云ふことが私に避く可からざるある責務を生じさせたのだ。既にそのことに何かを感じたと云ふことに於てだけさへもその兒の運命を見届けなければならぬと云ふ義務が生じてゐるやうに思はれた。なほその上にその兒の母を知つてゐるものがまさにその子の拾ひ手とならうとしてゐる私であるとして見れば、これはいよいよ複雑な問題とならねばならなかつた。ともかく私は私としてまづ何はさておきその兒を母の愛に訴へて彼女に返す必要があつた。彼女がもしそこで知らないといふたならば、私はその兒の母を全く知らないものとして誰か子を欲

する適當な人々の申し出のあるまで出来得べくんば養つてやらうと考へた。しかし、それにしても何せ彼女は私にこのやうな重大な自身の秘密を輕々と打ち開けたのか。それが私には分らなくなつて来た。それは彼女本來の輕率からだとばかりに思つた場合さぶる明瞭なことであつた。が、更にその他に何かがないか、何か子に對する愛情が、もしその秘密を打ち開けたとき相手のものが狼狽して私のやうにその子を拾ひに走るであらうと推察しての好奇心が彼女にあつたと思へば思はれないこともない。それにととひまことに問題とはならぬ閃きのやうな些細なものであつたとしても、そのかけひきの愛情の動きからは争はれぬ子に對する彼女の愛情がちらりと覗いてゐるやうに思はれた。そこから、彼女を攻めかけて反省させればせられる。いづれ他人の手より子にとつては母の手だ。もしそこで彼女がその子をいやだと云へば私は云はう。

「私に知らさずにもう一度捨てるがいい。」
それでも私はまだ彼女の顔にひつかかつてゐるやうな氣持がした。私は教會堂の横を通つて坂を登つた。私はふと妻のことを思ひ出した。何せだか私はここを通る度にいつも必ず妻のことを思ひ出す。勿論そのあたりには私に妻を思ひ出すしめる何らの特殊な現象もない筈だのに。何かその空氣の中には確かに、眼に見えぬ何かがあるに相違ない。八幡の境内はその坂の上にあつた。櫻が枝を垂れて繁つてゐた。私は低い石段を登り、鳥居を滑つて石畳の上を歩いていつた。周囲は森のやうに沈まつて暗く、樹の幹が時々立ち停つてゐる人のやうに見えた。すると拜殿の前に一人の黒い人影が鈍く靜に動いてゐた。私はその男らしい人影を見ると立ち停つた。もしその者も前に一度そこを通りすぎたとき拾兒に逢つて、さうしてそのまま逃げ出したもの、またそれが心にかかつて舞ひ戻つて来たものではなからうか。實際、拾兒に逢つたものはたとひ全く拾ふ意志がないものにとつても長く氣にかかるにちがひない。私はその人の傍に近寄つて行つて拾兒のことを訊ねてみようかと思つた。が、訊ねて見て、拾兒があつたと答へられても見當らない限り仕方なく、訊ねたと云ふことで、その拾兒と何かの關係かありさうに思はれると云ふことも不快であり、訊ねて知らないといふはれたときはまたその人に自分と同じ動搖を與へさうで氣の毒で、よしましたたとひ拾兒を知つてゐたとしても拾はな

かつた限り知らなかつたと答へるにちがひはなく、が、しかし何かの方法で確かに拾兒があつたと云ふことをその者から知り得ることが出来たとすれば、私は私一個の感情の整理に役立つのだ。永らく此の後ともその拾兒のことが氣にかからねばならないと云ふことは私としては困つたことだ。で私はその人影の方へ近寄つて黙つてその者の舉動を観察しようと思つた。私はもはや拾兒はこの境内にゐないことを直感した。私はその兒を捜すことは第二として、その男の傍へだんだんと近づいた。するとその男は男の方から私の方へ近寄つて来た。片手を帯へ袂み、片手を懐へ入れてゐてどこか萎れた様子が見えた。はて此の男。私がこの男を観察しようとしてゐるやうに、此の男も同じ心理で私を覗きつけようとしてゐるのではな

いか。私はその男の傍を擦れ擦れに通つて顔を見た。暗い顔の真中からその男の眼がまた私の顔を覗き込んだ。疑ひ深さうなその眼の光りが私には不快であつた。さう云ふ光りの眼とはいつも私は争ひさうな氣持がした。が、男の歩く方向は鳥居の方の出口とすれば斜めに少し外れてゐる。これではまた散歩のやうにぐるりと廻つて私の後を追つて来さうに思はれた。

私は拜殿の裏へ通つた。もし拾兒をした所が八幡の裏であつたとしたらそれは高い石垣だつた。いづれするならば此の拜殿の周圍に違ひなかつた。拾兒をする以上靜で人眼にかかる所ではなければならぬ。が、ゐない。しかし、あの男は何せいつまでこの周圍をうろつてゐるのであらう。手洗鉢の石の中で、樹の間を洩れた月の光りが水に映つてきらりと一つ光つてゐた。私はその男の歩行に感覺を働かせながら拾兒の所在を捜し廻つた。が、ゐない。男はときどきこちらの方々を向きながら石畳の上で足數を算へるやうに俯向いて歩いた。ふと、私はその男が誰かとそこで待ち合せてゐるのではないかと考へた。もしそれが嫌だとしたら彼にとつて私のゐるのには明らかに邪魔だつた。私はそれ以上境内にゐる必要もななくなつた。拾兒はあたりは靜に落ちついてゐるではないか。もう私は拾兒を捜す氣がなくなつて来た。そのまま直ぐ境内を出て坂を降りた。歸つて女の話をせめてやらう。そのときの答辯の仕方拾兒は事實であつたかどうかを判断しよう。が、それがもし事實であるとしてみれば私は拾兒を拾ひに出で来たのを彼女が知つてゐるからは彼女は

「米を飲みたいくはないかね。」
「ゐて？」と女は訊いた。
「君は誰を云つたんだね。」

をしてゐるの、持つても困るもんだわ。」
これは面白い。實際持つても困るのだから、
有るが故に愛されるとは悲劇である。

「所が金がないと、僕のやうに逃げられるよ。」
女は隣室でからからと高く笑ひ出した。

「あなた、お金がなくて逃げられたの？」

「さうだよ。」

「馬鹿々々しいわね。」

「實際馬鹿な話だよ。こんなことつてない方が
いいね。」

「奥さんに今度出逢つたらどうするの？」

「それが困るのさ、まさかよく逃げてくれたと
も云へないし。」

「ひつばたいてやるわい。」

「君だつて今に子供にひつばたかれるぞ。」と
私は笑ひながら云つた。

すると、女は急に黙つて了つた。それぎり
彼女は何事も云はなかつた。ふと彼女は泣いて
ゐるのではないかと私は思った。實際のん氣
に見える女性と云ふものは人々の思はぬときに
不意に泣き出すものだ。彼女の本性は生活
の享樂的な部分にのみ生える草花の様で、し
かしながら生活してゐると云ふ事の避く可から
ざる反證としての苦痛が、それだけにまた突如

として彼女の精神の弱つた一部をめぐり
込んで来るにちがひない。此のため彼女らにと
つて最も大切な生活上の武器は忘却性をと
り上げて了つた代りに、憤まじやかな悔恨を
強ひ續けていくとしたら恐らく彼女らは餘りに
重いその人生の苦痛のために根を抜かれた草の
様に滅びて了ふであらう。私は隣室の女にさ
う云ふ彼女の弱點について何事も言つてはな
らなかつたのだと云ふ事に氣がついた。彼女は
彼女の性格からもつとも子供のために自分の
爲めにも都合のいい方法を取つたのだ。今の場
合われわれの忠告や批評は何らの建設的な契
機にさへもならないと思はれた。見るがいい。
彼女は子を拾はれてさも安らかに喜んで居るで
はないか。

微風が夜の窓から流れて来た。花の匂ひがす
る。浴衣が壁にかかつたまま静に褥を靡かせて
ゐた。私は暫く窓に腰を下ろしてゐた。それ
からいつものやうに花屋のショーウィンドウを
覗きに覗つた街へ出ていつた。花屋の窓の青い
襖にはダリヤと百合と昨夜より数多くなつた矢
車草とが挿さつてゐた。その一段と低い下には
ガラスの鉢に盛り上つた石竹が。罌粟と薔薇
と夏菊とは瀬戸の花筒から首を擡げて黙つてゐ

た。葉は庭を埋めて青々と水に打たれて光つて
ゐた。花々は花屋の人の眠りのためにそれだけ
今は静にのびのびと自由に見えた。しかし、傷
つけられた醜い紫陽花の數輪は東を解かれたま
ま堅い土間の上に胸を横へて萎れてゐた。私
はその夜遅くまで街を歩いてゐた。家へ歸つた
ときはどこかで鶏が鳴いてゐた。足がひどく
汚れてゐて着物が肩に重く掛りつゝいた。私は足
を洗つて着物を着替へると先づ煙草を一服ゆる
ゆると吸つた。空は静に緑色に變つて来た。
街道では車の轍の響が始めた。空気が夜明
けの色の中で一層冷たくなつた。私は膝に火
を焚きつけて湯を沸かした。やがて部屋は煙を
立ち籠めたままだんだんと明るくなつた。遠く
の高い建物の窓硝子は最初の朝日を受けて桃色
にきらきらと輝き出した。雀は勇敢であつた。
彼らは屋根から屋根を一風となつて駆りつける
やうに飛び廻つてゐた。
湯が沸き立つて来た頃、女は起きて来た。
「よく眠れたかね。」と私は訊いてみた。
女は黙つて笑ひながら眼をこすつた。
「君は寝功ぢやないね。」
「私は夢ばかり見てゐたわ。」
女が顔を洗ふ間に私は茶を淹れた。

「どうぞ。」
私は彼女の前に茶を差し出した。女は私の
仕打ちを皮肉にとつて笑つてゐた。
「私、直ぐこれから行かなくちやならないん
だわ。」
無論私はとめなかつた。

「ね、私、これから八幡様へ一度行つて来た
わ。それから行かうかしら。」

「それもいいね。」

「あなたあそこまで一緒に行つてよ。」

「行かう。」

二人は茶を飲んでそれから家を出て行つた。
路傍の水道栓は一人の主婦の傍ですががしく
水を吐き出してゐた。街の屋根看板は露に濡れ
て新らしく光つてゐた。家々の戸は開けられ出
した。

「あなたまだ寝ないんだわね。」

「寝ない。」

「そんなことしちや毒よ。」

「早く死ぬかもしれないね。」

「さうよ。早くいい奥さんを捜すわい。」

「ないよ。」

「あつてよ。あなたにはいい奥さんを持たした
いわ。」

「資格があるかね。」
「あなたの奥様にや私のやうな女は駄目よ。」
私は何とも云へなかつた。
「俺も駄目だ。」
坂を登り出したとき、朝日はいよいよ明るく
輝き出した。敬會の尖塔は傾いた丘の上で、
新鮮な樹の緑の波を突き切つてひとり空高く聳
えてゐた。煙は家々の屋根の上に稠曳したまま
動かなかつた。神社内へ入つたとき、女は黙つ
たやうな石畳の上を、ひとり奥の方へ馳けてい
つた。

「ゐないわね。ここよ。」彼女は手洗鉢の石の
前に立ち停つてその下を指差した。
「そこも見えよ。」
女は暫く物珍らしさうな微笑を浮かべながらそ
の石のあたりを眺めてゐた。
「あの子、泣いたんだわね。」
私は黙つてゐた。露が樹の枝から落ちて来
た。今は私は何事も言つてはならぬ。
「可愛らしい子よ。女の子。座蒲團へ巻いてい
たのよ。ゐないわ。」
「いい人に拾はれたらいいがね。」
「さうよ。ねえ？」と女は私の顔を見上げた。
私は高い石垣の上から妻と捨兒を飲み込んで

ゐる街を見下ろした。街は壯大な花のやうであ
つた。街は大きく起伏しながら朝日の光りの中
で洋々として吹き誇つてゐた。
「ぢや、私歸るわ。すまなかつたわね。」と女
は云つた。
私は女の方を振り向いて頷いた。
「さやうなら。」
「さやうなら。」
暫くして、女は朗らかな朝の空気の身を軽く
に街のどこかへ消えて了つた。
「俺は何物をも肯定する。」と、街は後に残つて
ひとり傲然として云つてゐた。
私はその無識な街に對抗しようとして息を大
きく吸ひ込んだ。
「お前は錯誤の連続した結晶だ。」
私は反り返つて威張り出した。街が私の脚
下に横はつてゐると云ふことが、私には明れ晴
れとして爽快であつた。私は樹の下から一歩
出た。と、朝日は私の眼を眼がけて殺到した。

ナポレオンと田蟲

ナポレオン・ボナパルトの腹は、チユイレリ
の觀臺の上で、折からの虹と對峙するかの
やうに張り合つてゐた。その圓壯な腹の頂點
では、コルシカ産の瑪瑙の如く巴里の半景を至
ませながら、胸かに妃の指紋のために曇つてゐ
た。

ネー將軍はナポレオンの背後から、ルクサン
ブルの空にその先端を消してゐる虹の足を眺
めてゐた。すると、ナポレオンは不意にネーの
肩に手をかけた。
「お前はヨーロッパを征服する奴は何者だと思
ふ。」
「それは陛下が一番よく御存知でございませ
う。」
「いや、余よりもよく知つてゐる奴がゐるさうに
思ふ。」
「何者でございます。」
ナポレオンは答の代りに、いきなりネーのバ

ンドの留金がチヨフキの下から、きらきらと夕
榮に輝く程強く彼の肩を搦つて笑ひ出した。
ネーにはナポレオンの此の奇怪な哄笑の心理
が分らなかつた。ただ彼に搦られながら、恐る
べき易ひから逃がれた蠻人のやうな、大きな哄
笑を身近に感じただけである。
「陛下、いかがなさいました。」
彼は語尾の言葉のままに口を開けて、暫くナ
ポレオンの顔を眺めてゐた。ナポレオンの唇は
は、間もなくサンクルウの白い街道の遠景の上
で、皮肉な線を描き出した。ネーには、此のグ
ロテスクな中に弱味を示したナポレオンの風貌
は初めてであつた。
「陛下、そのヨーロッパを征服する奴は何者で
ございますか？」
「余だ、余だ。」とナポレオンは片手を上げて元
談を示すと、階段の方へ歩き出した。

ネーは彼の後から、いつもと違つたナポレオ
ンの狂つた青い肩の均衡を見詰めてゐた。
「ネー、今夜はモロワコの薔の果をお前にやら
れず始められた。
彼の田蟲の活動はナポレオンの全身を戦慄
させた。その活動の最高頂は常に深夜に定つ
てゐた。彼の肉體が毛布の中で自分の温度のた
めに膨脹する。彼の田蟲は分裂する。彼の爪は
痒みに従つて活動する。すると、ますます活
動するのは田蟲であつた。ナポレオンの爪は、
彼の強烈な意志のままに暴力を振つて對抗し
た。しかし、田蟲には意志がなかつた。ナポレ
オンの爪に猛烈な征服感があればあるほど、田
蟲の戦闘力は紫色を呈して強まつた。全世界
を震盪させたナポレオンの一個の意志は、全力
を上げて、一枚の紙のごとき田蟲と共に格闘し
た。しかし、最後にのた打ちながら屈した。な
ければならなかつたものは、ナポレオン・ボナパ
ルトであつた。彼は高價な寝臺の彫刻に腹を當
て、打ちひしがれた獅子のやうに腹這ひながら、
奇怪な哄笑を洩すのだ。
「余はナポレオン・ボナパルトだ。余は何者
も恐れぬぞ。余はナポレオン・ボナパルトだ。」
長く明けていつた。その翌日になると、彼の政
務の執行力は、論理のままに異常な果斷を猛々
しく現すが當であつた。それは丁度、彼の

う。ダントンがそれを食ひたさに、椅子から轉
がり落ちたと云ふ代物だ。」

その日のナポレオンの奇怪な哄笑に驚いたネ
ー將軍の感覺は正當であつた。ナポレオンの
腹の上では、徑五寸の田蟲が地圖のやうに猖獗
を極めてゐた。此の事實を知つてゐたものは、
貞淑無二な彼の前皇后ジョセフィヌただ一人
であつた。
彼の肉體に此の植物の繁茂し始めた歴史の
最初は、彼の地圖を確證した伊太利征伐のロヂ
の戦の時である。彼の眼前で彼の率ゐた一兵卒
が、彈丸に撃ち抜かれて轉じた。彼はその銃
を拾ひ上げると、先頭を切つて敵陣の中へ突入
した。彼に續いて一隊の兵卒は動き出した。そ
れに續いて一大隊が、一隊隊が。さうして敵軍
は崩れ出した。ナポレオンの慄然たる榮光はそ
の時から始まつた。だが、彼の生涯を通じて、
アングロサクソンのやうに彼を苦しめた田蟲も
また、同時にそのときの一兵卒の銃から肉體へ
移つて來た。
ナポレオンの田蟲は項癖の一種であつた。
それは總ゆる皮膚病の中で、最も頑強な痒さを

(田蟲とナポレオン)

與へて輪郭的に擴がる性質をもつてゐた。搦
けば花梨を踏みにじつたやうな汗が出た。乾け
ば素短のやうに素朴な白色を現した。だが、そ
の表面に一度爪が當つたときは、此の濕疹性の
白癬は、全身を擡げて猛烈と活動を開始した。
或る日、ナポレオンは侍醫を密かに呼ぶと、古
い太鼓の皮のやうに光澤の消えた腹を出した。
侍醫は彼の腹の傷へ、悲惨な禿頭を近寄せて
覗いた。
「Trichophyton, Eryema, Marginatum,」
彼は頭を傾け變るとボナパルトに云つた。
「閣下、これは東洋の墨をお用ひにならなけれ
ばなりません。」
此の時から、ナポレオンの腹の上には、東洋
の墨が田蟲の輪郭に従つて、黒々と大きな地圖
を描き出した。しかし、ナポレオンの田蟲は西
班牙とはちがつてゐた。彼の爪が物々たる雄圖
をもつて、彼の腹を引つ掻き廻せば廻すほど、
田蟲はますます横に分裂した。ナポレオンの腹
の上で、東洋の墨はますますその版圖を擴張
した。恰もそれは、ナポレオンの軍馬が、破竹
のごとくオーストリアの領土を侵蝕して行く
地圖の姿に相似してゐた。——此の時から、ナ
ポレオンの奇怪な哄笑は深夜の部屋の中で人知

れず現すが當であつた。それは丁度、彼の
猛烈な活力が昨夜の頑癖に復讐してゐるかの
やうであつた。
さうして、彼は伊太利を征服し、西班牙を率
制し、エチオプトへ突入し、オーストリアとデンマ
ルクとスエーデンとを侵略してフランスの皇
帝の位についた。
此の間、彼の此の異常な果斷のために戦死
したフランスの壯丁は、百七十萬人を數へられ
た。國內には廢兵が充滿した。驕りの聲が各戸
の入口から聞えて來た。行人の喪章は到る所
に見受けられた。しかし、ナポレオンは、まだ
密かにロシアを遠征する機会を狙つてやめな
かつた。此の蓋世不抜の一代の英氣は、またナポ
レオンの腹の田蟲をいつまでも癒す暇を與へな
かつた。さうして彼の田蟲は彼の腹へ瘡のやう
にますます深淵に根を張つていつた。此の腹に
田蟲を繁茂させながら、なほ且つヨーロッパの
天地を攪亂させてゐるナポレオンの姿を見てゐ
ると、それは丁度、彼の腹の上の奇怪な田蟲
が、黙々としてヨーロッパの天地を攪亂してゐ
るかのやうであつた。

ナポレオンはジューエーブローの條約を締結

クレスはナポレオンの征伐に次ぐ征伐のため、フランス國の財政の缺乏と人口の減少と、人民の怨嘆と戦ひに對する國民の飽滿とを指摘してナポレオンに詰め寄つた。だが、ナポレオンはヨーロッパの平和克復の使命を楯にとつて應じなかつた。デクスは最後に席を蹴つて立ち上ると、興奮する傍のネー將軍に向つて云つた。

「陛下は氣が狂つた。陛下は全フランスを殺すであらう。萬事終つた。ネー將軍よ、さらばである。」

ナポレオンはデクスが歸ると、憤懣の色を表してひとり自分の寢室へ戻つて来た。だが、彼は此の大遠征の計畫の裏に、絶えず自分のルイザに對する弱い、心がかたくなつてゐたのを考へた。殊にそのため部下の諸將と争はなければならなかつた此の夜の會議の終局を思ふと、彼は腹立たしい淋しさの中で次第にルイザが不快に重苦しくなつて来た。さうして、彼の胸底からは古いジョセフイメの愛がちらちらと光りを上げた。彼は此の夜、そのまま卓妃ルイザにも逢はず、ひとり怒りながら眠りについた。

ナポレオンの寢室では、寒水石の寢臺が、ベルシヤの鹿を浮べた緋の緞帳に圍まれて彼の寢

ルイザから壓迫されねばならなかつた。此のため、彼は彼女の肉體からの壓迫を押しつけ返すためにさへも、なほ自身の版圖をますますヨーロッパに擴げねばならなかつた。何せなら、ロシアの平民ナポレオンが、オーストリアの皇女ハプスブルグのかくも若く美しき娘を持ち得たことは、彼がヨーロッパ三百萬の兵士を殺して奪ち得た彼の版圖の強大な力であつたから。彼はルイザを見たと同時に、油を注がれた火のやうにいよいよロシア侵略の壯圖を胸に描いた。殊に彼はルイザを皇后に決定する以前、彼の選定した女はロシアの皇帝の妹、アンナであつた。しかし、ロシアは彼の懇望を拒絶した。さうして、第二に選ばれたものは此のハプスブルグの娘、ルイザである。ルイザにとつて、ロシアは良人の心を奪きつけた美しきアンナの住み國であつた。だが、ナポレオンにとつては、ロシアは彼の愛するルイザの微笑を見んがためばかりにさへも、征服せらるべき國であつた。左様に彼はルイザを愛し出した。彼が彼女を愛すれば愛するほど、彼の何よりも恐れ始めたことは、此の新しい崇高優美なハプスブルグの娘に、彼の醜い腹の頑癪を見られることとなつて来た。もし出來得ることであるならば、

彼は此のとき、フランス皇帝ナポレオン・ポナバルトの莊嚴な肉體の價値のために、彼の伊太利と腹の田蟲とを交換したかも知れなかつた。かうして善嚴な傳統の娘、ハプスブルグのルイザを妻としたコルシカ島の平民ナポレオンは、一度ヨーロッパ最高の君主となつて納まると、今迄彼の幸運を支へて来た彼自身の恵れた英氣は、俄然として虚榮心に變つて来た。此のときから、彼のさしもの天賦の幸運は枯れ始めた。それは丁度、彼の田蟲が彼を幸福の絶頂から引き摺り落すべく醜惡な平民の體臭を、彼の腹から嗅ぎつけたかのやうであつた。

千八百四年、パリの春は深まつていつた。さうして、ロシアの大平原からは水が滑けた。或る日、ナポレオンはその物々たる傲然な虚榮のままに、いよいよ國民にとつて最も苦痛なロシア遠征を決議せんとして諸將を宮殿に集合した。その夜、議事の進行するに連れて、思はずもナポレオンの無謀な意志に反對する諸將が續々と現れ出した。此のためナポレオンは、終りに遠征の反對者、將軍デクスと數時間に渡つて激論を戦はさなければならなかつた。デ

してオーストリアから凱旋すると、彼の精練の妻ジョセフイメを離婚した。さうして、彼はフランス皇帝の權威を完全に確立せんがため、新らしき皇妃、十八歳のマリア・ルイザを彼の敵國オーストリアから迎へた。彼女はハプスブルグ家、オーストリア神聖羅馬皇帝の娘である。彼女の部屋はチュレリーの宮殿の中で、ナポレオンの寢室の隣りに設けられた。しかし、新らしきナポレオン・ポナバルトは、また此の古い宮殿の寢室の中で、彼の巨大な田蟲の輪郭と格闘を續けなければならなかつた。

ナポレオンは若くして、美しいルイザを愛した。彼の前皇后ジョセフイメはロベスピエールに殺されたボルネー伯の妻であつた。彼女はナポレオンより六歳の年上で先夫の子を二人までも持つてゐた。今、彼はルイザを見ると、その若々しい肉體はジョセフイメに比べて、割られた果實のやうに新鮮に感じられた。だが、そのとき彼自身の年齢は最早四十一歳の坂にゐた。彼は自身の頑癪を持つた古々しい平民の肉體と、ルイザの若々しい十八の高貴なハプスブルグの肉體とを比べるとは淋しかつた。彼は絶えず前皇后ジョセフイメが彼から壓迫を感じたと同様、今度はハプスブルグの娘、

顔を擡げてゐた。夜は更けていつた。廣い宮殿の迴廊からは人影が消えてただ、裸像の彫刻だけが黙然と立つてゐた。すると、突然、ナポレオンの腹の上で、彼の太い十本の指が固まつた鐵のやうに動き出した。指は彼の寝衣を掻きむしつた。彼の腹は白癩のやうな田蟲を浮べて寝衣の襟の中から現れた。彼の爪は再び迅速な速さで腹の頑癪を掻き始めた。頑癪からは白い脱皮がめくられて来た。さうして、暫くは森閑とした宮殿の中で、腹皮を掻きむしるナポレオンの爪音だけが啾々やうにぼりぼりと聞えてゐた。と、俄に彼の太い眉毛は、全身の苦痛を受け留めて慄へて来た。

「余はナポレオン・ポナバルトだ。余はナポレオン・ポナバルトだ。」

彼は足に纏はる絹の夜具を蹴りつけた。

「余は、余は。」

彼は張り切つた綱が切れたやうに、突如として笑ひ出した。だが、忽ち彼の笑聲が鎮まると、彼の腹は、腹を入れた袋のやうに波打ち出した。彼はがばと跳ね返つた。彼の片手は緞帳の裏をひつ攫んだ。紅い裏は鋭い線を一握の拳の中に集めながら、一掃れ毎に銀を鳴らして送り出した。彼は杖を攫んで投げつけた。彼はピラ

ミッドを浮べた田蟲の影へ廣い額を擦りつけた。ナポレオンの汗はピラミッドの斜線の中へにじみ込んだ。緞帳は捲れ捲けた。と、彼は寢臺の上に跳ね起きた。すると、再び彼は笑ひ出した。

「余は、余は、何物をも恐れはせぬぞ。余はアルプスを征服した。余はプロシヤを撃ち破つた。余はオーストリアを蹂躪した。」だが、云ひも終らぬ中に、ナポレオンの爪はまた練磨された機械のやうに腹の頑癪を掻き始めた。彼は寢臺から飛び降りると、床の上へべたりと腹を押しつけた。彼の寝衣の背中に刺繍されたアフガニスタンの金の猛鳥は、彼を鋭い爪で押しつけてゐた。と、見る間に、ナポレオンの口の下面で、大理石の響きは彼の苦悶の息のために響つて来た。彼は腹の下の床石が温まり始めると、新鮮な水を追ふ魚のやうに、また大理石の新しい冷たさの上を這ひ廻つた。

丁度その時、鏡のやうな迴廊から、立像を映して近寄つて来るルイザの桃色の寝衣姿を彼は見た。

彼は起き上がることが出来なかつた。何せなら、彼はまだ、ハプスブルグの娘、ルイザに腹の田蟲を見せたことがなかつたから。ルイザは

「ルイザ。」と彼は叫んだ。
彼女の青ざめた顔が裸像の彫刻の間から振り返つた。ナポレオンの炯々とした眼は、彼の奥から輝いてゐた。すると、最早や彼女の足は懐へたまま動けなかつた。ナポレオンは彼女の襟を握つたままルイザの方へ進んでいつた。彼女はまたナポレオンの腹を見た。静まり返つた夜の空殿の一隅から、薄紅の地間のやうな怪物が口を開けて黙々と進んで来た。
「陛下、お待ちなされませ、陛下。」
彼女は空虚の空間を押しつけるやうに両手を上げた。
「陛下、暫くでございませ。侍醫をお呼びいたします。」
ナポレオンは妃の腕を握んだ。彼は黙つて寝臺の方へ引き返さうとした。
「陛下、お救しなされませ。御無理をなされませと、私はウイーンへ歸ります。」
磨かれた大理石の三面鏡に包まれた光りの中で、ナポレオンとルイザとは明暗を閃かせつつ、分裂し粘着した。争ふ色彩の尖影が、屈折しながら鏡面で衝突した。
「陛下、お氣が狂はせられたのでございませ。陛下、お放しなされませ。」

しかし、ナポレオンの腕は彼女の首に絡まりつゝいた。彼女の髪は金色の渦を巻いてきらきらと輝いてゐた。ナポレオンの怒り、ルイザが驚き逃げた。ナポレオンは、ルイザは手に彼女の頭髪を纏のやうに巻きつけた。
「逃げよ。余はコルシカの平民の息子である。余はフランスの貴族を滅ぼした。余は全世界の貴族を滅ぼすであらう。逃げよ。ハプスブルグの女。余は高貴と若さを誇る汝の肉體に、平民の病を植をつけてやるであらう。」
ルイザはナポレオンに引き摺られてよろめいた。二人の争ひは、トルコの香料の匂ひを腹帯と撒き散らしながら、寝臺の方へ近づいて行つた。綴帳が閉められた。ベルシヤの鹿の模様は暫く綴帳の裏の上で、中から突き上げられる度毎に眼の上で揺れてゐた。
「陛下、お氣をお沈めなされませ。私はジョセフィヌさまへお告げ申すでございませう。」
綴帳の間から美しい一本の手が延びると、床の上にはみ出てゐた枕を中へ引き摺り込んだ。
「陛下、今宵は静にお休みなされませ。陛下はお狂ひなされたのでございませ。彫刻の裸像ベルシヤの鹿の模様は静まつた。」

はひとり圓柱の傍で光つた床の上の自身の髪を見詰めてゐた。すると、突然、絹の綴帳の裾から、桃色のルイザが、吹きつけられた花のやうに轉がり出した。裳裾が空宙で花開いた。綴帳は静まつた。ルイザは引き裂かれた寝衣の切れ口から露はな肩を出して倒れてゐた。彼女は暫く床の上から起き上らうとしなかつた。掻き亂された彼女の金髪は、波打つたまま大理石の床の上へ投げ出された。
彼女は漸く起き上ると、青ざめた頬を涙で濡らしながら歩き出した。彼女の長い裳裾は、彼女の苦痛な足跡を示しつつ綴帳の下から裏側に繰り出されて曳かれていつた。
ナポレオンの部屋の重々しい綴帳は、そのまま温つた旗のやうに明方まで動かかなかつた。

五

呆然として、皇帝ナポレオン・ボナパルトが射られた歌のやうに床の上に倒れてゐる姿を眺めてゐた。
「陛下、いかがなさいました。」
ボナパルトは自分の傍に踏み込む妃の體温を身に感じた。
「ルイザ、お前は何しに来た？」
「陛下のお部屋から、激しい呻きが聞えました。」
ルイザはナポレオンの両脇に手をかけて起さうとした。ナポレオンは周章でて擴つた寝衣の襟をかき合せると起き上つた。
「陛下、いかがなされたのでございませ。」
「余は恐ろしい夢を見た。」
「マルメーゾンのジョセフィヌさまのお夢でございませう。」
「いや、余はモローの奴が生き返つた夢を見た。」
と、ナポレオンは云ひながら、執拗な痒さのためにまた全身を慄はせた。
「陛下、お寒いのでございませうか。」
「余は胸が痛むのだ。」
「侍醫をお呼びいたしませうか。」
「いや、余は暫くお前と一緒に眠れば良い。」

ナポレオンはルイザの肩に手をかけた。ルイザはナポレオンの胸から喉嚨を噛み殺した力強い痙攣を感じながら、二つの鏡のひきち切れた綴帳の方へ近寄つた。そこには常に良人の脱きなかつた羽巻が置かれたやうに垂れ落ちて縮んでゐた。絹の敷布は寝臺の上から掻き落されて、開いた綴帳の口から温つた枕と一緒にみ出てゐた。
ナポレオンは寝臺に腰を下るとルイザの福やかな腰に片手をかけた。だが、彼は、今はハプスブルグの娘に自分の腹を隠し通した苦痛な時間が腹立たしくなつて来た。彼は腹部の醜い病態をルイザの眼前に晒した。その高貴をもつて全ヨーロッパに鳴り響いたハプスブルグの女の頭上へ、彼は平民の病を堂々と押しつけてやりたい衝動を感じ出した。
「余は一平民の息子である。余はフランスを征服した。余は伊太利を征服した。余は西班牙とプロシヤとオーストリアを征服した。余はロシアを蹂躙するであらう。余はイギリスと東洋を蹂躙する。見よ、ハプスブルグの娘。」
ナポレオンはひき割ぐやうに、寝衣の兩襟をかき擴げた。
ルイザの視線はナポレオンの腹部に落ちた。

ナポレオンの腹は、猛鳥の爪の刺繍の中で、毛を落した犬のやうに汗を浮べて爛れてゐた。
「ルイザ、余と眠れ。」
だが、ルイザはナポレオンの權威に壓迫されてゐたと同様に、彼の腹の、その刺繍のやうな毒々しい頑癖からも壓迫された。オーストリアの皇女、ハプスブルグの娘は、今初めて平民の醜さを眼前に見たのである。
ナポレオンは彼女の傍へ身を近づけた。ルイザは綴帳の裾を踏みながら、恐怖の眉を擧めて返り返つた。今はナポレオンは妻の表情から敵を感じた。彼は彼女の手首をとつて引き寄せた。
「寄れ、ルイザ。」
「陛下、侍醫をお呼びいたしませう。暫くお待ちなされませ。」
「寄れ。」
彼女は綴帳の裏に顔を突き當て、翻るやうに身を躍らせて、廣間の方へ馳け出した。ナポレオンは明らかに貴族の娘の侮辱を見た。彼は彼の何者よりも高き自尊心を打ち碎かれた。彼は突つ立ち上ると、大理石の鏡面を片影のやうに這つて行くハプスブルグの娘の後姿を睨んでゐた。

外征の手腕を、まだ一度も彼女に見せたことがなかつた。

ナポレオン・ボナパルトの此の大遠征の規模は、彼の全生涯を通じて最も莊嚴華麗を極めてゐた。彼は國內の三十萬の青年に動員令に對する準備を命じた。更に健全な國內の壯丁九十萬人を國境と沿海線の守備に充てた。なほその上に、彼はフランス本國から二十萬人を、ライン同盟國から十四萬七千人、伊太利から八萬人を、波蘭とプロシヤとオーストリアから十一萬人、これに佛領各地から出さしめた軍隊を合せて七十萬人に、加ふるに豫備隊を合して總數百萬餘人の軍勢をドレスデンへ集中させた。さうして、ナポレオンは、彼の娘のことき皇后ルイザを連れてバリーからドレスデンまで出て行つた。ドレスデンではルイザの父オーストリア皇帝、プロシヤ皇帝、同盟各國の最高君主が一團となつて、百萬餘人の軍隊と共に彼ら二人の到着を歓迎した。

かうして、ナポレオンは彼の大軍を、いよいよフリードリヒランドの大原野の中へ進軍させた。

六

ナポレオンの腹の上では、今や田舎の版圖は徑六寸を越して擴つてゐた。その圭角をなくした圓やかな地圖の輪郭は、長閑な雲のやうに美妙な線を張つて歪んでゐた。侵略された内部の皮膚は乾燥した白い細粉を全面に撒き、荒された花々たる沙漠のやうな色の中で、僅かに美しい細毛が處どころ昔の激烈な争ひを物語るやうな形をかかつて生えてゐた。だが、その版圖の前線一圓に渡つては數千萬の田舎の列が、紫色の煙霧を染めてゐた。氣味の中には膿を浮べた分泌物が溜つてゐた。そこで田舎の群團は、鞭毛を振りながら、雜然と縦横に重なり合ひ、各々横に分裂しつゝ二倍の群團となつて、脂の漲つた細毛の森林の中を食ひ破つていつた。

ナポレオンは河岸の丘の上からそれらの軍兵を眺めてゐた。騎兵と歩兵と砲兵と、服色燦爛たる數十萬の狂人の大軍が林の中から、三色の雲となつて層々と進軍した。砲車の輻の連続は響を立たした河原のやうであつた。朝日に輝いた鉄砲の波頭は空中に虹を撒いた。栗毛の馬の平原は狂人を載せてうねりながら、黒い地平線を造つて、潮のやうに没落へと溢れていつた。

園

妹の部屋から醫者が出て来た。悪事をして来たやうな顔をして。彼は醫者の表情に注意するのが不快であつた。醫者は煙さうな鼻をしてゐた。鼻の穴が擴がると此の醫者は誰をついてゐるのに定つてゐた。

「妹はどうです？」
「お變りはないやうです。」
「誰だ——醫者は粗略に彼の手の脈を見たら——見ても駄目だ。もう此の患者は優生學に殺された。」
「血味は？」
「今日はありません。」
醫者の眼鏡の金に果樹園の雪が映つた。ブリズムから流れたスペクトルは弱まりながら壁の斑点の上へ折れてゐた。
「熱はひけてをりますね。」
「どちらが早いでせう？」
「何がですか？」

「いや。」
彼は顔を凝らめた。が、逆に此の健康者の心へ敲弄つてみたくなつた。
「死ぬのがです。」
醫者は彼を見たまま口を歪めて黙つてゐた。

「妹の方が早いでせう？」
「醫者は生々しく笑ひ出した。だが、兄と妹の肺臓が壁を隔てて腐つて行く。これは事實だ。二人はその病を死んだ兄から傳染された。」
醫者は鼻の穴を擴げながら壁の鏡を睨んで歸つて行つた。僧侶を呼べと云ふやうに急ぎながら。外では雪の上で黒い鳥が亂れてゐた。海岸の石の上で燈臺が光り出した。
彼は直ぐ自分の仕事をし續けた。彼の仕事は自分の死後の靈魂が木星の大赤點へ到着する時間の測定であつた。彼は靈魂が一秒二十五萬分の速度を持つてゐることを信仰した。彼の此の信仰した極数は空氣と死者の靈魂との摩擦から發する輝きの光度から計算された。だが、その自分の靈魂の發出する時は目前に迫つて

ゐる。
彼は自分の靈魂が一直線に伸びるものとは思はなかつた。雲と空氣の濃氣差があつた。星雲と月と太陽の引力に屈折した。なほ三十個の木星族の彗星が邪魔をした。今、彼の此の必死の遊戯を苦しめてゐるものは、木星を巡る九つの衛星に反應する靈魂の屈折率である。

「兄さん。」
P. I + mt = Po. I + moto
「兄さん。」
I + Rp = I + Rv
I + Rv = I + Rv
「カーテンを開けてよ。」
「待て。」
I - S - A = A - ds (A) / T. Dr = mts
「もうお日様が入るでせう。」
彼は顔を上げた。太陽はぼやけながら溝の中へ浸り出した。ふと彼は一度地の上を歩いてみたくなつた。もう永らく彼は天界のことを考へた。今一度、窓口の葉を落した枯枝をへし折つ

出て来る水々しい結液を指さきに感じてみた。だが、彼はベッドから降りると鏡鏡を取り上げた。鏡身は掌の中でひやりとした。幻の中を逆様に一羽の鳥が落ちて来た。テリアがひらりと巖頭を飛び越えた。――

「撃てッ！」

銃口がはたりと落ちた。彼は敷布を握んで嘆き出した。一本の線線が太陽から閃いた。彼は苦しうに銃をついて果樹園の方を見た。林檎は間もなくあの枝を揺るにちがひない。間もなく町子は地の上で處女を落すにちがひない。そして、彼は戀愛と童貞とを苦々しく輕蔑した。隣室からまた、妹の聲が弱々しく聞えて来た。

「婆や。」

「婆や。」

沼の暗い坂道の上から鈴が鳴った。町子の體

だ。彼は煙煙の傍から立ち上つた。馬籠の青い提灯が雪の中を揺れて来た。彼は頁を伏せて外へ出た。雪は彼の眉毛に降りかかった。果樹園の路へ降りるとテリアが波のやうに馳けて来た。彼は憂鬱に立ち停つて沼から下る青い提灯を眺めてゐた。

「風がなくていいわ。」

町子は垂れ下つた毛皮の首巻を肩へ投げた。空虚の橋の方へ動き出した。――

「どうしてこんな所に立つてらっしゃるの。」

「あなたは、どこかへ行くんですか。」

「私、来てはいけなかつたの。」

で雪を拂つてゐた。

「どうしてあんな所に立つていらつしたの？」

「あなたが来ると困ると思つたんです。」

「そんなに私が悪いの？」

「まあお入りなさい。」

「私、歸つたつていいのよ。」

彼は家の中へ入ると煙煙へ炭を投げ込んだ。町子は椅子に腰を下ろすと圓く蹲んだ彼の背中に手を乗せた。

「ね、私、手紙を昨日も書いたの。だけど、もう出すのがいやになつたの。」

「僕も昨日手紙を書いたんです。」

「まあ、どんなお手紙、ね、教へてよ。下さらなかつたんでせう。」

彼の眼の横で町子の膝が喜ばしうに動いてゐた。此の膝よ！ 悲しみとは何か。壓力の不足である。

「あなたのお手紙、いいお手紙だつたんでせう。私、いやなお手紙嫌ひよ。幸福な手紙がいいの。私、ちゃんとお手紙を藏つてあるの。」

「もう炭はこれ位でいいでせう？」

「ええ、澤山、私、雪で顔がほてつて仕様がないわ。」

窓を叩いて飛びつくテリアの爪音が外でした。雪が窓の敷居で凍つてゐた。彼は燐燐の傍へ椅子を引きよせた。

「あなた、悲しうなお顔ね。」と町子は云つた。

彼は黙つて町子の顔を見た。電燈の光りを横に、彼女の顔は眉をひそめてゐた。

「どうなすつたの。」

「ロウ・スピリットです。」

「あまり考へるからよ。もつと、……私、毎日来てあげたつていいんだけど。」

「あなたは成るだけ自由に愉快にしてらっしゃるの。」

「まあ。」

「いや、皮肉やありません。僕はとても愉快になれないんだから、愉快ぢやなくてはいけません。一體、不愉快な顔が何の功德になるんです？」

「あなた、一寸、あの音は何んでせう。」

町子は恐ろしく首を立てた。

「テリアですよ。」

「さうかしら、私、此の頃何にでもびくびくするのよ。どうしてかうなんでせうね？」

「あまり愉快すぎるんでせう。」

「まあ。」

「さう云ふのですよ。女の人が愉快な時は、一寸變つたことがあつても非常に恐ろしく思ふんです。」

「あなたはちつとも私の心持を御存知ないんだわ。私、愉快なことつてもちつともなくつてよ。」

「そりやいけない。」

「だつて、さうぢやありませんか。」

「あなたはいくらだつて愉快になれる。」

「あなた、そんなに起きていらつしていいの？」

「悪い、と彼は思つた。だが、今夜はなほ悪い。」

「あなたは僕の所へそんなに来てゐたつていいんですか。」

彼女は煙煙の火へ眼を落した。彼女の母が彼女を食ひとめてゐるのは分つてゐた。彼は胸を突かれた町子の胸の騒ぎを感じたいとは思はなかつた。だが、何もかも今暫くだ。

「あなたは誰かに結婚を迫られてゐるんぢやありませんか。」

「どうしてそんなことを仰言るの？」

「いや、たださう思つただけなんです。」

「どうして分つて？」

あなたの思つてゐることなら、大抵僕には分ります。」

「でも私、謝絶つたのよ。」

だが、いづれ謝絶出来ないときが来るだらう。次には、處女を落す祝賀である。次に子供だ。彼は壁にかかつた黒々とした天體の圖に眼を向けた。

「私、今夜はもつと面白いお話を聞きたかつたの。」

「あなたにはどんな話が面白いんです？」

「私、あなたがきつと私をいややうにして下さると思つてゐましたの。」

「どうして？」

「あなたは御存知ぢやありませんか。」

「あなたは僕が毎日何を考へてゐるのか知つてゐるんですか。」

「ええ、知つてますわ。」

「僕はね町子さん。云つてみれば、あなたが毎日何を考へていらつしやるのかとそればかり考へてゐたんです。」

「私もさうよ。」

「だけど僕は、あなたのことを考へるのがもういやなんです。殊に此の頃はなほいやです。」

「ちや来なければ良かったのね。」
町子は頭をふくらませた。愛の反語を間違へたのだ。だが、彼はもう飽舌りたくなかった。だが、今飽舌らなければ、一つの誤解を残して死ぬにちがひない。だが、愛しながら愛してはならぬとなると、いづれ一つの誤解は残るだらう。しかし、愛とは何か。時には反語を説明する努力である。

「何ぜあなたに逢ふのがいやかと云ふと、町子さん、さう怒つてはいけません。僕はこんな説明をするのもういやなんです。僕の病氣は人を愛してはいけません。」

「もう分つてゐますわ。」

「僕は話で自分の病氣に觸れて来ると、いつも後がたまらないんです。もう何千回同じことを考へたか。いくら考へたつていつも考へる範圍は定つてゐるんです。第一あなたのこと、第二にまたあなたのこと、そして最後があなたのこと。僕はもうこれが苦痛だ。どうにもなりはしない。」

急に町子は彼の胸へ崩れて来た。あまり不意だ。彼は冷淡に彼女の首を見詰めてゐた。

「さア、立ち給へ。」

「いや、いや。」

町子の熱を含んだ身体が彼の胸の上で圓々と蕩々き出した。彼は彼女を元の姿勢に戻さうとした。椅子が鳴つた。町子の身体はまた彼の胸へ跳ね返つて来た。

「君、傳來る！」

「いや、いや。」

「まあ待ち給へ。」

突然彼は片手で町子の肩の中を抱いたまま悲しくなつた。何ぜ、死に行く胸へ彼女の身体を投げつけるのか！ 悲劇ではない。嘔吐してくれ。胸が震へる。肩が震へる。死が乗り移るのだ！——彼は立ち上つた。櫛が落ちた。町子の口へ觸れようとした彼の肩は結ばれたまま標へてゐた。町子は涙に亂れた数本の頭髪を頼りにつてうな垂れた。

嵐はやんだ。と彼は思った。また一つの處女と童貞とは依然と平行線の上を鳴けて行く。恐らく二線は交はることはないだらう。彼はその交はる無限の極の輻射點を考へた。もしも愛がそのときに生れるものであるならば、今は深く死ぬが良い。肉體とは愛への二つの平行線の距離である。靈魂とは愛への輻射點への遠力だ。——彼は平聲に歸つて来た。彼は閉つた窓の鉤戸を開けた。凍つた雪の地りが戸の上

から落ちて来た。冷たい空気が部屋の中へ流れ込んだ。黒い人影が果樹園の雪の中を歩いてゐた。彼は沼の上の空を見た。夜は盛り上つた雪線の上で茫茫としてゐた。彼は夜の高さを考へた。そして、自分の高さを考へて死を待つた。

「町子さん。あなたは僕にお話をきかしてくれなければいけません。僕は今もう非常にあれが好きなんです。」

「私、寒くなりましたから御免なさいな。」

町子は首巻を肩へかけた。

「今夜はいつもより静かですね。櫛がちつとも通じませんよ。」

町子は黙つて寒さに身を慄はせた。彼は空の明るみの太さに出て行く湯気の横がりを眺めてゐた。町子は櫛を拾つて頭へ差した。

「あ、私、もうこれから来ない方がいいんでせうか？」

彼は黙つてゐた。

「私、分らなくなりましたの。」

「僕にさう云ふことをきくのはいけませんね。」

「でも……」

「お母さんの仰言つたやうになされば、それが一番いいと僕は思つてゐます。」

町子は暫く肩をひき締めて黙つてゐた。と、急に彼女は手に首巻を巻きつけて立ち上つた。

「あなたは怒つてらつしやるんですか。」と彼は云つた。

町子はドアの傍まで行くと彼の方を見た。眼が涙で光つてゐた。

「さやうなら。」

「町子さん、悪い意味にとつてはいけません。僕は決して悪いつもりで云つたのぢやありません。」

彼は町子の方へ近寄つた。町子はドアの外へ出て行つた。彼は彼女の後を追はうとした。が、やめた。——生ける者を追つてはならぬ——彼はハンドルに片手をかけて町子の後姿を見送つてゐた。

彼女は雪の中をうな垂れながら、黒く楯道の方へ曲つて行つた。

——俺は愛してゐるんだ！

——俺は違つてはならんだ！

——俺の肺は腐つて行く！

彼は入口の階から雪の上に倒れてゐる光線へ眼を落した。——誤解が一つ生と死の間へ落された。——だが、愛しないと云ふことが、常

に、最も愛すると云ふことに變るのだ。それが愛の最高の理論である。——

彼は戸を閉めると力なく燧燧の前へ戻つて来た。

すると、ふと彼は亡兄の彫りつけていつたいつもの慘酷な壁の羅何語が眼についた。

Quis veni in hortu nostra?

我が園に入り来る者は誰ぞ、(と彼は讀んだ。)今、その毒園に押し詰められてゐる者は二人である。二人は兄から病を傳染された。それに！ 彼は兄のその嘲笑的な壁の文字にまた新しく胸を突き刺された。彼は忘れてゐた憎悪を再び兄の靈魂へ向つて投げかけた。

「汝の選んだ者は、汝の弟と妹だ！」

彼は兄に飛びかかるやうにナイフを持つて、壁へ自分の怨恨を彫りつけようとした。だが、彼は自分達に傳染されて直ぐ次ぎに閉ぢ込められる者の心を考へた。——今に來る。今に此の壁と向つて日々同じことを考へる者があるにちがひない。そして、彼らは、體で自分達のために殺されて行くにちがひない。——

彼はまた冷静に落ちつき出した。彼はそれらの静に後から來る。選ばれた不幸な者達のため、ソクラテスの穩かな言葉を書き出した。自

分の心をなだめるやうに。生前の知識を壁の上で兄と二人で讀みながら。

Et mortem tinemus, semper aliqui terror nobis impendunt.

彼は壁の兄と自分の言葉とを詳細に比較した。すると、兄の動詞の使用法が間違つてゐるのを發見した。

「兄よ、お前の古典は永久に意味が通じないで済むだらう。俺はお前の嘲笑を黙殺する。」

III

雪は朝日に輝いてゐた。沼の彼方で銃が鳴つた。馬は朝日を割つて雪の上を鳴けて来た。彼は微風を避けて家の前へ出た。彼は考へることが何もなかつた。心はほのぼのとしてゐた。海の上では白帆が風を孕んでゐた。鷗は低く海流に戯れてゐた。漁場は眼下で賑はひ出した。一服の煙草が果樹園の方から匂つて来た。

「お早うございます。」

「お早うございます。」

健康な若者が朝の料理を運んで行つた。水々しい籠の若菜が窪んだ雪線の下へ鮮かに隠れていつた。

彼は壁の傍から道へ出た。一人の老人が道の真中に立ち停つて不思議さうに彼の家の方を見つめてゐた。ふと、彼は妹が家の中で黙つて死んでゐるやうな氣持がした。朝起きてからまだ彼は妹の容子を見なかつた。窓が閉つてゐる。彼は直ぐ家の方へ引き返した。郵便物が投げ込まれた。妹は隣室の壁の中で眠つてゐた。

「よし。」

彼は足音を忍ばせて窓を開けた。抜け毛が明るくなつた部屋の隅で浮き上つた。婆やが跛足をひきながら沼の方へ血吸を捨てに行くのが見えた。林檎の枯枝が寒く彼女の背の上で茂つてゐた。彼は瘦せた妹の部屋へ華やかなプリズムを持つて来た。(それから花を取り寄せよう)少女の蒼ざめた髪頭の上で七色のスペクトルが花開いた。赤、橙、黄、緑、鼻は鋭い青藍色の雄蕊となつて高まつた。

妹は眼を醒した。醒めた此の道花は黙つて部屋の中を見廻した。

「兄さん、私、夕べ死ななかつて？」

彼は黙つて妹の顔を見た。——もう遠くはない！——

「誰だかコツコツ、コツコツ窓を叩くのよ。」

「本當かね？」

「ええ、そしたらお爺さんがゐて、私に、お前死んだつて云ふのよ。私、死にやしないつて云ふのに、死んだんだ死んだんだつて云ふの。」

「夢を見たんだよ。」

「さうかしら。」

「夢なんだよ。何んでもないよ。」

彼は自分の部屋へ戻つて来た。

「あれは危い。もう駄目だ！」

しかし、彼はもう何事も考へたくはなかつた。

「何んでもないんだ。何んでもないんだ。」

一つの彼の小さな頭腦の組織の中を、十三萬の宇宙の大群が悠々と静な魚城のやうに廻轉した。その大宇宙の極みは何處にあるのか？

そのまた大宇宙の極みは何處にあるのか？

は涙がにじんで来た。

「神よ、御名を明し給へ！」

テリアはひとり階屋の上で跳ねてゐた。燈臺のガラスの光りが彼の眼を買いた。彼は郵便物を持つて沼の方へ行かうとした。すると、老人はまだ彼の家の方へ鳥のやうに飛んで立つてゐた。彼が近づくと老人は不意に笑ひ出した。

「あれは理務所でございますか。」

狂人だ。斬新な生活が始つてゐる。遠く子供の歡聲が窪地の雪の中から上つて来た。赤い船が半島の横へ現れた。

彼は郵便物の一つを切つた。都會の變名したKからだ。Kは彼の親しいソーシャリストである。

Hは投獄された。

Tはロシアへ逃亡した。

Sは行方不明。

Mは死亡。

Uは殺された。

彼は手紙を懐へ押し込んだ。周章てるな。他の料理されるのも、もう直ぐだ！何んでもない、何んでもない。

沼は雪の中で静まつてゐた。枯れ折れた蘆の間から数本の芽が鋭く空を狙つてゐた。一羽の鳥が静に雪の上へ降りた。婆やが窓を抱いて水際から登つて来た。

「お早うございます。もう御飯の用意は出来てをりますのでございます。」

「ああ。」

彼は湯氣の立つた爽々しい朝の食卓の前で、健氣さうに今は静に箸を取つてみたくなつた。

婆やはまた喉を地まながら跛足をひいて雪の坂路を下つていった。

四

月夜の夜が過つて来た。婦女の月經が亂れて来た。濱に打ち寄せる波足が狂ひ出した。その夜、彼の妹の靈魂が逆力を斷し始めた。

「兄さん、兄さん。」

「ここにゐるぞー！」

「兄さん。」

「よしッ、ここだ。」

「兄さん……」

「兄さん……」

「兄さん。」

……

街へ出るトンネル

計介は通りすがりに自分の家へ寄つた。妹はダイナマイトを積み上げた箱の傍で、コッソリ鏡を覗いてゐた。彼は庭に立つたまま、妹が誰を思つてゐるのかと一寸考へた。

「あら、兄さん、街へいらつしつたんぢやなかつたの。」

「あのね、私、今日ラ・パロマを弾いたのよ。」
彼は黙つてまた表へ出ると、峡谷の片側にかつた枕木の上を渡り出した。ふと彼はそこから崖の下へ墜落したトロッコの有様を眼に浮べた。満載された人々の身體が一齊に口を開け、岩角に弾動しながら渦の中へ突き刺さるやうに降り込んでいつた。だが、彼には人々の落ちる赤い口だけが、蝶々のやうにいつまでも眼に映つた。

彼が九號のトンネルの入口へ来かつた時、お熊は岩角へ太腕を擦りつけて足の裏の石を抜

いてゐた。計介は羊歯の叢の中から、新らしいお熊の股と岩とを眺めてゐた。暫くすると、お熊は歪んだトンネルの口から穴の中を窺きながら、にやりと誰かに腐つたやうな微笑を投げかけた。と、代りにころころ石ころが轉んで来た。

計介はポケットから巻尺を出してお熊の傍へ出ていつた。彼はこれからトンネルの中へ入つて今日の通行を計らなければならなかつた。だが、それが彼には此の頃は無意味であつた。彼の父が穴の中で働いてゐる坑夫達の單價を上げずに頑張り出してからは、計介には誰も彼もが自分に向つて絶えず飛びかからうとしてゐるやうに思はれた。彼は右手のポケットに實弾を込めたピストルを入れてゐた。彼は恐怖を感じる毎に、そのピストルの口徑の数字を咒文のやうに呟くのだ。

「何アに、どんと一發さ。殺す奴は殺すがいい。」
しかし、彼はいつか自分達一家の者は、自分も

父親も妹も、墜落したトロッコ同様峡谷の渦の中へ投げ込まれるにちがひないと思つてゐた。實はあのトロッコと一緒に墜落した人々も、計介一家の利益を上げる過程への犠牲だと云へば云へた。だが、彼にして見れば、こゝろは簡単に社會學の抽斗を開けて見る氣はしなかつた。それは峡谷の河口で發展する港が悪いのだ。港の電力が此の水道工事の作業を勝手に必要としてゐるからだと思つた。また彼は自分達の一家に迫つてゐる今の恐怖さへ、實は港の發展に與へられてゐる一つの犠牲だと思つてゐた。

「とにかく俺は知るものか。あの下の港に置くが良い。あ奴はひとり何もかも飲み込んでゐる怪物なんだ。」

そして彼はただ峡谷の横腹に掘られてゐるトンネルが、日々幾尺の岩石をぶち碎いて港の口中へ進みつつあるかを尋常に計つてゐればそれで良いのだと思つた。

「若旦那、もう直き雨になりますぜ。」
お熊は腰を振りながら、空虚のトロッコを穴の中へ押し始めた。濃霧は河口から噴き上げて来た。峡谷の黒い斷崖が油のやうに濕り出した。すると、濃霧は渦を巻かした峡谷の水の上

を、攻め込むやうに唸りながら昇つて来た。

二

計介は冷たい岩を探りながら穴の奥へ入つて行つた。水が錐のやうに首筋へ滴つた。時々奥の方でカンテラの光りが揺めくと、突如として行手の曲つた岩角が、峻烈の陰影を浮べて明滅した。壓迫された浪がシヤベルの音と一緒に、突き衝つて曲つて来た。

奥では既に引つ掛かつたカンテラの光りの中で、二人の男がダイナマイトを差し込む穴を掘つてゐた。一人が歌を唄ひながら、鐵槌を打ち下ろす。すると、一人が掛け聲かけて鐵槌を振り上げる。此のリズムに調子を打つて、二人の尻に下つてゐる濁の座蒲團がべたべたと二人の尻を叩いてゐた。一度叩く度に、二人の打ち込む鐵槌は、港へ、港へ、その港の口を狙つて進んで行く。

「アー、お陽さま昇ると穴の中。」
「それ来た。」
「お陽さま入つても穴の中。」
「よいしよ。」
「アー、くるくる廻つて日が暮れた。」
「どつこいな。」

歌がやむと、二人の男は壘と壘とを投げ出して計介の方を振り返つた。彼は巻尺の端を穴の先端へ當てさせ、その月初めの通行起點まで巻尺を曳き延ばした。

「十六尺三寸。」と彼は目盛を讀み上げた。

「すると、どうなりますかかね？」

「九寸三分の進行だ。」

「石が悪いんだ。」と黙つてゐた男が不平さうに横から云つた。

計介は巻尺を巻きながらも男達の様子に絶えず注意をはらつてゐた。お熊は兩足をふん張つて轉じてゐる石塊を胸に抱き上げた。と、どつとトロッコの中へ投げ込んだ。計介の巻いてゐる鋼鐵の巻尺だけは、岩を擦つてささやかな流れのやうな物優しい音を立ててゐた。

「お熊、今夜は誰と寝る番ぢや？」と太つた男が云つた。

「お前とぢや。」

と、お熊は浴びせると、「それ来た。」と掛け聲もろともまた一つの岩塊を、男を抱くやうに抱き上げた。

男はにやにや笑ひながら燐燐のやうなダイナマイトを横に擱へた。ダイナマイトの影は、横に大きく彼の口を斬り下げて怒り出した。彼は

雷管へ導火線を差し終ると、それをまた街へてゐるダイナマイトの中へ突き込んだ。

「おい、お熊、うろろしてゐると、どつと腹へ風穴通してやるぞ。」

計介はその男の言葉が自分に向つて投げつけられたのだと云ふこと位は分つてゐた。彼は出口の方へ歩き出した。と、彼の後で、もうダイナマイトの導火線が火花を吹き出しながら、岩の中へ燃え込んでゐた。後から、人影が岩壁の上へ折れ重なつたまま殺到して来た。彼はピストルを厭へて出口の方へ駆け出した。

三

計介は九號を済ますと十號の穴へ来た。穴は峡谷の一方の岩壁に添つて二十二ヶ所に掘られてゐた。此の二十二ヶ所の穴は全線一里に渡る街までのトンネルを、やがて一直線に連結しようとする小口の穴である。

十號の穴の中では、白衣を着た三人の朝鮮人が、水の中に浸つたまま黙々として岩を掘つてゐた。計介はその黒い岩と對面しながら、金槌のやうに何事も考へてゐななさうな彼らを後ろから見てゐると、愛憎になつて来た。此れは確に世の中で最も同情されるべき存在だ。その

「しかし、俺の方は危いんだ。俺は殺されようとしてゐる。俺は殺されるべき理窟を發見されたのだ。此の理窟が俺を絶えず追つ廻してゐるではないか。」

「彼は通行を計り終ると直ぐ十號の穴から外へ出て来た。——俺を守つてくれるものは何もない。ただ一本、引金を引く俺の人差指だけだ。これだ。」と彼は人差指を出して見た。

彼は此の危険な仕事をしてゐる自分の家から逃げ出すことが出来なかつた。もし彼が此の危険の中に踏みとまつてゐるなら父と妹はそれだけ助かるにちがひないのだ。いつか前に、彼は坑夫頭の瀧川が代表となつて、父の所へ要求を持ち出しに來た五六回日の夜であつた。計介はその後で父に坑夫達の要求のまま單價を上げてはどうかと奨めたことがある。すると父はいきなり傍の記入簿を開けて彼に云つた。

「わしは資本家ぢやないのだから。資本家は市役所だ。あの街全體が資本家だ。わしの入札して落した額は、どんなことがあろうとも絶対に

動かすことが出来ないんだ。もし、坑夫達の要求の通り單價の一部を値上げとする。するとだ、良いか、わしの利益は一日平均たつた六十圓だ。」

「そんなにあればいいですな」と彼は云つた。「うむ、良い。しかし、お前はまだこれから物價が騰ると云ふことを考へてゐないのだ。」

「それは誰でもさう思ふ。それでわしは困るのだ。米や味噌が上ると單價を上げよと云つて來る。もしわしは坑夫の單價を上げるとする。するとわしの損はそれだけぢや濟まないのだ。それだけの損ならわしは我慢するのだ。所が、わしの方でわしの家の味噌や醬油である火油や鐵やコンクリートや煉瓦の高くなる損まで引き受けねばならぬのだ。此の損はわしはどこへも持つて行き場がないのだよ。もし持つて行き場があるなら、上げよと云ふ坑夫の單價を、こちらから下げよと云ふより仕方がない。しかし、いまわしが上げる代りに下げたとする。すると、俺は云はないでも分るだらう。所が、いま物價

がずんずん上つてゐる。まだまだ上るにちがひないのだ。」

「さうだよさうだよ。しかし、わしは一つ鑿岩機を買はうかと思つてゐる。これを一臺買へば三十人の坑夫が要らなくなる。いくら物價が高くなつても機械は單價を上げてくれとは云はないからの。」

「しかし、そんなことをするのなら、もつと初めからしなければ。」

「そこで、だから坑夫の知らない間にこつそり買ふんだ。知らして下へば何をし出すかれないからな。」

計介はいま彼の家で秘密にその鑿岩機の注文してあることを思ひ出した。一臺の鑿岩機が三十人の人間の愛慾と食慾とを奪ひ上げる。その結果は？ 彼はそれを豫想することが出来なかつた。しかも事實は日々その結果の方へ進んでゐる。彼は枕木の上を歩きながら、絶えず大きな賭博を打つてゐるやうな気がして來た。

四

計介は首筋へ流れ込む毒を防ぐために上着の襟を立てて歩いた。石斛の花を全身に吹かせた岩層が霧の中に反りを打つて延び出てゐた。

「警へば今五人の男が不意に凶器を持つてあの岩の角から現れたとする。すると、俺はどうすれば良いか。——彼はその岩層の向うに折れ込んでゐる霧に埋まつた見えない路が不安になつた。路はトロツコのレールと人道とを兼ねた幅三尺程の路である。頭の上は十數丈の絶壁で足の下は數百尺の懸崖だ。ここで狭み打ちに合はされれば一挺のピストルで間に合ふか。これが彼のいつもの最後の問題である。」

彼は最後のときの練習のために、石斛の花の描いた白い曲線の下部を狙つてピストルを差し向ける姿勢をとりながら、岩角の先端へ身を現した。すると、茫々とした霧の中から、ダイナマイトの箱が徐々に押されながら浮んで來た。それは街から今日、計介の家へ着く筈の荷物である。家には火藥のことは分らない妹がただ一人ゐたのを彼は思ひ出した。

彼は暫くそこに立つてゐてから重さうにダイナマイトを押して來る二人の大夫の後について

て引き返した。大夫は計介の家の前まで來るとトロ箱から荷を降ろして擔ぎ出した。ダイナマイトは二人の肩の上に並んだまま、岩石の間を黙々として動いていつた。二層の莊嚴な峡谷の隅はその小さな物體を見下ろして靜まつてゐた。だが、今はダイナマイトは黙つてゐた。

計介が勝手口から早廻りして家へ入ると、妹は周章でて袂の中へ紙片を押し込んだ。

「一人かい？」

「ええ。」

「誰か來たか？」

「いいえ。」

「父さんは？」

「まだよ。」

妹は彼に背を向けて答へると青くなつたまま直ぐダイオリンを弾き始めた。ふと彼はいま妹が誰かに忍び込まれて接吻された所ではないかと思つた。彼は立つたまま變化する妹の耳の色を見詰めてゐた。

「探へ上るダイオリンの音に迎へられてダイナマイトが入つて來た。彼は大夫の差し出した傳票に印を済ますと記入簿へ書き入れた。

「雷管三百個、導火線三百條、ダイナマイト三百本、十三號へは十五個行き過ぎ。」

此の行き過ぎ十五個のダイナマイトの用途は計介にとつて疑問であつた。凡そ一日の工事の進行度合とダイナマイトの使用量とは比例すべきが原則である。しかるに十三號の進行度合は、その部面の岩質の硬度と比較してさへも、ダイナマイトの使用量は多過ぎる。此のダイナマイト使用統計表に狂ひの現れた部分には、常に何らかの生活的な興奮が、密かにそのメートルを上げてゐると見らるべき素質があつた。

計介は、一瀧川飯場、十三號と云ふ個所に警戒の線を引いた。この飯場には確に前から無用のダイナマイトを蓄積してゐる者が潜んでゐた。少なくとも今迄の統計表に現れてゐる限りには、百本のダイナマイトが黙つて誰かの懐中に隠れたまゝうろついてゐる。計介は自分を狙つてどこからともなく忍びよるその百本のダイナマイトの無氣味な沈黙を嗅ぎつけると思つた。

しかし、間もなく妹のダイオリンは霧の中でラ・パロマを明ひ出した。すると、忽ち行方不明の百本のダイナマイトは彼の頭の中で踊り出した。彼は浮き立つた心を耳に集めて、拍子をとつた。——誰が喜びよりも苦しみを欲するものか——歌へ、歌へ——彼は不意に街の

お柳を獲へて、こつそりキヌしたときの煙く欲情を思ひ出した。

「あのお柳は今頃は、港の窓から火のついた船を算へてゐるにちがひない。――」
白眼の下男が火のつかぬランプをさげて、依の間からむつくりと入つて来た。
霧は峡谷の中で渦巻きながら雨になり出した。

五

山嶺は振り倒された喬木の幹の上を急がしうに往つたり来たりしてゐた。計介は重さうに仲間の死骸を衝へてよろめいてゐる一匹の猿を見詰めてゐた。

そのとき、濡れた崖の横腹から一臺のトロッコが現れると、雨の中を傾いて彼の方へ馳け降りて来た。ブレーキを持つて突つ立つてゐる坑夫は頭髪に風を立てて叫び出した。

「十四號で、やられたぞ。」

計介は表の方へ駆け出して見た。脱れかかつたレールの下を疾走して来るトロッコの上に、血にまみれた若者が合羽を冠つて倒れてゐた。「やられた、やられた。」

負傷者を乗せたトロッコは彼の前まで一段と

喚くと、颯爽としてまた岩壁へ入り込んだ。後では峡谷の風景が雨に濡れたまま蕭條と静まつてゐた。遠くの岩角を墨汁のやうに浮き上らせた雲の中から、弱々しい蟲の聲が聞えて来た。

計介は此の静まつた峡谷の中を、街の病院まで血をつけて逃げ抜けて行くその一條の狂暴な空気が恐ろしかった。

それは丁度計介一家に反感を持つてゐる峡谷の人々の胸へ、火をつけながら駆け下つてゐるやうなものだつた。彼は直ぐそのまま、火事場へ飛込む氣持で、現場の十四號の隧道へ行つてみた。

十四號の入口からは、物々しい顔をした坑夫達がトロッコを押して崖の方へ進んで来た。トロッコの上には、鋭い角を立てた兇惡な相貌の岩塊が、一つ儼然と乗つてゐた。

「これが犯人だな。」

「こいつです。こいつがどツと天井から来やがつたんです。筋が五六枚折れましたかな。あの男は新米ですからハツバの後へ飛び込んでいつたんですよ。馬鹿な。」

十四號の飯場頭は計介を見ると、血のにじんだ岩塊の頭を足で踏みつけながら云つた。穴

の中ではダイナマイトをかけた直後が一番危険なときである。計介には隙間の弛んだ岩穴の中へ輕卒に飛び込んでいつたその男の様子が見えた。

「保ちさうかね。」
「いや、街へ行きつくまでに参りませう。」
「俺ア、後から行つたんだが、アツとぬかすと、もう此の石をひつ掻いてやがつた。」と一人が云つた。

負傷者の友人の一人は傍の者が計介に話しかけるのを腹立たしうに舌打した。男は青ざめた顔で怒らせてその岩塊に手をかけた。

「おい抛り込め。」

「よし来た。」

忽ち数人の手の中で、黒い岩塊は眞横を晒した兇賊のやうに、悠々と崖の傍へ動き出した。

「よいか、やるぞ。」

「いち、にい、さん。」

「こん畜生め。」と聲が揃つた。

岩塊は一臺の羊齒の葉を突き破つて轉ると、ガツと喰つて崖の中途で飛び上つた。と、あたりの岩片を蹴りつけながら、猛烈な生物のやうに洞の中へ飛び込んだ。

萬事がすむと計介は坑夫達が一齊に自分の方を見たと思つた。自分を投げ込んだ彼らの手際を示すかのやうに、

「こら、この通り。」と誰も彼もの顔が澄してゐた。彼は發作的に狂暴な怒りを感ぜ出した。

彼はふと崖の中途を見ると、血に濡れた羊齒の葉が被れたまま、未だしなやかに揺れながら雨に打たれてゐた。

「よし、俺もやつてくれ。」

彼はいきなり彼らに背を向けると、眞つ先に立つて、断崖の先端の描いた線の上を、怒りに屹立した一本の棒のやうに歩き出した。彼の後から坑夫達は黙つて来た。彼の背中は後に滑んだ沈黙に吸ひ込まれて縮まりながら、前へ前へと一團の沈黙を引き摺つて前進した。

自分の肉體に妨げられて後を同時に見ることが出来ないといふ人間の形體を祝福した。

彼は坑夫達からひとりと離れて安全になると、初めて恐怖のために後れてゐる自分の心臓を感じた。此の恐怖に自分の收縮してゐる一個の心臓の脈は、峡谷の中を進んでゐるトンネルの直線にどれほどの影響を興へて行くか、それを考へると、彼は自分の恐怖の進行の形が

俄に面白くなつて来た。自分の心臓から恐怖を要求することは、トンネルの意志なのだ。トンネルは自身の成長する養分として、その横たへた身體に附着して生活してゐる人間の群れから、絶えず適宜の感情の食物を吸收する。

さうして、彼が街まで延びたとき、彼は二倍の光度をもつて燦然と輝くのだ。

「しかし、それがどうしたんだ。」

計介はいつのまにか雨に濡れて桶のやうにびしょびしょになつてゐた。彼は學生時代に習つた地形學の原論をふと思ひ出して呟いた。

「地表に働く營力の最後の目的は、總て、太陽の均平作用である。」

六

峡谷は日の下で鉛の山のやうに光つてゐた。

計介は十三號の飯場からお熊を誘ひ出さうと計畫した。彼はもう直ぐ街から到着する營の巖岩機が、坑夫達に喚きつけられてゐるかどうかを知らなかつたからである。

彼は飯場へ行くと、水壺にかかつた寛の水を睨んで裏口から覗いてみた。すると、お熊は、立ち上つた男の胸へ猛鳥のやうに飛びかかつた。

「ぶち斬るぞ。」と男は叫んだ。

男はお熊の首へ手を巻くと、ぶるぶる左右に揺れ出した。お熊は男の片足をひつかかへて押しつけた。と、男の頭はどつと後の藪壁の中へ突き刺さつた。

計介は此の二人の格闘を別に珍らしいとも思はなかつた。これはいつでも起るお熊と男との癡情の果だ。

男は藪の中へ頭を突き込んだまま、遅しい片足を脚角のやうに振り廻して叫んでゐた。その喉にお熊は素早く表の方へ飛び出した。彼女は月に誘ひ出された狐のやうに、どこかの岩壁に隠れてゐる新しい男の所へ行くのである。

計介は小屋の横へ廻つて、お熊の行く先きを眺めてゐた。彼女は太股に月の光りを踊らせながら、男ましく枕木の上を馳けていつた。暫くすると彼女の後からビール壺をひつぎつけた男が靜まり返つた殺氣を含んだとと馳けて来た。

丁度お熊が岩角の先端を廻らうとしたときである。「待てッ。」と男は叫ぶと、お熊を目がけてビール壺を投げつけた。壺は一閃、岩角に衝つて爆けると、月の破片のやうにばらばらと崖

「下へ散つていった。」
 計介はお熊の行方を追跡することを断念した。今般分の後、岩盤で野蠻な啼々の聲が二つ洩れれば済みさうに思はれたからだつた。彼は暫く寛の傍の苔の上に腰を下ろしてお熊の歸るのを待つてゐた。

隣りの小屋の湯氣に満ちた裏窓からは、満面に顔物を映かした坑夫の子の寝顔が甬のやうに見えてゐた。その顔の横からは、怠惰な足が一本鬚を生やして延びて出てゐた。その足と寝顔の上で、時々大きな母親の影が湯氣と一緒に揺れてゐた。

その横の飯場頭の部屋の中では、渡り者の坑夫達が轉がりながら放埒な殺人法を物語つてゐるのに相違なかつた。この頭の瀧川はもう人を三人殺して来た男である。人を一人殺す度に彼は部下の者から尊敬された。さうして、彼はまたより部下の信頼を得るがために計介の父の所へ坑夫達の代表となつて要求を持ち込んで来るのが例であつた。その癖、彼は計介の父が利益を得る歩合よりも、時にはより多く坑夫達の割前を卸れてゐた。實はトンネルが一日街へ近づけば、その近づいた程度に應じた金額を計介の父から受けとるものは、坑夫達ではなく

して此の飯場を持つた飯場頭である。彼はその金の中から、坑夫達の食費と、頭として尊敬された満足な代價とを引きとつた残金を、單價に従つて下の坑夫達に與へるのだ。さうして、坑夫達は、ただ此の頭の命のままに、何らの不平をも敢てせず決定された日給額をもつて、日々岩石と格闘を續けて行く。もし彼らが一尺トンネルを街へ向つて押し出せば、その上へ落ち込んで来る街からの利得は、計介の父と飯場頭とが、ただ無量の報酬として簡潔に取り去つて了ふだけなのだ。此のため、トンネルの進行と共に起る争ひは常に計介の父と飯場頭とのあひだに於て續けられた。飯場頭は部下の坑夫達の暴力を背景にもつて計介の父を壓迫した。

しかし、計介の父は、ただ飯場頭を選定し得る権力と、所得を讓渡化し得る地位以外の何物も持つてゐなかつた。

計介は飯場頭の中でも特に瀧川にもつとも反感を感じてゐた。瀧川は部下の坑夫達を壓迫するために用ひる力さへ、彼の殺人して来た頭數と、その屏風のやうな盾とであつた。

「ええ、坑夫が二人逃げたので皆が追つかけていきましたの。」
 「いつ逃げたんだ。」
 「さうね。今頃は崖から抛り込まれてゐる頃よ。」
 良人の留守を適用しても此の若い女は湯から上つたやうにさばけてゐた。
 「二人逃げたとすると、三百圓の損か。」
 「さうよ。でも、こんな處から逃げないものは馬鹿だわね。私、あの二人の逃げるのはちやんと前から知つてゐたの。」彼女は聲を潜めて囁くやうに彼に云つた。
 「ぢや、黙つてゐたのをかしいぞ。」
 「だつて、私だつて逃げたいのよ。」
 計介は全く思ひがけないお品の言葉に黙つて了つた。何ぜ自分にさう云ふことを彼女は言ひ出したのか。それが彼には分らなかつた。
 「君は瀧川が嫌ひかね。」
 「ええ、私、罵されて来たんですもの。」
 「ぢや、逃げるんだ。」
 「逃げるなら、こんなときだわね。」
 「瀧川と一緒にだつてどれほどになるんかね。」
 「半年ほどよ。でも木山さん、私、逃げたいんだけど。」

「そこまで云ふと、急にお品はうなだれて黙り出した。彼は一寸釣られて此の峡谷から逃げ出す方法を考へた。
 「でも、私が逃げたら、瀧川はきつと私を殺して了つてよ。」
 「そりや分らないな、しかし、あんな男だからそのうちにまた他の女を見つけたら。」
 計介はふとその話とは全く別の、瀧川が自分達一家の者にどんな計畫を立ててゐるか云ふことを知りたくなつた。
 「瀧川は俺の親父のことなんか何んとか、云つてゐなかつたかね。」
 「云つてゐたわ。怒つてゐてよ。」
 「そりや怒る。」
 「あなたのお父さんが單價を上げないものだから、私、まだ着物も買つて貰へないの。」
 「實は、俺もこの山にはもうゐたくないんだが、どうも思ふやうに行かなくて。」
 「あなたなんかいぢやないの。お金はあるし、身體はきくし。私なんか一寸思ふやうに動くと殺されるんだから。」
 「そんな風に見えるかね。俺だつていつ殺されるか知れたものぢやないんだが。」
 「どうしてさ？」

「現に瀧川なんか、俺の親父を敵のやうに思つてゐるんだからね。」
 彼女は暫く黙つてゐてから眠つてゐる男の方を窺つた。
 「あの男も、もう直きに逃げ出してよ。そりや氣の毒なほど瀧川になぐられ通しなの。」
 「とにかく、お品さんや坑夫はただ上手に逃げればそれでいいんだ。しかし、俺はさうはいかない。第一俺なんか一人で逃げたつて、後に親父や妹があるんだからね、それが始終氣になつて。」
 「ほんとはここにゐると、始終びくびくしなきゃならないわね。今日逃げた坑夫だつて、昨夕はビール壺で頭をなぐられたのよ。」
 「どうしたんだ。」
 「ただね、風邪を引いて寝ただけなの。」
 「二人は呼吸が詰つたやうに黙つてゐた。」
 「私、思ひ切つて逃げようかしら。とお品は云つた。」
 「そりやさうするに限る。」
 「でも、私、うまく逃げられるかしら。」
 「逃げてからが難かしいよ、逃げてからどうするんだ。」
 「そりや何んでもないわ、あのね。とお品は云

ふと立ち上つて、「一寸」と云つた。彼女は奥口へ出ると、月の光りの中からすりりと彼の方を振り返つた。彼はお品の後からついて出た。寛の下の蘭の白い花の中で、入れ忘れた茶が月光を含んだまま傾いてゐた。お品は斷崖の端の窪んだ岩窟の間へ来ると、あたりを見透かしながら息づく大輪のやうな華やかな胸を近づけた。

「ね、木山さん、私、ほんたうに逃げるつもりなんだから。」

「うむ。」

彼の呼吸は彼女の忙し胸の起伏に引き寄せられた。

「あなたに迷惑はかけないわ。私、とうから逃げようと思つてたんですもの。」

「うむ。」

「私、瀧川に騙されて来たんだから、捕まれば街の警察へ云へばいいわね。」

「騙されたつて？」

「私、お父さんがここにゐるつて云はれたものだから、瀧川について来たの。そしたら、みんな誰だつたのよ。ね、逃げるんだつたら、今からがいいかしら。」

「駄目だ。」

「夜明け前の方がいいかしら。」

「うむ、今夜は皆が坑夫を捜すのに疲れてゐるから、その方がいい。」

「さうね、ちや私、さうするわ。」

計介は大海へ乗り出したやうに緊しまつて来た。

「一人で逃げるのかね。」

「ええ、何ぜ？」

「連れがあるんだらう。」

「いやよ、さつきはお金を借りてたの。」

「いや、ある方が心配がないからさ。」

「一人よ、あなたも逃げてくれればいいんだけど。」

「そのうちに行く。だけど、お品さん、逃げてからどうするんだ。」

「私女給になるの。前にもさうだつたのよ。」

「危いね。」

「ね、ね、どうかしてよ。」

「よし。」

彼は片手で藪を掴んだまま、お品の背中に手を廻した。月光を射つた鼻が、鮮やかな丘のやうに迫つて来た。女の身が彼の胸の中で、重々しく斷崖の外へしなり出した。と、羊商の葉が彼女の頭髮に揺められて跳ね上つた。

「私、ほんとに待つてよ。」

「ああ。」

「街へ行つたら直ぐ手紙を出すわ。」

「うむ。金がいつたら送つてやる。」

「私、お金よりあなたに来て貰ひたいの。」

「分つた。」

「その方がどんなに嬉しいか知れないわ。」

「うむ。」

「何だかあなた。ほんほん云つて。ね、ね、ほんとに来てよ。私、さうぢやなけりや、ね、ね。」

とお品は云ひながら計介の胸を持つて振り動かした。

八

計介はその夜床の中へ入つても眠れなかつた。総えず雨戸の外から音を踏んで近寄る瀧川の足音を身に感じた。胸が高まると、平元のピストルに手を觸れて冷たい銃身の感覚に氣を鎮めた。時計の音がだんだん鋭く彼の心臓を狙つて進んで来た。ふと彼は斷崖の方から岩を振りむしる物音をききつけた。彼は跳ね起きて障子を開けた。と、彼の大きな影が静まつた峽谷の中へ倒れたまま黙つて彼を見詰めてゐた。彼は一齊に銃口を向けられたやうに身が震へた。彼

の胸から腹へうねつた芳醇な熱い一定の線を思ひ出した。

それは昨夜から絶えず彼の胸中に入り浸つてゐる新鮮な吸盤を持つた生物だつた。此のお品の弾力に濡れた熱線が揺めく度に、彼は彼女に逢ひたくなつて切なかつた。

遠くの一面の白い花の中で、黒い花のやうに開いたトンネルの口から、坑夫達は鋭冷場へ昆蟲のやうに飛び降りてゐた。續いてダイナマイトの爆発する音響が、次ぎ次ぎに峽谷の中で震動した。

計介は寛の水を飲みながら、瀧川飯場から坑夫達が續々逃亡することを希望した。もし瀧川が日々お品を街へ捜しに出歩いてゐるとするならば、瀧川飯場が潰れて行くにちがひなかつた。もし瀧川飯場が潰れたならば、街から来る警備機を瀧川の特場の十三號のトンネルへ据えつければそれで良いと計介は考へた。もしまた、その十三號が彼自身の自由になる日が来たならば彼はそれから上る利益を直接坑夫達へ分譲しようと思畫した。すればピストルが不用になる。物價の暴落が恐るに足らなくなる。坑夫達の生活は堅固になる。負傷者の家族は安心する。父と妹の危険が救はれる。さうして、街へ出

るトンネルは、日々、その通行能率を平和に増進さすにちがひない。

計介はお品の逃亡を感嘆した。ただ今は、もつとも健全にトンネルを街へ通行さすための問題として、瀧川の理性がお品の逃亡によつてどれほど狂ひを生じてゐるか云ふことが残されてゐるだけだつた。それを思ふと、彼はまたあのお品の胸から腹へ走つた液滴とした一定の熱線を生じたとしたならば、それはお品の胸から腹へ走つた熱線が、街へ走つたからにちがひないのだ。

つまる所、お品の一定の線が街へトンネルを押し出す線であつたのだ。計介は、此の突如として峽谷の中からめくれ上つて来た一本の新鮮な理論を発見すると、にやにや隠謀者のやうに笑ひ出した。

「済まぬが、あの線は俺の胸へひつ着いた線なんだ。」

——あの線は俺の云ふままになる線だ。

九

その日の夕暮、瀧川飯場からまた三人の坑夫が逃げ出した。しかし、お品を捜しに行つた瀧

川はまた街から歸つて来なかつた。次の日の夕暮が再び来た。

すると、白眼の下男が青ざめた顔をして、レールに頭を打ちながら計介の方へ馳けて来た。

計介は不吉な風を感じて立ち上つた。

「旦那さまが、旦那さまが。」

下男は吃つたまま計介の手を引つ張つた。

「やられたのか。」

「旦那さまが。」

計介は下男の指差してある斷崖の方へ駆け出した。やつて来たな。と彼は思った。

峡谷は眞白な風に見えた。

「だが、どこへ行くんだ。」

峡谷は廻つてゐる車輪に見えた。

彼は光つたレールに曳かれて岩層を一つ廻つた。

と、斷崖の上で、彼の父と瀧川が抱き合つたまま倒れてゐた。

彼は空中を狙つてピストルを二發放つた。

彼はしなした風に吹かれたやうに傾く二人の方へ近づいた。

計介の父は、下から瀧川を睨むと、最後の言葉を一口云つた。

「貴様、話では分らぬ奴か。」

すると、突然、瀧川は、平手で打たれたやうに引き下つた。

クライマックスの頂點で、瀧川は腹くも一滴、彼の虚栄心へ注射されたのだ。

計介の父は眞直ぐに立ち直ると、汗をかいたまま感涙り出した。

「話があるなら、今晚来い。」

「はア。」と瀧川は頭を下げた。

父と息子は歸つて来た。二人は娘のまま、技動の高さを論べるやうに黙つてゐた。

計介は瀧川の怒りがお品の逃亡と徒勞な彼の探索からだと思ふことは直ぐ分つた。瀧川はお品の逃げた原因を、彼女の着物を買はなかつたがためだと思つてゐる。彼の物品を銷ぎとめてみた瀧川が、一枚の晴着だつたとしたならば、瀧川に晴着を買はなかつた計介の父が突きかかれるのは定つてゐた。

「しかし、お品を逃がしたのは此の俺だ。」

「お品の線がトンネルを押し出す前に、親父の身體が押し出された。」

計介は悲劇と喜劇の境界線が何處にあるのか分らなかつた。

だが、彼は瀧川に對する反感から今は少しも彼に恐怖を感じなかつた。ただ恐怖に代つて

腹立たしさが嵩じて来た。二人が家へ歸ると、妹は窓へ投げかけられた着物のやうに、俯いたまま窓の外へ折れてゐた。霧が煙のやうに峡谷へ流れて来た。下男は物音を濟めて夕食の準備を始めた。霧の中を一行に娘は坑夫の足が影のやうに通つていつた。計介の父はランプが點いても黙つてゐた。夕餉の時に黙つてゐた。恐らく頑固な父の腕で、恐怖が嵐のやうに吹き巻くつてゐるのに相違ない。——ふと計介は、父が坑夫の單價を上げ出すことを考へてゐるのではないかと考へた。

「お父うさん、危いですがからもう單價を上げてやつたらどうですか。」

彼は夕食をすませてから、父の傍で煙草を吸ひながら一滴の注射をやつた。だが、父は起きられたやうにむつとして黙つてゐた。

「お父うさんはいいでせうが、傍にゐる者が心配でいけませんよ。」

「うむ。」と父は初めて云ひ出した。

「上げてやつても恨つから損はしないでせう。僕は損をするより、今日のやうな危いことの方がいいですな。」

「お前のやうなもの、此の商賣は出来んわい。」まだ、生意氣な彼は思った。

二人はそのまま黙り込んだ。しかし、計介は父が弱味を見せない範圍に於て、間もなく確に單價を上げて行くにちがひないのを見てとつた。彼は街へ逃げ出したお品の線が、今頃黙つて父の心臓を狙つて来たのを感じると、霧で曇つたランプの下でまたにやりと笑ひ出した。

+

計介は坑夫の單價の上ることが、トンネルの構成上喜ぶ可きことであるとしても、坑夫の單價が上ることによつて、瀧川が一層坑夫達の中で勢力を張り出すのが不快であつた。彼は出来ることなら、此の機會を利用して瀧川を完全に峡谷から追放したかつた。彼が峡谷に動いてゐる限り、計介の父が坑夫の單價をいくら上げたとしても同じであつた。

瀧川は、その上つた單價に驚つて、また下の坑夫からそれだけ絞り上げるのは定つてゐた。

「あ奴はトンネルを食ふ奴だ。」

「あ奴は坑夫を殺せさすバチルスだ。」

「あ奴が居れば、今にそこからトンネルは腐るのだ。」

しかし、ただ三人の人間を殺して来たと言ふ

に過ぎない瀧川の一個の過去が、何故かくも大きなトンネルを腐らすのか。計介は今はまだ瀧川の狂暴な性格をめぐりて突きかかつて行きたくなかつた。

「他のことは後述しだ。」

「あ奴をここから抛り出すのだ。」

彼はふと今日瀧川の飯場から、三人の坑夫が逃亡したのを思ひ出した。——これで總計五人の坑夫が逃亡した。五人の勢力がなくなると、瀧川の隘口からは一日平均二尺の進行が遅れて行く。すると、彼の損害は一日平均十圓だ。今だ。

「今一人逃亡すればあ奴は完全に立てなくなる。」

「すればあ奴は逃げ出すより仕方がない。」

「お品萬歳！」

「俺は彼の後へ警岩機を据えつけるのだ。」

警岩機が追ひ出す人間だけは他の隘口へ逃せば良い。

計介は萬事今暫く待つて瀧川の様子を見ようと考へた。今はトンネルを最も立派に進行させる條件として残されてゐる問題は、警岩機が到着する時機よりも、瀧川の逃亡する時機の方がより早かるべき必要のあることだつた。もし瀧

川が警岩機の到着を嗅ぎつけなければ、彼は此の峡谷から動かないのに定つてゐた。もしそれを強ひて追放するとすれば、彼は此の峡谷の中で暴動をひき起こすのは明かなことであつた。

しかし、計介には瀧川の逃亡の後、瀧川の唯一の功績である單價の引上げ運動の結末をいかに處分すべきかが問題となつて来た。恐らく計介の父は、瀧川のゐない限り、單價を上げようとはしないにちがひないのだ。

「よし、そのときはその時だ。」

「俺は瀧川に代つて親父とどこまでも争ひを續けてやる。」

もし——それでも親父が俺の云ふことを聞かないなら、俺は親父を守ることは斷然やめだ。

しかし、瀧川は逃亡した坑夫の頭数だけ、再び坑夫を募集し始めたとしたならば、これがまた計介の新しい問題となつて彼の頭に残り出した。だが、瀧川が五人の坑夫を集めるには少くとも三百圓の現金が必要だつた。彼に今三百圓の金が出来るとすれば、いづれ計介の父から借りるのは分つてゐた。

「そこで、一つ瀧川に話をつけてやるので

ある。

「いや、お前の所のトンネルは、まだまだこれか

ら石が硬くなるばかりだと技師は云つてゐる。お前の所へ金を注ぎこんでばかりゐては、他の飯場が怒り出すに定つてゐる。」

計介の頭は此の論と事實の丸薬を考へ出すと、初めて軽くたつて来た。だが、もし此の寸法に一分の狂ひでも出来始めたら、トンネルは峡谷の横腹で洞穴になるにちがひないと彼は思った。

十一

翌日、お品から計介の所へ變名の手紙が来た。——私たうとうこんな所へ来たわ。こは汚いカフェーよ。お別れした時は眠れませんでした。私の名前はお品さんつて云ふの、早く来て下さいな。ずつと一緒になつて下さいなんて云はなくつてよ。御身分が違ふんですもの。でも、一日でもいいから来てちやうだい。早くよ、遅くなれば私、どんなになつてゐるか知れないわ。私もう濫川に逢ふのなんか恐くないの。私、あなたにお逢ひしたい一心なの。もうずつと山にゐるときから私、あなたのことばかり思つてゐましたの。

でも、あなたはいつも横ばかり見て働き込んでいらつしやるんですもの。私だつて仕方がないわ。ね、ね、早くよ、下から呼ぶからここで、ね、——

計介はお品に襟首を掴まれて揺られてゐるやうな感じがした。

「行く行く。だが、まア待つてくれ。」

今直ぐ行つては、濫川と父とのその後の様子が分らなかつた。彼はお品に返事を書かうと思つて手近の紙片を捜し出した。積み上げられたダイナマイトの箱の上に用紙が見えた。彼は周草ながら下からその用紙の片端を持つて、上に乗つてゐる塵紙の包み物のまま引き摺つた。と、塵紙の中から数枚の紙幣が乾いたビラの様に、彼の頭の上へ降つて来た。彼は、水を冠つた裸體の様に紙幣を浴びて動けなかつた。彼ははたためきながら散らしてゐる紙幣を掻き集せようとした。だが、ふと彼は、紙幣に叩かれて化石してゐる自分の心臓を感じると、ぐつと腹が立つて来た。彼は意地になり出した。数枚の紙幣の群れが、強風に波立つて縁側の方へつていつた。

敏な魚に見えた。——此奴だ。——此奴が人間を馬鹿にした奴だ。彼は鮮やかな十圓紙幣の如の中に坐り込むと、直ぐお品へやる懸文を書き始めた。

「俺はあのときからあなたに逢ひたくて仕方がない。しかし、今直ぐに逢ひに行つては後が困るのだ。長くは必ず待たせないから、いま暫くだ。ばたばたしないで音無しくしてゐてくれ。金は暫くすれば持つて行く。」

彼は手元にひつかつた十圓札を四五枚つかんで手紙の中へ巻き込んだ。午前のダイナマイトが地の底で爆けた。

「いや持つて、と彼は思つた。此の金は親父が坑夫へ支拂ふ此の月の金にちがひない。すると？」

「俺の撒き散らした金は坑夫の金だ。續いてまたダイナマイトが八號で爆発した。——今俺が此の金を一枚失へば、七人の坑夫の今日の生活が吹き飛んで了ふのだ。」

「それを三百枚としてみると？」

「——二人の人間だ！」

また十號と九號とで爆発した。と、續いて五

彼が彼の直下で爆発した。彼は狼はれたやうに狼狽へ出すと、ひらひら風に揺れながら散らしてゐる紙幣の波の中を這ひ廻つた。

「あらあら、兄さん。」

妹は夾竹桃の花束を持って新鮮な顔で入つて来た。彼女は憎く手品師でも見るやうに、ぼんやりと彼を見下ろしたまま立つてゐた。

「それ、お父さんが紙で包んでおきなすつたお金でせう？」

「拾へッ」と彼は云つた。

妹は縁側から崖の方へ飛び立たうとする紙幣の群れを、夾竹桃の花束で掃きよせ出した。遠くの峡谷の上下から、ダイナマイトの爆発する音響が次ぎ次ぎに響つて来た。

暫くすると、掻き寄せられた紙幣が盛り上つた更紗の模様やうに二人の顔で混雜した。

「私、折角貰つて来た花が日茶苦茶になつちやつたわ。どうなすつたの。」

「此の金を揃へてくれ。」

「でも、お母さんの日にお金を撒くなんて、随分お母さんだつて喜んでいらしつてよ。」

計介には、父が此の多額の金を故意に数枚の鼻紙の中にくるめて出て行つた大膽な心理が直

ぐ飲み込めた。金庫の中に詰められた金よりも、鼻紙の中に包まれた金の方が、いつの場合に於ても、より鼻紙に見えろにちがひないのだ。

彼は、妹が紙幣を揃へてゐる暇に、お品と自分の手紙をポケットの中へ押し込んだ。

「しかし、金は？」

金は手紙にくるんだそのままをお品へやらすと彼は思つた。

「今にお品が坑夫の單價を上げ出すのだ。その他の誰でもない。これは明かなことではないか。」

彼はお品にやつた足りない坑夫の金だけは、やがてお品が濫川を追放させる報酬として、父がそれだけ負擔すべきが當然だと考へた。彼は直ぐポストのある峡谷の村の方へ下つていつた。

十二

計介が村から歸つて来ると、彼の家の方から濫川が歸つて来た。二人は當然レールの上で行き合はねばならなかつた。だが、計介には、濫川の姿がまるで肩の張つた一疋の家畜に見えた。彼は自分がどうして此の濫川を恐れてゐたのか分らなかつた。彼は濫川を見下すやうに、

彼から二人の距離を詰め出した。

「ヤア」と濫川は新さうに笑ひかけた。

「ヤア」と彼は云つた。

二人はその儘肩を譲り合つて狭い枕木の上を行き過ぎた。計介は二人の間をかすめた風からお品の匂ひを嗅がうとした。

「だが、あの曲者め、俺の家で、何をやらして来たのかな。」

ふと彼は父が絞め殺されてゐる所が浮んで来た。彼は急いで家へ入ると、父はよろめきながらズボンへ片足を入れてゐた。

「今、濫川が来たでせう。」

「うむ」と父は云つた。

「何しにやつて来たんです？」

「撃岩機が来たら、あ奴に情してやることにしてやつた。」

トンネルが俄に彼の頭の中で崩れ出した。「あ奴に情してやらないと、進行がむづかしい」と父は云つた。

「親父は濫川が悪いのだ！」

彼は腹立たしさに黙り込んだ。

「俺が濫川を一番苦しめてゐるときに、濫川を一番助けてゐたのは俺の親父だ。」

「賭博の勝負は決定した。」

——瀧川が勝つたのだ。
計介は一切の苦しみを振り捨て、今は、瀧川に復讐してやるために、街のお品の所へ駆け出して行きたくなつた。
「いや、何に、利益は俺と瀧川とで分けるのさ。」と父は云ふと笑ひ出した。
彼は横を向きたくなつた。
——もう軍價は上がることがないだらう。坑夫達は聖岩樓に食はれて了ふにちがひない。
「それで他の者が、指を齧へてをればいいですね。」と彼は云つた。
「何アに。」
「第一もう物價が騰つて来るぢやないですか。」
「さうしたら、それまでさ。」
「まだまだ瀧川のやうな奴の出で来るのは、これからですよ。」
父の鼻は赤い顔の眞ん中で膨れ出した。
「貴様は黙つてゐりやそれでいいんだ。」
「来ましたね。」
「何をツ。」と父は叫んだ。
彼は横づらを殴られると、振り返つた。と、また父の拳が振り上つた。彼は表の方へ飛び出した。
——誰がこんな苦しみをするものか。

——今にトンネルは洞穴になるだらう。
今に親父の死骸が洞穴のまん中で寝轉んでゐるだらう。
彼はトロッコを拾ふと、お品のゐる街の方へ疾走した。岩層のカーブを乗り切る度に、峡谷の風光は明るく河口の方へ展開した。晴れ渡つた河口からは、濃栗色の鯉の群れが峡谷の中へ登つて来た。彼は初めて、トンネルを抜け出るやうに刻々幸福な速力を感じ出した。

青い大尉

父が突然死んで了つた。私は海峽を渡ると、バナナを四日間食べ續けてまだ知らぬ街まで出かけていつた。
母はとある街角の三角形の奇様な帽子張りの家の中で、ひとり机のやうにぼんやりと坐つてゐた。
「どうしたんです。」
「死んだ。」と母は云つた。
それはさうにちがひない。私はその日から、忽ち債鬼となつて活動を始めた。
「金をくれ、親父が死んだ。」
「金を寄せ。親父が死んだ。」
債鬼の歌ふ歌はかうであつた。
私は先づ法務局の役人と、職工所のある技師と、府廳の書記と時計屋の主人の所へと談判した。しかし、金は下手な債鬼の歌に踊るものでは決してない。そこで、私は義理を輕蔑して一番窮い隣家の家へ向進した。すると、隣家の退役大尉は赤痢になつて死にかかつてゐた。姉と弟とは薄暗い家の中で、黙つて店頭の饅頭を

焼いてゐた。
私はもう金に踊らせられるのがいやになつた。
朝な朝な涼しい驢馬が鈴を鳴らして通つて行つた。辻では驢馬の警官が眼の光つた鮮人の顔を見てゐた。
私は残して来た鮮人にてて手紙を書いた。
「もうあなたと結婚は出来ません。父に金が何もないのを知りました。無論、僕もありません。歸る船賃さへも、まだこれから取るのです。あなたは僕を好きだと云つてはいけません。僕は、あなたと僕とを引き裂いた金が欲しくなつては、困るのです。」
私は悲しくなると骨壺から父の骨をとり出した。
「これが親父か。こんな親父はあるものか。これは石灰と云ふものだ。」
私は父の骨を掴みながら、一片づつ骨壺の中

へ投げ込んだ。チャリン、チャリンと父は清らかな音を立ててゐた。私は父と角力をとつて、父を投げつけたときのことを思ひ出した。
外では支那人と朝鮮人とが殴り合つてゐた。鮮人は紙屑の中へ押し倒されると、片足を上げて慘なげに唸つてゐた。
隣家の大尉が入院すると、娘は擔体に柄のない刀を持つて私の家へ入つて来た。
「いいんですよ。いいんですよ。」
「でも。」
「いいんです。」と私は云つた。
次の日から、娘は裏口からこつそりと足音を忍ばせて覗き出した。
細い路をへだてた横の屏風では、積み上げられた紙屑の隅で勝手にごそそ鮮人達がモヒの注射をやつてゐた。彼らの一人は角の滑れたシルクハットを冠つてゐた。一人は骨の突き出た洋傘を持つてゐた。一人は跛足で跛足の半靴を履いてゐた。
「あれは何んです。あれは？」
「あれは、お前、泥棒と乞食だよ。」と母は云つた。
乞食と泥棒の顔は叩き落された瓦のやうで、

父が突然死んで了つた。私は海峽を渡ると、バナナを四日間食べ續けてまだ知らぬ街まで出かけていつた。
母はとある街角の三角形の奇様な帽子張りの家の中で、ひとり机のやうにぼんやりと坐つてゐた。
「どうしたんです。」
「死んだ。」と母は云つた。
それはさうにちがひない。私はその日から、忽ち債鬼となつて活動を始めた。
「金をくれ、親父が死んだ。」
「金を寄せ。親父が死んだ。」
債鬼の歌ふ歌はかうであつた。
私は先づ法務局の役人と、職工所のある技師と、府廳の書記と時計屋の主人の所へと談判した。しかし、金は下手な債鬼の歌に踊るものでは決してない。そこで、私は義理を輕蔑して一番窮い隣家の家へ向進した。すると、隣家の退役大尉は赤痢になつて死にかかつてゐた。姉と弟とは薄暗い家の中で、黙つて店頭の饅頭を

焼いてゐた。
私はもう金に踊らせられるのがいやになつた。
朝な朝な涼しい驢馬が鈴を鳴らして通つて行つた。辻では驢馬の警官が眼の光つた鮮人の顔を見てゐた。
私は残して来た鮮人にてて手紙を書いた。
「もうあなたと結婚は出来ません。父に金が何もないのを知りました。無論、僕もありません。歸る船賃さへも、まだこれから取るのです。あなたは僕を好きだと云つてはいけません。僕は、あなたと僕とを引き裂いた金が欲しくなつては、困るのです。」
私は悲しくなると骨壺から父の骨をとり出した。
「これが親父か。こんな親父はあるものか。これは石灰と云ふものだ。」
私は父の骨を掴みながら、一片づつ骨壺の中

へ投げ込んだ。チャリン、チャリンと父は清らかな音を立ててゐた。私は父と角力をとつて、父を投げつけたときのことを思ひ出した。
外では支那人と朝鮮人とが殴り合つてゐた。鮮人は紙屑の中へ押し倒されると、片足を上げて慘なげに唸つてゐた。
隣家の大尉が入院すると、娘は擔体に柄のない刀を持つて私の家へ入つて来た。
「いいんですよ。いいんですよ。」
「でも。」
「いいんです。」と私は云つた。
次の日から、娘は裏口からこつそりと足音を忍ばせて覗き出した。
細い路をへだてた横の屏風では、積み上げられた紙屑の隅で勝手にごそそ鮮人達がモヒの注射をやつてゐた。彼らの一人は角の滑れたシルクハットを冠つてゐた。一人は骨の突き出た洋傘を持つてゐた。一人は跛足で跛足の半靴を履いてゐた。
「あれは何んです。あれは？」
「あれは、お前、泥棒と乞食だよ。」と母は云つた。
乞食と泥棒の顔は叩き落された瓦のやうで、

「お母アさんを、あなたはそんなに嫌ひなの？と私は訊いてみた。
「ええ、嫌ひ。私、ほんたうのお母アさんに逢ひたいわ。」と娘は云つた。
「ちや、あのお母アさんは伯母さんなの？」
「違ふの。あれは私の家の女中だつたの。」
「さう、ちや、ほんたうのお母アさんは？」
「死んだの。」
「死んだ。」
「お父うさんは私のことで、いつでもお母アさんと喧嘩ばかりしてゐるの。」
「ちや、お父うさんがゐなくなつたら、どうするの？」
「分らないわ。」と娘は云つた。
しかし、娘は死にかかつてゐる父のことを云はれても別に悲しさを顔をしなかつた。
「あなたは、お父うさんが好きなんですか。」
「いいえ、ちつとも。」と娘は云つた。
それなら彼女にはどう云ふことが悲しいのか、それが私には分らなかつた。
娘は私に見られるといつも俯向いて黙つてゐた。
「あなた、いつ歸るの？」と娘は訊いた。
「もう直き、海が静にならないと、危いから。」

「母が喜んでゐましたよ。」
「あのね、今日、お母アさんが、あなたの所のお手傳ひをするやうにつて、さう云ひましたわ。」
「ありがたう。お母アさんも病院へ行きましたか。」
「ええ、あつた。お母アさんも病院へ行きましたか。」
「ビストルを何んで？」
「ビストルをお渡ししておつて、お父うさんが云つてましたわ。」
「ビストルなんか、あるんですか。」
「ええ、これ。」と云つて娘はいきなり包みの中から黒いビストルを取り出した。
私はビストルを受けると、掌の上へ載せてみた。手應へのある重い把握力が私に武装の快感を感じさせた。
「これはあなたが持つてゐるは危いから、暫く僕が持つてゐて上げますよ。」
「ええ、そして、これも。」と娘は云ふと弾丸を差し出した。
私は初めてビストルと弾丸を持つたのだ。
「よし。」と私は呟いた。
私はそれから毎夜、こつそりと青い街燈の光りで見送るの鏡身を鋭く光らせてみるのが好きになつた。その横の紙屑の山の隅では、また

私に傷を通つた馬の警官に眼をひかれた。警察の支那人が怒々と車をひいて暗い路の中へ入つていつた。
暫くすると、娘は突然眼に両手をあてて泣き出した。
「何ぞ泣くの。泣くんぢやない、泣くんぢやない。」
私は娘の背中に手を廻すと、街燈の光りのとどかぬ屑屋の暗い物置の傍へ連れていつた。
紙屑の中では、また例の跛足が青い眼を光らせて探つてゐた。阿片の匂ひが鼻を突いた。
「あなた、歸つちやいや、歸つちやいや。」と娘は云つた。
私は紙屑の中の跛足の動かぬ暗い穴のやうな顔を見成りながら、娘のお下げの端を指の先に巻きつけた。
次の日病院から娘の母が急いで一寸歸つて来た。歸ると彼女は直ぐその夜、また病院へ出かけて行つた。出かけるとき、私はカーテンの隙間から彼女の後姿を見つめてゐた。彼女は裏口から箱の立ち籠めた表へソツと出て行く。屑屋の小舎の前で待たせてあつた男と聲をひそめて話し出した。男は肩で彼女の肩を押し

いつも彼らも笑つてゐることはつひぞなかつた。いつも彼らはぶらぶらしながら煙草を吹かしては注射をした。ときには、彼らは無表情な鈍い顔のそのままで喧嘩をやつた。
シルクハットはお洒落であつた。彼は膝に縛りつけた手巾の中から注射器を取り出した。跛足は頭の鉢巻の中から取り出した。彼はいつでも紙屑の中に埋まつて死にかかつた犬のやうにびりびりと震へてゐた。
或る夜、私は屑屋の前で病院から歸つて来た隣家の娘と行き逢つた。私は一寸立ち停ると、娘も何か云ひたさうな眼をして立ち停つた。
「お父うさんは？」と私は訊いてみた。
娘は黙つて笑つてゐた。
「いい方ですか。」
「いいえ。」と彼女は云つた。
辻の青い街燈が娘のお下げの後で光つてゐた。暗い屑屋の襖の中からは跛足の眼がちらちらと玉のやうに探つてゐた。
「あなたは幾つ。」と私は訊いてみた。
「十六ですの。」
「さう。僕の父が亡くなつたとき、あなたはいろいろ手傳つて下さつたさうですね。」
「いいえ、何んにも。」と娘は云つた。

「母が喜んでゐましたよ。」
「あのね、今日、お母アさんが、あなたの所のお手傳ひをするやうにつて、さう云ひましたわ。」
「ありがたう。お母アさんも病院へ行きましたか。」
「ええ、あつた。お母アさんも病院へ行きましたか。」
「ビストルを何んで？」
「ビストルをお渡ししておつて、お父うさんが云つてましたわ。」
「ビストルなんか、あるんですか。」
「ええ、これ。」と云つて娘はいきなり包みの中から黒いビストルを取り出した。
私はビストルを受けると、掌の上へ載せてみた。手應へのある重い把握力が私に武装の快感を感じさせた。
「これはあなたが持つてゐるは危いから、暫く僕が持つてゐて上げますよ。」
「ええ、そして、これも。」と娘は云ふと弾丸を差し出した。
私は初めてビストルと弾丸を持つたのだ。
「よし。」と私は呟いた。
私はそれから毎夜、こつそりと青い街燈の光りで見送るの鏡身を鋭く光らせてみるのが好きになつた。その横の紙屑の山の隅では、また

いつも跛足のモヒ中毒者が探つてゐた。シルクハットは時々酒としてステッキを片腕にかけながら、破れた靴を履いて歸つて来た。
「しかし、金は？」
金のことを思ふと、私は毎朝高いたい空の下で淋しくなつた。學校をやめねばならぬ。母を養つて行かねばならぬ。私は自分の肩の瘦せてゐるのが氣になつた。しかし、何よりも船賃だ。あの海峡の線の波が、どうして無数の牙のやうに見えるのだらう。私は懐にビストルを忍ばせてまたあきらめてゐた債東の歌を歌ひ歩いた。
しかし、法務局の役人は電話を一臺置をつく機械にしてつた。鐵工所の技師は鐵の錆びた看板を借金の桶に應用した。府廳の書記は私の言葉を聞く代りに筆の輕さを私に吹聴した。時計屋の親父は体んでゐる時計の時間を飽く迄正當と心得た。さうして、私と母とを船に乗せて海峡を渡らせてくれるものは、今は死にかかつてゐる青い大尉のビストルだけになつて来た。
隣家の娘は毎夜辻の街燈の下で、お下げを弄びながら私を持つてゐた。或夜私が出て行くと、彼女は母の悪口を云ひ出した。

緒にわなくていいから、嬉しいの。」と彼女は云つた。

「お父うさんは、そりや私を強く打つ。腕でくくつて竹で叩くのよ。あれ、お母アさんが怒いのね。お母アさんつてば、私が叩かれれば、はアはア云つて笑つてゐるの。私、憎らしいから、一度夜中に警察へ飛び出しちやつたわ。そしたら、お父うさんが叱られてるの。」

「しかし、お父うさんは、あなたを憎くつて叩くんぢやないんですよ。お父うさんは、あなたのことを心配して叩くんです。だから、早くお父うさんの所へお行きなさい。」

「あな、まだここにいらしやるの？」
「うむ、そりや、行かなくちや。」
「でも、」と娘は云つて動かなくつた。
「ひとりで行くのは恐いのですか。」
「あなた、まだここにいらしやるの？」
「うむ、ここにゐますから、お行きなさい。」
「ちや、あたしも、ここにゐるわ。」と娘は云つた。
「それなら僕は歸ります。」
「いや、いや。」

「しかし、あなたはお父うさんの所へ行かなかい

りやいけません。」

「それなら僕は、もう知らない。」
すると、娘はまた前夜のやうに泣き始めた。私は霧で曇つた街燈の青い光りの下で、しくしく泣いてゐる娘のお下げを見てゐるのが好きであつた。支那人の車が忍びやかな輪のやうに霧の中へ消えていつた。

「ちや、あなたは病院へ行きますか。」
彼女は泣きながら頷いた。
「ちや、こちらへいらつしやい。」
私は娘を連れてまた屏風の物置の前まで歩いて来た。私はあの紙屑の中に坐つて探へてゐるであらう跛足の無表情な顔の前で、一度娘に大きな接吻を試みたかつた。

「さア、泣いちゃいけない。泣いちゃ。」と私は云つた。
娘は私の前で立ち停つた。
「さア、顔を上げなさい。」
娘は俯向けてゐる顔を一寸真直ぐにしたがまた直ぐ俯向けた。私は彼女の顔を片手で上げると首をぐつとひき寄せた。彼女は苦しうに私の胸へ手をかけた。そのとき、ふと私は先刻娘の母親がこの同じ所で男と戯れてゐたのを

思ひ出した。すると、青い大尉の顔が匂ひのやうに浮んで来た。私はもう娘に接吻するのが不快になつた。

「さア、お父うさんの所へ、直ぐいらつしやい。直ぐ。」と私は云つた。
娘は黙つて私の顔を見上げてゐた。
「行かないんですか。」
しかし、彼女は私の前にいつまでも立つてゐた。私は勝手に自分の家の方へ歩き出した。すると、娘は測れながら静かに街燈の光りの方へ歩いていつた。

私は立ち停つて霧の中へ駆け込んで行く娘の後姿を眺めてゐた。
私はその夜から急にまた内地へ残して来た懸人へ逃げたくなつた。丁度隣家の娘が父が死にかかつてゐるにも拘らず、私の傍で泣くやうに、私も父へ死んだにも拘らず、懸人の匂ひが慕はしくてならなかつた。

私は再び債鬼の旗を押した。あの時計屋の体んでゐる時計を動かして、時日の経過を示さなければ——私は時計屋へ出かけていくと最後に云つた。
「あなたの店のこの時計は、皆休んでゐる時計

ばつかりなんです。そんな時計を偽用されては、僕はいつまでたつても歸れないんです。い加減に金を下さい。金を。」
すると、時計屋は溢々半額の金を出して来た。次に私は法務局へ廻つてみた。
「金を下さい。金を。もし僕らが歸らなければ、こちらにゐる間の費用だけ、全部あなたの所へ押しつけますよ。」

すると、ここでは、いま一週間だけ待つてくれと頼んだ。私には報酬は苦手である。私は苦い顔をして歸つて来た。歸ると、隣家へ押しかけていつたらしい債鬼が一人私の家で母と一緒に話してゐた。

「それでですね。あなたの所が、お隣りからあの栗田口の刀をお取りになつて、私はビストルをとると、かうしようちやありませんか。あの栗田口は忠綱ですから、時價で、まア二百圓にはなりませんよ。」
「ちや、あのビストルは？」と、私は彼の話を横取りした。

「あれですか、あれは、さうですね。まア、九十圓の代物ですね。しかし、何んです。あれは、あなたん所のお父うさんもよく御承知ですが、今なかなか手に入らないビストルですよ。しか

し、これはあなたん所の御主人とよく一度お話ししてからにしたいと思ひますが、とにかく、隣家の主人はもう危いですから、今の中にはつきりさせておきませんと。」
「僕の親父はゐませんよ。」と私は云つた。
「ああ、さうですか。どこへお出でになりました。」
「死んだんです。」
「えッ。」と男は云つた。
「此の月の初めに亡くなりました。」

「でも、つい先日、びんびんしてらつしやつたちやありませんか。」
「ええ、突然でしたものですから。」
男は急に逃げ腰になると部屋の中を呆然と眺め出した。
「あそこに骨があるでせう。あれですの。」と母は父の骨を指差した。

男はだんだん恐さうに眼を光らせながら、黙つて暫く骨を見てゐたが、
「もう生きてゐるのが、いやになつた。」と叫びた。
彼は直ぐそれから急いでこそそこそと會釋もせず歸つていつた。

隣家の大尉は妻と子から死なれることを待たれながら、まだなかなか死ななかつた。
或る朝、私は母に起された。すると、紙屑の中ですべて覆へてゐた跛足の乞食が、雨の上つた泥濘の中へ顔を俯向けたままに死んでゐた。その傍で、シルクハットは黙つて煙草を吸ひながら跛足の背中を眺めてゐた。隣家は涼しく朝の勤めに鈴を鳴らして通つていつた。

「シャゴ、シャゴ、シャゴ、シャゴ。」
暫くすると警官が人夫を連れてやつて来た。人夫達は乞食に建を被せて擔ぎ上げると、また警官の後から去つていつた。後の泥の中には、深い一つの死、面がくつきりと残つてゐた。
私は硝子の三角形の家の中から、彫られた乞食の死、面を見詰めてゐた。誰があのマスクを第一番に踏んで行くであらうかと考へながら。

シルクハットは死んだ跛足のゐたあの紙屑の中に半身を埋めながら、膝から注射器を取り出すと腕にぶつぶつ針を打ち出した。

その日も夜になると、また私は隣家の少女を泣かしたに街燈の下へ出ていつた。思ふに彼女はそこで泣くのが楽しみに相違ない。その青い

街燈は、少女の眼から涙を絞り出すに相應しいそこはかとなき水のやうなメラソコリアを持つてゐた。

「ね、あのう、あなたとこの小母さんがね。」と彼女は私を見るときいきなり胸の前へ擦り添つて来て囁いた。

「お父うさんは？」
「あなたとこの小母さんがもう直ぐ日本へ歸るんですつて。」

「そりや、歸ることは歸りますよ。早く海が静まつてくれればいいと思つてるんだけど。」
「私も早く歸りたい。」

「あなただつて、もう直ぐに歸れます。」
「だつて、そんなこと、いつだか分らないわ。」
「心配しなかつて、ちつとしてれば歸れるやうになりますよ。もしお父うさんでも死んだら、僕がビストルを賣る店を教へてあげられるから、そこでお買いなさい。あなたの歸れるだけのお金は、あのビストルから出て来ますから。」

「だつて、お母アさんは、そんなこと承知しないわ。」
「もししたら、あなたはそれをもつてこつそり賣つて了へばいい。それから、あなたの所には、

大切な刀があるから、あれも今からあなたは隠しておかないアいけませんよ。あれを欲しがつて、狙つてゐる人が澤山あるから、そ奴らに渡して了つちやいけませんよ。」
「あたし、あなたと一緒に歸りたい。」と娘は云つた。

「そりや、僕が歸るまでに、あなたも歸れるやうになればいいけど。」
「お父うさん、早く死ねばいいわ。」と娘は小聲で叫んだ。

「そんなこと云ふ子は、僕は嫌ひだ。もう知らないから、お歸りなさい。」と私は強く云つた。

すると、娘は初めて泣き出した。私はまたひそやかな快感を感じ出した。私は娘の背中に手をあてると、巡禮のやうに人目の届かぬ暗い屏風の小屋の前まで連れて来た。

小屋の紙屑の中には、いつもの懐へる食糧がもうあなかつた。ただ静な紙屑が黒い壁のやうに積つたまま黙つてゐた。私はふとあの跛足の死面を思ひ出した。あのマスクのあつた所はどこだつたか。私はマツチを擦ると足もとの暗い泥濘の上を捜し廻つた。マツチの光りに照らされた泥の皺は、油を塗られた皮膚のやうに輝きながら私の顔を映し出した。と、泥の中か

眼に見えた風

一
避暑期の都會はさびれて来た。人けのない商店の中で煽風器が空廻りをやつてゐる。軒を並べたそれらの店の空気のやうな庭の中を、次から次へと風に吹かれて渡つていつた、この昆蟲のやうな私の動作は思はぬ幸福な避暑であつた。

私はいかに困窮をしようとも、生活に關して頭を悩ますことを自分の恥辱だと思つてゐる。私は生活の楽しみを知らねばならぬ。

二
プラットホームへ通じる地下道の中で、前を歩いて行く女がしきりに咳をし始めた。私は深海の魚が空中に上げられると、今まで海水の重力に抵抗してゐた内部の壓力で、破裂すると云ふ素晴らしい光景を考へてゐたのである。と、私は女の咳に動かされた。擦れ擦れになつたとき、ふと横顔を見ると、女は私の別れ

た妻であつた。病が出たのであらうか。私は辰子と肩を並べるやうにして黙つたまま一緒に歩いていつた。が、彼女は私とはまだ氣附かずに肩を縮めて歩いてゐる。眞鍮の欄干が見えると地下道は階段になつた。私は此のまま辰子と別れて行かうと考へた。

私は彼女と一緒に生活をしてゐるとき、彼女の内部を確信に見てとつたのはたつた口の中三寸までの深さだけだつた。その奥はいつも眞暗で見えなかつたのを覚えてゐる。そのため彼女を一日に一度は曲者だと思ふ習慣がついてゐた。が、今は、私は彼女の内部から何物をも買ひたいとは思はない。人はただ妻と云ふ一個の肉體を自分の周囲でぐるぐる廻らさすことによつて、自分の領域を確定する。が、何が二人の間で切斷されたのであらう。とにかく、彼女はいつ見ても眼を光らせてゐる鳥のやうだ。

彼女は顔を上げた。と、三年の間別れてゐた自由な二人の眼が逢つた。彼女はひどく周章

ら、顔を靴で踏みつけられた犬のやうに無表情な一つの凹んだ面を見た。私は動き停つた。これは周章でマツチを擦り變へると近々と顔を面の傍へ近寄せた。と、私はそのデッドマスクの中から、至んだ自分の顔を見附け出した。私は思はずマツチを泥の中へ投げ捨てた。私は自分の顔を撫で廻した。が、いくら撫でても跛足の懐へる顔が、眼前で生々々と、無敵に懐へる吸盤のやうに懐へ出した。私は家の中へ駆け込んだ。と、父の骨がちつと私を見附きてゐた。私は飛びかかるやうに父の骨を抱き上げると、がらがら激しく左右に揺り始めた。

「ちよつとお待ち。」と母は云つた。
私は骨を抱いたまま初めて母の顔を見た。母は白毛の垂れた首を傾けて、暫く隣家の物音を聞き入つてから、小聲で云つた。

「お前、お歸りのお父うさんも、死んだらしいね。」
私には母の顔までが一本の石碑のやうに見えて来た。

てて顔を向いた。あの袋の中では、私に影射された昔の古い細胞が混濁してゐるのにちがひない。私は意地悪く彼女と並んで歩いてみた。私は彼女がどんな言葉を出すであらうか試験してみたかつたのだ。此の女は私の死ぬことを幾度願つてゐたか知れなかつた女である。私がいつまでも黙つてゐると彼女もいつまでも黙つてゐた。多分彼女の身體は私の半面に鳥肌を立ててゐるのに相違ない。私は？ 私は彼女の唇に流れてゐる下等な表情から過去を考へてゐるだけだ。だが、何故に過去の最も醜い風情のみが、かくばかり鮮やかなのであらうか。

「あなた、どこにいらつしやるの。」と彼女は訊いた。
私は住所を云ふと、さやうならをするつもりで笑つてみた。前には、私は此の微笑で彼女を妻にすることが出来たのだ。

ホームへ電車が入つて来ると二人はどちらもお辭儀をした。
「さやうなら。」
「さやうなら。」

お辭儀と云ふものは、何と物柔かなものであらう。私は善行を積んだ騎士のやうに道徳的な

「あれは、さうして彼は周囲にゐるものが、切られた西瓜の野蠻な赤い大口ばかりだと気が附くと、安心して鏡舌り出した。」

三

私は果物店の前まで義眼の日と一語に歩いて来た。レンズ磨きの彼は遠く度に見えを捜してゐる。彼は自分の貧しさを勇敢に無視しながらいつもステッキの先でこつこつ道をつついてゐた。彼は果物店の奥室へ入ると私に云つた。

「われわれは、と、さうして彼は周囲にゐるものが、切られた西瓜の野蠻な赤い大口ばかりだと気が附くと、安心して鏡舌り出した。」

「君は職業を捜してゐたのか。」
「彼は戀愛を捜してゐた、とても云ふやうに。彼は黙つて立ち上ると、またこつこつステッキ

を突きながら戀愛を捜しに街の中へ出かけていった。私は彼を想像する度に、いつも彼のステッキが鋭い呼吸を持った鼻のやうに見えて来る。彼の憂鬱な後姿は街頭を見送しながら、

四

どの方角へ歩いていっても若者は来るべき社會と愛の話ばかりをやつてゐた。その癖私は今日は一日軒並に下つた看板で頭を打つた。舌を噛んだりし続けた。街の店頭を覗いてみるとネクタイの群れが濡れた髪やうに沈んでゐる。私は橋の上から泥濘の水をちつと見てゐる。すると、不意に貧しい女優のSが後から私の肩を叩いて云つた。

私も活潑に歩き出した。が、何を活潑に歩いてゐるのか。私は立ち停つた。眼の前のガラスの中に煙草が山のやうに積もつてゐる。私はどつちへ行つても同じことなのだ。それに、何せ南の方へ歩き出すのか。もう、私の心はいつの間にか不必要なものばかりになつてゐるのだ。

五

Hの世話で大學の解剖科へ勤め出した。死人係りだ。私は覺悟を持つてゐる。私の身體までが既に不必要なものであると云ふことを、私は人間を鈍だと思ふ練習をし出すのだ。私は最早やいかなることにも興奮しないであらう。

た死人の濡れた皮膚をほじくりながら私に云つた。

「おい、此奴ア、お前に似てらア。よく見とくがいいぜ。」
「勿論、私は私を、眼に見えた風一だと思つてゐる。」

二度目に行路病者を見たときにはもう彼は人間の形を無くしてゐた。私は床に落ちてゐる彼のやうな耳を膝で掃き寄せながら、敏捷に載れてゐる二匹の蠅の動作を眺めてゐた。

六

誰もゐるべき筈のない私の家の中で、人の影が動いてゐる。
「御免なさい。」と私は戸口に立つて云つてみた。
すると出て来たのは私の別れた妻であつた。
「あたし、あなたがもう奥さんを持つていらつしやることだと思つてゐたの。でも、来てみたら、いつまでたつてもからつぽでせう。」

これを第一、不用心だわ。」
「俺の留守へ入つて来る奴なんて、お前ぐらゐなものだ。」
「私は彼女が家を出たときにも黙つてゐた。が、今は私は黙つて彼女を見てゐてやらう。私は上つて煙草を一服吸ひ始めた。」

「あたし、實は、あなたの噂はいつも聞いて知つてゐるの。」
「それは、馬鹿な證據だよ。」と私は云つた。
「彼女は明るい細びを眉の片端に吊り上げた。ね、あたし、もう一度ここにゐてもいい。」

「そんなことは、俺にきかずにお前にきけ。」
「そりやさうね。だけど、あたしが勝手に出ていつて、勝手に歸つて来たんだから、あなただつて、あきらめるより仕方がないわ。」
「うむ、そりや、さうだ。」と私は笑つて云つた。
「彼女は私の留守を利用して、こつそり客をたらうと云ふ腹であることぐらゐは分つてゐる。だが、私は昔の馴染のために、私の家と蒲團を借してやらう。」

七

楽しみと云ふものは探せばいくらでも出て来るもんか。」

「おい、君、君、女が、何故かくも淫奔であるかと云ふことを、説明するために、男がかくも厭厭なズボンと云ふものを、何故に發明して来たかと云ふことを、考へれば良いのだ。分つたね、おい、ズボンだよ。此のズボンだ。あははははは、笑はせやがらア。」

「女が逃げて了ふと私と彼は肩を組んで哀へ出た。ボールが火花を落して曲つていく。Hは電柱にもたれたまままげらげらと笑ひ出した。私はHの手をひつ張つて暗い街の方へ歩いていつた。彼はひよるけながらがくがく首を垂れては、一息はせやがらア。」

「自動車が走つたガラスのやうに近づいて来ると、首が出た。窓に茂つた植物の影で鴉がひとり鏡舌つてゐる。Hはポケットの中へ小石を詰め込みながら私の後で唸つてゐた。
「おい、金を拾へ、金を拾はんと云ふことが、あるもんか。」

彼はひよろひよろしながら石を握つて鴨の傍へ近寄つた。鴨は逆さまに籠にとまると彼の動かぬ義眼の前で舌を出した。

「ボートボ、ボートボ、トンデコイ。」

「笑はせやがらア。」

と彼は云つた。彼はまたげらげら笑ひながら私の後からついて来ると、青い燈のついた酒場の廻り廊の中へ首を突つ込んで、娘のやうによろけ出した。

八

私は辰子が三人の男を自由に切り廻してゐることを知つてゐる。彼女は殆ど小遣に困つたことがない。前に私が製作所の書記をしてゐた頃よりも彼女が金銭に悩まされないと云ふことは、それだけ彼女の墮落を示してゐるのであらうか。彼女に貞操を賣らしたのは私の他の誰でもない。だが、私はそれ故に彼女を愛し続けなければならぬのであらうか。私は彼女に金銭を與へることが出来なかつた代りに絶體の自由を與へた。すると、彼女は私の與へた自由を賣つて金を勝手に買つたのだ。だが、われわれのいかなる肉體が、その器官を賣らずに金を買ふことが出来たであらうか。われわれは

永久買ひ手のつく器官から買つていかねばならぬのだ。

九

今は、私と辰子とはただ生活の賑やかさのためだけに對立してゐるだけである。あなた、もう御飯が出来たのよ。」と彼女は云ふ。

そこで、私と彼女とは華やかに向ひ合ひながら湯気の立つた飯を食ふ。何が悪いのであらう。彼女が私の行ひについて、私が彼女の行ひについて、吟味の眼を光らせる必要は少しもない。全く、これは、互に愛し合つてゐる所が一點たりともないからだ。人は完全に愛し合ふ場合と、全く愛さない場合との二種の形が、恰も眞似するごとく似通つてゐると云ふことは、興味がある。もう彼女は前のやうに私の死ぬことを願ふ必要は少しもない。私は云つた。「お前は前に、夜中に寝られぬ夜なんか、こつそり俺が死ねばいいと思つたことがあるだらう。」

「ええ、そりやね。」と彼女は云つた。

「ぢや、今はどうだ。」

「今は、さうね、あたし、何だかあなたが、早

く出世をなさればいいと思ふだけだわ。」

「お前は正直だよ。俺も正直な所があるが、どうもあまり正直者同志がよると、人間は不幸になつて行くらしい。」

私は嘘について考へる。人間は總て幸福にならんがために嘘を造るのだと云ふことを。

十

私は辰子に訊いてみた。「お前は俺に愛する者があると思つたことはないのでかね。」

「だつて、もしお有りだつたら、あたしがからしてゐて、平氣でいらつしやる筈がないわ。」と彼女は云つた。

「ぢや、俺はお前が歸つて来たので、そんなに嬉しさうな顔をしてゐるかい。」

「あたしは、あなたがあたしのしたことに一言も仰言らない所が、何だか賞めて上げたいくらゐるの。あたしはあなたが、どつか人と變つたお前が所がありさうな氣がして来たのは、近頃よ。」

「ぢや、少々は、ちよつと惜しいことをしたとも思つてゐるんだな。」

「ええ、そりやさうよ。惜しいわ。だけど、も

しあたしがあなたから逃げなかつたら、いつまでたつたつて、分らなかつたわ。」

「ぢや、俺のためには、いいことをしてくれたと云ふ腹でもゐるんだな。」

「そりや、さう云ふ理窟になつて来るのね。ぢや、あたしは、ほんとに、いいことをしたのかしら。まさかね。」と彼女は云ふと自分から笑ひ出した。

十一

私は辰子と一緒に街を歩きながら訊ねてみた。

「お前は、俺と別れてゐる間に、まあ凡そ、何人ほどの男を知つて来たんだい。」

「さうね、百人ぐらゐるはあるかしら。」と彼女は云つた。

「それで、お前の氣に入つた男と云ふのは、どう云ふたちの男だつた。」

「あたしは、結局あなたが一番好きよ。」

「俺は、お前から今頃お愛想を聞かうとは思つてゐないよ。」

「あたしだつて、あなたにいまさらお愛想でもないぢやないの。」

「それぢや、お前は俺を愛してゐると云ふのか

い。」

「まあ、さう云はれば、そんな氣もするわ。だけど、愛だなんて、何んだか水に浮いた油みたいで、人間きが悪いぢやないの。」

「もうそんな年でもないか。」

「さうよ。」

「所が、俺は、かう見えても必死になつて、その産しい奴をせつせと毎日捜してゐる一人なんだよ。」

「それでも、あれから一人もないの。」

「うむ、ない。俺は毎日、死人ばかり見てゐるんだ。」

「それぢや、つまらないぢやね。もつと、あなたは生きてる人を追つ馳けなくちや駄目よ。」

「さうだ。追つ馳けなくちや、いけない。」私は云つた。「しかし、女から見ると、いつたい、俺は好かれる方の男かい。」

「あなたは、好かれるわ。きつと今に良くつてよ。」

「所が、たまに俺の追つ馳けた女だと、そ奴が逃げたりしやがるし。」

彼女は反り返つて笑ひ出した。

「だつて、また歸つて来たぢやないの。」

「いや、昔から、歸つて来た奴にはろくな奴が

ないもんだ。」

すると、私は打たれたやうに悲しくなつた。私は彼女を愛してゐたのだ。昔から。それに、今は。

私は辰子をひつぱり廻して最後に橋の上までやつて来た。二人は欄干に膝をついて橋の下の泥溝をちつと眺めてゐた。

十二

小さな劇場がはねると樂屋口から降りて来るSとぼつたり一緒になつた。Sは階段を降りて来ると後に連れてゐる十四五の少女を私に紹介した。

「これが、葉ちやん。」

Sの弟子の一人であらう。「こんな子供でも、もう追つ馳けられてゐるんだから、輕蔑しないでやつて頂戴な。」

私はあらためて葉ちやんを見た。「此の白いハンカチを、誰があんな黒い煙突の上へかけようとするのか。」と、驚いたことには、もう彼女は處女ではなかつた。彼女の眼つきは私の肩からもうびくびくと希望を吸ひ取らうとしてゐるではないか。すると突然、Sは息も切れさうな嬉しさを示して云つた。

「昨夕はあたし、それは素晴らしいブルジョアになつたのよ。ね、かうなの。あたしが樂屋から出て来ると、それは素敵なバツカードが一臺持つてるの、それで、あたし、まアどんなことをやつたと思ひになつて。」

「その話は喜んで聞きますが、もう死ぬのはよしたんですか。」

「ああ、さうさう。あたしは死ぬ筈だつたのね。だけど、あなただつて、まるで死にさうな恰好で泥濘なんか見てらつしやつたぢやありませんか。」

お蔭で私は彼女がどうして一夜だけブルジョアになつたかと云ふ話を聞かずにすんだ。が、人は、突然幸運に忍び込まれる隙間を十分に持つものだと云ふことには、領事か。私は幸運が何より好きだ。われわれは、人に同情し與へるための準備として、絶えず幸運を心掛けてゐなければならぬ運命に、いつたいつまでゐるのであらう。

十三

「今日は私はそれを見た。乞食が一人、橋の上で死んでゐた。此の死體の乗つてゐる地上の一點はどこの管轄に屬するかと云ふ問題だ。橋より以東の管轄は私の勤めてゐる解剖室が持つてゐる。橋より西はN大學だ。行路病者の死體は下駄のやうに無敵に有り得るものではない。そこで、死體の掠奪戦は絶えず白熱するのである。」

十四

「以後氣をつけてくれ給へ。君の留守に、どうもあの女は怪しからん振舞が多過ぎる。」

十五

夕霧が降りて来た。辰子は子供の戯れてゐる透明な空地の中を背さめて歸つて来た。

「おい、お前の留守に、やつて来たぞ。」と私は云つた。

「あら、さう、あたし、すつかり疲れちやつた。何とか云つてゐて。」

「まあ、だつて、あなたが叱られる理由がないわ。」

「所が、俺も馬鹿だつたんだ。お前を俺の何だと訊くから、家内だと云つたのさ。さうしたら、良人は良人らしくすべき義務があるつて、やつつけられた。」

十六

「あなたはやつぱり、あたしにいつも怒つていらしたのね。だけど、あたしは、あなたにどんな侮辱をされたつて、感じないのよ。よくつて。」

「あなただは、そんなことばかり面白がつて、どうなさるの。」

「お前には云つたつて分らぬが、俺はこれでもなかなか軽蔑の出来ない學者なんだ。俺はお前と俺との精神作用を委しく論べて博士になるんだ。博士だよ。」と私は聲を強めて云つてみた。

「ちや、あたしのすることは、何でもあなたの役に立つのね。」

「うむ、さうだ。だからお前は俺の云ふことなら、何でもきくやうにしてきてくれ。」

私の愉快は生活の中で、最早や毛物のやうに充ち満ちて行くばかりである。

十九

いよいよ計畫してゐた夜になつた。私は隣室を眺め得られる装置をした唐紙の中に隠れてゐた。辰子は頭の禿げた美しい四十五六の男と一緒に入つて来た。彼女は私を樂しめるために感じる無智な誇りを見せて大きな表情を造つてゐる。男は煙草を吹かせながら相場の話をやり出した。が、話がすむと、男は煙草の火

を火鉢の縁でにじり消して彼の本能に火を點け替へた。すると急に辰子の身体は微動する刺青のやうになまめかしい動物に變つて来た。思ふに辰子は突如として私に復讐する快感に襲はれたのであらう。だが、今は、私の體內からは道徳的な格律が盡く崩壊した。此の私の顔を見るが良い。私は散落の頂點に達してゐる。辰子は私に對する復讐に満ち足りたかのやうに惨虐極まる美しい線を描いてゐる。だが、何といふこれは御座らない空間の響みであらう。が、ふと私は眼前の事實とは全く別な、開室の水面にひよつこり浮き上つた死體の姿を思ひ出した。私の精神は再び落ちつきを取り戻した。私は自分を欺くために傍にあつた鉛筆をとると、眼にしてゐる華やかな風景を寫生し始めた。と、私は彼女が曾て私の戀人であつた昔の可憐な姿を思ひ出した。これが人生の眞相であらうか。これが、此の變化が、と、私は突然聲を放つて泣き出した。が、その聲が明喉まで上つて来ると、忽ちそこで奇怪な笑ひ聲に變つていつた。私の腹は團扇のやうに波打ち出した。私は唐紙を握むとがたがた崩れるやうに揺り動かした。私は隣室へ飛び込んだ。すると、辰子は母親のやうに澄して横眼

しかし、目茶苦茶になつたのはお前だ。目茶苦茶にならなくてもすむ所を、お前は勝手にしたのだ。お前を目茶苦茶にした責任は俺にはあるが、目茶苦茶になつた方の責任は、お前にあるんだ。こんなことはお前には分るまい。」

「もうそんなことなんか、今頃分つたつて仕様がないわ。」

「仕様がな。だから、俺は困つてるんだ。俺は時々、お前を殺してやらうと思ふことがあるのを知つてるか。」

「うるさい人ね。」と彼女は云ふと眉を擡めて横を見た。

私は彼女の襟首をひつ攫むと膝の上へ捻ぢ伏せた。頭を續けさまにひつ叩いた。彼女は私のやうに私の膝の上へ突つ伏したまま黙つてゐた。私は彼女を引き摺り上げると唐紙の傍へ投げつけた。と、彼女は倒れたまま、私を見上げて油のやうににたりにたりと笑ひ出した。

私は私の樂しみが、再びここまで来てゐること気がついた。最早や私は彼女にだけはいかなることをしても良いのである。絶対の權利、この愉快な幸福が、突然不潔な二人の塊りの中から爽かに浮き出して来たのである。私は此の次には何をすたらう。さうしてその次は、

そのまた次は、私は私の興味の扉を開けて行く自由の深さに對して今は新鮮な恐怖をさへ感じて来た。

十七

「ふむ、君は創作のやうなものをやつてゐないかね。」

「時々、積古のやうなものやつてみました。が、どうも自信がないのでよしました。」

「ちや、一度一つ何でもいいから、持つて来て見せてくれ給へ。」

多分、博士は私の精神鑑定をする氣にちがひない。私も博士が去ると、眼前に並んだ毒婦の子を産む古怪な器管を眺めながら、私もいつかはこの欄の上へ並べて欲しい希望を書いてみようかと考へた。

十八

ゐてはいけない。行く所があるなら今の中だ。もしお前がこれ以上ここにをれば、俺はお前を殺すかもしれないぞ。」

「殺したいなら、殺さないよ。」と彼女は云つた。

「お前は恐くないのか。」

「あたし、恐いことなんて、この世の中に何にもないわ。」

「ぢや、結構な話だ。しかし、お前が俺の傍にをれば、もう今迄のやうな工合にはいかないぞ。それでもいいか。」

「いいわ。だつて、あたしは今迄のやうなことには、もう俺も飽きたしちやつたの。」

彼女は覺悟を定めたらしい。

二十

私はたうとう薬局室から砒素を盗んで歸つて来た。私は辰子と向ひ合ふと、紙に包んだままその砒素を机の上へ置いて云つた。

「これは砒素だ。いいかい。これを飲むと眼のやうに死ぬんだよ。俺はこれを此の机の引出に入れておくが、これがなくなつたときは俺かお前か、どちらかが飲まされたんだ。分つたね。」

辰子は私の顔色を窺ふやうに冷たく黙つて私を眺めてゐた。

私は砒素を机の中へ入れるとまた彼女に云つた。

「これは、俺が飲まされるかお前が飲まされるか、どつちかは分らないが、飲まされた方は自殺になるんだよ。分つたね。」

「だつて、あなたは、まだ死にたくはないんでせう。」

「いや、俺はもう生きてゐる資格のない人間だ。そりや、死ぬのは恐いと思へば恐いのだが、恐くないと思へば恐くないと云つた程度のもので、俺ひとりだといつてまでたつたつて、自分で死ぬさうな気がしないのだ。しかし、結局は死ぬ方がいいんだから、遠慮はいらない。」

事實、私は彼女を殺さうとしてゐるのか、彼女に私を殺ささうとしてゐるのか、また例の私の實験室なのか、それさへ私には臆駭としてゐて分らないのだ。しかし、それなら、いつたい辰子は私を殺さうと思つてゐるのか。彼女は二度目に私と逢つてから私の云ふことに反対したためしが一度もない。やらうと思へば彼女は何事でもやつてのける所がある。だが、辰子は私を殺して何にならう。しかし、私に殺される

と思へば彼女から先に私を殺さないとは限らないのだ。彼女としてもまた私のことを、私が彼女について考へてゐるのと同様に、考へてゐるのちがひあるまい。

二十一

食事のときが来ると私はいつも机の中の砒素のことを思ひ出した。私は辰子の惣菜の盛り方を眺めながら、もしや此の中にも思ふのだ。辰子は無表情な顔のやうに平然として私に云ふ。

「さア、お上りなさいな。」

私は此の大膽不敵な女に弱味を見せるのはいやなのだ。私は厭しい静な鬼氣に刺されながら茶碗を持った。私は自分の顔の皺で彼女の表情を見詰めながら食物を口の中へ投げ込んだ。すると、彼女も私の食べた食物に手をつけた。

此の女は俺と一緒に死にたいんだ。ふとさう思ふと、私は彼女の身体に手を觸れてみずにはをれなかつた。

「お前は、何のために生きてるんだ。」

「そんなこと知らないわ。」

勿論知らう答のない彼女の無感な口を見てゐると、私はまた平氣になつてすこすこと箸をとつた。時々私は食事の後に急に眼に涙はれた。「やられた」と思ふと砒素の入つた机の引出を見たくなつた。が、彼女のことをそれほどまでに心の問題にしてゐたことに気がつくと思ひが情れに思はれてならなかつた。私は思ひとまつてそのまま床の中に入つて了ふ。すると、幾時が来ても私は眠れないのだ。私は眠れないままに夜中眼を開けた。すると、辰子の眼は皮膚を破つてちつと私を見詰めてゐた。二人の眼と眼は無言のまま互に心を見ようとした。

「あなたはいつ殺すの。」

「お前はいつだ。」と胸の中で探り合ふ。

二人は白刃の尖端がカチリと觸れ合つた刹那のやうに、黙つてどちらも眼を閉ぢた。

二十二

私は「眼に見えた氣」の最後に解剖室の感想を持つて来て、結句をエビングハウスの心理学の中から採草した。實はその句で死人を常に解剖してゐるK博士の胸を一突き突きたかつたのだ。

「He whose eye is so keen that he sees the dead in the grave no longer sees the flowers blooming。」

實に此の悲壯な句は私を此の世から救つてくれたと同様だつた。虚榮心と云ふものは有難い。K博士は私を呼ぶと、「眼に見えた氣」を知人のある雑誌編輯者に紹介しようと思つてくれた。その時博士は最後の句のことを話して私に云つた。「君はエビングハウスを讀んだかね。あの最後は、「一寸僕にあつてゐるね。」

「いや、あれは僕自身に云つたんです。」

「いや、まアそれはいいが、もう君もあまり死人を見ないやうに心掛けないと、花はいつまでたつたつて咲かないよ。」と博士は笑つて云つた。

私は逆襲されたのだ。だが、此の逆襲ほど私に光明を興へてくれたことはまたとあらうか。私は此のときから、死が俄に恐ろしくなり出したのだ。私は眼世主義について簡潔明瞭な答へを云ふ。

「寂ろ。と私は云つた。
彼女は私の胸の上へ顔を付けるといつても泣きじやくつてゐた。
私は此の思はぬ彼女の不意打ちを利用して、出来得る限り彼女の美しさを認めてやらうと考へた。そこで、私はますます深く彼女の悲しさを誘ひ出さうとして黙つてゐた。すると、辰子は急に飛び起きて表の方へ駆け出さうとした。驚きを呼びに行くのちがひない。私は彼女の飛び立つ片足を握まへた。
「どこへも行くな。」

「彼女が私を突き放さうとした。私は彼女の片腕を握んでまた云つた。
「俺の云ふことをきけ。俺はお前に云ふことがある。」
辰子は私の枕もとへ坐ると静かに私の顔を睨め出した。私の顔はいつの間にかまたここまで開いてゐたのだ。だが、私はあまりに即ちか過ぎるこの喜劇に於て了つて黙つてゐた。此の私の沈黙は深夜の魔力のために彼女には莊嚴なる姿に見えたにちがひない。彼女は突然また私の胸の上へ崩れて泣き出した。もう仕方がない。私は明日の朝まで辰子の此の必死の眞面目さを愚弄してゐなければならぬの

だ。しかし、この考へは唯々私の奇情な復讐心に火を點けた。私は彼女に對して受けた屈辱に復讐しない限り、斷じて後悔はしないであらう。私は死に邁る眞似をしながら愛について嚴肅に考へた。だが、辰子の此の私に與へてゐる今の舉動は愛でなくてはならぬであらうか。と私は云へ私此の舉動もまた愛でなくてはならぬであらう。私は彼女の愛を見たいのだ。
「おい、俺はお前からお前に、俺の子供を産んで貰ひたいと思つてゐたのを知つてゐるか。」と私は云つた。
すると、辰子の途切れてゐた泣き聲は、再び喚び込むやうに高まつた。私は私の動作が全く偽りであると云ふことを告げる機会がますますなくなつて来たのである。もう私はそのままちつと寝てゐることが出来なくなつた。私は起き上ると外へ出ようとして戸口の方へ歩き出した。すると、辰子は私とは反対の方へ立つていつた。私は振り向くと、彼女は私の引出から刺刀を取り出して擡げてゐた。私は彼女の背後から飛びかかると刺刀を壓へて云つた。
「馬鹿な、よせ。」

「瞬間、私は私もまた購されてゐたやうな氣持になつた。私は刺刀を取り上げると辰子の

動かぬ後姿を眺めながら、此の女は俺より深淵に芝居を打つてゐたのではないかと思ひ出した。
私は辰子を床につかせて了ふと自分も寝た。どちらもいつまでも黙つてゐた。思ふに辰子は私の偽りを知つたのちがひないのだ。
二十四

「眼に見えた氣」を書いた雑誌の廣告が新聞に出た。私の名前が浮き出てゐる。私は朝の茶を飲みながら辰子に新聞を見せて云つた。
「おい、お前も俺に出世をさせてくれたらしいぞ。もつと、うんと悪いことをしてくれよ。」
「あら、あら。」と、辰子は云つて新聞を眺めてゐた。
彼女の喜びに満ちた顔は、後ろから見ても分つたに違ひない。私は彼女のその顔さへ疑ふほど、彼女から絶望を與へられなかつた過去の私に感謝する。
「今日は何かお祝ひしなくちやならないわ。」と辰子は云つた。
「うむ、祝つてくれ。」
「あなたがこんなに出世をなすつたんだから、お祝ひにあたしがここから出ていくわ。」

それが、私と彼女との最後の樂しみになるものであらうか。私は云つた。
「出て行きたいなら、出て行くがいい。しかし、もう碇素なんか捨てたぢやないか。」
「だつて、あなたには、いい奥さんがいくらでも来てよ。」
「女と云ふものは、そんなもんかい。」
「ええ、さう。だつて、あたしだつて、さうなんですもの。」
「ぢや、女と云ふものは、俺がかうなると出て行くものか。」

「そりやそんなものぢや。だつて、あたしはもう汚いわ。あなたから嫌はれないうちに、行かなくちや。」と彼女は云ふと、ぼんやり落ちついて煙草を吸つた。
いつたいつた辰子をこんなにも美しく洗濯してゐたのであらう。此の見えざる洗濯屋は私であつたのか。だが私は彼女にとつては冷然とした良人であつた。
二十五

「新聞の批評家は次のやうに云つてゐる。
「此の作者の名には初めて接するが、作中の辰子なる賣春婦はあまりに典型的にて面白くない。しかし、私なる人物の辰子を愛してゐるや否や陰險としながら陰險な所、男の氣持が良く分る。見るべきものなり。」
A新聞の評——「私なる人物の實驗性に出違ふ辰子の態度は宜し。男の方あまりに自己辯護の嫌ひあるは作者の未だ社會を見てゐざる證據である。」
U新聞曰く——「辰子のことについて今少し書くべき必要がある。私なる人物が死體係りをしてゐると云ふことについて辰子が何らかの關心を持つべきであらう。もし、私なる人物が虚榮のために死してゐるとすれば、あまりに此の人物らしからざることではないか。」
F新聞曰く——「最初はだらだらしてゐるが私は終ひには胸を打たれた。賣春婦になつて歸つて来た辰子の中から、作者は出来得る限り、汚れざる一面を見ようとしてゐる。そこが少し古い美しきだとは思つたが、これは近來の快作だ。」
私は新聞の批評を見ると憂鬱になつた。此の程度の出世で一人の女が家出をしたと云ふこ

とは、社會がいかに美妙な轉回を、抱えず企ててゐるか云ふことを教へただけだ。
私はテーブルから離れると筆末を持つて解剖室の床の上を掃き始めた。私は一人の掃除夫にすぎないと云ふことを認識するために、脚や、足や、首や背袋の間を渡りながら。
が、私は私の顔が、ホルマリンの池の中から浮き上つた曾てのあの死人の顔に似てゐたと云ふことで、博士に認められた男である。
もし顔の形がその者の運命を現してゐるものなら、と私は考へた。
私は盆の上に載つてゐる斬られた首の滑らかな斬り口を、横目でちらりと眺めてみた。
二十六

やなかつたわ。もつとやきもち燃きて貧乏で、うるさいの。」

「ぢや、やつぱり、僕みたいなもんですね。」
「あら、さうぢやないわ。あたし、あなたみたいな方だつたら、初めから家出なんかするものですか。あたしはあなたの、あんな所が好きなのよ。ほら、あんな、ね。」

ふと私は、此の汚れたハンカチのやうな女を、もう一枚洗濯させられるのではないかと考へた。そのとき、もうS子は私と肩を並べて勇しく街頭を歩いてゐた。私は汚れた女を洗へば洗ふほど、だんだん私だけが汚くなつていくのではあるまいか。此の眼に見えた風の中の、見えない奴も、と、私の一步一步は、ホルマリンの池の中へずるずり込むために動いてゐるやうに思はれて来てならなかつた。が、私はもう私を捨てねばならぬ。私は私を認めてはならぬ。私は一發の弾丸のやうに、私としてかく無力ならしめてゐる「眼に見えぬ風」を射殺せなければならぬと考へた。

日輪

序折

乙女達の一團は、水鏡を頭に載せて、小丘の中腹にある泉の傍から、唄ひながら、合歡木の林の中に隠れて行つた。後の泉を包んだ岩の上には、まだ凋れぬ太藷の花が、水鏡の破片とともに踏みまじられて残つてゐた。さうして、西に傾きかかつた太陽は、この小丘の裾遠く擴がつた有明の入江の上に、長く曲折しつゝ廻か水平線の兩端に消え入る白い砂丘の上に、今は力なくその光りを投げてゐた。乙女達の合唱は華やかな酒樂の歌に變つて来た。さうして、林をぬけると、再び、人家を包む圓やかな濃緑色の團塊となつて、森の中へ、吸はれて行つた。眼界の風物、何一つとして動くものは見えなかつた。

延びて来た。さうして、間もなく、泉の水面に映つてゐる、白茅の一行が裂かれたとき、そこには彼の切れた短弓を握つた一人の若者が立つてゐた。彼の大きく窪んだ眼窩や、その突起した顎や、その影のやうに暗鬱な顔の色には、道に迷つた者の極度の疲勞と饑餓の苦痛が現れてゐた。彼は這ひながら岩の上に降りて来ると、弓杖ついて、崩れた角を突き上げながら、渦巻く蔓の刺青を描いた唇を、泉につけた。彼の首から垂れ下つた一連の白瑪瑙の勾玉は、音も立てず水に浸つて、靜に藻を食ふ魚のやうに光つてゐた。

「見よ、大兄、爾の勾玉は猪の爪のやうに穢れてゐる。」と、卑彌呼は云つて、大兄の勾玉を彼の方へ差し示した。
「やめよ、爾の管玉は病める獸のやうに曇つてゐる。」
卑彌呼のめでたきまでに玲瓏とした顔は、暫く大兄を睥んで黙つてゐた。
「大兄、以後我は玉の代りに、眞砂を爾に見せるであらう。」
「爾の玉は爾の小指のやうに穢れてゐる。」と、大兄は云ふと、その皮肉な微笑を浮べた顔で、再び砂濱の松明の方へ、振り向けた。「見よ、松明は輝き出した。」
「此處を去れ、此處は爾のごとき男の入る可き處ではない。」
「我は歸るであらう。我は爾の管玉を奪へば爾を置いて歸るであらう。」
「我の玉は爾に穢された吾身のやうに穢れてゐる。」

「待て、爾の玉は爾の靈よりも光つてゐる。玉を與へよ。爾は玉を與へると我に云つた。」

「行け。」

車狗の大兄は笑ひながら、自分の勾玉をさらさらと小窓に入れて立ち上つた。

「今夜は何處で逢はう？」

「行け。」

「丸屋で待たう。」

「行け。」

大兄は遺戸の外へ出て行つた。車狗呼は残つた管玉を引きたれた裳裾の端で掃き散らしながら、彼の房へ走り寄つた。

「大兄、我は高倉の傍で爾を待たう。」

「我はひとり月を待たう。今夜の月は満月である。」

「待て、大兄、我は爾に玉を與へよう。」

「爾の玉は、我に穢された爾のやうに穢れてゐる。」

大兄の哄笑は、忍竹を連ねた瑞穂の横で起ると、夕間の微風に捲かれてゐる柏の根の傍まで、續いていつた。車狗呼は染衣の袖を噛みながら、遠く松の茂みの中へ消えて行く大兄の姿を見詰めてゐた。

「歸れ、歸れ。」

と大兄は云ひつつ彼を抱いた腕に力を絶めた。車狗呼は大兄の首へ手を巻いた。さうして二人は黙つてゐた。月は青い光りを二人の上へ投げながら、彼方の森からだんだん高く昇つていつた。そのとき、二人の瘦せた若者が生靈を噛みつつ木樨樹の下へ現れた。彼は破れた軽い麻鞋を水に浸した依のやうに重々しく運びながら、次第に蕙苺の茂みの方へ近寄つて来た。車狗の大兄は足音を聞くと立ち上つた。

「爾は誰か。」

若者は立ち停ると、生靈を投げ捨てた手で、劍の頭椎を握つて黙つてゐた。

「爾は誰か。」と再び大兄は云つた。

「我は路に迷へる者。」

「爾は何處の者か。」

「我は旅の者、我に糧を與へよ。我は爾に劍と勾玉とを與へるであらう。」

大兄は車狗呼の方を振り向いて彼女に云つた。

「爾の早き夜は、不吉である。」

「大兄、旅の者に食を與へよ。」

「爾は彼を共なうて、食を與へよ。」

「歸れ、歸れ。」

と大兄は云ひつつ彼を抱いた腕に力を絶めた。車狗呼は大兄の首へ手を巻いた。さうして二人は黙つてゐた。月は青い光りを二人の上へ投げながら、彼方の森からだんだん高く昇つていつた。そのとき、二人の瘦せた若者が生靈を噛みつつ木樨樹の下へ現れた。彼は破れた軽い麻鞋を水に浸した依のやうに重々しく運びながら、次第に蕙苺の茂みの方へ近寄つて来た。車狗の大兄は足音を聞くと立ち上つた。

「爾は誰か。」

若者は立ち停ると、生靈を投げ捨てた手で、劍の頭椎を握つて黙つてゐた。

「爾は誰か。」と再び大兄は云つた。

「我は路に迷へる者。」

「爾は何處の者か。」

「我は旅の者、我に糧を與へよ。我は爾に劍と勾玉とを與へるであらう。」

大兄は車狗呼の方を振り向いて彼女に云つた。

「爾の早き夜は、不吉である。」

「大兄、旅の者に食を與へよ。」

「爾は彼を共なうて、食を與へよ。」

「待て、爾の玉は爾の靈よりも光つてゐる。玉を與へよ。爾は玉を與へると我に云つた。」

「行け。」

車狗の大兄は笑ひながら、自分の勾玉をさらさらと小窓に入れて立ち上つた。

「今夜は何處で逢はう？」

「行け。」

「丸屋で待たう。」

「行け。」

大兄は遺戸の外へ出て行つた。車狗呼は残つた管玉を引きたれた裳裾の端で掃き散らしながら、彼の房へ走り寄つた。

「大兄、我は高倉の傍で爾を待たう。」

「我はひとり月を待たう。今夜の月は満月である。」

「待て、大兄、我は爾に玉を與へよう。」

「爾の玉は、我に穢された爾のやうに穢れてゐる。」

大兄の哄笑は、忍竹を連ねた瑞穂の横で起ると、夕間の微風に捲かれてゐる柏の根の傍まで、續いていつた。車狗呼は染衣の袖を噛みながら、遠く松の茂みの中へ消えて行く大兄の姿を見詰めてゐた。

「歸れ、歸れ。」

と大兄は云ひつつ彼を抱いた腕に力を絶めた。車狗呼は大兄の首へ手を巻いた。さうして二人は黙つてゐた。月は青い光りを二人の上へ投げながら、彼方の森からだんだん高く昇つていつた。そのとき、二人の瘦せた若者が生靈を噛みつつ木樨樹の下へ現れた。彼は破れた軽い麻鞋を水に浸した依のやうに重々しく運びながら、次第に蕙苺の茂みの方へ近寄つて来た。車狗の大兄は足音を聞くと立ち上つた。

「爾は誰か。」

若者は立ち停ると、生靈を投げ捨てた手で、劍の頭椎を握つて黙つてゐた。

「爾は誰か。」と再び大兄は云つた。

「我は路に迷へる者。」

「爾は何處の者か。」

「我は旅の者、我に糧を與へよ。我は爾に劍と勾玉とを與へるであらう。」

大兄は車狗呼の方を振り向いて彼女に云つた。

「爾の早き夜は、不吉である。」

「大兄、旅の者に食を與へよ。」

「爾は彼を共なうて、食を與へよ。」

「歸れ、歸れ。」

と大兄は云ひつつ彼を抱いた腕に力を絶めた。車狗呼は大兄の首へ手を巻いた。さうして二人は黙つてゐた。月は青い光りを二人の上へ投げながら、彼方の森からだんだん高く昇つていつた。そのとき、二人の瘦せた若者が生靈を噛みつつ木樨樹の下へ現れた。彼は破れた軽い麻鞋を水に浸した依のやうに重々しく運びながら、次第に蕙苺の茂みの方へ近寄つて来た。車狗の大兄は足音を聞くと立ち上つた。

「爾は誰か。」

若者は立ち停ると、生靈を投げ捨てた手で、劍の頭椎を握つて黙つてゐた。

「爾は誰か。」と再び大兄は云つた。

「我は路に迷へる者。」

「爾は何處の者か。」

「我は旅の者、我に糧を與へよ。我は爾に劍と勾玉とを與へるであらう。」

大兄は車狗呼の方を振り向いて彼女に云つた。

「爾の早き夜は、不吉である。」

「大兄、旅の者に食を與へよ。」

「爾は彼を共なうて、食を與へよ。」

た。さうして、彼の頭の上を乗り越えて消えて行くと、彼は漸く半身を起して宮殿の方を見極けた。

四

「王子は歸つた。」
「呪禁師の言はあつた。」
「峠を越えて。」
「矛木のやうに、瘦せて歸つた。」
奴國の宮は、山の麓の葎屋の中から騒ぎ始めた。さうして、この騒ぎは宮を横切つて、宮殿の中に入つて行くと、夜になつて、神庫の前の庭園で、盛大な饗宴となつて變つて来た。
松明を咬んだ火車は圓形にその草野を包んで立てられた。集つた宮人達には、鹿の肉片と、松葉で造つた煎酒や醗の酒が配られ、大夫や使部には、和稻から作つた諸白酒が與へられた。さうして、宮の婦女達は彼らの前で、まだ花吹かぬ忍冬を頭に巻いた舞女となつて、酒樂の唄を讀みながら、踊り始めた。数人の若者からなる樂人は、槽や土器を叩きつつ、二絃の琴に調子を打つた。
肥え太つた奴國の宮の君、長は、童男と三人の宿禰とを従へて、槽の上で、瘦せ細つた王子

の長羅と並んでゐた。長羅は過ぎた狩獵の日、行方不明となつて奴國の宮を騒がせた。彼は十数日の間、深い山々を過つてゐた。さうして、彼は不編へ出た。曾てあの不編の宮で、生命を斷たれようとした若者は彼であつた。
「長羅よ、見よ、奴國の女は美しい。」と君長は云つて踊る婦女を指差した。「我は爾に妻を與へよう。爾は爾の好む女を捜せ。」
長羅の父の君長は、妃を失つて以來、饗宴を催すことが最大の慰藉であつた。何ぜなら、それは、彼の面前で踊る婦女達の間から、彼の欲する淫蕩な一夜の肉體を選択するに自由であつたから。さうして、彼は、回を重ねるに従つて常に一夜の肉體を捜し得た。今又彼は、槽の上から二人の婦女に眼をつけた。
「見よ、長羅、彼方の女の踊りは見事であらう。」
長羅の細まつた憂鬱な眼は、踊りを外れて森の方を眺めてゐた。君長は空虚の酒盃を持つたまま、忙しうに踊りの中へ眼を走らせながら、再び一人の婦女を指差して云つた。
「彼方の女は、子を産む猪のやうに太つてゐる。見よ、長羅、彼方の女は、子を喰んだ冬の鼠のやうに太つてゐる。」

饗宴は酒宴から酒の減るにつれて亂れて来た。此は酔ひ潰れた若者達の間を漫歩しながら、酢漿草の葉を食べた。やがて一團の若者達は裸體となつて、櫛の枝を振りながら婦女達の踊りの中へ流れ込んだ。このとき、人波の中から、絶えず槽の上の長羅の顔を見詰めてゐる女が、二人あつた。一人は踊りの中で、君長の視線の的となつてゐた、濃艶な若い大夫の妻であつた。一人は松明の明りの下で、兄の河和郎と並んで立つてゐる、兵部の宿禰の娘、香取であつた。彼女は、奴國の宮の乙女達の中では、その美しい氣品の高さに於て軒然として優れてゐた。
「ああ長羅、見よ、彼方に爾の妻がある。」と、君長は云つて、長羅の肩を叩きながら、香取の方を指差した。
香取の氣高き顔は、松明の下で、淡紅の朝飯のやうに、靨らんで俯向いた。
「王子よ、我の酒盃を爾は受けよ。」と、兵部の宿禰は傍から云つて、馬爪で作つた酒盃を長羅の方へ差し延べた。何ぜなら、彼の胸中に長く溜まつてゐた最大の希望は、今、漸く君長の唇から、流れ出たのであつたから。
併し、長羅の頭首は、重く黙つて横に振られ

た。彼の眼の向けられた彼方では、松明の一塊が、火車の塵埃を燒き切つて、赤々と草の上へ刷れ落ちた。一疋の鹿は、飛び上つた。さうして、踊りの中へ角を傾けて頭を込んだ。
「父よ、我は臥所を欲する。我を救せ。」
長羅はひとり立ち上つて槽を降りた。彼は人波の後をぬけ、神庫の前を通つて暗い櫛の下まで来かかつた。そのとき、踊りの群から駆け出した一人の女が、後から馳けて来た。彼女は大夫の若い妻であつた。
「待て、王子よ。」と彼女は云つた。
長羅は立ち停つて後を向いた。
「我は爾の歸るを、月と星とに祈つてゐた。」
長羅は黙つて再び母屋の方へ歩いていつた。
「待て、王子よ。我は夜の來る度に、爾の夢を見た。」
併し、長羅の足はとまらなかつた。
「ああ、王子よ。爾は我に言葉をかけよ。爾は我を、森へ其なへ。我は我の祈りのために、再び爾を槽の上で見た。」
そのとき、二人の後から、一人の足音が鳴けて来た。それは、女の良人の瘦せ細つた、若い大夫であつた。彼は苦さめた顔をして、慄へながら長羅に云つた。

「王子よ、女は我の妻である。爾はくば、妻を斬れ。」
長羅は黙つて、母屋の階段に足をかけた。大夫の妻は、長羅の腕を握つてひきとめた。
「王子よ。我を共なへ、我は今宵とともに、死ぬるであらう。」
大夫は妻の首を掴んで、引き戻さうとした。併し、我を欺いた。爾は狂つた。」
「放せ、我は爾の妻ではない。」
「ああ、妻よ、爾は、我を欺いた。」
大夫は妻の髪を掴んで引き寄せようとしたときに、再び新しい一人の足音が、踏踏みながら、三人の方へかけて来た。それは酒盃を片手に持つた長羅の父の君長であつた。彼は踏み返ると、土を片頬に塗りつけて起き上つた。
「女よ、我は爾を捜してゐた。爾の踊りは何物よりも見事であつた。來れ。我は今宵爾に、奴國の宮を與へよう。」
君長は女の腕を握つて階段を昇つていつた。大夫は女の後から馳け登ると、再び妻の手を持つた。
「王子よ、女は我の妻である。妻を救せ。」
「爾の妻か。よし。」
君長は、女を放して劍を抜いた。大夫の首

は、地に落ちた。續いて爾が、高懸に倒れると、杉葉の中に靜まつてゐる自分の首を覗いて、動かなかつた。
「來れ。」と君長は女に云つて、その手を持つた。
「王子よ、王子よ、我を救へ。」
「來れ。」
女は君長を突き跳ねた。君長は大夫の胸の上へ仰向きに倒れると、露な二本の足を空間に跳ねながら、起き上つた。彼は酒氣を吐きつつ、その劍を振り上げた。
「王子よ、王子よ。」
女は呼びながら長羅の胸へ身を投げかけた。長羅の身體は立木のやうに堅かつた。劍は降りた。女の肩は二つに裂けると、良人の胸を叩いて轉がつた。
「長羅よ、酒樂は彼方である。朝はまだ來ぬ。行け。女は彼方で待つてゐる。」
君長は劍を下げたまま松明の輝いた草野の方へ、再び踏踏みながら第二の女を捜しに行つた。
長羅は突き立つたまま、二つの死體を眺めてゐた。さうして、彼は西の方を眺めると、
「車轆呼。」と一言呟いた。

五

奴國の宮の鹿と馬とはだんだんと肥えて来た。しかし、長羅の頬は、日々に落ち込んだ。彼は夜が明けると、梅の上へ昇つて不彌の國の山を見た。夜が昇ると頭首を垂れた。さうして、彼の唇からは、微笑と言葉が流れた星のやうに消えていつた。彼のこの愛慕に最も熱傷した者は、彼を愛する叔父の祭司の宿彌と、香取を愛する兵部の宿彌の二人であつた。ある日、祭司の宿彌は、長羅の行方不明となつたとき、彼の行方を占はせた呪禁師を再び呼んで、長羅の病を占はせた。廣間の中央には、忍冬の模様を描いた大きな蕉煙が据ゑられた。その中の、薔薇の焼粉の黄色い灰の上では、櫻の枝と鹿の肩骨とが積み上げられて燃え上つた。呪禁師はその立ち簡めた煙の中で、片手で玉串を上げ、片手で抜き放つた剣を持つて舞を舞つた。さうして、彼は蕉煙の上で波紋を描く煙の文を見詰めたが、今や巫祝の言葉を傳へようとしたとき、突然長羅は彼の傍へ飛鳥のやうに馳けて来た。彼は呪禁師の剣を奪ひとると、再び萩の咲き亂れた庭園の中へ馳け降りた。さうして、彼は墓に戯れかかつてゐた一疋の牝鹿を見て

とめると、一撃のもとにその首を斬り落して、呪禁師の方を振り向いた。
「來れ。」
呆然としてゐた呪禁師は、慄へながら長羅の傍へ近寄つて来た。
「私の望は西にある。いかが。」
「ああ、王子よ。」と、呪禁師は云ふと、彼の襟へる唇は、紫の色に變つて来た。
長羅は血の滴る劍を彼の胸さきへ差し向けた。
「云へ、私の望は西にある。良きか。」
「良し。」
「良きか。」
「良し。」と云ふと、呪禁師は仰向きに、線菜の上へ覆つた。
長羅は劍をひつ下げたまま、彼を押し開けて、八尋殿の君、長の前へ馳けていつた。そこでは、君、長は二人の童男に鹿の毛皮を着せて、交尾の眞似をさせてゐた。
「父よ、我に兵を與へよ。」
「長羅、爾の頬は瓜のやうに青ざめてゐる。爾は猪と鶴とを食へ。」
「父よ、我に兵を與へよ。」
「聞け、長羅、猪は爾の頬を服らせるであらう。」

六

「やめよ。我が言葉は、爾の希望のごとく重くであらう。」
長羅は唇を咬み締めて宿彌を見詰めてゐた。宿彌は吐息を吐いて、長羅の前から立ち去つた。
奴國の宮からは、面部の秋形の刺青を塗り滑された五人の使部が、偵察兵となつて不彌の國へ發せられた。さうして、森からは弓材になる檀や楓や梓が切り出され、鹿矢の骨片の矢の根は、征矢の雁股になつた矢鏃ととり變へられた。漆の脂と松脂とを煮溜めた薬煉は、弓弦を強めるために新しく武器庫の前で製せられた。兵士達は、この常とは變つて悠々閑々とした戦ひの準備を、心算に喰つてゐた。しかし、彼らの一人として、娘を憶ふ兵部の宿彌の計畫を洞察し得た者は、誰もなかつた。
偵察兵の歸りを持つ長羅の顔は、昂奮と熱意のために、再び以前のやうに、男々しく逞しく輝き出した。彼は終日武器庫の前の廣場で、馬を走らせながら劍を振り、敵陣めがけて突入する有様を眞似てゐた。しかし、車輪呼を奪ふ日が、尙依然として判明せぬ焦燥さに耐へ得ることが出来なくなると、彼は一人、國境の方へ

偵察兵を遣ひに馬を走らせた。
或る日、長羅は國境の方から歸つて來ると、泉の傍に立つてゐた兵部の宿彌の子の河和郎が、彼の方へ進んで來た。彼は長羅の馬の擴がつた鼻孔を指差して、彼に云つた。
「王子よ、爾は爾の馬に水を飲ましめよ。爾の馬の呼吸は、切れてゐる。」
長羅は彼に従つて馬から降りた。そのとき、一人の乙女が垂れ下つた梅の絲の中から、襟へる兩腕に水甕を持つて現れた。それは兵部の宿彌の命を受けた、河和郎の妹の香取であつた。彼女は美しく、唇を凝した淡竹色の裳裾を曳きながら、泉の傍へ近寄つて水を汲んだ。彼女の肩から下り落ちた一束の黒髪は、差し延べた白い片腕に絡まりながら、太陽の光りを受けた明るい泉の水面へ擴がつた。長羅は馬の手綱を握つたまま彼女の姿を眺めてゐた。彼女は汲み上げた水甕の水を、長羅の馬の前へ靜に置くと、裾らめた襟を俯向けて、垂れ下つた梅の絲を胸の上で結び始めた。
「奴國の宮で、もつとも美しき者は爾である。」と長羅は、云ふと、馬の上へ飛び乗つた。
香取の一層裾らんだ氣高い顔は、梅の絲で隠

七

された。馬は再び、奴國の方へ馳けて行つた。
併し、長羅は武器庫の前まで來たときに、三人の兵士が水甕の中へ、毒空木の汁を搾つてゐるのを目にとめた。
「爾の汁は？」と長羅は馬の上から彼らに訊いた。
「矢鏃に塗つて、不彌の者を我らは攻める。」と彼らの一人は彼に答へた。
長羅の眼には、その矢を受けて倒れてゐる車輪呼の姿が浮び上つた。彼は鞭を振り上げて、馬の上から飛び降りた。兵士達は跪拜した。
「王子よ、救せ、我らの毒は、直ちに一人を殺すであらう。」と一人は云つた。
長羅は毒甕を足で蹴つた。泡を立てた緑色の汁は、倒れた毒から草の中へしみ流れた。
「王子よ、救せ、我らに命じた者は宿彌である。」と、一人は云つた。
忽ち毒汁の泡の上には、無数の山賊の死體が浮き上つた。

不彌の國から一人の偵察兵が奴國の宮へ歸つて來た。彼は、韓土から新羅の船が、尚輝と銅劍とを載せて、不彌の宮へ來ることを報告した。

長羅は直ちに出兵の準備を兵部の宿願に促した。併し、宿願の頭は重々しく横に張られた。宿願は奴國の弓弦の弱むを欲するかと、長羅は云つて詰め寄つた。

「待て、歸つた偵察兵は一人である。」

長羅は沈黙した。さうして、彼は、嘆息する宿願の頭の上で、不彌の方を仰いで嘆息した。

六日目に第二の偵察兵が歸つて来た。彼は不彌の君、長が、投所の國境へ狩獵に出ることを報告した。

長羅は再び兵部の宿願に出兵を迫つて云つた。

「宿願よ、機會は我らの上に来た。爾は最早や口を閉ぢよ。」

「待て。」

「爾は武器庫の扉を開け。」

「待て、王子よ。」

「宿願、爾の我に教ふる戦法は？」

「王子よ、狩獵の日は、危険である。」

「やめよ。」

「狩獵の日の警戒は、警戒する。」

「やめよ。」

「王子よ、爾の必勝の日は他日にある。」

八

不彌の宮には、王女卑彌呼の婚姻の夜が来た。卑彌呼は寢殿の居室で、三人の侍女を使ひながら、式場に出る可き装ひを整へてゐた。彼女は齊杭に懸つた鏡の前で、兎の香骨を焼いた粉末を顔に塗ると、その上から、辰砂の粉を兩頬に掃き流した。彼女の頭髪には、山鳥の保片羽を雪のやうに降り積もらせた。冠の上から、韓士の珊瑚と翡翠を連ねた玉簪が懸かつてゐた。侍女の一人は、白色の絹布を卑彌呼の肩に着せかけて云つた。

「空の下で、最も美しき者は、私の姫。」

侍女の一人は、卑彌呼の胸へ、瑣珩の勾玉を垂れ下げて云つた。

「地の上的日は、私の姫。」

横と横の植つた庭園の白洲を包んで、篝火が赤々と燃え上ると、不彌の宮人達は各々手に数枚の柏の葉を持って白洲の中へ集つて来た。やがて、琴と笛と法螺とが緩やかに王宮の椒

の間もなく、兵士を召集する法螺と銅鑼が、竹園の宮に鳴り響いた。兵士達は、八方から武器庫へ押し寄せて来た。彼らの中には、弓と劍と楯とを持った河和郎の姿も混つてゐた。彼は、この不意の召集の理由を父に訊き正さんがために、ひとり王宮の中へ入つていつた。併し、寂寥とした廣間の中で、彼の見たものは、御席の上に血に塗られて倒れてゐる父の一つの死骸であつた。

「ああ、父よ。」

彼は楯と弓とを投げ捨てて、父の傍へ駆け寄つた。彼は父の死の理由の謎を識つた。彼は血潮の中に落ちてゐる、父の耳を見た。

「ああ父よ、我は復讐するであらう。」

彼は父の死體を抱き上げようとした。と、父の片腕は、衣の袖の中から轉がり落ちた。

「待て、父よ、我は爾に代つて、復讐するであらう。」

河和郎は血に滴る父の死體を背負ふと、馳せ遠く兵士達の間をぬけて、ひとり家の方へ歸つて来た。

やがて、太陽は落ちかかつた。さうして、長羅を先頭に立てた奴國の軍隊は、宿願の家の前を通つて不彌の方へ進軍した。河和郎の血走つ

「爾は必勝を敵に與ふことを欲するか。」

「敵に與ふるものは、劍。」

「爾は我の敗北を願ふ者。」

「我は、爾を愛す。」

長羅は鹿の御席の毛皮を、宿願に投げつけて立ち去つた。

宿願はその日、漸く投げ槍と楯との準備を兵士達に命令した。

四日がたつた。さうして、第三の偵察兵が王女卑彌呼の婚姻が、数日の中に行はれることを報告した。長羅の顔は、兵部の宿願の前で、見る見る中に蒼ざめた。

「宿願、銅鑼を鳴らせ、法螺を吹け、爾は直ちに、武器庫の扉を開け。」

「王子よ、我らの聞いた三つの報道は、違つてゐる。」

長羅は無言のまま、宿願を睨んで突き立つた。

「王子よ、二つの報告は残つてゐる。」

長羅の唇と兩手は震へて来た。

「待て、王子よ、長き時日は、重き責を齎すであらう。」

長羅の劍は、宿願の上で閃いた。宿願の肩は、耳と一緒に二つに裂けた。

の方から響いて来た。十人の大夫が手火をかか

げて白洲の方へ進んで来た。續いて楯を持つた三人の宿願が進んで来た。それに續いて、劍を抜いた君、長が、鏡を抱いた王妃が、さうして、卑彌呼は、管玉をかけ連ねた瓊矛を持つた車狗の大兄と並んで、白い孔雀のやうに進んで来た。宮人は歡呼の聲を上げながら、二人を日がけて手にした柏の葉を投げた。白洲の中央では、王妃のかけた眞鍮鏡が、石の男根に吊り下がつた幣の下で、松明の焰を映して、朱の満月のやうに輝いた。その後の四段に分れた白木の楯の上には、野の青物が一段に、山の果實と鳥類とが二段目に、鱈や鯨や鯉や鮫の川の物が三段目に、さうして、海の魚と草とは四段の段に並べられた。奏樂が起り、奏樂がやんだ。君、長は鏡の前で、劍を空に指差して云つた。

「ああ無窮なる天上の神々よ、吾らの祖先よ、二人を守れ。ああ廣大なる海の神々よ、地の神々よ、二人を守れ。ああ爾ら忠良なる不彌の宮の臣民よ、二人を守れ。不彌の宮は、爾らの守護の下に、明日の日輪のごとく榮えるであらう。」

周囲の宮人達の手が白い波のやうに揺れる

と、再び一齊に、柏の葉が投げられた。卑彌呼と車狗の大兄は王宮の人々に包まれて、奏樂に送られながら、白洲を埋めた青い柏の葉の上を野殿の方へ歸つていつた。群衆は歡びの聲を上げつつ、彼等の後に動揺めいた。手火や松明が、入り亂れた。さうして、王宮からは、諸白酒が、鹿や猪の肉片と一緒に運ばれると、白洲の中央では、蕙草の實を愛飾りとなした銅女らが、山並を振りながら、酒宴の唄を誦ひ上げて踊り始めた。やがて、酒宴と舞踏は深まつた。威勢良き群衆は、合唱から叫喚へ變つて来た。さうして、夜の深むにつれて、彼らの騒ぎは、叫喚から呻吟へと落ちて来ると、次第に光りを失ふ篝火と一緒に、不彌の宮の群衆は、間もなく曉の星の下で、巨大な眼のやうに見えて来た。

そのとき、突然、武器庫から火が上つた。と同時に森の中からは、一齊に岡の聲が群衆めがけて押し寄せた。それに應じて森からは、長羅を先頭に立てた一團が、花壇を突き破つて宮殿の方へ突撃した。不彌の宮の群衆は、再び竹のやうに騒ぎ立つた。松明は消えかかつたまま酒や祝賀と一緒に飛び廻つた。さうして、投げ槍の飛び交ふ下で、併し、劍が、撒かれた水の

やうに輝くと、人々の身体は手足を飛ばして、間断なく地に倒れた。

長羅はひとり、轉がる人波を蹴散らして宮殿の中へ近づくと、寶殿の戸を突き破つて、寶殿の方へ駆け込んだ。廣間の布被を押し開けた。八尋殿を横切つた。さうして、奥深い一室の蒸被を引きあげると、そこには、白い羽毛の諸團に被はれた卑彌呼が、卑彌呼の大兄の腕の中で眠つてゐた。

「卑彌呼。」長羅は入口に突き立つた。

「卑彌呼。」

卑彌呼の大兄と卑彌呼とは、菓を亂された鳥のやうに、跳ね起きた。

「去れ。」と叫ぶと、大兄は着枕に懸つた鹿の角を、長羅に向けて投げつけた。

長羅は劍の尖で鹿の角を跳ねのけると、卑彌呼を見詰めたまま、飛びかかる虎のやうに、小腰を跨めて刃を寄つた。

「去れ、去れ。」

長羅に向つて鏡が飛んだ。玉が飛んだ。しかし、彼は無言のまま、卑彌呼の方へ近寄つた。大兄は、卑彌呼を後に守つて、彼の前に立ち塞がつた。

「爾は何故に、ここへ来た。」

と、大兄は云ふと、彼の胸には、長羅の劍が刺さつてゐた。彼は叫びを上げると、その劍を握つて、後へ反つた。

「ああ、大兄。」

卑彌呼は良人をきかへた。大兄の胸からは、血が、赤い花のやうに、噴き出した。長羅は、卑彌呼の肩に手をかけた。

「卑彌呼。」

「ああ、大兄。」

卑彌呼の身体は、卑彌呼の腕の中へ崩れかかつて、息が絶えた。

「我は爾を奪ひに、不彌へ来た。卑彌呼、我とともに、爾は奴國へ來れ。」

長羅は卑彌呼を抱き寄せようとした。

「大兄、大兄。」と彼女は云ひながら、卑彌呼の大兄を抱いたまま、床の上へ泣き崩れた。

そのとき、奴國の兵士達は、血に濡れた劍を下げて、長羅の方へ亂入して來ると、口々に叫び合つた。

「我は、王を殺した。」

「我は、王妃を刺した。」

「不彌の劍を、我は奪つた。」

「我は、寶劍と玉とを掠つた。」

長羅は卑彌呼を床の上から抱き上げた。

「我は、爾を奪ふ。」

彼は卑彌呼の大兄を、卑彌呼の腕から踏み放すと、再び宮殿を突きぬけて、廣間の方へ駆け出した。卑彌呼は長羅の腕の中から、小枝を拂つた根の枝に、上頸をかけられた父と母との死體が、魚のやうに下つてゐるのを眼にとめた。

「ああ、我を刺せ。」

昭の家となつた武器庫は、轉がつてゐる死體の上へ、轟然たる響を立てて崩れ落ちた。長羅は卑彌呼を抱きかへたまま、ひらりと馬の上へ飛び乗つた。

「去れ。」

彼は馬の腹をひと蹴り蹴つた。馬は、石のやうに轉がつてゐる人々の頭を蹴散らして、森の方へ駆け出した。それに續いて、血に塗られた奴國の兵の鋒尖が、最初の朝日の光りを受けてきらめきながら、森の方へ掃かれて來た。

「卑彌呼。」と長羅は云つた。

「ああ、我を刺せ。」

彼女は馬の背の上で昏倒した。

「卑彌呼。」

馬は走つた。春と薊の花を踏みにじつて、奴國の方へ馳けていつた。

「卑彌呼。」

九

遠く人馬の騒擾が闇の中から聞えて來た。阿和郎と香取は、戸外に立つて、鮮を見たと、松明の輝きが、河に流れた月のやうに長くちらちらとゆらめいて宮の方へ流れて來た。それは不彌の國から引き上げて來た奴國の兵士達の明りであつた。阿和郎と香取は、忍竹を連ねた寶垣の中に身を潜めて、彼らの近づくの待つてゐた。

やがて、士達のざわめきが、次第に二人の方へ近寄つて來ると、その先達の松明の後から、馬の上で、一人の動かぬ美女を抱きかへた長羅の姿が、眼についた。阿和郎は劍を抜いて、飛び出ようとした。

「待て、兄よ。」と香取は云つて、阿和郎の腕の後へ引いた。

先達の松明は、寶垣の前へ來かかつた。美女の片頬は、松明の光りを受けて、病める鶴のやうに長羅の胸の上で垂れてゐた。

阿和郎は劍を握つたまま、長羅の顔から美女の顔へ眼を流した。すると、憤怒に燃えてゐた彼の顔は、次第に火を見る嬰兒の顔のやうに弛

んで來て、口を解いた。さうして、彼の厚い二つの唇は、兵士達の最後の者が、跛足を引いて來實を食ふながら、宮殿の方へ去つて行つても開いてゐた。しかし、間もなく、兵士達の松明が、宮殿の草野の上で、圓く火の小丘を築きながら燃え上ると、阿和郎の唇は引きしまり、再び彼の兩手は劍を持つた。

「待て、兄よ。」

物に怯えたやうに、香取の體は軽く揺れた。しかし、阿和郎の姿は闇の中を、夜蜘蛛のやうに寶垣の方へ馳け出した。

「ああ、兄よ。」と香取は云ふと、彼女の悲歎の顔は、重く數本の忍竹へ傾きかかり、さうして、再び地の上へ崩れ伏した。

十

阿和郎は兵士達の間を脱けると、宮殿の母屋の中へ入つていつた。さうして、廣間の裏へ廻つて、尾花で編んだ玉籠の間から中を覗いた。

廣間の中では、君長は二人の宿禰と、數人の童男と使部とを傍に從へて、前方の蒸被の方を眺めてゐた。數個の燈油の皿に燃えてゐる燈火は、一樣に、君長の方へ掃かれてゐた。暫くして、そこへ、數人の兵士達を從へて、現れたのは長羅であつた。

「父よ、我は勝つた。我は不彌の宮を、南北から襲め寄せた。」と長羅は言つた。

「美女は何處か。」

「父よ、我は不彌の宮に、立てる生物を残さなかつた。我は王を殺した。王妃を刺した。」

「美女をとつたか。」

「我はとつた。さうして、寶劍と鏡をとつた。我の奪つた寶劍を、爾は受けよ。」

「美女は何處か。不彌の美女は、潮の匂ひがするであらう。」

長羅は兵士達の持つて來た劍と、葶の袋の中からとり出した鏡や瑠璃の勾玉を、父の前に並べて云つた。

「父よ、爾は爾の好む寶を選べ。寶劍は韓土の鐵。奴國の武器庫を備るであらう。」

「長羅よ、我は爾の殊勳に、爾の好む寶劍を與へるであらう。我に美女を見せよ。不彌の美女は何處にゐるか。」

君長は御席の上から、立ち上つた。長羅は一人の兵士に命じて言つた。

「連れよ。」

卑彌呼は後に劍を抜いた數人の兵士に守ら

れて、廣間の中へ連れられた。君長は卑彌呼
を見ると、黙然に聲を失つた笑顔の中から、今
や手を延ばさんと思はれるばかりに、その肥え
た體軀を搖り動かして、彼女に云つた。
「不彌の女よ。爾は奴國を好むか。我とともに
に、奴國の宮にとどまれ。我は爾に爾の好む
何物をも與へるであらう。爾は女を好むか。
奴國の女は不彌の鹿より脂を持つであらう。
不彌の女よ。我を見よ。我は王妃を持たぬ、
爾は我が王妃になれ。我は爾の好む蛙と鯉と
を與へるであらう。我は加羅の翡翠を持つてゐ
る。」

「奴國の王よ。我を殺せ。」
「不彌の女よ、我の傍に來れ。爾は奴國の誰
よりも美しい。爾は銀を好むか。我の妻は黃
金の銀を殘して死んだ。爾は銀を爾の指に嵌
めてみよ。來れ。」
「奴國の王よ、我を不彌に歸せ。」
「不彌の女よ、爾は奴國の宮を好むであらう。
我とともにゐよ。奴國の月は、田舎のやうに冠
物を冠つてゐる。爾は奴國の月を眺めて、我と
ともに山蟹と雁とを食へ。奴國の山蟹は、赤い
卵を喰んでゐる。爾は赤い卵を食へ。山蟹の
卵は爾の腹から、我の強き男子を産ますであら
う。」

う。來れ。我は爾のごとき美しき女を見たこ
とがない。來れ、我とともに我が宮へ來りて、
酒を干せ。」
君長は對馬の上に巻かれてゐる卑彌呼の手を
とつた。長羅の顔は、刺青を浮べて蒼白く變つ
て來た。
「父よ、何處へ行かうか。」
「酒宴の用意は良きか。長羅よ、爾の持ち歸つ
た不彌の寶は、見事である。」
「父よ。」
「長羅よ、我は爾のために、新らしき母を與へ
るであらう。爾は臥所へ入つて、眠ひの疲れを
癒へ。」
「父よ。」長羅は君長の腕から卑彌呼を奪つ
て突き立つた。「不彌の女は、我の妻。我は妻
を渡して、不彌へ行つた。」
「長羅、爾は我を欺いた、不彌の女よ。我に
來れ。我は爾を嫁りに、長羅を遣つた。」
「父よ。」
「不彌の女よ。我とともに來れ。我は爾を、
奴國の何物よりも愛するであらう。」
君長は卑彌呼の手を引きながら、長羅を突
いた。長羅は劍を抜くと、君長の頭に斬り
つけた。君長は燈油の血を覆して匂玉の上

へ轉がつた。殿中は君長の周圍から騒ぎ立つ
た。
政司の宿禰は立ち上ると劍を抜いて、長羅の
前に出た。
「爾は王を殺害した。」
長羅は宿禰を睨んで肉迫した。忽ち廣間の中
の人々は、宿禰と長羅の二派に分れて争つた。
見る間に、手と足と、角髪を解いた數個の首と
が斬り落された。燈油の皿は投げられた。さう
して、室の中は暗くなると、跳ね上げられた鹿
の毛皮は、閃く劍の刃さきの上を、踊りなが
ら放埒に飛び過つた。
卑彌呼は蒸被を手探りながら闇にまぎれて、
尾花の玉簾を押し分けた。その時、玉簾の後
に今まで身を潜めてゐた阿和郎は、八咫殿の廻
廊から洩れくる松明の光りに照らされて、突然
に浮き出た不彌の女の顔を目にとめた。
「阿よ、待て。」
と阿和郎は云ふと、廣間の中へ飛び込もうと
してゐたその身を屈して、彼女を横に抱き上げ
た。さうして彼は宮殿の庭に飛び下り、庭の前
へ跳けてくると、卑彌呼の耳に口を寄せて囁い
た。
「阿よ、我と共に奴國を逃げよ。王子の長羅は、

我と爾の敵である。爾を奪はば、彼を我は殺
すであらう。」

一頭の栗毛に鞭が上つた。馬は闇から闇へ二
人を乗せて、奴國の宮を蹴り捨てた。
長羅は布被の前へ追ひつめた宿禰の肩を斬り
下げた。さうして、劍を引くと、「卑彌呼、卑彌
呼」と呼びながら、部屋の中を駆け廻り、布被
を引き開けた。玉簾を跳ね上げた。庭園へ飛び
降りて、萩の草叢を薙ぎ倒しつづつ、廣場の方へ
馳けて來た。
「不彌の女は何處へ行つた。捜せ。不彌の女
を捕へた者は、宿禰にするぞ。」
再び庭に積まれた松明の小丘は、駆け集つた
兵士達の鋒先に突き刺されて崩された。さうし
て、奴國の宮を、吹かれた火の子のやうに、八
方へ飛び散ると、次第に疎に擴がりながら動搖
めいた。

十一

阿和郎の馬は狭まつた谷間の中へ踏み入つ
た。前には、直立した岩壁から、油椀に桶の森
が下つてゐた。阿和郎は馬から卑彌呼を降ろし
て、彼々に云つた。
「馬は進まず。阿よ、爾は我とともに今宵をす

ごせ。」
「追手は如何。」
「よし。阿よ。我は又國の宿禰の子。我の父
は、長羅のために殺された。爾を奪ふ士を
奴國の宮に連れて殺された。長羅は我の敵であ
る。もし爾が不彌の國にならば、我の父は
我とともに今宵を送る。爾は我の敵である。」
「我の良人は、長羅の劍に殺された。」
「我は知らず。」
「我の父は、長羅の兵士に殺された。」
「我は知らず。」
「我の母は、長羅のために殺された。」
「やめよ。我は爾の敵ではない。爾は我の敵
である。不彌の女、我は爾を奪ふ。我は長羅
に復讐のため我は爾に復讐のため、我は爾を
奪ふ。」
「待て。我の復讐は残つてゐる。」
「不彌の女。」
「待て。」
「不彌の女、我の願ひを容れよ。然らば、我
は爾を刺すであらう。」
「我の良人は、我を殺して死んだ。我の父と母
とは、我のために殺された。我はひとり残つて
ゐる。刺せ。」

「不彌の女。」
「刺せ。」
「我に爾があらざれば、我は死するであらう。
我の妻になれ。我とともに生きよ。我に再び奴
國の宮に歸れと爾は云ふな。我を持つは劍で
あらう。」
「待て。我の復讐は残つてゐる。」
「我は復讐するであらう。我は爾に代つて、父
に代つて、復讐するであらう。」
「するか。」
「我は復讐する。我は長羅を殺す。」
「するか。」
「我は爾の夫に代つて、爾の父と母に代つて、
復讐する。」
「するか。」
「我は爾を不彌と奴國の王妃にする。」
その夜二人は結婚した。頭の上には、蘭を飾
つた直笠と、數條の葦とが導の枝から垂れ下つ
てゐた。二人の臥所は、羊商と並と刈萱とであ
つた。さうして、卑彌呼は、再び新しい良人
の腕の中に身を横たへた。阿和郎は馬から鹿の
毛皮で造られた馬籠を降ろして、その妻の背に
かけた。月が昇つた。阿和郎は奴國の追手を警
戒するために、劍を抜いたまま眠らなかつた。

鹿鼠は桶の穴から出てくると、ひとり枝々の間を飛び渡つた。月の映る度毎に、鹿鼠の眼は青く光つて輝いた。さうして、阿和郎の二つの眼と劍の刃は、山並と知蓋の中で輝いた。その時、突然、卑彌呼は身を顛はせて、阿和郎の腕の中で泣き出した。

十二

その夜から、奴國の野心ある多くの兵士達は、不彌の女を捜すために宮を發つた。彼らの中に荒甲と云ふ一人の兵士があつた。彼の額から片頬にかけて、田鼠が根強く巣を張つてゐたために、彼の球形の細青は奴國の誰よりも淡かつた。彼は卑彌呼が逃走した三日目の眞晝に、森を脱け出た河原の岸で、馬の嘶きを聞きつけた。彼は芒を分けてその方へ近づくと、馬の傍で蘿蔔を洗つてゐる不彌の女が見えた。荒甲は舟を延ばして隠け寄らうとした時に、兎と沙魚とを擡げた阿和郎が芒の中から現れた。

「あ、僕は荒甲。不彌の女を捜して来たか。」
荒甲は黙つて不彌の女の姿を指さした。阿和郎は荒甲の首に手をかけた。と、荒甲の身體は、飛び散る沙魚と兎とともに、芒の中へ轉がされた。阿和郎は石塊を抱き上げると、起き

上らうとする荒甲の頭を目算して投げつけた。荒甲の田鼠は眼球と一緒に飛び散つた。さうして、芒の莖にたかると、濡れた鶏頭のやうにひらひらとゆらめいた。阿和郎は死體になつた荒甲の胴を一蹴り蹴ると、追手の覺音を聞くために地にひれ伏して背の上に耳をつけた。彼は妻の傍へ馳けていつた。

「奴國の追手が近づいた。乗れ。」
馬は卑彌呼と阿和郎を乗せて漕を渡つた。數羽の山鴨と雀の群れが、柳の中から飛び立つた。前には白雲を柳曳かせた連山が、眞晝と芒の穂の上に連つてゐた。

「かの山々は。」

「不彌の山。」

「追手は不彌へ廻るであらう。」

「廻るであらう。」

卑彌呼は阿和郎とともに、不彌に残つた兵士達を集めて奴國へ征め入る計畫を立ててゐた。しかし、二人を乗せた馬の頭は進むに従ひ、不彌を外れて耶馬臺の方へ進んでいつた。秋の光りは阿和郎の背中に廻つた衣の結び目を中心として、羽毛の如のやうな芒の穂波の上に明るく降り注いだ。さうして、微風が吹くと、一樣に背を曲げる芒の上から、首を振りつつ

進む馬の姿が一段と空に高まつた。空では、鶉子と高とが圓く空中の持場を守つて飛んでゐた。

十三

その夜二人は數里の森と、二つの峯とを越して小丘の原に到着した。そこには椎と蜜柑が茂つてゐた。猿は二人の頭の上を枝から枝へ飛び渡つてゐた。阿和郎は野犬と狼とを防ぐがために、楯楯を焚いた。彼等は、數日來の經驗から、追手の眼より、野鼠の牙を恐れねばならなかつた。卑彌呼はひとり、阿和郎に添つて身を横たへながら目覺めてゐた。なぜなら、その夜は彼女の夜警の番であつたから。夜は更けた。彼女は椎の梢の上に、群つた彼葉の上に、さうして、靜な暗闇に垂れ下がつた蘆葦の隙々に、亡き卑彌呼の大兄の姿を見た。

卑彌呼の大兄の如きが彼女の眼から消えてゆく時、彼女は涙に濡れながら、再び燃え盡きる楯楯の上へ新らしく枯枝を盛り上げた。猿の群れは梢を降りて、焚火の周圍に集まつて来た。さうして、彼女が枯枝を火に差し焼く度に、彼らも彼女を眞似て差し焼けた。

ら、突然に地を踏み鳴らす軍勢の響が聞えて来た。卑彌呼は傍の阿和郎を呼び起した。

「奴國の追手が近づいた。逃げよ。」

阿和郎は飛び起ると足で焚火を踏み消した。再び兵士達の鯨波の聲が張り上つた。二人は馬に飛び乗ると、立木に突きあたりつつ小丘の頂上へ馳け登つた。すると、芒の原に掩はれたその小丘の背面からは、一齊に枯木の林が動搖めきながら二人の方へ進んで来た。それは牡鹿の群れだつた。馬は散亂する鹿の中を突き破つて馳け下つた。と、原の樹から白茅を踏んで一團の兵士が現れた。彼等は、一列に並んだまま、楯から二人の方へ締め上げる袋の紐のやうに進んで来た。阿和郎は再び鹿の後から頂上へ馳け戻つた。その時、椎と蜜柑の原の中から、再び新しい鹿の群れが、頂上へ向つて押し寄せて来た。さうして、阿和郎の馬を混へた牡鹿の群れの中へ突入して来ると、鹿の團塊は更に大きく混亂しながら、吹き上げる黒い泡のやうに頂上で動搖めいた。しかし、間もなく、渦巻く彼らの團塊は、細長く山の側面を川波のやうに流れていつた。と、行手の楯に、兵士達の松明が點々と輝き出した。さうして、それらの松明は、見る間に一列の弧線を描いて擴がる

十四

と、忽ち、全山の楯を圓環に取り包んで縮まつて来た。鹿の流れは阿和郎の馬を浮べて進上した。再び彼らの團塊は、小山の頂で踏み合ひ乗り合ひつつ沸騰した。松明を映した鹿の眼は、明滅しながら彈動する無数の玉のやうに輝いた。その時、一つの法螺が松明の中で鳴り渡つた。兵士達の收縮する松明の環は停止した。それと同時に、芒の原の空中からは一齊に矢の根が鳴つた。鹿の群れは悲鳴を上げて散亂した。阿和郎の馬は跳ね上つた。と、阿和郎は卑彌呼を抱いたまま草の上へ轉落した。しかし、彼は窪地の中へ這ひ降りると、彼女の楯のやうにひれ伏して矢を防いだ。矢に射られた鹿の群れは原の上を狂ひ廻つて地に倒れた。忽ち窪地の底で抱き合ふ二人の背の上へ、鹿の地りがひき續いて落ち込むと、間もなく、無然として盛り上つた彼らは、突き合ひ蹴り合ひつつ次第に靜かに死んでいつた。さうして、彼らの傷口から進る血潮は、石垣の隙間を漏れる泉のやうに、滾々と流れ始めると、二人の體を染めながら、窪地の底の蘚苔の中まで滲み込んでいつた。

阿和郎と卑彌呼を包んだ兵士達は、君長に

率ゐられて、遠巻きに鹿の群れを巻き包んで来た耶馬臺の國の兵士達であつた。彼らは小丘の頂上で狂亂する鹿の群れの鎖まるのを見る時、松明の持ち手の後から頂上へ馳け登つた。明るく輝き出した頂は、散亂した動かぬ鹿の野原であつた。總て、兵士達は松明の周圍へ盡く集つて来ると、夫々一匹の鹿を引き摺つて、再び山の麓の方へ降りていつた。その時、頂上の窪地の傍で、群つた一團の兵士達が、血に染つた阿和郎と卑彌呼を包んで喧騒した。二人を見られぬ者は、遠く人垣の外で口々に云ひ合つた。

「鹿の中から美女と美男が湧いて出た。」
「赤い美女が、鹿の腹から湧いて出た。」
「鹿の美女は人間の美女よりも美しい。」

總て、兵士達の集團は、阿和郎と卑彌呼を包んだまま、彼等の君長の反耶の方へ進んでいつた。
「王よ。」と兵士達の一人は跪拜して反耶に云つた。「鹿の中から若い男女が現れた。彼らを撃つか。」
君長の反耶は、傍の兵士が持つた松明をとると、頂上に高くかさざして二人の姿を眺めてゐた。

「我らは、遠く山を越えて来れる不備の者。我ら
を放せ。」と河和郎は云つた。反耶の視線は、
河和郎の顔から彌呼の方へ流された。

「彌呼は不備の國の旅人か。」
「然り。我らは不備へ歸る旅の者。我らを救
せ。」と彌呼は云つた。

「耶馬臺の宮は、かの山の下。爾らは我の宮を
通つて旅に行け。」

「救せ。吾らの路は爾の宮より外れてゐる。吾
らは明日の旅を急ぐ者。」

「反耶は松明を投げ捨てて、兵士達の方へ向
返つた。

「行け。」

兵士達は王の言葉をおもひに云ひ傳へて動揺め
き立つた。再び小山の頂では地を這る鹿の
死骸の音がした。その時、突然、彌呼の頭
に浮んだものは、彼女自身の類ひ稀なる美し
き姿であつた。彼女は耶馬臺の君、長を味方
にして、直ちに奴國へ攻め入る計畫を胸に描
いた。

「待て、王よ。」と彌呼は云ふと、並んだ番の
やうな向を見せて、耶馬臺の君、長に微笑を投
げた。

「彌呼は吾らを爾の宮に共なふか。吾らは爾の
やうな血が滴る度毎に、遠ざかる松明の明りの
方へ推された。その時、兵士達の群れから離れ
て、ひとり山腹へ引き返して来た武將があつた。
それはかの君、長の弟の反給であつた。彼は
芒の中に立ち停ると、片眼で山上に推されて
一本の蜜柑の枝を狙つて矢を引いた。蜜柑の
枝は、一段と闇の中で激しく揺れた。河和郎の
首は、獵人の獲物のやうに矢の刺つた胸の上へ
垂れ下つた。間もなく、濃霧は松明の光りをそ
の中にぼかしながら、倒れた世の原の上から靜
にだんだんと河和郎の周囲へ流れて来た。

十五

耶馬臺の兵士達が彼らの宮へ歸つたとき、卑
彌呼はひとり、捕虜の宿舎にあてられる石室
の中に入れられた。それは幸運な他國の旅人に
與へられる、耶馬臺の國の習慣の一つであつ
た。彼女の石室は奥深い石灰洞から成つてゐ
た。數本の鐘乳石の柱は、撃打つ高い天井の
岩壁から下つてゐた。さうして、僅かに開けら
れた正方形の石の入口には、太い櫛の格子が
降され、その前には、背中和胸とに無数の細い
蠟燭の繪でもつて、大きな一つの蠟燭を刺青し
た一人の奴隷がつけられてゐた。彼の頭には、

宮を通るであらう。」
「ああ、不備の女。爾らは我の宮を通つて不
備へ行け。」

「卑彌呼。」と河和郎は云つた。
「待て。爾は吾に從つて耶馬臺を通れ。」卑彌
呼は河和郎の腕に手をかけた。

「卑彌呼、吾らの路は外れて来た。耶馬臺を過
れば、吾らの望みも過るであらう。」

「過るであらう。」
「吾らの望みは急いでゐる。」

「河和郎よ。耶馬臺の宮は、不備の宮より奴國
へ近い。」

「不備へ急げ。」

「耶馬臺へ過れ。」

「卑彌呼。」

河和郎は、眼を怒らせて、卑彌呼の腕を突き
拂つた。その時、今迄反耶の横に立つて、卑彌
呼の顔を見つけてゐた彼の弟の片眼の反給は、
小脇に抱いた法螺貝を、河和郎の肩間に投げつ
けた。河和郎は踏踏めきながら、銅の頭推に手
をかけた。反給の身體は、河和郎の胸に飛びか
かつた。河和郎は地に倒れると、剣を捲つて反
給の頭へ投げつけた。一人の兵士は鹿の死骸で
河和郎を打つた。續いて數人の兵士達の松明は

跳ね上らうとする河和郎の胸の上へ投げつけら
れた。火は胸の上で、蹴られた花のやうに飛び
散つた。

「彼を縛れ。」と反給は云つた。
數人の兵士達は、藤蔓を持つて一時に河和郎
の上へ押しかむきつた。

「王よ、彼を救せ。彼は吾の夫、彼を救せ。」卑
彌呼は王の傍へ駆け寄つた。反給は藤蔓で巻か
れた河和郎の身體を一本の蜜柑の枝へ吊り下げ
た。卑彌呼は王の傍から河和郎の下へ駆け寄つ
た。

「彼を救せ。彼は我の夫、彼を救せ。」
反給は卑彌呼を抱きとめると、兵士達の方を
振り返つて彼らに云つた。

「不備の女を連れよ。山を下れ。」

一團の兵士は卑彌呼の傍へ押し寄せて来た。
彼女の身體は數人の兵士達の頭の上で跳ねなが
ら蜜柑の枝の下から裾の方へ下つていつた。

河和郎は垂れ下つたまま、蜜柑の枝を突き
張つて、遠くへ荷負はれてゆく卑彌呼の姿を
睥んでゐた。兵士達の松明は、谷間から煙のや
うに流れて来た夜霧の中を揺られていつた。

「妻を返せ。妻を返せ。」

蜜柑の枝は、河和郎の唇から柘榴の結果の

蜜柑の汁で染められた藍色の袴の布が巻きつ
けられ、腰には、纏ぎ合した鹿の皮が纏はれて
ゐた。

卑彌呼は兵士達に押し込められたまま、乾草
の上へ顔を伏せて倒れてゐた。夜は更けた。兵
士達のさざめく聲は、彼らの疲勞と睡けのため
に、耶馬臺の宮から鎮まつた。さうして、森か
らは霧を透して、鼻と狐の聲が石室の中へ聞
えて来た。曾て、卑彌呼が、森の中で卑彌呼の大
兄の腕に抱かれたまま、鼻の聲を眞似たのは、
過ぎた平和な日の一夜であつた。曾て、彼女が
河和郎の腕の中で、狐の聲を聞いたのは、過ぎ
た數日前の夜であつた。

「ああ、河和郎よ、もし我が爾に從つて不備
へ廻れば、我は今爾とともにゐるのであらう。
ああ、河和郎よ、我を救せ。我は卑彌呼を愛して
ゐる。爾は我のために傷ついた。」

卑彌呼は頭を上げて格子の外を見た。外で
は、弓を首によせかけた奴隷が、消えかかつた
篝火の傍で、乾草の上に兩手をついて石室の中
を覗いてゐた。彼女は格子の傍へ近寄ると、臆
病な犬のやうな奴隷の二つの細い眼に愕然と微
笑を投げた。

「来れ。」

奴隷は眼に地つた逆毛をしばたたくと、
大きく口を開けたまま脊を延ばした。弓は彼の
肩から這り落ちた。
「爾は鹿狩りの夜を見たか。」と卑彌呼は云つ
た。
「見た。」
「爾は我の横に立てる男を見たか。」
「見た。」
卑彌呼は首から勾玉を脱すと、彼の膝の上へ
投げて云つた。
「爾は彼を見た山へ行け。爾は彼を共なへ。
爾は玉をかけて山へ行け。我は爾に玉を與へよ
う。」
奴隷は彼女の勾玉を拾つて首へかけた。勾玉
は彼の胸の上で、青い蠟燭の刺青を叩いて音を
立てた。彼は加はつた胸の重みを愛玩するかの
やうに、ひとり微笑を洩しながら玉を撫でた。
「夜は間もなく明けるとあらう、行け。」と卑彌
呼は云つた。
奴隷は立ち上つた。さうして、胸を壓へると
彼の姿は夜霧の中に消えていつた。しかし、間
もなく、彼の足音に代つて、石を打つ木靴の音
が聞えて来た。卑彌呼は再び格子の外を見る
と、そこには、霧の中に、ひとり王の反耶が立

つてゐた。
「不彌の女、爾は何故に眠らぬか。我は耶馬
裏の國王の反耶である。」と君長は車彌呼に云
つた。

「王よ、耶馬裏の石害は我の宮ではない。」

「爾に石害を興へた者は我ではない。石害は旅
人の宿。もし爾を傷つけるなら、我は我の部屋
を爾のために興へよう。」

「王よ、爾は何故に、我が傍に我の夫を置くこ
とを敢さぬか。」

「爾と爾の夫とを裂いた者は、我ではない。」

「爾は我の夫を呼べ。夜が明ければ我は不彌へ
歸るであらう。」

「爾の行く日に、我は爾に馬を興へよう。爾は
爾の好む日まで、耶馬裏の宮にゐよ。」

「王よ、爾は何故に我の滞ることを欲するか。」

「一日滞る爾の姿は、一日耶馬裏の宮を美
しくするであらう。」

「王よ、我の夫を呼べ。我は彼とともに滞ら
う。」

「夜が明ければ、我は爾に爾の夫と、部屋と
を興へよう。」

反耶の木靴の音は、暫く格子の前で廻つてゐ
た。さうして、彼の姿は夜霧の中へ消えていつ

た。洞内の一隅では、ひとすぢの水の滴りが静
かに岩を叩いてゐた。

十六

反輪は鹿狩りの疲勞と酒のため、計畫し
てゐた車彌呼の傍へ行く可き時を寝過した。さ
うして、彼が眼醒めたときは、耶馬裏の宮は、
朝日を含んだ金色の霧の底に沈んでゐた。彼は
松明の炭を踏みながら霧を穿たぬ隙の中で、堤
のやうに積み上げられた鹿の死骸の中を通つて
いつた。彼の眼の足らぬ足は鹿の堤から流れ
出てゐる血の上で止つた。遠くの麻の葉叢の上
を、野牛の群れが黒い背だけを見せて森の方へ
動いていつた。すると、その最後の牛の背が、
速に歩を早めて駆け出したとき、刺青のために
青まつた一人の奴隷の半身が、赤く血に染つた
一人の身體を背負つて、だんだんと麻の葉叢の
上に高まつて来た。さうして、反輪が圓を斜め
に横切つて車彌呼の石害を眺めて立つた時、奴
隷の蜘蛛は一層曲りながら、石害へ通る岩の上
を歩いていつた。奴隷を睥んだ反輪の片眼は、
強く反りを打つた鼻柱の横で輝いた。
「ああ、河和郎よ。」と石害の中から車彌呼の聲
が聞えて来た。

「旅の女よ。」と反輪は云つてその額を格子に
つけた。

車彌呼は河和郎を指差しながら、反輪を睥ん
で云つた。

「爾の獲物は、これである。」

「やめよ。我は爾と共に山を下つた。」

「爾の矢は、我の夫の胸に刺さつてゐる。」

「我は爾の傍に從つてゐた。」

「爾の弓弦は、爾の手に從つた。」

「爾の夫を狙つた者は、奴隷である。」

「奴隷は吾に從つた。」

反輪は奴隷の置き忘れた弓と矢を拾ふと、破
れた蜘蛛の巣を滑つて森の中へ駆け込んだ。し
かし彼の片眼に映つたものは、霧の中に包まれ
た老杉と、踏み開かれた羊歯の一條の路とであ
つた。彼はその路を辿りながら、森の奥深く進
んでいつた。しかし、彼の片眼に映つたものは、
茂みの隙間から射し込んだ朝日の筋を切つて飛
び立つ雉子と、霧の底でうごめく野牛の體に黒
い背であつた。さうして、霧はただ反輪の堅い
角髪を打つた。が、路は一本の太い樫の木の前
で止つてゐた。彼は立ち停つて森の中を見廻し
た。頭の上から、露の滴りが一層激しく落ち
て来た。反輪はふと上を仰ぐと、樫の梢の又の

間に、奴隷の蜘蛛の刺青が、青い筋のやうに見
えてゐた。反輪は蜘蛛を狙つて矢を引いた。す
ると、奴隷の身體は圓くなつて枝にあたりなが
ら、熟した果實のやうに落ちて来た。反輪は、
舌を出して俯伏せに倒れてゐる奴隷の方へ近よ
つた。その時、奴隷の頭髪からはげれかかつた
一連の勾玉が、へし折れた羊歯の青い葉の上で、
露に濡れて光つてゐるのが眼についた。彼はそ
れをはずすと自分の首へかけ垂らした。

十七

霧はだんだんと薄らいで来た。さうして、森
や草叢の木立の姿が、朝日の底から鮮かに浮
き出して来るに從つて、煙の立ち昇る葺屋か
らは木を打つ音やさざめく人聲が聞えて来た。
しかし、石害の中では、車彌呼は、格子を隔て
て倒れてゐる河和郎の姿を見詰めてゐた。数日
の間に第一の良人を刺され、第二の良人を撃た
れた彼女の悲しみは、最早彼女の涙を誘はな
かつた。彼女は乾草の上へ倒れては起き上り、起
きては眼の前の河和郎の死體を眺めてみた。し
かし、角髪を解いて血に染まつてゐる河和郎の
姿は依然、格子の外に倒れてゐた。さうして、
再び彼女は倒れると、胸に劍を刺された車彌呼の

奴隷は背負つた赤い死體の胸を石害の格子に
立てかけて、倒れぬ様に死體の背を押しつけた。
格子の隙から車彌呼の白い兩手が延び出ると、
垂れた河和郎の首を立て直して云つた。
「ああ爾は死んだ。爾は復讐を残して死んだ。
爾は我のために殺された。」

奴隷は死體の背から手を放した。彼は歡喜の
微笑をもらしながら、首の勾玉を兩手で揉んだ。
河和郎の死體は格子を撫でて地に倒れた。

反輪は毛の生えた逞しいその顔で、霧を掃が
しながら、石害の前へ馳けて来た。

河和郎を抱き上げようとして身を跨めた奴隷
は、足音を聞いて背後を向くと、反輪の唇か
ら、むき出した白い齒が怒氣を含んで迫つて来
た。奴隷は吹かれたやうに、一飛び横へ飛びの
いた。

「女は吾に玉を興へた。玉は我の玉である。」

彼は胸の勾玉を壓へながら、襟と袖の間に
張り詰つた蜘蛛の網を突き破つて、森の中へ馳
け込んだ。

反輪は石害の前まで来ると、格子を撫つて中
を覗いた。

車彌呼は格子に區切られたまま、倒れた河和
郎の頭の前になつてゐた。

表が、乾草の匂ひの中から浮んで来た。彼女は
ただ茫然として輝く空にだんだんと溶け込む
霧の世界を見詰めてゐた。すると、今迄彼女の
胸に溢れてゐた悲しみは、突然憤怒となつて爆
発した。それは、地上の特權であつた暴虐な
男性の腕力に刃向ふ、彼女の反逆であり怨恨
であつた。彼女の眼は、次第に激しく波動する
兩肩の起伏につれて、益々冷たく空の一點に
食ひ入つた。ふとその時、草叢の葉波が描いた
地平の上から、立昇つてゐる一條の煙が彼女の
眼の一角に映り始めた。それは薄れゆく霧を破
つて眞直ぐに立ち昇り、渦巻きながら圓を開い
て、擴げた翼のやうに、だんだんと空を領し
てゐる煙であつた。彼女は立ち上つた。さうし
て、格子を掴むと、高らかに煙に向つて呼びか
けた。

「ああ、大神は吾の手に觸れた。吾は大空に昇
るであらう。地上の王よ、我れを見よ。我は爾
らの上に日輪の如く輝くであらう。」

石害の格子の隙から現れた車彌呼の微笑の中
には、最早、車彌呼も河和郎も消えてゐた。さう
して、彼等に代つて、その微笑の中に消んだも
のは、ただ想像を含めた憐愍な復讐の光りで
あつた。

「耶馬臺の宮の若者達は、眼を醒ますと噂に聞いた鹿の美女を見ようとして、宮殿の花園へ押しよせて来た。彼らの或者は、彼女に食はずがために、鹿の好む大バコヤ、百合根を持つてゐた。しかし彼等の誰もが鹿の美女を捜し出すことが出来なくなると、總て庭園に積まれた鹿の死體が彼らの手によつて、崩し出された。その時、君長、反耶の命を受けた一人の使部は、嚴かな容姿を眞直ぐに前方へ向けながら、彼らの傍を通り投げて石客の方へ下つていつた。若者達の幾らかは、直ちに彼の後から従つた。使部は石客の前まで来ると、その門をとり脱し、櫛の格子を上へ開いて跪拜した。

「王は爾を待つてゐる。」

間もなく若者達は、暗い石客の中から現れた卑彌呼の姿を見ると、齊しく足を停めて首を延ばした。彼女は入口に倒れてゐる河和郎を抱き上げると、そこから動かうともしなかつた。

「王は爾を待つてゐる。」と再び使部は彼女に云つた。

卑彌呼は河和郎の胸から顔を上げて使部を見

「爾は王の前へ彼を共なへ。」

「王は爾を共なへと我に云つた。」

「王は彼を共なふを我に教した。連れよ。」

使部は河和郎の死體を背に負つて引き返した。卑彌呼は亂れた髪と衣に、乾草の屑をたからせて、使部の後から石の坂道を登つていつた。若者達は左右に路を開いて彼女の顔を見てゐた。さうして、彼女の姿が彼らの前を通り抜けて、高い庭の葉波の中に消えようとしたとき、初めて彼らの曲つた腰は、靜かに彼女の方へ動き出した。彼らの肩は狭い路の上で突き衝つた。が、百合根を持つた一人の若者は、後の方で口を開いた。

「鹿の美女は、森にゐる。森へ行け。」

若者達は再び彼の方を振り向くと、石客の前から彼に従つて、森の中へ駆け込んだ。

やがて、卑彌呼は使部の後から現れた。君長は立上つて彼女に云つた。

「旅の女よ。爾は爾の好む部屋へ行け。我は爾のためにその部屋を飾るであらう。」

「王よ。」使部は跪拜した膝の上へ河和郎を乗せて云つた。「我は女の言葉に従つて若い死體を共なうた。」

「旅の女よ。爾の衣は鹿の血のために穢れてゐる。爾は新しい耶馬臺の衣を手に通せ。」

「王よ。若い死體は石客の前に倒れてゐた。」と使部は云つた。

「捨てよ。爾に命じたものは、死體ではない。」

「王よ。若い死體は吾の夫の死體である。」と卑彌呼は云つた。

反耶の赤い唇は、微動しながら喜びの皺をその兩端に深めていつた。

「ああ、爾は吾のために爾の夫を死體となした。着よ、吾の爾に與へる衣は吾の心のやうに整つてゐる。」

王は爾にひかへてゐた一人の童男を振り返つた。童男は兩手に桃色の絹を振上げたまま、卑彌呼の前へ進んで来た。

「王よ。」と使部は河和郎を抱き上げて云つた。「若い死體を何處へ置くか。」

「旅の女よ。爾は爾の夫を何處へ置くか。」

その時、急に高縁の踏板が、馳け寄る荒々しい響を立てて振動した。人々は入口の空間に眼を向けるとそこへ怒つた反給が駆け込んで来た。

「兄よ、旅の女が逃げ失せた。石客の口が開いてゐた。」

「王よ。我は夫の死體を欲する者に與へるであらう。」と卑彌呼は云つた。さうして、使部の膝から河和郎の死體を抱きとると、入口に立ち塞がつた反給の胸へ押しつけた。

反給は崩れた河和郎の角髪を除けると、片眼を出して彼女に云つた。

「吾は爾に代つて奴隷を撃つた。爾の夫を射殺した奴隷を撃つた。」

「やめよ。夫の死體を欲した者は爾である。」と、卑彌呼は云つた。

「旅の女よ、森へ行け、奴隷の胸には我の矢が刺さつてゐる。」

卑彌呼は反給の片眼の方へ背を向けた。さうして、腰を纏つた古い衣の紐を取り、その脇に纏つた結び目を解きほどいた。彼女の衣は、葉を取られた桃のやうな裸體を浮べながら、彼女の滑らかな肩から毛皮の上へ下り落ちた。

反耶の大きく開かれた二つの眼には、童男の掛けた衣の方へ靜かに動く彼女の腰の曲線が、霧を透した朝日の光りを區切つたために七色の虹となつて浮き立ちながら、花壇の上で羽叩く鶴の胸毛をだんだんに現してゆくのが映つてゐた。さうして、反給の動かぬ片眼には、彼女の乳房の高まりが、反耶の銅の細に戯れる鳩の頭のやうに、微動するのが映つてゐた。卑彌呼は裸體を巻き變へた新しい衣の一端で、童男の捧げた指先を拂ひながら、部屋の中を見廻した。

「王よ。此の部屋を吾に與へよ。吾は此處に停まらう。」

彼女は靜かに反耶の傍へ近寄つた。さうして、背に廻らうとする衣の二つの端を、王に示しながら、彼の胸へ身を寄せかけて微笑を投げた。

「王よ。吾は耶馬臺の衣を好む。爾は吾のために、爾の與へた衣を纏べ。」

反耶は卑彌呼を見詰めたが、その衣の端を手にとつた。悦びに聲を清めた彼の顔は、霧の中で、彼女の衣の射る絹の光りを受けて、薄紅色に染えてゐた。部屋の中で、河和郎の死體が、反給の腕を這つて倒れる音がした。反給の指は

垂れ下つた兩手の先で、頭を擦ける十正の髪

のやうに動き出した。彼の身體は、胸毛に荒々しい呼吸を示しながら、次第に卑彌呼の方へ傾いていつた。

反耶は衣を結んだ兩手を、後から卑彌呼の肩へ廻さうとした。と、彼女は急に妖艶な微笑を兩頬に掛がしながら、彼の腕の中から身を翻して踊り出た。さうして、今や卑彌呼を目がけて飛びかからうとしてゐる反給の方へ駆け寄ると、彼の剛い首へ兩手を巻いた。

「ああ、爾は、我のために我の夫を撃ちとめた。我を我の好む耶馬臺の宮にとどめしめた者は爾である。」

「旅の女よ、我は爾の夫を撃つた。我は爾の勾玉を奪つた奴隷を撃つた。我は爾を傷つける何者をも撃つであらう。」

反給の太い眉毛は、潰れた臉を吊り上げて柔らかな形を描いて来た。しかし、反耶の空虚に撞がつた兩腕は次第に下へ垂れ落ちると、反耶は腕を擡つて、床を突き立てながら使部に云つた。

「若い死體を外へ出せ。宿禰を連れよ。鹿の死體の皮を剥げと彼に云へ。」

使部は床の上から、河和郎の死體を抱き上げ

ようとした。車彌呼は反給の胸から離れると、急に使部から河和郎を抱きとつて毛皮の上へ泣き崩れた。

「ああ、河和郎、爾は不彌へ歸れと我に云つた。我は耶馬臺の宮にとどまつた。さうして、ああ、爾は我のために殺された。」

反給は首から紅絲の勾玉を取りはずすと、車彌呼の傍へ近寄つて来た。

「旅の女よ。我は紅絲の奪つた勾玉を、爾に返す。」

「旅の女よ。立て。吾は爾の夫を阿久那の山へ葬らう。」と使部は云つて、河和郎の死體を抱きとつた。

反給は倒れてゐる車彌呼を起すと、勾玉を彼女の首へ垂れ下げた。彼女は再び立ち上ると、反給の傍へ近寄つて、彼に云つた。

「王よ。我を不彌へ歸せ。爾の馬を我に與へよ。我は不彌の山へ、我の夫を葬らう。」

「爾の夫は死體である。」

「朝が来た、爾が我を不彌へ歸すを約したのは、昨夕である。馬を與へよ。」

「何故に爾は歸る。」

「爾は何故に我をとめるか。」

「我は爾を欲す。」

車彌呼の顔は再び生々とした微笑のために輝き出した。さうして、彼女は反給の肩に兩手をかけると、彼に云つた。

「ああ、吾を爾の宮にとどめよ。吾の夫は死體である。」

「旅の女、吾は爾を欲す。」と反給は云つて彼女の方へ迫つて来た。

車彌呼は反給に與へた顔の微笑を再び反給に向けると彼に云つた。

「我は不彌に歸らず。吾は爾らと共に耶馬臺の宮にとどまるであらう。爾は吾のために、我に眼を與へよと王に願へ。我は數夜の眼を、馬の上で眠つて来た。」

「兄よ。此の部屋を去れ。」と反給は云つた。

「爾の獲物は死體である。爾は獲物を持つて、部屋を去れ。」と反給は云つた。

車彌呼は二人に抱まれながら、反給の肩を柔かく入口の方へ押して云つた。

「王よ。我に眼を與へよ。眼が醒めなば、我は爾を呼ぶであらう。」

「不彌の女、吾も呼べ。兄が爾を愛するよりも、我は爾を愛す。」

反給は肩を立てて王を睥むと部屋の外へ出て行つた。

「女よ眠れ。爾の眼が醒めなば、吾は爾のために此の部屋を飾らさう。」

反給の車彌呼に囁いた聲に交つて、部屋の外からは、高く反給の銅鑼のやうな聲が響いて来た。

「兄よ。部屋を出よ。我は爾よりも先に出た。不彌の女よ、兄を出せ。」

反給は眉間に皺を落して入口の方へ歩いて行つた。童男は彼の後から追つた。使部は最後に、河和郎の死體を抱いて出ようとする時、車彌呼は彼の腕から河和郎を奪つて、荒々しく竹の遺戸を後から閉めた。

「ああ、河和郎、吾を救せ。吾は爾の復讐をするであらう。」

彼女は床の上に坐ると、齒を咬みしめた河和郎の顔に自分の頬をすり寄せた。しかし、その冷たい死體の觸感に、體て車彌呼の大兄の頬となつて彼女の頬に傳つた。彼女の頬は、流れる涙のために光つて来た。

「ああ、大兄よ。爾は爾の胸の中に、我を雌雄子の如く抱きしめた。爾は吾を、吾が爾を愛することく、愛してゐた。ああ、大兄、爾は何處へ行つた。歸れ。」

彼女は兩手で頭をかかへると立ち上つた。

「大兄、大兄。」

彼女はよるめきながら部屋の中を歩き出した。脱ぎ捨てた彼女の古い衣は、彼女の片足に纏りついた。さうして、彼女の足が厚い御席の織ぎ目に入ると、彼女は足をとられてどつと倒れた。

二十

反給は閉ざされた車彌呼の部屋の前に、番犬のやうに蹲んでゐた。前方の廣場では、兵士達が歌ひながら鹿の毛皮を剥いでゐた。彼らの剣は、狼狽なかけ聲と一緒に、鹿の腹部に突き刺さると、忽ち鹿は三人からなる一組の兵士の手によつて裸體にされた。間もなく、今まで積まれてあつた鹿の小山の褐色の色が、麻の葉叢の上からだんだんに減つてくると、それにひきかへて、珊瑚色の鹿の小丘が、著しく晴れ渡つた空の中に高まつて来た。手の休まつた兵士達は、血の流れた草の上で角力をとつた。神車の裏の篠屋では、狩獵を終つた覽宴の準備のために、遠成の鹿の遺物が作られてゐた。兵士達は、廣場から運んだ裸體の鹿を、地中に埋まつた大甕の中へ鹽塊と一緒に投げ込むと、彼らはその上で枯葉を焚いた。その横では、不足な酒を

作るがために、兵士達は森から摘みとつてきた黒松葉を壓搾して汁を作つてゐた。ここでは、その仕事の効果が、最も直接に彼ら自身の口を喜ばすために、歌ふ彼らの聲も、いづれの仲間達の歌より一段と威勢があつた。

反給は時々戸の隙間から中を覗いた。薄暗い部屋の中からは、一條の氣息が絶えず爾に聞えてゐた。彼は顔を擧げて部屋の前を往來した。しかし、兵士達の廣場でさざめく聲が、一層賑はしくなつて来ると、彼は高い欄干から飛び下りてその方へ馳けて行つた。今や麻の草場の中では、角力の一團が最も人々を集めてゐた。反給は彼らの中へ刺り込むと、今まで勝ち續けてゐた一人の兵士の前に突きたつた。

「來れ。」と彼は叫んでその兵士の股へ片手をかけた。兵士の體軀は、反給の胸の上で足を跳ねながら浮き上つた。と、反給は彼の身體を、倒れた草の上へ投げつけて、大手を上げた。

「我を倒した者に、劍をやらう。來れ。」

そのとき反給の眼には、白鷺の羽根束を擁へた反給の二人の使部が、積まれた裸體の鹿の間を通つて、車彌呼の部屋の方へ歩いて行くのが見えた。反給の擡げた兩手は、だんだんと下へ下つた。

「よし。我は爾に勝たう。」と一人が云つた。それは反給に倒された兵士の眞油であつた。彼は立ち上ると、血のついた角髪で反給の腹をめがけて突進した。

「放せ、放せ。」と反給は云つた。が、彼の身體は、曲つた眞油の背の上で、舟のやうに反つてゐた。と次の瞬間、彼は踏み開かれた草の縁が眼につくと、反給に嘲笑む不彌の女の顔を浮べて、逆様に墜落した。

「我に劍を與へよ。我は勝つた、我は爾に勝つた。」

ひとり空の中で喜ぶ眞油の顔が高く笑つた。反給は怒りのバネに跳ね起されると、波立つ眞油の腹を蹴り上げた。眞油は叫びを上げて顛倒した。それと同時に、反給は車彌呼の部屋の方を振り返ると、遺戸の中へ消えようとしてゐる使部の黄色い背中が、動搖めく兵士達の頭の上から見えてゐた。

「眞油は死んだ。」

「眞油は蹴られた。」

「眞油の腹は破れてゐる。」

廣場では、兵士達の歌がやまつた。あちらこちらから草叢の中からは、兵士達が、動かぬ眞油を中心に馳け寄つて来た。しかし、反給は、彼ら

とは反對に廣場の外へ、鹿の死體を飛び越え、
馳け寄る兵士達を突き飛ばし、麻の葉叢の中を
一文字に使部達の方へ突進した。
遺戸の中では、卑彌呼の眼りに氣遣ひながら、
二人の使部は、白鷺の尾羽根を周囲の壁となつ
た圓木の隙に刺してゐた。

反給は部屋の中へ飛び込むと、一人の使部の
首を攫んで床の上へ投げつけた。使部の腕から
は、かかへた白鷺の尾羽根が飛び散つた。
「我を赦せ。王は部屋を飾れと我に命じた。」轉
がりながら叫ぶ使部の上で、白鷺の羽毛が、叩
かれた花園の花のやうに、ひらひらと舞つて
ゐた。反給は拳を振りながら使部の腰を蹴つて
叫んだ。

「部屋を出よ、部屋を出よ、部屋を出よ。」
二人の使部は直ちに遺戸の外へ逃げ出した。
そのとき、彼らに代つて、兩手に龍膽と萩とを
かかへた他の二人の使部が、入つて来た。反給
は二人の傍へ近寄つた。さうして、その一人の
腕から、萩の一束を奪ひ取ると、彼の額を打ち
續けてまた叫んだ。

「部屋を出よ、部屋を出よ、部屋を出よ。」
「大兄、我は王の言葉に従つた。」
「去れ。」

「大兄、我は王のために鞭打たれるであらう。」
「行け。」

二人の使部は出ていつた。が彼らに續いてま
た直ぐに二人の使部が、鹿の角を肩に背負つて
入つて来た。反給は散亂した羽毛と萩の中に突
き立つて卑彌呼の寝顔を眺めてゐた。彼は物音
を聞きつけて振り返ると、床へ投げ出された鹿
の角の一枚を肩にひつかけたまま、逃げる使部
の姿が、遺戸の方へ馳けて行くのが眼についた。
反給は捨てられた白鷺の尾羽根と、龍膽の花束
とを拾ふと、使部達に代つて圓木の隙へ刺して
いつた。彼は時々手を休めて卑彌呼の顔を眺め
てみた。しかし、その度に、細く眼を見開いて
彼の後姿を眺めてゐた卑彌呼の臉は、再び
眼りのさまを装つた。

「不彌の女」と反給はその野蠻な顔に、細い微
笑を浮べて彼女を呼んだ。
「不彌の女、見よ。我は爾の部屋を飾つてゐ
る。不彌の女、起きよ。我は爾の部屋を飾つ
てゐる。」

卑彌呼の眼りは續いてゐた。さうして、反
給のとり残された細い微笑は、ひとりだんだん
と淋しい影の中へ消えていつた。彼は卑彌呼の
頭の傍へ近寄つて片膝つくくと、兩手で彼女の蒼

二十一

夜が深まると、再び濃霧が森林や谷間から、
狩獵の後の宴宴に浮かれてゐる耶馬臺の宮へ
押し寄せて来た。場庭の草園では、霧の中で、
焚火が火の子を爆いて燃えてゐた。その周囲で
は宮の婦女達が、赤と青との虎斑に染まつた衣
を巻いて、若い男に圍まれながら踊つてゐた。
踊り疲れた若者達は、尙も歌ひながら、草叢の
中に竝んだ酒瓮の傍へ集つて来た。彼らの中の
或者達は、夫々自分の愛する女の手をとつて、
焚火の光りのとどかぬ森の中へ消えていつた。
王の反耶は、大夫達の歡心に強ひられた酒のた
めに、だんだんと酔ひが廻つた。彼は卑彌呼の
部屋の裝飾を命じた五人の使部に、王命の違
反者として體刑を宣告した。五人の使部は武裝
した兵士達の圍みの中で、王の口から體刑停止
の命令の下まで鞭打たれた。彼らの背の上
で、竹の根管の鳴るのとともに、酒樂の歌は草
園の焚火の傍で、ますます亂雑に高まつた。さ
うして、遠い國境の一つの峯から立ち昇つてゐ
る噴火の柱は、霧の深むにつれて、次第にその
色を鈍い銅色に變へて来ると、違反者の背中は
破れ始めて、血が流れた。彼らは地にひれ伏し

て草を引き摺りながら、悲鳴を上げた。反耶は
悶轉する彼らを見ると、卑彌呼に此の體刑を見
せんがために、彼女の部屋の方へ歩いていつた。
何ぜんなら、もし彼女が耶馬臺の宮にゐなかつた
ら、反耶にとつては、この體刑は無用であつた
から。しかし、反耶が卑彌呼の部屋の遺戸を押
したとき、毛皮を身に纏つて横たはつてゐる不
彌の女の傍に、一人の男が蹲んでゐた。そ
れは彼の弟の反給であつた。
「不彌の女、我と共に來れ。我は爾のために、我
の命に反いた使部を罰してゐる。我は彼らに、
爾の部屋を飾れと命じた。」
「彼らを赦せ。」と卑彌呼は云つて身を起した。
「反給、爾は此の部屋を出よ、酒宴の踊りは
彼方である。」と反耶は云つて反給の方を振り向
いた。
「兄よ、爾の后は、爾と共に踊りを見んとし
て、待つてゐた。」
「不彌の女、來れ。我は爾を呼びに来た。爾
の部屋を飾り忘れた使部の背中は、鞭のために
破れて来た。」
「彼らを赦せ。」と卑彌呼は云つた。
「よし、我は兄に代つて、彼らを赦すであらう。」
と反給は云つて、遺戸の方へ出ようとする、反

耶は彼の前へ立ち寒がった。
「待て、彼らを罰したのは、我である。」
反給は兄の手を拂つて遺戸の方へ行きかけ
た。反耶は卑彌呼の傍へ近寄つた。さうして、
彼女の腕に手をかけると、彼女に云つた。
「不彌の女よ、酒宴の準備は整うた。爾は我
と共に酒宴に出よ。」
「兄よ、不彌の女と行く者は、我である。」と反
給は云つて、遺戸の傍から反耶の方を振り返つ
た。「行け、使部の罪を赦すのは、爾である。」
「不彌の女、我と共に酒宴に出よ。」反給は
再び卑彌呼の傍へ戻つて来た。
「王よ、我を酒宴に共なふことをやめよ。爾は
我と共に、私の部屋にとどまれ。」
卑彌呼は反耶の手を持つてその傍に坐らせ
た。
「不彌の女、不彌の女。」反給は卑彌呼を睥ん
で懐へてゐた。「爾は我と共に部屋を出よ。」
彼は彼女の腕を掴むと、部屋の外へ出よう
とした。
反耶は立上ると反給に曳かれる彼女の手持
つて引きとめた。
「不彌の女、行くことをやめよ。我とともに
よ。我は爾の傍に残るであらう。」

反給は反耶の胸へ飛びかからうとした。そのとき、卑彌呼は傾く反給の體軀を、その柔かき掌で制しながら、反耶に云つた。
「王よ、使部の傍へ我を共なへ。我は彼らを救すであらう。」

彼女が一人先立つて遺戸の外へ出ていつた。反給と反耶は、彼女の後から馳け出した。しかし、彼らが庭園の傍まで来かかつたとき、五人の使部は、最早死體となつて、土に咬みついたまま横たはつてゐた。兵士達は王の姿を見たと、打ち疲れた腕に一段と力を籠めて、再び意氣揚々とその死體に鞭を振り上げた。
「鞭を止めよ。」と反耶は云つた。
「王よ、使部は死んでゐる。」と一人の兵士は彼に云つた。

卑彌呼は振り向いて反給の胸を指差した。
「彼らを殺した者は、爾である。」
反給は言葉を失つた。卑彌呼のやうに、ただその口を動かしながら、卑彌呼の顔を見守つてゐた。
「來れ。」
と反耶は卑彌呼に云つた。さうして、卑彌呼の手をとると、彼は彼女を酒宴の廣間の方へ導いていつた。

「ああ、爾は我のために奴國を撃つか。坐れ、我は爾に酒を與へよう。」

卑彌呼は王に向けてゐたにやかな微笑を急に反給に向けて、その手をとつて坐らせた。反耶の顔は喜びに輝き出した。反給の顔にひきかへて響んできた。
「卑彌呼、耶馬臺の兵は、我の兵である。反給は我の一人の兵である。」と反耶は云つた。

反給の顔は勃然として朱を浮べると、彼の拳は、反耶の角髪を打つて鳴つてゐた。反耶は頭をかかへて、倒れながら宿禰を呼んだ。
「反給を縛れ。宿禰、反給を殺せ。」
併し、一座の者は酔つてゐた。反給は尙も反耶の上に飛びかからうとして片膝を立てたとき、卑彌呼は反耶と反給の間へ割り込んで、倒れた反耶をひき起した。反耶は手に持った酒盃を反給の額へ投げつけた。
「去れ。去れ。」

反給は再び反耶の方へ飛びかからうとした。卑彌呼は彼の怒つた肩に手をかけた。さうして、轉つてゐる酒盃を反給の手に握らせると、彼女が云つた。

「待て、不彌の女、待て。」と反給は呼びながら、二人の後を追ひかけた。

二十三

卑彌呼は竹皮を編んで敷きつめた酒宴の廣間へ通された。松明の光りに照された棘の柵の葉の上には、山椒の汁で洗はれた山蛤と、山蟹と、生薑と鰯と、酸漿と、まだ色づかぬ鰻魚桃の實とが並んでゐた。さうして、蓋のとれた行器の中には、新鮮な杉菜に抱かれた鹿や、猪の肉の香物が、高々と盛り立てあつた。その傍の素焼の大きな酒瓮の中では、和稻製の諸白酒が、高い香を松明の光りの中に漂はせてゐた。最早や酔の廻つた好色な一人の宿禰は、再び座についた王の後で、侍女の乳房の重みを計りながら笑つてゐた。卑彌呼は、盃をとりあげた王に、柄杓をもつて酒を注がうとすると、そこへ、荒々しく馳けて来たのは反給であつた。彼は王の盃を奪ひとると、卑彌呼に云つた。
「不彌の女、使部を殺した者は兄である。爾は我に、酒を與へよ。」
「待て、王は爾の兄である。盃を王に返せ。」と卑彌呼は云つて、彼女に差し出してゐる反給の手から、柔かにその酒盃を取り戻した。「王

「やめよ、爾は我の酒盃をとれ。我に耶馬臺の歌をきかしてみよ。我は不彌の歌を、爾のために歌ふであらう。」

「卑彌呼、我は耶馬臺の兵を動かすであらう。耶馬臺の兵は、兄の命より、我の力を恐れてゐる。」

「爾の力は強きこと、不彌の牡牛のやうである。我は爾のごとき強き男を見たことがない。」と卑彌呼は云つて、反給の酒盃に酒を注いだ。
反給の顔は、太陽の光りを受けた童顔のやうに柔くと、彼は酒盃から酒を滴らしながら勢ひよく飲み干した。しかし、卑彌呼は、彼女の傍で反給を睥みながら、唇を噛み締めてゐる反耶の顔を見た。彼女は再び柄杓の酒を傍の酒盃に満たして、彼の方へ差し出した。さうして、彼女は左右の二人の酒盃の干される度に、にこやかな微笑を配りながら、その柄杓を廻していつた。間もなく、反給の片眼は、赤銅のやうな顔の中で、一つ腫脹と濁つて来た。さうして、王の顔は溢りながら、眠りに落ちる犬のやうに傾き始めると、態で彼は、卑彌呼の膝の上へ首を垂れた。卑彌呼は、今はただ反給の眠入るのを待つてゐた。反給は行器の中から鹿の肉塊を握み出すと、それを兩手で振り廻して唄を

唄つた。卑彌呼は彼の手をとつて膝の上へ引き寄せた。

「王よ、我は不彌の國の王女を見たか。」
「盃を我に與へよ。」
「王よ、我は不彌の國の王女である。我の玉を爾は受けよ。」
卑彌呼は首から勾玉をとり脱すと、歌者として彼女の顔を眺めてゐる反耶の首に垂れ下げた。

「王よ、我は我の夫と奴國の國を廻つて来た。奴國の王子は、不彌の國を亡ぼした。爾は我を愛するか。我は不彌の王女、卑彌呼と云ふ。」
「ああ、卑彌呼、我は爾を愛す。」
「爾は奴國を愛するか。」
「我の愛する國は不彌。」

「ああ、爾は不彌の國を愛するか。もし爾が不彌の國を愛すれば、我に耶馬臺の兵を借せ。奴國は不彌の國の敵である。我の父と母とは、奴國の王子に殺された。我の國は滅びてゐる。爾は我のために、奴國を攻めよ。」
「卑彌呼。」と横から反給は云つた。さうして、彼は突き立つたまま、彼女の傍へその顔を近づ

歌つた。卑彌呼は彼の手をとつて膝の上へ引き寄せた。

外の草園では焚火の光りが薄れて来た。草叢のあちこちからは醇漢の呻きが漏れてゐた。さうして、次第に酒宴の騒ぎが宮殿の内外から響つて来ると、態で、卑彌呼の膝を枕に轉々としてゐた反給も眠りに落ちた。卑彌呼は部屋の中を見廻した。しかし、一人として彼女のますます消え渡つたその幼かな眼を見詰めてゐる者は誰もなかつた。ただ酒氣と肝臓とが亂れた食器の方々から流れてゐた。彼女は鹿の肉塊を冠つて眠つてゐる反給の顔を見詰めてゐた。今や彼女には、調和郎のために復讐する時が来た。彼女には、反給の腰に敷かれてあつた。さうして、彼女の第二の良人を殺害した者は、彼女の膝の上に眠つてゐた。しかし、反給のその遅い、兩肩の肉塊と、その狂暴な力の溢れた頸とに代つて、奴國に攻め入る者は、彼の他の何者が、何處の國にあるであらう。態で彼女のために長羅の首は落ちるであらう。態で、彼女は、不彌と奴國と耶馬臺の國の三國に君臨するであらう。さうして、もしその時が来たならば、彼女は更に三つの力を以て、久しく攻伐し合つた暴虐な諸國の王を、その足下に蹂躙する時が来るで

歌つた。卑彌呼は彼の手をとつて膝の上へ引き寄せた。

あらう。彼女の泣き渡つた瞳の底から再び浮び始めた残酷な微笑は、静まつた夜の中を、ひとり毒汁のやうに流れてゐた。

「ああ、地上の王よ、我を見よ。我は爾らの上に、日輪の如く輝くであらう。」

彼女は膝の上から反耶と反耶の頭を降して、静かに彼女の部屋へ歸つて来た。しかし、彼女はひとりになると、またも深夜のやうに、幻の夢の中で卑狗の大兄の匂ひを嗅いだ。彼は彼女を見詰めて微笑むと、立ちすくむ小鳥のやうな彼女の傍へ、大手を擡げて近寄つて来た。

「卑彌呼、卑彌呼。」

彼女は卑狗の囁きを聞きながら、卑狗の波打つ胸の力を感じると、崩れる花束のやうに、彼の胸の中へ身を投げた。

「ああ、大兄、大兄、爾は何處へ行つた。」

彼女の身体は毛皮の上に倒れてゐた。しかし、その時、またも彼女の怨恨は、涙の底から急に浮び上つた仇敵の長羅に向つて、猛烈と勃發した。最早や彼女は、その胸に沸騰する狂ほしい復讐の一念を厭伏してゐることは出来なくなつた。

「大兄を返せ、大兄を返せ。」
彼女は立ち上つた。さうして、きりきりと

齒をきしませながら、圓木の隙に刺されに白鷺の尾羽根を次ぎ次ぎに引き抜いては捨てていつた。しかし、再び彼女は、彼女を呼ぶ卑狗の大兄の聲を聞きつけた。彼女の身体は呆然と石像のやうに立ち寄り、風に吹かれた衣のやうに圓木の壁にしがたかかると、再び抜き捨てられた白鷺の尾羽根の上へ、どつと倒れた。

「ああ、大兄、大兄、爾は我を殺して何處へ行つた。何處へ行つた。」

二十三

反耶は夜中、眼が醒めると、傍から不彌の女が消えてゐた。さうして、彼の見たものは、自分の片手に握られた乾いた一つの酒壺と、肉塊を冠つて寝てゐる反耶の口を開いた顎とであつた。

「不彌の女、不彌の女。」

彼は立ち上つて卑彌呼の部屋の方へ行かうとした。と、彼は反耶の足に踏いて、前にのめつた。しかし、足は急いでゐた。彼は踏踏めきなから、彼女の部屋の方へ近づくと、その遺戸を押して中に入つた。

「不彌の女、不彌の女。」
卑彌呼は白鷺の散亂した羽毛の上に倒れたま

ま、動かなくなつた。
反耶は卑彌呼の傍へ近寄つた。さうして、片膝をつきながら、彼女の背中に手をあてて囁いた。

「起きよ、不彌の女、我は爾の傍へ来た。」

卑彌呼は反耶の力に従つて靜かに仰向きに返ると、涙に濡れた頬に白い羽毛をたからせたまま彼を見た。

「爾は何故に我を殺してひとり去つた。」と反耶は云つた。

卑彌呼は黙つて、感情に慄へる反耶の顔を眺めてゐた。

「不彌の女、我は爾を愛す。」

反耶は唇を慄はせて、卑彌呼の胸を抱きかかへた。卑彌呼は石のやうに、冷然として耶馬臺の王に身をまかせた。

そのとき、部屋の外から重い足音が響いて来た。さうして、彼女の部屋の遺戸が急に開くと、そこへ現れたのは、反耶であつた。彼は二人の姿を見ると突き立つた。が、忽ち彼の下顎は、狂暴な嫉妬のために戦慄した。彼は齒をむき出して無言のまま、猛然と反耶の方へ追つて来た。

「去れ。去れ。」と反耶は云つて卑彌呼の傍へ

ら立ち上つた。

反耶は、恐怖の色を浮かべて逃げようとする反耶の身体を抱きかかへると、彼を圓木の壁へ投げつけた。

反耶の頭は逆様に、床を叩いて轉落した。反耶は腰の剣をひき抜いた。さうして露はな剣を跳ねてゐる兄の脇腹へ突き刺した。反耶は呻きながら刺された剣を握つて立ち上らうとした。が、反耶は再び彼の胸を斬り下げた。反耶は卑彌呼の方へ腹這ふと、彼女の片足を握んで絶息した。しかし、卑彌呼は横たはつたまま、身動きもせず、彼女の足を握つてゐる王の指先を眺めてゐた。反耶はまだ間に逢はぬ影のやうに青黒くなつて反耶の傍に突き立つてゐた。體で、反耶の手から剣が落ちた。靜かな部屋の中で、床に刺さつて横に倒れる劍の音が一度し

た。

「卑彌呼、我は兄を殺した。爾は私の妻になれ。」

反耶は卑彌呼の傍へ蹲むと、荒い呼吸を彼女の顔に吐きかけて、彼女の腕と肩とに手をかけた。しかし卑彌呼は黙然として反耶の死體を眺めてゐた。

「卑彌呼、我は奴國を攻める。我は爾を愛す。」

我は爾を愛す。卑彌呼、私の妻になれ。」

彼女の頬に附いてゐた白い羽毛の一端が、反耶の呼吸のために揺れてゐた。反耶は尙も腕に力を籠めて彼女の腕の上に身を跨げた。

「卑彌呼、卑彌呼。」

彼は彼女を呼びながら、彼女の胸を抱かうとした。彼女は曲げた片腕で、反耶の胸を押しのけると靜に云つた。

「待て。」

「爾は兄に身を與へた。」

「待て。」

「我は兄を殺した。」

「我は爾を欲す。」

「奴國の滅びたのは、今ではない。」

反耶の顔は勃發する衝動を叩かれた苦惱のために歪んで来た。さうして、彼の片腕は、暫しの焦躁に揺られながら、次第に眼的な決意を閃かせて卑彌呼の顔を覗き始めた。と、彼女は、飛び立つ鳥のやうに身を跳ねて、足元に落ちてゐた反耶の剣を拾つて身構へた。

「卑彌呼。」

「部屋を去れ。」

「我は爾を愛す。」

「奴國を攻めよ。」

「我は攻める。爾を放せ。」

「奴國の王子を長羅と云ふ。彼を撃て。」

「我は撃つ。爾は私の妻になれ。」

「長羅を撃てば、我は爾の妻になる。部屋を去れ。」

「卑彌呼。」

「去れ。奴國の滅びたのは今ではない。」

反耶は彼の片腕に怨恨を流して卑彌呼の顔を眺めてゐた。しかし、間もなく、喉びに疲れた毛物のやうに、彼は足を鈍らせて部屋の外へ出て行つた。卑彌呼は再び床の上へ俯伏せし身を崩した。彼女は彼女自身の身の穢れを思ひ浮べると、彼女を取巻く卑狗の大兄の靈魂が、今は次第に彼女の身邊から遠のいて行くのを感じて来た。彼女の身体は恐怖と悔恨とのために顫へて来た。

「ああ、大兄、我を救せ。我を救せ。我のためには爾は歸れ。」

彼女が剣を握つたまま泣き伏してゐるとき、部屋の外からは、突然喜びに溢れた威勢よき反耶の聲が聞えて来た。

「卑彌呼、我は奴國を攻める。我は奴國を、砂のやうに崩すであらう。」

耶馬臺の宮では、一人として王を殺害した反輪に向つて造るものはなかつた。何故なら、耶馬臺の宮の人々には、彼の狂暴な熱情と力とは、前から、國境に立ち昇る夜の噴火の柱と等しい恐怖となつて映つてゐたのであつたから。しかし、君長の葬禮は宮人達の手によつて、小丘の頂で行はれた。二人の宿禰と九人の大夫に代つた十一の旗輪が、王の柩と一緒に埋められた。さうして王妃と、王の三頭の乗馬と、三人の童男とは、殉死者として首から上を空間に擡げたままその山上に埋められた。貞淑な王妃を除いた他の殉死者の悲痛な叫喚は、終日終夜、秋風のままに宮の上を吹き流れた。さうして、次第に彼らの叫喚が弱まるのと一緒に、その下の耶馬臺の宮では、蕭々として、取ひの準備が整つていつた。先づ兵士達は周囲の森から野牛の群れを召集することを命ぜられると、次に数千の投げ槍と楯と矢とを造る傍ら、弓材となる梓や檜を弓矯に懸けねばならなかつた。反輪は日々兵士達の間を馳け廻つてゐた。しかし、彼の卓強を得んとする欲望はますます彼を焦燥せしめ、それに従ひ彼の狂暴も日に日に

にその度を強めていつた。彼は、戦々兢々として駆け違ひながら立ち働く兵士達の間から、眼ある度に卓強呼の部屋へ戻つて来た。彼は彼女に追つて訴へた。しかし、卓強呼の手には、絶えず抜かれた一本の劍が握られてゐた。さうして、彼女の答へは定つてゐた。
「待て、奴國の滅びたのは、今ではない。」
反輪はその度に無言のまま戸外へ駆け出すと、必ず彼の劍は一人の兵士を傷つけた。
奴國の宮では、長羅は卓強呼を失つて以来、一つの部屋に横たはつたまま起きなかつた。彼は彼女を探索に出かけた兵士達の歸りを待つた。しかし、歸つた彼らの誰も弓と矢を捨てると、黙つて農夫の姿に變つてゐた。長羅は童男の運ぶ食物にも殆んど手を觸れようとしなくなつた。そればかりではなく、最早や彼を助ける一人残つた祭司の宿禰にさへも、彼は言葉を支へようとしなかつた。さうして、彼の長羅は、不備を追はれて歸つたときの彼のごとく、再び木のやうにだんだんと瘦せていつた。彼の病原を洞察した宿禰は、蚯蚓と、鶏腸草と、童女の經水とを混ぜ合せた液汁を長羅に飲ませると

めに苦心した。しかし長羅はそれさへも飲まうとはしなかつた。そこで、宿禰は奴國の宮の乙女達の中から、優れて美しい乙女を選抜して、長羅の部屋へ導き入れることを計畫した。しかし、第一日に選ばれた乙女と次の乙女の美しさは長羅の引き締つた唇の一端さへも動かすことが出来なかつた。宿禰は憂慮に悩んだ顔をして、自ら美しい乙女を捜し出さんかのために、奴國の宮の隅々を廻り始めた。その噂を聞き傳へた奴國の宮の娘を持つた母親達は、己の娘に華やかな装ひをこらさせ、髪を飾らせて戸の外に立たせ始めた。さうして、彼女自身は己の娘を凌駕する美しい娘達を見たときに、それらの娘達の古い悪行を、通る宿禰の後から大聲に饒舌つていつた。かうして、第三日に選ばれた美しい乙女は、娘を持つた奴國の宮の母親達のまだ誰かが豫想さへしなかつた河和郎の妹の香取であつた。しかし、己の娘の榮譽を彼女のために奪はれた母親達の誰一人として、香取の美貌と行跡について聽する者は見あたらなかつた。何せなら、香取の父は長羅に殺された宿禰であつたから。彼女は父の惨死に次いで兄の逃亡の後には、ただ一人河和郎の歸國するのを待つてゐた。彼女にとつて、父を殺した長羅

は、彼女の心の微とはならなかつた。彼女の敵は、彼女がひとり、胸底深く秘め隠してゐた愛する王子、長羅を奪つた不彌の女の卓強呼であつた。さうして、彼女の父を殺した者も彼女にとつては、彼女の愛する王子長羅をして彼女の父を殺さしめた不彌の女の卓強呼であつた。選ばれた日のその翌朝、香取は宮殿から送られた牛車に乗つて登殿した。彼女は宿禰が彼女を選んだその理由と彼女に與へられた重大な責任とを、他に選ばれた乙女達の誰よりも深く重く感じてゐた。彼女は藍色の衣を纏ひ、首からは翡翠の勾玉をかけ垂らし、その頭には瑪瑙をつらねた玉鬘をかけて、兩腕には磨かれた鷹の嘴で造られた一對の劍を附けてゐた。さうして、彼女の右手の指に嵌つてゐる五つの鑽は、亡き母の片身として、彼女の愛慕し續けて来た黄金の鑽であつた。彼女は牛車から降りると、一人の童男に共なはれて宿禰の部屋へ入つていつた。宿禰は暫く彼女の姿を眺めてゐた。さうして、彼はひとり得意な微笑をもらしながら、長羅の部屋の方を指差して彼女に云つた。
「行け。」
香取は命ぜられるままに、長羅の部屋の杉戸

の方へ歩いていつた。彼女の足は、戸の前まで來ると立ち憚んだ。
「行け。」と再び後で宿禰の聲がした。
彼女は杉戸に手をかけた。しかし、もし彼女が不彌の女に負けたなら、さうして、彼女がもし奴國の女を殺したときは？
「行け。」と宿禰の聲がした。
彼女の胸は激しい呼吸のために波立つた。がそれと同時に、彼女の唇は、決意にひき締つて慄へて來た。彼女は手に力を齧めながら、靜に杉戸を開けてみた。彼女の長く心に秘めてゐた愛人は、毛皮の上に横たはつて眠つてゐた。しかし、彼女の頭に映つてゐた會つての彼の、男々しく美しかったあの顔は、今は潰まつた窪みの底に眼を沈ませ、顔は突起した顎を蔽つて縮まり、さうして、彼の兩頬は、餓えた鹿のやうに細まつて落ちてゐた。
「王子、王子。」
彼女は跪拜して小聲で長羅を呼んだ。彼女の顔は、その氣高き容色の上で赧らんだ。しかし、長羅は依然として、彼女の前で眠つてゐた。彼女は再び膝を、長羅の方へ進めて行つた。
「王子よ、王子よ。」
すると、突然に長羅の牛身は起き上つた。彼

は暫々と眼を輝かせて、暫く部屋の隅々を眺めてゐた。さうして、漸く跪拜してゐる香取の上に眼を注ぐと、彼の熱情に輝いたその眼は、急に光りを失つて細まり、彼の身體は、再び力なく毛皮の上に横たはつて眼を閉ぢた。香取の顔色は、蒼然として變つて來た。彼女は身を床の上に俯伏させた。が、再び、弾かれたやうに頭を上げると、その蒼ざめた頬に涙を流しながら、聲を慄はせて長羅に云つた。
「王子よ、王子よ、我は爾を愛してゐた。王子よ、王子よ、我は爾を愛してゐた。」
彼女は不意に言葉を切ると身體を整へて端坐した。さうして、頭から靜に玉鬘を取りはづし、首から勾玉をとりはづすと、長羅の眼を閉ぢた顔に従容として見詰めてゐた。すると、彼女の唇の兩端から血がたらたらと流れて來た。彼女の蒼ざめた顔色は、一層その色を蒼ざめて落ちつき出した。彼女の身體は端坐したまま床の上に傾くと、最早や再びとは起き上つて來なかつた。かうして、兵部の宿禰の娘は死んだ。彼女は舌を噛み切つて自殺した。しかし、横たはつてゐる長羅の身體は、身動きもしなかつた。
香取の死の原因を知らなかつた奴國の宮の

人々は、一齊に彼女の行爲を賞讃した。さうして、長羅を戴く奴國の乙女達は、奴國の女の名譽のために、不彌の女から、王子の心を奪ひ返せと叫び始めた。第四の乙女が香取の次に選ばれて再び立つた。人々は齊しく彼女の美しさを効果の上に注目した。すると、俄然として、彼女は香取のやうに自殺した。何ぜなら、香取を賞讃した人々の言葉は、あまりに莊嚴であつたから。しかし、また第五の乙女が宿彌のために選ばれた。人々の彼女に注目する仕方は變つて来た。けれども、彼女の運命も第四の乙女のそれに等しく、不吉な慣例を造らなければならぬのは當然のことであつた。かうして、奴國の宮からは日々に美しい乙女が減りさうになつて来た。娘を持つた奴國の宮の母親達は、急に己の娘の美しい髪ひをはぎとつて、農衣に着せ變へると、宿彌の眼から家の奥深くへ隠し始めた。しかし、宿彌はひとり、ますます憂慮に墮んだ時鬱な顔をして、その眼を光らせながら宮の隅々をさまようてゐた。第六番目の乙女が選ばれて立つた。人々は恐怖を以て彼女の身の上を氣遣つた。その夜、彼女は乙女の自殺の報道を聞く前に、神庫の前で、宿彌が何者かに暗殺されたと云ふ報道を耳にした。

しかし、長羅の横たはつた身體は、殆ど空虚に等しくなつた王宮の中で、死人のやうに動かなくなつた。
「或る日、一人の若者が、王宮の門前の欄の板を見つると、疲れ切つた身體をその中へ駆け込ませて、ひとり叫んだ。
「不彌の女を、我は見つた。不彌の女を、我は見つた。」
若者の聲に應じて出て来る者は誰もなかつた。彼は高縁に差し込んだ太陽の光りを浴びて眠つてゐる童男の傍を通りながら、王宮の奥深くへだんだんと入つていつた。
「不彌の女を、我は見つた。不彌の女は、耶馬臺にゐる。」
長羅は若者の聲を聞くと、矢の音を聞いたやうに、身を起した。彼の顔は靨らんだ。
「入れ、入れ。」しかし、彼の聲はかすれてゐた。若者の呼び聲は、長羅の部屋の前を通り越して、八尋殿へ突きあたり、さうして、再び彼の方へ戻つて来た。長羅は踏踏みながら杉戸の方へ近寄つた。
「入れ、入れ。」
若者は杉戸を開けると彼を見た。

「王子よ、不彌の女を我は見つた。」
「よし、水を與へよ。」
若者は馳けて行き、馳けて歸つた。
「不彌の女は、耶馬臺にゐる。」
長羅は怨の水を飲み干した。
「爾は見つたか。」
「我は見つた。我は耶馬臺の宮へ入りつた。」
「不彌の女は、何處にゐる。」
「不彌の女を我は見つた。不彌の女は、耶馬臺の宮の王妃になつた。」
長羅は激怒に壓伏されたかのやうに、ただ黙つて慄へながら、床の上の劍を指差した。
「王子よ、耶馬臺の王は戦ひの準備をなした。」
「劍を拾へ。」
若者は劍を長羅に與へると、再び云つた。
「王子よ、耶馬臺の王は、奴國の宮を攻めるであらう。」
「耶馬臺を攻めよ。兵を集めよ。我は爾を、宿彌にする。」
若者は喜びに眉毛を吊り上げて黙つてゐた。
「不彌の女を奪へ。耶馬臺を攻めよ。兵を集めよ。」
若者は髪を翳つて、部屋の外へ駆け出した。

間もなく、法螺が神庫の前で、高く鳴つた。それに應じて、銅鑼が宮の方から鳴り出した。

二十六

耶馬臺の宮では、反輪の狂暴は、その度を越えて募つて来た。それにひきかへ、兵士達の間では卑彌呼を尊崇する熱度が戦ひの準備の整つて行くに従つて高まつて来た。何ぜなら、未だ曾て何物も制御し得なかつた反輪の狂暴を、ただ一瞬の視線の下に壓伏さし得た者は、不彌の女であつたから。さうして、彼女のために、反輪の劍の下からその生命を救はれた数多くの者達は彼らであつた。彼らは彼らの出征については必勝を期してゐた。何ぜなら、未だ何者も制御し得なかつた耶馬臺の國の大なる恐怖を、ただ一瞬の下に壓伏さし得る不彌の女を持つものは彼らの軍であつたから。反輪の出した三人の偵察兵は歸つて来た。彼らは、奴國の王子が卑彌呼を奪ひに耶馬臺の宮へ攻め寄せると云ふ報道を齎した。反輪と等しく怒つた者は耶馬臺の宮の兵士達であつた。その翌朝、進軍の命令が彼らの上に下された。一團の先頭には騎馬に跨つた反輪が立つた。その後からは、楯の上で輝いた數百本の鋒尖を従へた卑彌呼が、六人

の兵士に擔がれた乗物に乗つて出陣した。彼女は、長羅を身邊に引き寄せる手段として、背の上から、人目を奪ふ紅の染衣を纏つてゐた。一團の隊には背に投げ槍と食糧とを荷ひつけられた數十疋の野牛の群れが連つた。彼らは弓と矢の林に包まれて、燃え立つた楯の紅葉の森の中を、奴國の方へ進んでいつた。さうして、この蜿蜒とした武裝の行列は、三つの山を昇り、四つの谷に降り、野を越え、森をつききつて行つた。その日の中に、二人の奴國の偵察兵を捕へて首斬つた。二日目の夕暮れ、彼らはある水の潤れた廣い河の岸へ到着した。

二十七

不彌を一舉に蹂躙して以來、まだ日のたぬ奴國の宮では、兵士達は最早や戦争の準備をする必要がなかつた。神庫の中の鋒も劍も新しく光つてゐた。さうして、彼らの弓弦は張られたままに、まだ一矢の音をも立ててはゐなかつた。しかし、王子長羅の肉體は、弱つてゐた。彼は焦躁しながら、鶴と鶏と山蟹の卵を食べ続けるかたはら、その苛立つ感情の制御しきれぬ時になると、必要な偵察兵を矢繼早やに耶馬臺へ向けた。さうして、彼は兵士達に逢ふ毎

に、その輝いた眼を狂人のやうに山の彼方へ向けて、彼らに云つた。
「不彌の女を奪へ。奪つた者を宿彌にする。」
彼の言葉を聞いた兵士達は互にその顔を見合せて黙つてゐた。しかし、それと同時に彼らの野心は、その沈黙の中で互に彼らを敵となして睥み合せてゐた。
數日の後、長羅の顔は蒼白く疲れたまに輝き出した。さうして、遅く前に跨んだ彼の長羅は、鞍馬のやうに兵士達の間を馳け廻つてゐた。出陣の用意は整つた。長羅の正しく尖つた鼻と、馬の鼻とは眞直ぐに耶馬臺を睥んで進んでいつた。數千の兵士達は、互に敵となつて塊つた大集團を作りながら、聲を潜めて彼の後から従つた。長羅の馬は、耶馬臺へ近寄るに従つて、次第にひとり兵士達から離れて前へ急いだ。このため兵士達は、休息することを忘れねばならなかつた。しかし、彼らはその熱情を異にする長羅の後に続くことは、不可能なものであつた。さうして、二日がたつた。兵士達は、ある川岸へ到着したときは、最早や前進することも出来なかつた。彼らはその日、まだ太陽の輝いてゐる中から、河原の芝の中で夜營の準備にとりかかつた。

遠い國境の山の峯が、一つ黒々と煙を吐いてゐた。太陽は桃色に變つて落ち始めた。そのとき、遙に對岸の芒の原が、ざわめき立つた。さうして、一齊に水禽の群れが、列を亂して高く舞ひ上ると、間もなく、數千の銃尖が、芒の穂の中で輝き出した。

「耶馬臺の兵が押し寄せた。」

「耶馬臺の兵が押し寄せた。」
奴國の兵士達は動亂した。しかし、彼らは休息を忘れて歩行し續けた疲勞のために、却つて直ちにその動亂を整へて、再び落ちつきを奪回することに容易であつた。彼らは應戰の第一の手段として、鉾や釘やその他統ての武器を芒の中に伏せて鎮まつた。何せなら、彼らは奴國の兵の最も特長とする戦法は夜襲であることを知つてゐた。數名の斥候が川上と川下から派出された。長羅は一人高く馬上に跨つて對岸を見詰めてゐた。川には淺瀬が中央にただ一線流れてゐた。さうして、その淺瀬の兩側には廣い砂地が續いてゐた。

夜は次第に降りて来た。對岸の芒の波は、今は曠に背後の山の下で煙つて見えた。その時、突然對岸からは銅鑼がなつた。すると、尾に火をつけられた一團の野牛の群れが、雲のやうに

煙曳いた對岸の芒の波を蹴破つて、奴國の陣地へ突進して来た。奴國の兵は、野牛の一團が眞近まで迫つたときに、一齊に彼等の群れへ向つて矢を放つた。牛の群れは鳴聲を上げて突き立つと、遙に耶馬臺の陣地の方へ、猛然と押し返した。奴國の兵は、牛の後から對岸に向つて押し寄せようとした。しかし、長羅は彼らの前を、一直線に馬を走らせてその前進を食ひとめた。

と、齊しく野牛の群れは、對岸から放たれ出した矢のために、再び逆流して奴國の方へ向つて来た。それと同時に、鯨波の聲が對岸から湧き上ると、野牛の群れの兩翼となつて、投げ槍の密集團が、砂地を蹴つて兩方から襲つて来た。奴國の兵は、直ちに、川岸に添つて長く延びた。さうして、その敵の密集團に向つて、一齊に矢を放つと、再び密集團は彼らの陣營へ引き返した。野牛の群れは狂ひながら、ひとり奴國の兵の斷ち切れた中央を突きぬけて、遠く後方の森の中へ馳け過ぎた。

夜は全く降りてゐた。國境の噴火の煙は火の柱となつて空中に立つてゐた。奴國の兵の夜襲の時は迫つて来た。しかし、彼らの疲勞は一段と増してゐた。彼らは、敵の陣地の滑まると一緒に、芒の中に腰を下ろして休息した。長羅

は彼らの疲勞の狀態に気がつくると、その計畫してゐた夜襲を斷念しなければならなかつた。けれども、奴國の軍は、次に來るべき肉迫戰のときまでに、敵の陣營から矢をなくしておかねばならなかつた。それには、夜の闇が必要であつた。

彼らは疲勞の休まる間もなく、聲を清めて川原の中央まで進んで出ると、櫓を擧げやうに横につらねて身を隠した。さうして、彼らは一齊に足を踏みたたき、鯨波の聲を振り上げて肉迫する氣勢を敵に知らしめた。對岸からは、矢が雨のやうに飛んで来て櫓にあつた。彼らは引きかへすと又進み、退いては再び鯨波を振り上げた。さうして、時刻を隔いて、この數度の率制を繰り返してゐる中に、最早や對岸から矢が飛ばなくなつて来た。しかし、彼らに代つて敵からの率制が、激しくなつた。初め奴國の兵は、敵の喊聲が肉迫する度に、恐怖のために、思はず彼らに向つて矢を放つた。けれども、それが數度續くと、彼らは敵軍の來襲も、所詮自國の率制と等しかつたことに氣付いて矢を惜しんだ。夜はだんだんと更けていつた。眠つたやうに沈黙し合つた兩軍からは、盛に斥候が派せられた。川上と川下の砂地や芒の中では、小

さな斥候戦が方々で行はれた。

かうして、夜は兩軍の上から明けていつた。朝日は奴國の陣地の後方から昇り始めた。耶馬臺の國境から立ち昇る噴火の柱は、再び煙の柱に變つて来た。さうして、兩軍の間には、血の染んだ砂の上に、矢の刺つた屍や牛の死骸が朝日を受けて、點々として横たはつてゐた。

そのとき、耶馬臺の軍は、まばらに一列に横隊を造つて、静々と尾を踏みながら進んで来た。彼らの連つた櫓の上からは、油を滴ませた茅花の火口が鉾先につきさされて燃えてゐた。彼らは奴國の陣營間近く迫つたときに、各々その鉾先の火口を芒の中へ投げ込んだ。奴國の兵は直ちに足で落ち来る火口を踏みつけた。しかし、彼らの頭の上からは、續いて無數の投げ槍と礮が落ちて来た。それに和して、耶馬臺の軍の喊聲が、地を踏み鳴らす覺音と一緒に湧き上つた。消え残つた火口の煙は芒の原に燃え移つた。奴國の陣營は、竹の塊ける響きを交へて、濛々と白い煙を空に巻き上げた。長羅は全軍を森の傍まで退却させた。さうして、兵を三團に分けると、最も精緻な一團を自分と共に森へ残し、他の二團をして、立ち昇る白煙に隠れて、

川上と川下へ分れさせた。分れた二團の軍兵は鉾と劍を持つて、砂地の上の耶馬臺の軍を、兩方から一時にとつと挟撃した。白煙の中へ矢を放つてゐた耶馬臺の軍は、散亂しながら對岸の陣地の中へ引き返した。奴國の二團は川の中央で一つに合すると、大集團となつて逃げる敵軍の後から追撃した。さうして、今や彼らは、敵の陣營へ殺到しようとしたときに、新たな耶馬臺の軍が、奴國の密集團の中に挟んで芒の中から現れた。彼らは奴國の密集團と同じく、鉾と劍を持つて、喊聲を上げつつ、堂々と二方から押し寄せて来た。長羅は自國の軍が敵軍に包まれたのを見てとると、残つた一團を引きつれて、箭に火の消えた芒の原を突き破つて現れた。耶馬臺の軍は彼の新しい一軍を見ると、奴國の密集團を包んだまま、急に進行を停止した。長羅は自分の後ろに一團を張つて、敵の大團に對峙しながら動かさなかつた。その時、對岸の芒の中から、逃げ込んだ耶馬臺の兵の一團が、再び勢ひを盛り返して進んで来た。と、三方から包まれた奴國の密集團は渦巻きながら、耶馬臺の軍の右翼となつた大團の中へ殺到した。それと同時に、かの芒の中へ押し返した敵の一團は、投げ槍を霜のやうに輝かせて、動亂する

奴軍の中へ突入した。忽ち動搖めく人波の點々が、倒れ、跳ね、踊り、渦巻くそれらの頭上で無數の白い閃光が明滅した。と、やがて、その殺戮し合ふ人の團塊は叫喚しながら紅となつて、延び、縮み、揺れ合ひつつ、次第に小さく擦り減つて行くと、遂に長羅の動かぬ一團の方へ、潮のやうに崩れて来た。それに和して、今迄彼と對峙して止まつてゐた耶馬臺の左翼の軍勢も、一時に鯨波の聲を張り上げて、彼の方へ押し寄せた。長羅の一團は、彼を捨てて崩れて来た。長羅は一人馬上に踏みとまつて、「返せ、返せ」と叫び續けた。

その時、放してあつた一人の奴國の斥候が、彼の傍へ駆け寄つて來ると、手を喇叭のやうに口にあてて彼に叫んだ。「不測の女を我は見、見よ。不測の女は、赤い衣を纏つてゐる。」

長羅は彼の指差す方を振り向いた。そこには、肉迫して來る刃の潮の後方に、紅の一點が、静々と赤い帆のやうに彼の方へ進んでゐた。長羅はひらりと馬首を敵軍の方へ振り向けた。馬の腹をひと蹴り蹴つた。と彼は無言のまま、その紅の一點を日かけて、押し寄せる敵軍の中へただ一騎飛進した。鉾の雨が、彼の頭

上を飛び廻つた。彼は盾を差し出し、片手の劍を振り廻して飛び来る鋒を斬り拂つた。無敵の顔と劍が、彼の周囲へ波打ち寄せた。彼の馬は飛び上り、跳ね上つて、その人波の上を起伏しながら、前へ前へと突き進んだ。長羅の劍は、馬の上で、風車のやうに廻轉した。腕が飛び、劍が飛んだ。ばたばたと人は倒れた。と、急に人波は、彼の前で二つに割れた。

「卑彌呼。」
長羅の馬は突進した。そのとき、片眼の武將を乗せた黒い一騎が、砂地を蹴つて、彼の前へ馳けて来た。

「開け、我は耶馬臺の王の、反輪である。」
長羅の馬は突き立つた。さうして、反輪の馬を横に流すと、圓を描いて擔がれた高座の上の卑彌呼の方へ突進した。

卑彌呼の高座は、彼の馬首を脱しながら、反輪の後へ廻つていつた。長羅は睨いた眼を卑彌呼に向けた。

「卑彌呼。」
彼は馬を蹴らうとすると、再び反輪の馬は、疾風のやうに馳けて来た。と、長羅は突然馬首を返すと、反輪の馬に向つて突撃した。二頭の馬は嘶きながら突き立つた。楯が空中へ跳ね上

つた。再び馬は頭を合せて落ち込んだ。と、反輪の劍は長羅の腹へ突き刺つた。同時に、長羅の劍は反輪の肩を斬り下げた。長羅の長羅は反輪の上へ踊り上つた。二人の身體は逆様に馬の上から墜落すると、抱き合つたまま砂地の土を踏つた。蹴り合ひ、踏み合ふ彼らの足先から、砂が跳ね上つた。草葉が飛んだ。さうして、反輪の血走つた片眼は、引つ綱まれた頭髪に吊り上げられたまま、長羅の額を中心に、上になり、下になつた。二つの口は噛み合つた。亂れた彼らの頭髪は、絡まつた鳥のやうにばさばさと地を打つた。

卑彌呼の高座は二人の方へ近寄つて来ると降された。しかし、耶馬臺の兵士の中で、彼らの反輪を助けようとする者は、誰もなかつた。何ぜなら、耶馬臺の恐怖を失つて、幸福を望む者は、それは彼らであつたから。彼らは卑彌呼と一緒に、劍を握つたまま、血砂にまみれて呻きながら轉々する二人の身體を見詰めてゐた。彼らの顔は、一様に、彼らの美しき不備の女を守り得る力を、彼女に示さんとする努力のために緊き締つてゐた。しかし、間もなく彼らの前で、長羅と反輪の塊りは、卑彌呼の二人の良人の仇敵は、戦ひながら、次第にその力を

弱めていつた。さうして、反輪の片眼は、取られたまま砂の中にめり込むと、二人は長く重なつたまま、動かなかつた。卑彌呼はひとり、彼らの方へ近づいた。そのとき、長羅は反輪の胸を踏みつけて、突然、地から湧き出たやうに、起き上つた。彼は血の滴る頭髪を振り亂して、柔かに微笑しながら、その蒼ざめた顔を彼女の方へ向けた。

「卑彌呼。」彼女は立ち停ると、劍を上げて身構へた。兵士達は長羅の方へ肉迫した。

「待て。」と彼女は彼らに云つた。
「卑彌呼、我は爾を迎へに、ここへ来た。」
長羅は腹に反輪の劍を突き通したまま、兩腕を擴げて彼女の方へ歩もうとした。しかし、彼の身體は左右に二足三足踏めくと、滴る血の重みに倒れるかのやうにぱつたりと地に倒れた。彼は再び起き上つた。

「卑彌呼、爾は我と共に奴國へ歸れ。我は爾を待つてゐた。」
「爾は我の夫の、大兄を刺した。」
「我は刺した。」
「爾は我の父と母とを刺した。」
「我は刺した。」
「爾は我の國を滅ぼした。」

では、奴國の兵を追ひながら、奴國の方へ押し寄せて行く耶馬臺の軍の餘波の聲が、一段と空に上つた。

「我は滅ぼした。」

長羅は再び踏踏みながら、彼女の方へ歩みよつた。と、またも彼の身體は、どつと倒れた。振り上げた卑彌呼の劍は、下がつて来た。長羅は尙も起き上らうとした。しかし、彼の胸は、地に刺された人のやうに、地を離れると地についた。さうして、彼は漸く砂の上から顔を上げると、彼女の方へ手を伸ばした。

「卑彌呼、我は爾を奪はんために、我の國を滅ぼした。我は爾を奪はんために、我の父を刺した。宿願を刺した。爾は歸れ。」
長羅の蒼ざめた顔は、地に垂れた。

「卑彌呼、卑彌呼。」
彼は恰も砂に吹くごとく彼女を呼ぶと、彼の臉は閉ぢられた。卑彌呼の身體は顛へて来た。彼女の劍は地に落ちた。

「大兄よ、大兄よ、我を救せ。彼を刺せと爾は云ふな。」
卑彌呼は頭をかかへると、劍の上へ泣き崩れた。

「大兄よ、大兄よ、我を救せ、我は長羅を撃つた。我は爾のために復讐した。ああ長羅よ、長羅よ、我を救せ。爾は我のために殺された。」
長羅と反輪と卑彌呼を残して、彼方の森の中

年譜

明治三十一年三月十七日誕生。大分縣宇佐郡長峰村に本籍あり、初めて小學校に入りしは大津市大津小學校。後、父の任地に從ひ轉々小學校を變る。父は測量技師なり。最も印象に残る地は三重縣伊賀國東柘植なり。此の地は母の生れし所なれば、多く此の地にて幼年期を送る。三重縣上野中學校を卒業後、早稲田の文科に入學。中途にして退學、復々再び入學。二十五のとき父死す。
大正十二年一月、「文藝春秋」同人となる。
同年五月、「日輪」を「新小説」に、「蠅」を「文藝春秋」に發表す。
同年八月、「マルクスの審判」を「新潮」へ發表す。
九月一日、大震災。
大正十三年十月、「文藝時代」を同人十七人と共に創刊す。新感覺派の文學運動、此の時より始まる。
短篇集「御身」を金星堂より出版。
同年十月、「無禮な街」を「新潮」へ。

同十一月、「愛巻」を「改造」へ。
大正十四年正月、「表現派の役者」を「新潮」へ、「櫻へる薔薇」を「新小説」へ。
同年四月、「園」を「文藝時代」へ。
同年七月、「靜かなる羅列」を「文藝春秋」へ。
同年八月、「街の底」を「文藝時代」へ。
大正十五年正月、「ナポレオンと田島」を「文藝時代」へ。
同年七月、「街へ出るトンネル」を「中央公論」へ。
同年八月、「春は馬車に乗つて」を「女性」へ。
同年十月、「蝶はどこにでもゐる」を「文藝春秋」へ。
昭和二年正月、「計算した女」を「新潮」へ。
同年二月、「花園の思想」を「改造」へ。
同月、短篇集「春は馬車に乗つて」を改造社より出版。
同年四月、「文藝時代」を解散。
同年五月、「手帖」を同人二十人と共に創刊。
同年七月、「醜態とした風」を「改造」へ。

同年同月、戯曲集「愛の挨拶」を金星堂より出版。
同年九月、「七階の運動」を「文藝春秋」へ。
同年十一月、「皮膚」を「改造」へ。
同月、雜誌「手帖」を廢刊す。
昭和三年正月、「眼に見えた風」を「文藝春秋」へ。
同年四月、「花婿の感想」を「改造」へ。
同年五月、「支那へ遊ぶ」。
同年八月、「笑つた皇后」を「中央公論」へ。
同年十一月、「長篇の一篇」「風呂と銀行」を「改造」へ。
同月、選集「新選横光利一集」を改造社より出版。
昭和四年三月、長篇の第二篇「足と正義」を「改造」へ。
同年六月、長篇の第三篇、「掃蕩の疑問」を「改造」へ。

海に生くる人々

葉山嘉樹

序。

葉山嘉樹

知は、自分と、他に読んで貰つても、大し
く知し、くずし、こ思ひ、作品はそんなに沢山は
書してぬぢい。

海に生くる人々。 誰が殺したか。

淫者物語。 芳御名の店よし。 船。 等は

友の範疇に属すと思つてみる。

今後、取し、くずし、作、あ、む、を、書、ま、ら、い、と

思、て、みる。

海に生くる人々

室蘭港が奥深く入り込んだ、その太平洋
への湾口に、大黒島が控をしてゐる。雪は北海
道の全土を蔽うて地面から、雲までの厚さで横
に降りまくつた。

汽船萬壽丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を
詰め込んで、風雪の中を横濱へと進んだ。船は
今大黒島をかはらうとしてゐる。その島の彼方
には大きな浪が打つてゐる。萬壽丸はデッキま
で沈んだその船體を、太平洋の怒濤の中へこは
ごは覗けて見た。そして思ひ切つて、乗り出し
たのであつた。彼女がその臨月の體で走れる限
りの速力が、ブリツチからエンチンへ命じられ
た。

冬期に於ける北海航路の天候は、いつでも非
常に險惡であつた。安全な航海、愉快な航海は
冬期に於ては北部海岸では不可能なことであつ
た。
萬壽丸甲板部の水夫達は、デッキに打ち上げ

る、ダイナマイトのやうな威力を持つた波浪の
飛沫と戦つて、甲板を洗つてゐた。ホースの尖
端からは、沸騰點に近い熱湯が迸り出たが、
それがデッキを五尺流れるうちには凍るので
あつた。五人の水夫は熱湯の凍らぬ中に、その
渾身の精力を集めて、石炭塊を積みやつた。

萬壽丸は右手に北海道の山や、高原を眺めて
走つた。雪は船と陸とをヴェールを以て遮つ
た。悲壯な北海道の吹雪は、マストに悲痛な叫
びを上げさせた。
生命のあらゆる危難の前に裸體となつて、地
下數千尺で掘られた石炭は、數萬の炭坑労働者
を踏臺にして地上に上つて來た。そして、今、
海上では同じく生命の赤裸々な危険に、その全
身を船體と共に暴露しつゝある、船員の労働に
依つて運送されるのであつた。

藤原六雄は、ランプ部屋へ入つて、ランプの
掃除をしてゐた。彼は、今年二十八歳のひどく
だまりやの、氣むづかしやであつた。そして、
一體彼は何か仕事をしてゐるのか、どうか疑は

しいほど、労働が嫌ひな性のやうに見えた。彼
の職務は倉庫番であつた。
ランプ部屋はブリツチに向ひ合つて、水夫室
と火夫室との間に、みじめに、小さく拵へら
れてあつた。藤原はそこでランプのホヤを拭き
ながら、水夫達が、デッキを掃除してゐるのを
見てゐた。彼はこの頃ボースンにも、一等運轉
士にも見込みが悪いことを知つてゐた。「スト
キ(倉庫番)にもワシデッキの時には手傳つて貰
はなきやならん。一萬噸も八千噸もある船とは
異ふんだからな」と、いつか水夫達全部が揃つて
飯を食つてゐる時にボースンに云はれたことがあ
つた。

「ふん、ストキとは倉庫番でことだ。倉庫番は
倉庫の番さへしてりや、それで澤山だらう」と、
彼は答へた。
——それ以來、どうも、俺は水夫たちの仲間
からまでも受けがよくない——と、淋しさうに、
ストキは考へた。

二

船のエンチンはフルスピードをかけてゐた
が、風と浪とで速力が全で出なかつた。未明に
出帆したのに、夕方になつても未だ津輕海峡沖

を抜け切らなかつた。その夜、高等船員側では室蘭へ引きかへさうかとの相談も行はれたが、それは実行されるに至らなかつた。

水夫達は、暴風雪がだん／＼猛烈になつて来るに連れて、その作業も平常とは趣を異にし始めた。船體は保険マーク以上に沈んでゐるので、十分に抵抗的であつて、波浪は一つも残らずデツキへと打ち上げた。そしてデツキは一面の海になつてしまつた。揉み込む水はなかく／＼小さな排水口からは急には出て行かなかつた。デツキには、ハツチの上を通るやうに、ライフライン(命綱)が張られた。いつデツキを通らうと試みても、そこは外海と何等異なる處はないからであつた。

浪はその山と山との間に船を挟んでしまふ。その谷になつた部分が船のヘッドから胴體へ進む時、次の山の部分がヘッドに打ち衝る。鐵製のわが萬壽丸も、この苦悶には堪へかねて、斷末魔の叫びを擧げる。ミリ／＼、ドタン／＼と／＼なる。その谷がやがて、ともへ行くと推進器は空中で空廻りをする、推進器は、飛行機のプロペラーのやうに空中で廻轉する。兎もなその船の太さほどの猛風をやうに吠える。特別装

じて、わが萬壽丸を吞まうとしてゐるのであつた。船は絶えず激揺き、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギンは絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決闘するやうに打ち合つた。船尾ではプロペラーが、その手を空に振り上げた。自然と人力とはその最大の力と、あらゆる智慧とを以て闘争した。

三

船を一郭として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戦つてゐる時に、船員たちは自分たちが、船のりであることを、この時以上に癢に感じ、心細くなり、衰れに氣の滅入ることはなかつた。そして彼等は、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意にも拘らず、自分の運命を哀れむのであつた。彼等は、眞つ暗な闇の中を電光が一時に、全く鮮明にパツと明るく照らす様に、この困難な労働の間に、感ずる處の彼等の地位は、全くハツキリした賃銀労働者の正體であつた。然し、それは電光と全く同じであつた。彼等は、すぐ、その仕事の方へ一切の注意を向けねばならなかつた。水夫等は、船首の方を済まして、船尾のハツ

置のないどの棚からも、いろんなものが落ちる。ランプのカップからランプが踊り出る。舵器は非常にその效力を減じられる。速力は今ではもう推進器の空轉の危険から、殆んど三哩位に減じられて、たゞ船首を風の方向から轉換しないやうにのみ總ての努力を盡してゐた。

汽室の眞上のコック座では、コックが、いつも一度で炊く飯を五度位に分けて炊かねばならなかつたし、お茶も同様な方法にして粥、汁物は作るわけには行かなかつた。コックは、石炭庫の中で、頭中を痛だらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかつた。水夫等は、デツキを洗ふ波浪からダンプ内への浸水を護るために、ハツチカバー(船中の蔽ひ)や、それを押へた金具や、又その上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかつた。それは危険な作業であつた。そしてこの危険な作業なしには、この船全體が危険から免れ得る方法

チへ行くために、サロンデツキに上つた時であつた、ブリツヂにゐたコーターマスターの小倉が、何か分らぬことを、體中で怒鳴りながら、物凄ひ勢ひでブリツヂから飛び下りて来て、サロンデツキを離れ方へかけて行つて、そのダラップをまた飛び下りた。

セーラーたちは、ビクリとした。のみならず、コック場のコックやボーイや交替で休んでゐた機関長や、ブリツヂの上の船長や、全部が小倉の飛んでつた行方を見守つた。小倉は、船尾へ駆けつけた。そこには、ブリツヂから探るステイムギア(蒸汽機)の鎖と、そのカバーとの間に、わざとのやうに、水夫見習が、右半身をうつ伏しに漕り込ませてゐたのであつた。小倉は、水夫見習が樂に出るやうにと思つたのであつたが、然し舵器は同位に船首を保つために、一割も放擲しては置けなかつた。そこへ水夫等は全部駆けつけた。あるものは、カバーの金板をバード動かさうと試みた。この間にも波浪は、船首甲板ほどではないにしても三四度、此處を洗つた。水夫全體の力と小倉の力とは水夫見習を、鎖とカバーの間から引つ張り出すことが能き

がなかつた。恰も意地の悪い馬が馴れぬ乗手にするやうに、船體は猛烈にその背を振つた。そしてその毎に綱杓が水を掬ふやうに、デツキは波浪を掬ひ込んだ。ロープは濡れて、因くたつて操作に非常な困難と滞滯とを招いた。然しそれは成し遂げなければならぬ仕事であつた。ハツチが水を飲むと云ふことは、文句なしに、簡單明瞭に、船體の沈没を意味するものであつた。五人の水夫とボースンとストキと、大工との八人が總動員で、この仕事を遂げた。

未だ二つのハツチが船尾の方に残つてゐた。そして、時間は今夕食に迫つてゐた。水夫たちは、飢ゑを感じた。けれども、海も飢ゑを感じた。けれども見習は、引きずり上げられた海死體のやうにだらりとして、眼ばかり宙につつてゐた。彼は直ちに、水夫二人に擔がれて、最も震動と轟音との甚しい船首の、彼の南京蟲だらけの巢へ連れ込まれた。仕事着を彼から脱がせることは最大の急務であつた。が同時に最大の困難でもあつた。まるで帆布作りの仕事着でもあつたやうに、それは凍りついてゐたのである。ついで来た藤原は、その腰のメスを抜いて見習の仕事着を上手に切り裂いた。そして、彼の寝間着が、上にかげられた。

ボーイ長の右手と右の肺の部分に紫青色の打撲傷が出来てゐた。そして左足の指が砕けてゐた。ストープがないために、水夫等は甚しく寒かつた。見習は、傷と、凍のために、若しこのまゝにして置いたらば、必ず始末は早くつくと思ふことを皆知つてゐた。そこでついで来たストキと、水夫二人は、各水夫の巢から、ありつだけの毛布を集めて、それをかけてやつた。そして、そのまゝ、全部彼等は船尾ハツチのカバー作業に駆けて行つた。船尾のハツチは船首のそれと同様の危険と困

難きをもつて、作業された。手の届きさうな低空を、雪雲が横飛びに飛んだ。中に、濃い雪雲は、マストに引つかゝつてそれを抜いてでも行くかのやうに、はげしくマストを揺ぶつた。水手達は、頭上迄に昇るかと思ふと、足下深く沈んだ。(船の動揺は、同時に水手達を動かすものだ。)ボーイ長(水夫見習を云ふ)の運命は、全甲板労働者の現在のすぐ背後に雲のやうに迫つてゐるのであつた。

船尾部分のハッチはこの上もなく厳密に閉鎖された。そして、次のは、機関室と、その上部に在る士官室、サロンデッキとの間に閉つてゐたために、以前の三つに比較して、作業は極めてあつた。そこで、藤原は、ランプを燈す準備をするために、再び「おもて(船首部分)へ歸つて行つた。

ランプ部屋へ入る前に、彼は先づ水夫室へ入つた。未だ十七歳の少年、水夫見習は、痛みに堪へかねて、「お母様、おとうさん」と、兩親を呼び求めては、泣いてゐた。そして、暫く息を詰めて、死のやうな沈黙の中へ落ちて行くのだつた。藤原は、ボーイ長の寝床の端板に凭れかゝつて、ボーイ長の顔を覗き込んだ。けれども、見えなかつた。一つの窓も開けられてゐな

い水夫室は、出入口から星の夜のやうな光が辛うじて這ひ込み得ただけであつた。殊にボーイ長のは二層床の下部に當り、光の方を背にしてゐたので、最も暗かつた。藤原は、自分の床から欄干をとつて、ボーイ長の枕頭に立てた。彼は白ベンキのやうに青ざめて、そしてくらくらのやうに衰へてゐた。

未だ、チーフメイトは、何等の手當もしには來なかつた。彼は、ボーイ長を慰めた、そして直ぐにチーフメイトが「膏藥」を持つて、のろ／＼來やがるだらう、奴等には、労働者よりも、プロックの方が比較にならぬほど重大なんだ、然し、心配しないがいい、皆がついてゐるからと云つて、ランプ部屋へ支度に行つた。

萬壽丸は尻谷岬燈臺沖にかゝつた。暴化はその勢ひを少しも収めなかつた。水夫等は、ボートやサンパンを吹き飛ばされたいやうに、それを、より一層強んど、吹き出し度い位に、頭丈に、これでは沈没した時に決して間に合はないと、證據立てられるほど、それほど頭丈に、くど／＼とデッキや煙突にまで、綱を引つ張つた。そして、この仕事は、波浪の恐れは全然なかつたが、動揺と、風と、

おまけに「てすり」がないので、海へ落ちると云ふ危険を伴つた。ボートデッキは、船中で一番高い部分であつて、それは士官室の屋根と天井とを兼ねてゐた。水夫達は、一本のロープを持つて、ボートの下へ仰向に滑り込んだり、ボートの外側——そこはデッキ一枚の幅しかなく、海面まで一直線にサイドなのだ——に、今縛りつける、そのボートに揺つて綱をからげるために、サイドへ足を踏ん張つて、海の方へ體を傾けたりした。

ボースンは、直ぐ前のブリッジから、船長が作業を見てゐたために、その亮けた頭を、章魚のやうに赤くして慌てたり、怒鳴つたり、焦つたりした。

四

險惡な薄暗がり、海上に這ひ出たために、右舷に尻屋岬の燈臺が感傷的に瞬き始めた。荒れに荒れる海上に、燈臺の光を眺むるほど、人の心を感傷的にするものはない。この海上の上は、今にも我々の命を奪はうとする程暴れ、喚いてゐる。そして、我々の家は宙天から地底へまで揺れ轉ぶ。そこには火もなく、燈さへもない。だのに、あそこには、燈臺が光る。その

燈臺は、しつかりと地上に立つてゐて、そこには家族がある。團圓がある。愛すべき子供がある。いとしい妻がある。そこには火鉢があるだらう。鐵瓶がかゝつてゐるだらう。正月の用意の餅が掲げてあるだらう。子供がそれをねだつてゐるであらう。「もうねんねするんです。ね、夜食べると、ボン／＼いた／＼ですよ。サ、ねんね」と、母は今年三つになつた子供を膝の上に抱き上げるだらう。さうして、可愛くて堪らぬと云つた風に、子供の頬にキスするだらう。さうして、夫と顔を見合せて微笑むだらう。さうして、「明日は又随分澤山鳥が落ちてゐることでせうね。こんなにしけるんだもの、鳥だつて船だつて敵ひませぬわね」と、云つて、火鉢から鐵瓶を卸して、茶でも入れるだらう。そして、子供に隠して、その父から一枚の煎餅を出して貰つて「坊やはいゝ子ね、サ、お菓子」と云つて突し抜けて子供にそれを與へるだらう。

だのに、俺達は、凍えるやうな風と、メスのやうな浪と、雪のやうに冷たい資本家や、水のやうに冷酷な船長の下で、労働をしてゐるんだ。俺は何だつて船員になんぞなつたんだらう。彼等は殊に家持の下級船員はさうであつた。彼等はさうでなくてさへも、その家庭に堪らなく曳

きつけられてゐるのに、暴化のときには、その心持は長い刑を言ひ渡された囚人が、その家族のことを身も心も痛せ砕けるやうに懸ひ慕ひ、氣遣ふのと異なる處がなかつた。全く、今では、兩舷から、鯨油を流してさへゐる位であつたから。鯨油を流すことは、暴化も甚しくならなないとやらなことであつた。

尻屋の燈臺はセンチメンタルに瞬く。日は暮れかけて、間は、波と波との谷間から煙のやうに忍び出しては白い波浪の飛沫に、蹴飛ばされてゐた。舵手の小倉は、船首を風位から變へないやうに、そのあらゆる努力を傾注してゐた。彼の眼はコムパスと、船の行方とを、機械的に注視してゐた。

と、本船の前左舷邊かな沖合に、一般の汽船が見えた。「あ、汽船が！」と、小倉は無意識に叫んだ。船長もチーフメイトも誰もがブリッジの左舷へ集つて、望遠鏡のレンズを向けた。この少し前から、ボートデッキで、サンパンの下にもぐり込んで仕事してゐた、水夫の波田芳夫と云ふのも、今小倉が見付けたのを見付けて、一人でサンパンの下から眺めてゐたのであ

つた。ブリッジでは望遠鏡があるために、その汽船は救助信號を掲げて、難破漂流しつゝあるものであることが分つた。ブリッジからは、直ちにエンヂンへ向けて、フルスピードを命令した。一つ救助に出かけよう云ふのであつた。

全乗組員は難破船が見えること、その救助に向ふことを直ちに知つてしまつた。そして、全員はボートデッキへスタンバイした。わが勇敢な、而も自分も腹半分水を飲んだ半溺死人のやうな、萬壽丸は、その臨月の體で、目的の難破船に、僅かに船首を向けた。極めて、それは僅かの程度であつた。が、本船はグリップと傾いた。そして見る見る中に、その舵が向いて居ないに拘らず、グン／＼その頭を振り始めた。そして、同時に物凄いな怒濤が、船首、船尾の全部を吞まうとするやうに打ち上げて來た。

船長は、今云つた許りであつたにも拘らず、方位を元へ返した。本船は極めて短い五分とかからぬ間に、殆んどコースを半回轉しようとしたのであつた。難破船の稍近くへ近づくと、能くは、本船はその船首を非常な努力の下に従前通りの

位置に返してしまつた。
 難破船を救ふと云ふことは、本船を一緒に沈める計畫になると云ふので、船首はもうその向きを換へなかつた。けれども哀れな兄弟たちの乗り込んでゐる妹の難破船は、段々我々の視野に大きく明瞭に入る様になつた。我々は、今のコースを以て進むならば、四哩位の側を通過するであらう。

波田は、サンパンの下から這ひ出して猶も一生懸命に、煙突にもたれて、寒さと、個み處を同時に得ながら見入つてゐた。狂犬の口を激ふ泡のやうな怖ろしい波浪と、この夕時とに、あの船は吞まれてしまふんだ。彼は自分が二度も沈没に際會した時の事を思ひ浮べては、その難破船に射込むやうな眼を投げてゐた。

その小さな五百噸位の小蒸汽船は、北海道沿岸廻りの船らしかつた。今やその煙筒からは燃え残りの煙草程の煙も出てゐなかつた。汽船に浸水したのはもうずつと早いことだつたらう。そのマストの下の方には、棧橋に流れかゝつたばろ布のやうに帆布が、まといつてゐた。汽船に浸水してから、どこかのカバでも外してマストに縛りつけたものであらう。僅かに、デッキの上でバタ／＼と、その切れつ端が洗濯

したおしめのやうに振れてゐた。
 それにしても船員は、ブリツヂにも、マストにも、デッキにも、どこにも見えなかつた。津經海峡を越す時に命を捨てて、ボートでも本船を捨てたのであつたのかも知れない。又は、その各々の室に凍えた體を、動搖のまゝに、お互ひに打つ掛け合つたり、追つかけ合つたりして、樂しみのなかつた生前の勞働者の運命を呪ひ悲しんでゐるのかも知れない。然し、この暴化はそれほど長く續いた譯でもなかつた。本船の出帆の前日が高潮であつたのだから未だ二晝夜しか経つてゐない。船員は、或は、一室に集つて、別れのための最後の貧しい食事でもしてゐるのかも知れない。

「あゝ、彼は二度まで沈没船に乗つてゐた。一度は開つ腹を切り切れ、一度は衝突だつた。が、どちらも瀬戸内海で、一度は春の末、一度は眞夏であつた。そして、そのどちらの時も救はれた。けれども、北海道の冬の海では逆も助りつこはあるまい。彼は、瀬戸内海で沈められた時に、海の中に飛び込みざま「助けてくれ」と怒鳴つた悲鳴を今でも思ひ出せる。その叫びを擧げる利那は全く、ありとあらゆる記憶、あらゆる感じ、それ等のものが、一度に總動定でもするやも持たず、誰も甲板に出ないであらう。出られないのだ。途中で仆れてしまふのだ。

そして、漸く、最後の一人がデッキへ這ひ出た時には、今汽笛を鳴らして通つた船は、浮べる一大不夜城の壯觀を見せて、三哩も行き過ぎてゐるであらう。

このやうにして、わが萬壽丸は汽笛を鳴らし通つた。その汽笛を微に聞いて、今立ち上らうとして、その凍えた體に最後の努力と藻掻きとを試みてゐる兄弟が、その船の中に居ないだらうか、その頼りない捨てられた犬の子のやうに衰れた形をした船の中に。

鐘が鳴つた。夕食である。水夫は水夫室に、火夫は火夫室に、各々入つて行つた。

難破船は、蒲團の中に、暴れ狂ふ怒濤の中に、傳奇小説の中で語られた悲しき運命の船の如くに、とり残された。

藤原は、船尾にランプを吊り上げながら、残された船を見送つて、堪へられない寂しさと、憤とに心を燃した。

「あの船には、少くとも二十人の乗組員はあつただらう。それが養つてゐる、同じ數位の家族もあつただらう。あの中で二十人は凍死したか、ボートで溺死したか、どちらにしてもあの

うに頭に浮んで来た。そして、「十八では未だ死ぬのに、二年早すぎる」と、彼は思つた。何で二年早すぎたのか自分でも分らない。けれどもハツキリ自分は二年早すぎると思つた。おゝ！もし、あの船の人たちが、死んだとすれば、皆他と同じ感じを、抱いて死んだことだらう。死ぬるのには、人間は何歳になつても二年早すぎるのだと、自分はこの頃考へるやうになつたが、全く、どの位多くの人が二年宛早く死んで行くことだらう。それにしても、この船長は何といふ冷酷、残忍な奴だらう。僅か四哩や五哩より離れてゐないのに、その最後を見届けようともしないとは。自分の悦樂のためにはこの船長は俺達の生命を、いつでも艦の前に投げてやるだらうに。彼は、あの沈没船に代つても、又この船員たちのためにも、船長と聞ふ時が必ず来ると信ずると、波田は考へに耽つた。

難破船はますます近づいた。日は暮れただれども、未だ夕明りである。船は、今ならば、もつと難破船へ近づくとが能きるのであつた。が、わが、勇敢な萬壽丸は船員全員の希望にも拘らず、船長の一言によつて、冷やかに姉妹の死を見捨て、去ることになつた。そして、本船には、救助不能の信號が掲げられた。相手へ知

五

「人間が生きて行くためには、どうしても人間の生命を失はねば生きて行けないのか、人柱！俺達は皆人柱なんだ！」

水夫室では、水夫達が、犬ころが唸り合ひながら食べると同じやうに、騒ぎながら、夕飯を食つてゐた。

負傷したボーイ長の側には、藤原と、波田とが居た。波田のベッドは、ボーイ長のと上字形に隣合つてゐるので、自分のベッドで、頭

をかめながら、うまい夕食を攝つた。全く字義通りに「喉から手が出る」程であつた。胃の腑へ届く食物は、そのまゝ直ちに消化されて、血管を少女のやうな元氣さと華かさとで駆け廻るやうに感じられた。彼は飯を口一杯に頬張りながら、ボーイ長の足許に波田と並んで、これも頬張つてゐる藤原に話しかけた。

「チーフメートは来たかい」

「未だだよ」藤原は、全でそれが波田のせゐでありでもするかの様に、膨れつ面をもつて、答へた。

「随分無責任ぢやないかい。三時間も打つ捨らかしとくなんて」

「距離が遠いんだよ。距離が、奴等のはね」藤原は謎の様に云つた。

「ハ、ハ、ハ、なるほどね、サロンから、おもてまでちや三時間も来られねえや」波田は、冗談だと思つて笑つた。

「五感と、神経中樞との距離がさ。鼻と口との距離と同じ程なんだよ」

ストキはひどく憤慨してゐるやうに見えた。

「それに、かう云ふことに馴れて、無神経になるつてことは、それが仲間のことであると、なほさら善くないね」

藤原は、話がむづかしいので、有名であつた。彼は漢語見たいなもの——仲間の間でさう云つた——を使ひたがる癖が骨に沁み込んでゐるのであつた。

未だ食事が、始められて間もなく、チーフメートは、ボーイに「救急箱」を持たせて「大急ぎ」で駆け込んで来た。

水夫達は食事を中止した。そして、水夫見習のベッドを、チーフメートと一緒にとり巻いた。

「ボーイ！ こんなに暗くちや何も分らんぢやないか、蠟燭をつけて来い。五六本！」と、チーフメートは一發放した。

かくて、蠟燭はつけられた。ボーイ長がそこへ駆けつけてから、三時間目に初めて、彼の室は燈で照らされた。彼が船へ持つて来たものは、その體と、その切り捨てられた仕事着と、初期の禿頭病とだけであつた。

彼は、陸上でひどく苦しんだ。彼の腕はひどく貧乏の上に、兄弟が十一人もあつた。彼は、小さい時分から、自分を養ふのは自分でなければならぬことを感じさせられて来たのであつた。

彼は、訴へるやうな目附で、又、彼のそのや

うな負傷にも拘らず、チーフメートに直接物を言ふことを恐れて、遠慮勝ちに「痛あーい」と叫んだ。

チーフメートは何でも構はず、ボーイ長の左半身全體に、イヒチオールを塗りまくつた。彼は一分間でも早く彼の義務が終ればいゝのであつた。醫者のやる様なことが、彼の義務であることも痛に際ることであつたが、それは、彼がそれでパンを得てゐる以上、仕方のない災難なのであつた。彼は、彼もパンのために、そのいやな仕事を持つてゐることを知ると同時に、もつと悪い條件の下にパンを求めてゐるものがあり、それが「おもてのならずもの」でもあることを知らねばならない筈であつた、ところが、彼は、ブルジョアが、彼と自分を區別してるとすつかり同じやうに、彼とセーラー等とを區別してゐた。「俺は紳士だが、奴等は労働者だ」或はもつと正確には「俺は人間だが、奴等はセーラーだ」と。

チーフメートは、限りなき嫌惡の情を含みながら、ボーイ長を減茶苦茶に、イヒチオールで塗りまくることを、(面倒臭い餘りに、さうするのではない)と云ふ風にセーラーたちに見せた。彼は爲すなければならぬことの形式だ

けをやつて、両も感謝の念をセーラー達から盗まうとさへ企んだのであつた。

黒川鐵男、これがチーフメートであつた。黒川は、イヒチオールを塗りまくる間に、口をきくことは、それほど仕事の能率を妨げないし、又、それ以上仕事を、汚くも困難にもしないで考へた。そして彼がどんなに、この「蠟けら」のやうなボーイ長に對してさへ、人道的であるかを見せてやることはいゝ。と彼は考へた。

「おもては全く、寒いね、そしてまるで眞つ暗ぢやないか」と黒川は口を切つた。彼はボーイ長の胸部にイヒチオールを塗布しながら云つた。

「満船の時はどうも仕方がありません」と、ボーイメンは鞠躬如として答へた。全で、全で、寒くて、暗くて、汚くて、狭いのは、ボーイメン自身の罪でもあるやうに。

「これぢやいくらお前等でも堪らないなあ」

「なあに、メートさん、新造船だから、いゝ方ですよ」とボーイメンは答へた。

「暗くて寒いことあ今始まつたことぢやないや、おまけに風呂だつてありやしない、これでもおれ等は、人間並は、人間並なのかい」と藤原が後ろから、燃えるやうな毒舌を打つつけた。

チーフメートは早速方向轉換の必要を痛感した。

「ボーイ長の傷は存外軽くてすんだね。俺はもうとても駄目だと思つてゐたんだよ。命拾ひしたわけだね」

「さうさ、すぐたばりやもつと傷が軽いわけさ。手がかゝらねえからな」又藤原が口を出した。

セーラーたちは、何か起りはしないかと内心好奇心に驅られて「事」の起るのを待つてゐた。

「黙つてろ！ 餘計な口を叩くな！」チーフメートは途々爆發した。

「黙つてろ？ 黙るさ。だが、手前等にや手前等の命は大切でも、人間の命が、どの位大切かつてことは分る時はあるまいよ。ヘッー藤原はそのまゝ自分の鼻へ上つて、煙草に火をつけ

彼は明白にチーフメートに挑戦した。

戦争はすぐ開かれるか、後で開かれるか、どんな形に於て開かれるか、それは水夫等全體を昂奮の極に追ひ上げた。

黒川一等運轉手は彼の策謀が失敗したことを承認した。そして、多分この事はこれだけで片がつかないだらうと、云ふことも分つた。長

とに迫られてゐたのだつた。

六

安井の手當がすむと、水夫達は、改めて、食卓に就いた。そして、いつでも安井がボーイ長の職務として、食事の準備、後片附等はするものであつたが、今日は、波田が引き受けた。

「安井君、何か食べたくなかないか」と、波田はボーイ長に訊いた。

「喉が潤いて、腹が空いて、堪らない」と、彼は辛うじて答へた。

「そいぢや今持つて来るから待つて呉れよ」

波田は、コックに、卵を呉れるやうに頼んだ。

「卵なんぞ贅澤なものがおもてに使へるかい、ぼけなす奴！」波田は一擧の下に、卵なんぞ、おもての者の口に入りかねることを教へられた。然し、若し、卵がなければ、洗動物を呉へるのに困るのであつた。

「どうだらう、ボーイ長が困り物は食べられないだらうと思ふんだが、何か裏で食べるやうなものはないだらうか、とも(高級海員の事)のコーヒーへ入れるミルクを一罐だけ分けて貰へないだらうかなあ」波田は食餌のことは、チ

ーフメイトが醫者序にやるべきものだと思つた。けれどもまた「やるべきこと」は他達だけにあるんだと思ひかへした。

「それぢやシチャード(司廚司)へ話して見ろ！一兩位出しや分けられねえこともねえかな、ぐれえなことだらうぜ」

このコックはおもての食費を削減化すために、ともこのコックから、給料を下げても、おもてへ一つ船で鞍がへした、途轍もない悪であつた。

「この野郎、鼻持のならねえ野郎だ」と思ひながら、波田は、シチャードへ、ミルク一罐と、卵十個分けて貰へないかと交渉した。

「ボーイ長にやるんだつて、あゝ、いゝとも、持つて行きな、さうかい、ぢやあパンを一斤許り持つてつて、牛乳と卵とで潤してやるといゝや、ほら、こゝに砂糖と、それだけでいゝかい、そしてどうだね、ボーイ長の容態は」シチャードは親切に倉庫から、それ等のものを策へ出して呉れた。

「どうもありがたう。金は後でおもてから拂ふからね、當分濟まないが借してて呉れないか」波田は全く嬉しかつた。

「あゝ、そいぢや、ありがたうよ」

波田は、ともかくそれ等のものを持つて来てボーイ長に呉へた。

彼は飢えた狼のやうに食り飲んだ。ボーイ長が食慾を失つてゐないことが、波田には大層心強く思はれた。

彼が安井のために、食事の支度をする間に誰かが食事を終つてゐた。そして、茶碗や、徳利(醬油)はころばないやうに、各々その始末すべき處へと仕舞はれてあつた。彼は、それから、又、自分の分を繼續しなければならなかつた。船の動搖は甚しかつたが、満船してゐる關係上、動搖以上に浪の打込みが甚しく、そのため、水夫室の頭上では、鎗が浪と衝突して少しも緩みが来ると、今にもサイドを押し割りさうに、メリ／＼と鳴つた。

波田は、それ等のことには、外の誰もと同じく馴れ切つてゐるので、二度目の夕食をうまく食ふことができた。

彼は、腹には詰め込みながら、耳には、セーラーたちの「煙草」の話を聞いた。暴化後では、きつと話がしんみりするものであつた。いつでも巫山戯るにきまつてゐる三上さへも、一二

度極端な、女郎に關するその話題を提供して見たが、反響がないので、それ以外に話すことを全然持たない彼は黙りこくつて、すぐにその寢床にもぐりこんで、三十分間をぐつすりとおもてのことに決めたらしかつた。

疊敷には能きない形ではあるが、それをその面積に換へれば六疊位は敷けるだらうと思はれる「おもて」には、上下二段にベッドを作りつけて、水夫長、大工、船取を除いた、水夫五人と、おもてのコックが一人と、ストキとが寝るやうに出来てゐて、その中央に、テーブルと、ベンチとが作りつけてあつた。で、おもてでは、一切合切がキリ／＼一杯であつた。食卓は、用事が済むと、室の真ん中に立つてゐる柱に添うて上に吊り上げられるにしても、矢張り一杯々々であつた。そして道具置場は、その食卓の下を滑つて、船首の尖つた處が、さうであつた。

わが萬壽丸は、甚しく團扇に似てると云ふ定評があつてさへ、矢張り船の船首の部分は、いくらか失つてゐることが、これで見ても分るのであつた。

そして、窓は總て、二重に嚴密に閉ざされ、デッキへの鐵の扉までが嚴重に閉ざれたから、空氣は全く動かなく通はなくなつてしまつた。そし

て、この、太鼓の内部のやうな船室は、皮であるべきサイドの鐵板が、波濤に叩かれて堪らなく薄くのであつた。

その間にボーイ長は、その負傷の疼痛を、陸上の父と母とに訴へた。指子木のやうに圓い神懸の持主であるセーラーたちも、環塊がかくの如くであるために、ひとりでしんみりしてしまふのであつた。そして、彼等は、いつでも、しんみりするのを好まなかつた。それは、彼等を、此世の中で一番詰らない役割に引張リ込んでしまふからであつた。と云ふのは、いつでも彼等は最も詰らない役割であるのだが、それを本たうに彼等に手きびしく覺らせるからである。誰でも、自分が踏みつけられ、馬鹿にされることを喜ぶものはない。わがセーラー達も、しんみりする時必ず、さうであることが分るやうに獨りで考へるのであつた。そして、船乗りの氣質として、そんなに自分たちを「コミヤル」(餘剩労働を搾取すると云ふ意が含まれてゐる船乗り言葉)奴は容赦しない筈であるのだが、それが能き得ない處に、彼等が、しんみりした度に情氣込み、次いで自暴自棄になると云ふ結果が生れるのであつた。

彼等は、自分達が人間であることを知つてゐ

た。そして人間らしからぬ生活に、追ひまくられてゐることを知つてゐた。そして、彼等はどうすれば、これらの不都合な生活から人間らしい生活へ入れるかを、絶えず考へ、その機會を視つてゐた。そして彼等は、その考へを繼めることも、機會を捕へることも能きないで、「小資本を貯めるための、極めて短い時間だけ、この危険な仕事によつて金儲をしよう」とした最初の考へは、そのまゝ、彼等を怒濤の上で老年にしてしまひ、摩滅した心棒にしてしまふのであつた。

七

「俺たちは何だつてこんな泥棒掘りに、いちめられるんだらうなあ」と、藤原が溜息と一緒に吐き出すやうに云つた。一時の昇格から、夕方ボーイ長のことで来たチーフメイトとの事を思ひ出して、きつとよからの豫感に裏はれたのだらう。

「それやあ君、泥棒掘だからさ」と小倉がへうきに答へた。彼は人に落胆させまいとして、いつでも首を折る氣のいゝ正直者であつた。

眞つ黒な中に、噴みつかんばかりに白い泡を吐く、波層の中へと突進した。デッキの最高部は極めて狭かつた。従つて、後部のハッチデッキを浪で蔽ふ時は、われ／＼は、本船と切り離された板片の上に縋つてゐるやうな心細さを感じた。凍寒はナイフのやうに鋭く痛くわれ等の薄着の肌をついた。飛沫は絶えず、全部の者を縮み上らせた。

レットが、その緒を引つ張る速度が緩むと、それは、ハンドルに依つて止められる。そしてそのワイアの長さが、そこで讀まれる。それを讀み終ると、二つのハンドルでその沈鐘を巻き上げねばならない。それが水夫の仕事であつた。深海測定器であるから、おまけに進行中であるから、鐘は斜に流れつゝ海底に到達するのである。百米突、二百米突などのワイアの長さを讀み上げられた時、われ／＼は、海の深さよりそれを巻き上げることの困難さに縮み上る。

それは極めて、それそのものとしては軽いものであつた。けれども船の進行と、浪の抵抗とは、釣つた魚が愈々陸上に上るまでは、その幾倍もの大きさのやうに思はれる、より以上に、その小さな沈鐘を重くした。そして、その手巻ウインチは、極めて小さく出来てゐたために、

らぬ程であつた。それに、今朝からのワシデッキとハッチの密閉とで水夫達は、その着物の大部分を濡らしてしまつた。(波田、三上の如きは、その全部を二重に濡らした、詰り一揃の服を二度濡らした。)それで、今、誰の仕事着も沈ひ濡がれて、汽船場の手すりに、乾かされてあつた。

水夫達は起きるとすぐ、猿股一つでか、或は素裸でか、寝間着か、汽船場まで、仕事着をとりに行かねばならなかつた。けれども裸で、その寒さに道中はならなかつた。

波田は、自分の仕事着が未だ、今乾された許りであるので、いくら汽船場の上でも未だ生乾きであることを知つてゐた。従つて彼は、猿股一つの上に合羽を着て作業しよう決心でゐた。處が仕事着は小倉が彼に一つ呉れることにしようとして送んだ。それで、彼は、油輪のキャンパスのやうな、オバーオールを一つ手に入れることができた。それにはベンキで未來源の輪のやうな模様、ベター一面に彩られて、ゴハ／＼してゐた。

「それでも、ロンドンで買ったんだぜー小倉は云つた。

「船来の乞食が着てたんだらう。こいつあ工合

ワイアを、一回轉に、極めて小距離、最初は二時後に三時位より巻き取ることができなかつた。そして、それが車軸へ来るまでに、二人の水夫は、グリスを以て、ワイアに塗らねばならなかつた。これは、一々塗ることが不可能であるために、二人のセーラーはワイアをグリスのついたウェスで握つてると云ふ形になつて現れるのであつた。

巻き方は骨が折れた。と同時にグリスの塗工も寒かつた。そして、その全體の者にとつて最も苦痛な點は、凍寒と、眠いと云ふことであつた。

寒さは全く著しくかつた。合羽をバリ／＼に凍らせた。皮膚が方々痛かつた。齒が合はなかつた。體が痺れて来るのだつた。そして、眠りは、もつと強く、水夫たちを襲つた。賃銀労働のあらゆる刹那が必要労働と、餘剰労働とに分別され得るやうに、あらゆる刹那に、寒さと、眠さとが、全で相反した刺戟を彼等に與へた。

寒さに對しては、彼等は必要以上に、體を揺り動かした。眠さに對しては、彼等は膝關節が、グラ／＼して、作業が空になるのであつた。そして、それが、お互ひに、眠ごっこをしてゐるのであつた。それはまるで、冗談半分によつ

八

「今から、ディーブシレット(深海測定器)を入れろつ」と、それから水夫室へ来てその眞ん中で大聲に「スタンバイ」と怒鳴つた。

彼は、今日晝中の労働が耐しかつたので、夜は休みになるものだと思つてゐた。暴化は稍々その勢ひを弱めはしたが、而も、船首甲板などは一浪毎に怒濤が打ち上げて来た。そして、水夫室の出入口は、波の打上げの毎に、素晴らしい水量の多い溜になつて、上のデッキから落ちて来るので、一々その重い鐵の扉を閉さねばならぬ程であつた。それに、今朝からのワシデッキとハッチの密閉とで水夫達は、その着物の大部分を濡らしてしまつた。(波田、三上の如きは、その全部を二重に濡らした、詰り一揃の服を二度濡らした。)それで、今、誰の仕事着も沈ひ濡がれて、汽船場の手すりに、乾かされてあつた。

水夫達は起きるとすぐ、猿股一つでか、或は素裸でか、寝間着か、汽船場まで、仕事着をとりに行かねばならなかつた。けれども裸で、その寒さに道中はならなかつた。

波田は、自分の仕事着が未だ、今乾された許りであるので、いくら汽船場の上でも未だ生乾きであることを知つてゐた。従つて彼は、猿股一つの上に合羽を着て作業しよう決心でゐた。處が仕事着は小倉が彼に一つ呉れることにしようとして送んだ。それで、彼は、油輪のキャンパスのやうな、オバーオールを一つ手に入れることができた。それにはベンキで未來源の輪のやうな模様、ベター一面に彩られて、ゴハ／＼してゐた。

「それでも、ロンドンで買ったんだぜー小倉は云つた。

「船来の乞食が着てたんだらう。こいつあ工合

が「いや」と彼は云つた。

水夫達は皆各々スタンバイした。そして、ともへと出かけた。

暗黒は海を横にも縦にも包んでゐた。間は、その見えないうちであらゆる物を縛り、締めつけ、引き摺り、轉ばしてゐるやうに思へた。それは總ての物を纏めて引つくるみ、その中の部分を締めつけた。風が波に打衝かり、マストに突き當り、リギンに切られて、泣き喚いた。海はその知らぬ底で大きく低く、長く、長く、長く、長く、わが萬壽丸は、その一本の手をもつて、相變らず虚空を掴んで行き悩んでゐた。船尾の速度計は三哩を示してゐた。

水夫たちは、倉庫からグリスを取り出して、ウェスにつけてその手に握つた。

そして、ボースンが、ランプをもつて、レットの機械を照らした。

ともからは、波田が以前から、その後頭の左寄りの處に、吋丸位で深さ二寸位の穴を「ブチ開け」てやりたい、と常々希つてゐたセキメーツ(二等運轉手)が来た。

硝子管は沈鐘の中へ収められた。そして、パネが外された。風の緒のやうなワイアを引つ張つてレットは、ガラガラララと船尾から、逆巻く、

水夫等は、八度、それを繰り返した。それは、八日、航海するより、八日拘留されるよりも長かつた。その間に四時間半を費した。彼等は濡れた敷のやうに疲れ衰へてしまつた。セキメーツは徹夜の決心を、自分のために撤回した。彼も今は濡れた敷であつた。水夫がその南京島の待ち草臥れてゐる巢へ藻漕り込んだのは、午前一時前十五分であつた。そこには眠りが眠つた。

九

一切を夢の中に抱擁して、夜は更けた。夜、そのものは、それでいゝのであるが、おもての船室は、一八六〇年代の英國に於けるリース仕上の家内労働者が、各一人に對して六十七乃至百立方呎、呟しか空気を與へられてゐなかつた。マルクス——のと較べて、もつと甚しかつた。われわれは、夜の明け方まで、死のやうな眠りにつく、そしてその死のやうな眠りから覺めて「繭の蓋」を開けて、外氣を室内に吹き入れしめるときに、「あゝ、眠が覺めた」と思ふ代りに「よく俺は蘇生したものだ」と思ふのであつた。

我々はしげの場合、殊にオゾーンが多いに

も拘らず、暗んど窒息死の瀬戸際まで眠る。そのために、我々の體中は一晩中に鈍く重くなつてゐる。そして、睡眠が與へる元氣恢復と云ふことは思ひもよらないことであつた。われわれは、水夫室なる繭詰の、屏なる蓋を開けて、初めて、人心地がつくのであつた。これは、本文と關係のないことであるが、この時乗組んでゐた人間の中、藤原、波田、小倉、西澤、大工、安井は皆、結核患者であつた。そして、この空氣汚濁は、そのことに起因して、肺疾患者を海上に於て生産する矛盾を散てした。

繭詰の内部に、生きたものが居ると云ふ結果は、どんなものであるかは、明に誰にでも想像のつくことであつた。たゞそれは、その蓋を開けた時に、蓋の外の清浄さによつて、非常に救はれた。彼等が五時間眠つてゐる間に、海は風いだ。アルプスのやうに骨張つてゐた海面は、山梨高原のやうにうねつてゐた。マストに、引つ懸り打つ衝つた雲は、今は高く上の方へ昇つて行つた。發作の静まつた後のやうに、彼女はおとなしく、靜に進んだ。

りにすることが能きる。そこは、そのまゝ天國だと、考へるやうなものであつた。處が監獄の扉の外にも、彼の考へた自由はその影もなかつたやうに、又甲板の上で考へたやうな自由と幸福とは、決して陸上にもありはしなかつた。彼等は、それを、彼等が上陸する度に味つた。そして、陸上で自分の財布を地面へ叩きつけ、自分の着てゐるその不恰好な汚れた着物を引き裂き、労働で荒れた、足の踵のやうな手の皮を引ん削いでやり度く思ふのであつた。それ等が、彼等が折角憧れ切つた陸に上つたに拘らず、彼等から自由と幸福とを追つ拂つた。労働者は、自由や幸福や、人間性が、賃金を得つゝある間に自分に與へられ、或は自分からそれを得ようとするのが、全然不可能なことであることを知るやうになる。人間が牛肉を食ふと同じやうに、人間がメスを食ふ時代の存続する限り、労働者は、その生命が鞭の下にあることを自覺しなければならぬ。水夫等は、そんな風なことを感じた。と思ふと、そのすぐ次には、他一人でいくら焦つて見ても始まらない話だ、坊主でも女郎買をするではないか、他等は人間の中の屑扱ひにされてゐるんだと、社會が自分に強制する處の職分及生活範圍を、

室蘭出帆の日は日曜であつて、作業、それも並々ならぬ雑作業だつたので、今日の月曜は日曜延べで休みにするやうに、「とも」へ頼みに行くことにしようではないかと「ならざるもの」共は、商船出帆を擱へながら相談した。「それは願ふまでもなく至當の事ぢやないか。黙つて休みやいゝさ」と藤原は關争的に主張した。

「これは、一々その都度々々、頼んだり頼つたりしちや、面倒だし、その度にかげ合ひに行く者は悪者になるやうだから、一つ永久的の取り極にしたら、日曜日、出帆入港にて休日となりたる節は、翌日を公休日となすこと」とか何とか、四角張つて、約束しといたら、そんなに、毎々間違つがないでも済むだらうぢやないか」波田は提案した。

「そんなにしなかつたつて、さういふもあることぢやないんだから、今日だけ願つていたらいいぢやないか」とボースンはなだめた。哀れなボースンよ！年は寄つてゐるし、子供は多いし、暮しは苦しいし、喉は病氣だし、この臆病な禿のお爺さんに従ふことに皆決めた。ボースンは、顔で憤つて、洗ふとそのまゝ、チーフメートの處へ頼みに行つた。

船は大うねりに乗つて、心持よく泳いで行く。右手には遙に本州北部の山々が、その海岸まで突出して、豪壯なる姿を眞つ白く見せた。寂しい山河である。そこには我等の寄るべき港とは殆んど無いのであつた。人煙稀れな森林地帯でもあるやうに、原始的な草原でもあるやうに感じさせる景色であつた。ボースンの返事のあるまで、水夫達は、デッキへ上つて、懐しき陸を眺め、昨日困らされた海を見入るのであつた。

風は、今日は昨日程寒くなかつた。黒潮の影響を受けてゐるので、デッキへ上つても、メスで頬の肉を裂かれるやうな痛さを感じることはなかつた。

水夫達は皆、それらの嗜好に従つて、漸く着いてからの行動や、食物に就いて空想に浸つてゐた。デッキの上では、彼等は陸にさへ上れば、あらゆる快樂がある、それが待つてゐると思ふ。自分たちが縛られ、奴隷扱ひにされ、自由を略奪され、労働力を搾取されてゐることは、陸と、デッキとの間に海が横はるからであると、無意識の中に考へてゐた。それは、丁度牢獄に監禁された囚人が、赤い高い煉瓦塼の彼方には、絶對の自由がある。自分はそこでは自分の好む通

自分から容認してしまふのであつた。彼等は、陸でも、これより月給がよいのに、俺は海の上で何故こんなに少いのだらう。俺も陸に上つて働けないだらうか、逆も働けない口があるまい。と、彼等は法則通りに思ひ込んでゐるのであつた。

ボースンが「とも」から歸つて来た。そして「特に今日は休暇を與へる」と云つたことを傳へた。

この報告は、何等の批評もなく皆に受け入れられ、喜ばれた。「馬鹿にしてやがらあ、『特に』だ」と、嬉しそうに叫びながら、誰かが、何を爲るためにも分らずに、そのベッドへと駆け込んで行つた。そしてこの貴重なる、出し盡された休日等を彼等は、大抵眠つてしまふのであつた。全く、いつもの例の如く、この時も、一人残らず、その巢へもぐるが早い、眠つてしまつたのであつた。唯一の切實なる欲求を睡眠に置いてゐるセーラーたちは、そのことから見ただけでも、どの位彼等が過勞し、酷使されてゐるかが分る。

一〇

朝食は八時である。波田は、ボーイ長が負

傷したため、仕事の間炊事の方をやらねばならなかった。二時間許り間があるので、彼はその時間を、自分のベッドへともぐり込んだ。彼は、八時になると、コックから起きた。彼は、おもての人たちが食べるやうに、大きな味噌汁と、お餅とを、コック場から抱いて来て、柱に添うて吊り下げた、テーブルの上へそれを載せた。それから彼はあらゆる準備を終へて「飯だ」と怒鳴った。

ボーイ長には、昨夜通りに、味噌汁を添へて與へて、彼は第一番に朝食に就いた。それは、全くうまい飯であつた。味噌汁もうまかつた。澤庵も、……

波田が食つてゐる中に皆も眠い目をこすりこすり起きて、飯にとりかゝつた。船の飯はうまかつた。それは、全く澤山食はれた。それは味としては實に不味きこの上もないものであつた。味噌汁にしろ、澤庵にしろ、味と云ふ點から味ふ時にそれは零であつた。けれども、これがセーラーたちにはこの上もなくうまかつた。彼等はよくそれほど多量に食べると思ふほど食つた。

ストキは波田に、セーラーたちが、不味いものを多く食べることは、心理的な部分も非常に

に手傳つてゐると云つたことがあつた。ストキに従へばかうであつた。

セーラーは食物を定期に與へられる。彼等は、どの食事の前にも、四時間の労働を課せられてゐる。彼等は十分空腹である。時間が来ると、彼等は食卓へかけつける。食卓には、盛り切りの惣菜が一皿宛置かれてある。種々十分に食べる爲めには、澤庵だけしかない。彼等は、いつでも、次の食事が甚しく待ち遠しい。それは、空腹が待たせるよりも、一つの重要な理由は、次の食事が来ると云ふことが、その日の労働をそれだけ成し終へたと云ふ、一つの安心を彼等に與へること、その食事の後にくらかの時間が、彼等に與へられてゐることである。彼等は、これ等の心的作用によつて、待ち兼ねた食事が済むと、直ぐに次の食事を、ゲー／＼おくびを出しながら待つのである。彼等は又食事と食事との間に、間食することができない。彼等は食事に際して、そこに盛られた量以上の菜は絶対に食ひ得ない。また、それ以外の菜も海上に於いて求むべき方法がない。丁度彼等は四人が、その胃腸を少食のために損ひつゝ、堪へられない飢えを訴へ、次の食事に對して焦燥を感じつゝ待つので、同様である。

セーラーたちが、食事をそれほど待ち、食するのは、それが自分自身のためにする（これは資本家のために、再生産することにもなる）唯一の生活手段であるからだ。自分のためにする何等の仕事のない時、たゞ一つの自分自身の事があるならば、それは誰にでも、重大に取り扱はねばならないことだ。殊にそれがパンの問題に關する時は、猶更さうでなければならぬ。

實際彼等は、その食事を、實際より以上に、想像を以て調理して食ふのである。じやがいのうでたのが鹽で味をつけて盛られてゐると、彼等は、それをキントンと呼ぶのである。そして、それは全くきんとんのやうにうまいのである。

外國航路に於ける船では、決してこんな状態ではないが、それにしても心理的には、矢張りさうである。けれども、萬壽丸は、これが甚しい。萬壽丸では、船主は甲板部に豚を飼つてゐる積りでもあるらしい。

「こんな状態では、誰でも、心細さからだけでも、喉まで詰り込み度くなることは事實である」と。これがストキのプロレタリア哲學であつた。

「ナア、女人から借りて来たんだが、逆も難かしくて、分らねえんだ」
「一寸見せ給へ、へへ、マルクス全集、第一巻IIか、資本論か、それや君、社會主義の本ぢやないかい」
「波田は、自分もその本を非常に讀み度く思つてゐたが、値り高價なので今まで買ふことができなかった。彼は中をめぐつて見ながら「面白い」と訊いた。

「面白い、面白くないか、ためになるか、ならぬか、全で分らぬよ。意味が分らないんだ。處々サーチライトで照らし出した程部分的に分る處があるんだ。そこはね、本文の論旨を説明するために引例した處さ。その例だけは分る。そして素できに面白い。面白いと云ふより、何だか、僕たちのことが、僕たちの知つてゐる以上、委しく書かれてゐるよ。だけど、その例以外は全で分らないんだよ」波田は正直に答へた。
「僕にも讀まして呉れ、ね」藤原は頼んだ。
「あ、いゝとも、讀んで呉れ給へ、未だ續きが三冊あるからね」
「僕も本を讀むことは好きだつたよ。随分よく讀んだものだよ」と云つて彼は、波田と並んで本

事實、ストキは實が悪い、第三者の積りで、自分が豫め腹を作つて置いて、その状態を眺める時に、ストキの觀察及批評は當つてると、思はずにはゐられないのである。

食事は、藤原の皮肉なる觀察の如くにして終つた。終るや否や又元の如く寢床へ犬の様に浮り込んだのが、三上であつた。西澤は煙草に火をつけて、彼が最も得意とする、信州岡谷附近の紡績工場に勤めてゐた頃のローマンズの一くさりを読み始めた。彼の話は實にうまかつた。講談師でもあれほどには話さないであらうと思はれる程、一切を創作的に述べるのであつた。そして、その話がうまければうまい程、初めの人は感心し、古顔は、逃げ出してしまふのであつた。

今は、藤原も、波田も、逃げ出す譯に行かなかつた。外に誰も西澤のローマンズを引き受けて呉れるものが無いからであつた。藤原は辛抱する氣でこれも無暗に、煙草を喫かした。西澤の話が、その巧妙なる山に入つて、今正に落ちようとする時、藤原が云つた。
「君の話は大變うまい。そして大層面白い。ただ、一度だけ純粋なほんとの話をして聞かして貰つたら、面白いらうと思ふよ」

「アハ、ハ、ハ、君の肉皮の方が上手だよ。僕も一度ほんたうな話をし度いと思ふんだが、それがほんとだか、どこからが捕へたんだか、今では自分にも分らなくなつてしまつたんだ。ハ、ハ、ハ、と氣の良ささうに笑つた。
「君は全く、無産階級藝術家の寶玉だ。全くだよ」と藤原は、全く眞面目に云つた。
「小銃だと受け應へが出来るが、藤原君がタンクを使用し始めると、僕も退却以外に應戰の法がねえや。ハッハ、ハ、ハ、」
西澤も、そのベッドへ上つて、轉がつてしまつた。
「どうだい、誰もかも皆寝ちやつたね。『寝る程樂はなかりけり、浮世の馬鹿が起きて働く』つて歌があるぢやないか、皆賢くなつちやつたね」と云ひながら波田は、自分の軍から本を持ち出して来て、それを、繻詰の蓋の處へ行つて讀み始めた。
藤原は暫く、暗い室の中で、煙草の火だけを、時々明るくさせては一人、何か考へてゐるのであつた。が、やがて彼は煙草を捨て、立ち上つた。
「波田君、君は感心に本を讀むね、それは何で本だい。航海學かい」

のベンチへ腰を下した。彼は、人を人とも思はないやうな、ブツキラ棒な男であつた。そして必要以上は口を利くことが嫌ひなやうに見えた。

「全く君は讀書家だね」と波田は藤原に同意した。「そして、どんな本を君は好んで讀んだかい」

「僕はね、ありとあらゆる讀らない本を讀み漁つたよ。珠算獨り學びなど云ふ本まで、珠算なんてする氣もなく讀んだし、ドンキホーテも、波邊山も、占易の本から、小學地理、歴史、修身、全く何でもかでも活字の並んでゐるものは手當り次第に讀んだよ」と藤原は、何だか、河の堤防が決壊してもしたやうに渦を巻いて彼の話を話し出した。

藤原は、そのいつもの、無口な、無感情な、石のやうな性格から、一足飛びに、情熱的な、鐵火のやうな、雄辯家に變つて、その身の上を波田に向つて語り始めた。

「僕が身の上を、誰かに聞いて貰はうなんて野心を起したのは、全く詰らない感傷主義からだ。こんなことは、話し手も聞き手も、その話

の後で、きつと妙な淋しい氣に落ち入るものだ。そして、話し手は、「こんなことを話すんぢやなかつた。俺はなんて下らない、泣き言屋だらう」と思ふし、一方では、「あ、あんなに昂奮して、あの男に話さすんぢやなかつた。この話は後々の生活の間に何かの、悪い障害になるか知れない」と、思ふに決つてゐる。處がそんな結果を齎すやうな話だけが、何かのはずみで、どうしても話さずには居られない衝動を人に與へるものなんだ。あとで何でもないやうな話

は、何かのはずみに、誰かを騙り立て、話さずには置かないと云ふやうな、昂奮や衝動を興へはしないんだ。僕は、今日、僕が本を無暗に讀んだと云ふ話から、僕は僕が出来なくなつたんだ。それほど、僕は「本を讀んだ」ことが僕に馬鹿氣な氣を興へたらしいんだ。「本を讀んだ」とは、僕が起るのにも、眠るのにも、ものを云ふのにも「本を讀んでる」やうな感じを人に與へるらしい。語り僕は本の讀んでならない乾燥したもの許りを讀んだんだ。

それで僕は見事に頭を壊してしまつた。今から考へると、その頃、僕は何を讀むかと云ふ大切な讀書の要件が分つてゐなかつたんだ。時によると、同書館で、目錄だけを半日かゝつて讀ん

だ。そして結局、本を讀むことは、僕に何も與へないことを知つたんだ。そして今になつて考へると、その頃の僕には、生活がなかつたんだ、生活が、その頃の僕は燃見たいにフラ／＼して、地についてゐない、生意氣な學生だつたんだ。本を讀むことの無駄を知り、僕の頭の從つて、カラッポであることを自覺した僕は、生活をどうしようかと考へたんだ。生活は學校を出て、その免状で月給にありついて、その範圍外は家からの補助で送るのが、生活ぢやないことを僕は覺つたんだ。生活とは、燃えるものだと思つたんだ。燃え盡すやうな爆發するやうなものだ。僕が生活だと考へたんだ。彼は親の金で教育を受けてゐる。それや俺が生きてると云ふ事にはならないんだ。俺が生きてるためには、俺が自分を活かさなきゃならないんだ。俺は、俺の腕で食はう！と僕は決心したんだ。そこで、僕は毎朝、下宿を辨當を持つて出て、友人の所へ書物を預けて置いて、工場を廻り歩いた。そしてAと云ふ工場に旋盤見習で入つた。

工場生活は、非常に苦しかつた。學生の生活と較べて、溝のやうに悪かつた。朝から夜まで、仲間の労働者さへも、見習の僕を蔑視するやうに思はれた。單純に物事が運ばなかつた。

「人間は何故働かねば食へないんだか知つてるか、え」といつが又云ふんだ。

「人間は苦しんでるんだ」と僕が云つたんだ。「さうだ。一人のために千人が、十人のために一萬人が」といつが云つたんだ。僕は分つた。その労働者は、白水と云ふ名前だつた。

それから僕はその男とつき合ふやうになつたんだが、その白水と云ふ男は全く珍らしく意志の強固な、感情を理智で叩き上げて、火のやうな革命的な思想を持ち、それを僕等が彼でも食ふやうに、平氣で、傍目からは習慣的に見えるほど、冷靜に實行する男だつた。A工場では、誰もその男を尊敬してゐた。會社では、その男を敬首しようとして、あらゆる手段を廻らしてゐた。そして、それは白水も十分に感づいてゐたやうだつた。彼は、眼だけを光らして、殆んど上役と口を利く様なことがなかつた。上役も彼を見ると、なるべく避けて歩いてるやうに見えた。彼は、朝から終業まで、熱心に旋盤にかじりついて、仕事をした。そして、不思議なことは、彼は、特に能率を上げたこともなく、下げたこともなかつた。いつも一生懸命でやつてゐて、そして彼の能率は一寸以下であつた。彼の熱心には、職長も文句が出なかつ

僕は、今ではあたり前だと思つてゐるので、自分でも驚くのだが、一佐長の處へ行つて、ゲレインを借りて持つて來いなどと云はれてどの位そのために取をかけたか、方々駆けずり廻つたりしたか知れなかつた。僕は、此處にも生活はないと思ひ始めてゐた。けれどもそこは、學生とちがつた處があつた。眞劍だつた。そして、誰かが、心の底になにか雪雲のやうに陰鬱なものを貯へてゐた。どんな若い労働者でも、不平を云つてゐた。そして、彼は、その生活が悪いと考へてゐた。僕も甚だ悪いと思つてゐた。そこで、僕は、いゝ生活を考へるのだつた。こんな生活はいけない。

つめるやうになつた。僕は全て僕自身を仇敵のやうに白い眼で睨んだ。工場へ五時に來てから、幾度も小便に行つた。その中ほんたうにしかつたのが幾度、あとは、兎にかく場處を動き度かつたからだ。倉庫番(工場)の處まで何歩あるか、何移かゝるか、それだけをゆつくり歩くことを、何故職長は符めるか、職長は労働者か、それとも何か、とそんな風に思の骨頂のやうなことから、その仲様々なことが、僕の頭を根限り追ひまくつた。

「人間は何故働かねば食へないんだか知つてるか、お前」といつが云ふんだ。僕は暫く黙つてゐた。すると、

「たんだ。彼はA工場の技師長と同期で大學を出た、と云ふ噂があつたんだから。處が白水は學校には、實際は行つてゐないらしいんだ。然し、また驚くほど獨學をやつたらしいんだ。彼は僕と違つて、讀むべきものを知つてゐたんだ。探す目的を持つてゐたんだ。それに、白水は、前科が四犯あつたんだ。その各々の入獄時代に外國語も研究したらしいんだ。年は見たところ三十にも見えるんだが、實際は二十六だつた。彼は、資本家からも、労働者からも、別々な立場と意味とからで注目されてゐたんだ。それは汚ない、暗い六疊の間だつた。それを白水は借りたんだ。そして彼はそこで自炊を始めたんだ。暫く彼がさうしてゐる中にその六疊の間は、いつでも夜になると、労働者が五六人集つてゐないことはなくなつた」

二

藤原は熱心に語つた。彼は、白水を目の前に置いて、話してでもゐるやうに、感嘆し、幸福さうに自分の話に酔つてゐるのであつた。彼は、こゝまで話して来て、その好きな煙草に火をつけて、肺臓全體に煙の行き互るやうに、深く深く、煙を喫つた。

波田は、熱心に聞いてゐた。そして、白水と云ふのは、藤原の前名のことではあるまいか、と、藤原の話の合間々々には疑つたりしてゐた。それは、藤原によつて語られ、表される白水ではあるにしても、餘りによく藤原に似すぎた。けれどもそれはどうでもいゝことであつた。

「フ、ム、鐵工業の労働者は頼もしいね」と、波田は味味的に云つた。
「労働者は、主人になるんだからね、労働者の手によつて、平和と幸福とが購はれるんだからね」ストキは、ホツとしたやうにして云つた。
「それから、その男はどうしたんだね」と波田は本をいぢりながら訊いた。
「白水は、自分の六疊の薄暗いと云ふより、殆んど眞つ暗な間を、夜間——書間でもいゝのだが、書間は皆仕事に出るのであつた。が、中には、書間辨當を持つて本を讀みに来る者もあつた——開放したのであつた。そして、顔は變つても、數はいつでも大抵五六人、多い時は十五六人も集つた。そして、そこであるんな話を取り交された。僕も、その集りには毎晩出たものだつた。」
白水は、彼の室では、又はその集りでは、全で

工場に於ける彼とは別人のやうに柔和に、そして氣輕になるのだつた。最初の頃は、誰でも不思議に思ふのだつた。誰かが「白水君は、工場と、家とは別々な全く異つた白水君を持つてゐるんだね」と云つた時、彼はかう答へた。
「それや僕に限つたこつちやないぜ。君だつてさうぢやないか、機械の附屬品たる君と、細君のための君と、奴隷としての君と、君の主人としての君と、誰だつて、労働者はこの二つの人格を持つてゐないものはないだらう。君だつて、機械の附屬部分として働いてゐる時の顔付や氣持と、今の、それ、細君や、子供のための君としての顔付や氣分の方が、どの位懐しい、親しい人間だか分らないよ。燈臺下暗しだぜ、ハツハツハ、と。そこに居合せた者も、皆聲を揃へて笑つた。彼の説明は按摩のやうに人を柔かにし、その疑ひを解いたんだ。」
そして、話はいつても、かう云つた風な冗談から口を切られて、何故労働者が機械の附屬部分であるか、と云ふ質問が生じて来るのだつた。それには白水君が誰も返答しない時に、ゆつくりと、よく分るやうに説明を加へるんだ。
かう云ふ風にして、そこに集つて来る労働者は、必ず、一つ宛か、二つ宛か、自分自身のの上

の解語を會得して歸つて行くやうになつた。かうしてゐる間にも、白水は、絶えず、警察から、尾行されたり、強込みされたり、呼出しを受けたりするんだつた。そして、それが、毎晩そこに集ることが原因であることが、そこへ集つて来る人達にも分つて来るのだつた。

その中に、そこへ絶えず集る者には、たとへば僕等などにも、時々警察の眼が光るやうになつて来たんだ。それが何故だか分らなかつたんだ。しかし、若い者は警察からこれ云はれることに對して、非常な反感と、従つて、それを激成するやうな、立場になつて行くのだつた。彼等は今まで無邪気に聞いてゐた。しかし、警察が彼等の私宅を訪問したり、その工場を訪ねたりするやうになると、彼等は眞剣に聞くやうになつて来た。そして、警察をだん／＼恐れぬやうになつて行つた。
「俺達自身が何であるかを、俺たち自身で研究することが、何故悪いんだ」と、若い労働者たちは、警察の刺戟の洗禮を受けると、一種の無産階級信念——を抱くやうになつて来たんだ。
そして、遂に、警察によつて刺戟された若人共は、立派な「無産階級軍の前衛隊」となり、痛加へらるゝ試験によつて、×××、××××、

恐るゝに足らずと云ふ、暗い信念の中に、生きるやうになつたんだ。さうして、さうなると、そこに待つてゐたものは、彼等の尻を引つ叩いた鞭が、拵へて待つてゐた陷阱であつた。愈々、彼等は、現實の牢獄の塙に打つ突らねばならなくなつたんだ。

ある年の秋だつた。A工場の在るN市は、日本全國を襲つた暴風雨の襲撃を受けた。その程度は日本の諸都市中で最も惨めな部分に屬する程であつた。
風が強くて、雨が横から吹いて、傘がさせなかつた。屋根瓦が吹き飛ぶので、街に出られなかつた。海岸部分は軒先まで浸水した。水が減くと同時に、崩壊した家が無數だつた。船が海岸へ打ち上げられて、玩具屋の店先に於ける船のやうであつた。目貫の方でも、小学校が崩壊した。民家が倒れた。市民は外にも出られなかつた。内にも居られなかつた。
A工場の労働者も、この天災から逃避し得なかつた。のみならず、彼等はその住む地域の關係上、より一層甚しい程度に、その被害を受けた。彼等は少し受取つて多く養ふために、安い家賃を選んだ。そこは海岸の低地であつたんだ。

A工場の労働者で、白水と同じ部に出でゐる男が、十分にその浸水の憂の辛さを感めさせられた。彼の家は床上二尺浸つた。疊が將に汚濁せる潮水のために浸らうとする時、正にその時期にかつきり達してゐる彼の細君は、生理上の法則に従つて、赤ん坊を分娩した。その産褥の隣りに、十二年以前から如何なる場所へでも横になつて行く、痛風の彼の老母が臥せてゐた。
太陽が誰をも待たないと同様な公平さと、正確さとで、その汚濁した潮水は、その水量を増して来た。叫喚があつた。失心があつた。泣き聲があつた。

この労働者は、疊に赤ん坊を入れた。そして押入の上段に、出来るだけ深く老母を押し込んだ。次に彼の細君を、その手前へ押し込んだ。その上で、この男は、自分自身赤ん坊を襁褓で抱いて、父親の正當なる責任を果した。極めて簡單明瞭なる事實であつたが、それが簡單であつても、その事のために入費がかゝると云ふことも明かなことだつた。處が、どうしてこの男が母の養育や妻の後始末、それから子供への手當、産婆への報酬などをすることが能きやう。それ處ではなかつた。彼は今まで、家族を養つ

てゐたA工場にも、出るに出来ない有様だつた。僕はビシ／＼に瀕れてゐた。床の下は魚でも住んでゐさうだつた。便所と井戸水とが同居したのに、未だそれが掃除されてゐない。若し、この男が苦勞に馴れなかつたか、貧乏に馴れなかつたか、一寸神神買でもあつたのなら、僕等が考へても、首をく／＼つた方が氣が利いてゐさうに思はれる位なんだ。ところが、この男は我慢したんだ。後で知る事だが、この男は我慢するんだ、何でも、癪に障る位、我慢強いんだ。と僕等は、さう思つてたんだ、ところがどうだらう。まるつきり奴は感じしないんだ。

彼は、この悔憤たる事實に對して、何物をも感じなかつたやうだつた。たゞ、金が少々あればいいのだつた。それが萬事を解決するだらう。君、長い間、人間は餘り悔めであると、感受性を全然失つてしまふものらしいんだ。この兄弟なんぞも矢つ張りその一例だと見える。人間がその苦痛に對して、馴らされてしまふ——何の必要もないのに——それが、どんなことだと君は思ふんだ。馬が去勢されて生殖慾が無くなるやうに、人間が縛りつけられて、型に押し込まれて、自由を奪はれてしまつた去勢された

馬のやうに、感受性を失つてしまふ。自分がどんな奴隷だか知らずに、働けば樂になると思つて働く。労働者たちは、皆この感受性を麻痺させられてしまつたのだ。労働者は働けば働くほど、自分を搾る資本に、それだけ多くの餘利労働は搾取され、資本を増大せしめるんだ。この去勢された、馬のやうになり切つた兄弟は、二三日の後會社へ行つたんだ。「積善會の積立金を頂戴度うございませうが、かう／＼云ふ譯で」と、事實ありのままを純客觀的に——彼には、今では、彼自身のこと客觀的にしか見えなくなつたやうだつた——くどくどと述べ立てたんだ。

この積善會つてのはね、労働者の賃銀の百分の五を毎月強制積立をさせるんだ。そして、その金を一定の額だけ、吉凶禍福に應じて、會社からいくらかの補助金と共に、給與して貰ふんだ。そして毎年一回この金で運動會を開いて、一金一対(五十錢)を酒代として、頂くんだ。工場法の役目を、労働者の負擔に轉化した型が、即ちその積善會なるものだつたんだ。その積善會のお金の中で私の積立金を下さいと、この男は申出たんだ。勿論それは言下に却けつけられて、見舞料と

して積善會から二圓だけ貰へた譯なんだ。處が二圓では何とも話が着えんとその男は云ふんだ。何とかならないでせうかと、相談を白水に持つて行つたんだ。「それは、積立金を取つたらいいだらう。積立金は職工の貯金だらう。それを取つたらいいだらう。積善會の方は又話が何とかつくだらう」と云ふことで、白水は事務所へ、その節くれ立つた木の切株のやうな男と一緒に رفتんだ。

工務係の御明と云ふ妙な後光の差し損つたやうな名前の男が、二人と相對して、何の話だと訊いたんだ。おふくろと、妻と赤ん坊とを、押入へ押上げた、この哀れな男は、くど／＼と、何故波が敷居より上へ上つて来たか、とか、疊と疊の間から、先づ汚れた水が、ブク／＼と吹出して来るものだとか、押入へ、幸ひ、三人を入れましたので、とか、彼が、今そこで、そんな目に會つてもゐるやうに、細大洩らさず、「客觀的」に話し始めた。彼の話は、決して腹の立つべき質のものではなかつた。けれども、その長さ、それから、繰返すと、切りのないのには、誰もが退屈を

しなければならなかつたし、それに、話の中に、いつの間にか、問題と、話の中心とが離れてしまふと云ふ困難な缺點があつた。「それで、どうだと云ふのだね」と後明は、この男に訊いた。「へー、それで」と、この哀れな男は驚返して答へた。そしてそれつ切りで先が出なくなつてしまつたのだ。彼はもう、自分の要件は今までの話の中で話した、それも嫌返し／＼話したやうな氣がしてゐたのであつた。もうこれ以上何を申上げませうと云つた顔付をしてゐた。

一三

「さう云ふ悲惨な事情であるから、自分の労働賃銀の一部を積立て、ある、積立金を拂戻して下さいと云ふのです」白水が代つて話した。「君は頼まれて来たのかね」後明は、その方が先決問題だと云ふ様な顔付で訊いた。「さうです」「さうかね」と、今度はその男に訊いた。「へー」と、どつちだか分らぬ返事をその男はした。「その事が、その積立金拂戻について、それほど重大な先決問題ぢやないではありませんか、

問題は極めて簡單でせう。労働者がその賣つた労働力に對して支拂つた金額の一部を、會社が労働者の爲めに積立て、ある、強制的に。その金額を、労働者が返して呉れと云ふのは、全で一分の思考を要しないことぢやありませんか」白水はまくし立てた。「それやね、誰も拂はんとは云はんのだが、どう云ふ手續で持つて行かうつてんだね」「支拂傳票さへ書けばいい、こつちやありませんか」「話り、退職しようと思ふんだね」と、意地悪の後明人事係は云つた。「退職！誰が、いつ退職なんて云つたんです」と白水は少し宛昂奮してやり始めた。「だが、會社の規則では、積立金は、退職の時に支拂ふと云ふことになつてゐるんだからね。従つて、積立金を受取る者は、同時に、賃銀の残額をも一緒に支給されることになる譯だね」と、その豚奴は、いやに尻を落ちつけてやがつた。「勿論」と、白水は口を切つたんだ。奴が、何か心に決することがある時の重々しい口調で

「労働者が退職して行く時に、積立金が賃銀と同時に支拂はれるのは、當然なんだ、それは工

場法にも明記されてあることなんだ。然し、それは如何なる事情があつても、會社に損害のかゝつた場合でも、それから差し引くことができない、性質の金なんだ。その金が本人退職後、尙會社に残つてゐるとすれば、明かに委託金横領ではないか、その金が支拂はれるのが、いつも最後の例だからつて、その金を受取ることに依つて、辭職を意味するなんて、そんな説話が、よくも人事係の君の口から吐けたもんだ。君のその論調と態度とが、今まで、労働者自身の金を、どんな必要があつても労働者へ返さなかつた、と云ふ例を作つたまでのことだらう。君のその論調でやられたのなら、今まで、一時の入用のために、自分の預金を引き出すために、どの位多くの労働者を、君は破首したことになるだらう。この會社の積立金が若し、縁切商のやうに、それをとると、命に關すると云ふのであつたなら、僕はわれ／＼の武器に訴へても、又は工場法に依つて、法に於ても取ふ積りだ」

白水がその重々しい論調で、肋骨の間から、心臓を目掛けて、筆でも刺すやうに話してると、相手の後明は、最初はいやに横柄振つて、虚勢を張つてゐたんだが、終ひには、怖ろしくなつ

「然し、私は未だ、職首するとも退職せよとも云ひはしないですよ。たゞそれは例の無いことだ、今まではかう云ふ仕来りであつたと云つたまでですよ」と、その千枚紙の面の上に油をかけたが、

「悪い例なら破つたらどうだと云ふんだ。舊來の陋習を破つたらどうだと云ふんだ。一切合切を前例を守つてゐたら、人間は未だに、人間の肉を食つて、生活しなければならぬんだ。未だ人間が人間の肉を食つてゐるんだが、それが無くなるためには、あらゆる舊來の陋習を破らるべきなんだ。殊に法律でさへ保護してゐるやうな範圍内にも、労働者を搾取欺略することは、明かに人間嗜食の一形式だ。白水は益々彼の鉤を揉み込んで行つた。

「いや、君のやうに昂奮しちや困りますよ。さう云ふお氣の毒な事情ならお拂ひするやうにしますせうが、何しろ前例の無いことですから、一度重役まで何つて見なければなりません。今直ぐでなければいけないんですかね」と白水に云つて、「オ、い、どうだい、さう要るのかい」と、哀れな切様に訊いた。

「勿論すぐです。今日はもう三日後になつて、中では思はず××歌を合唱したんだ。そして、その日の夕方、その日の示威運動をリードした鈴木君が既足で引つ張つて來られたんだ。

「僕等は、警察から検事局、検事局から未決監、監獄と、順を追うて進むべき道を辿んだんだ、そして、そこへ送られた五人の初犯囚は、警察の××べきでないと知つた如く、××××べきでないことを又知るに至つたのであつた。その平議は、N市に永久に、無産者運動の胎を付ける基礎になつた。

そして、その刑を終へると、同志はそれ／＼袂を分つて、他の都會へ散つて行つたんだ。そして僕だけはいかして船乗りになつてゐるんだ。白水は今どこで活動してゐるだらうと、よく僕は思ふんだ。船に於ける職階は、陸上とは全然趣を異にするが、この頃僕には分つて來始めた。僕は、百人分の米を作つて、自分は飢ゑ、千人分の米を織つて自分は凍えたり、大窟を建て、自分が行き止れしたり、するやうな労働者の地位を全く改め得るまでは、不慮の闘争が必要なんだ。そしてその時は必ず來るんだ。當然來るべき良きものを迎へないと云ふ法はない。我々はそれの來るまで迎へるんだ。――ストキはポケットから煙草をとり出して火を

んだから、後れてゐるんですぜ」と、白水は、その切様が慌て、へまな返事をするのだらうと思つて、引き取つて答へた。

「それぢやお話して來ますから暫く待つて、呉れ給へ」と云ひ残して、バリカンで悪戯に毛を剪られたむく犬のやうな恰好で、後明人事係は出て行つたんだ。

長いこと待たせて後明は歸つて來て、紙つ切を渡して、
「それへ金額を書いて下さい、そして、その金額は向う三ヶ月間に分割して、収入から差引いて積立てますから、その積りでゐて下さい」と扱かしやがつたんだ。

「何をこのむく犬め」と、白水はいきなり怒鳴りつけて、そこにあつた椅子を振り上げかけたが、切様が止めた。

「へえ、ありがたうござえます。今さへ助かりや、後は三月で間違ひなく御返し致しますから」と、一方で白水を引つ張りながら、一方で後明に、承知をした上、御丁寧なお辭儀を一つしたんだ。

「へえ、何に、今の都合がつきや後は又眞つ黒になつて稼ぎますから」と白水に云つたんだ。その事件があつて後の白水は、會社側から

つけた。
「波田君、僕の話がいや味になりやしなかつたかい。うんざりしちやつたらうね」

「いや、面白かつた。僕は、君等が経験した監獄の話が聞き度いんだ」
「監獄の話は單調なものだ。單調無爲と云ふ苦痛だけ。社會では、僕等の生命はそれを顧みない程多忙に搾取され、その溝壑に投げ込まれるが、監獄では、たゞちつとそれを見詰めると云ふだけのものだ」藤原は、靜にデツキへ出て行つた。

「さあ、それぢや、僕は衣食の支度をしなきや」と云つて、波田は、コック部屋へと出て行つた。
デツキでは、藤原は、波田に凭れて、荒涼たる本州北部の風光に見入つてゐた。

一四

わが萬壽丸は、三日間の道を歩んで、その十一時頃横濱港外へ假泊する筈だつた。船は藤浦沖を通つた。懸て横濱港の明るい燈が見え始めるであらう。
藤原は、水夫等、火夫等の乳房であつた。それを待ちあぐむ船員の心は、放免の前日に於け

甚しく忌み嫌はれた。そして白水の職首が事務員から、重役の問題にまで進んだんだ。

この家屋浸水事件後、僕と白水その他の多數の兄弟たちが、A工場に對して、N市に於ける最初の大規模な應戰を試みて、全部が、見事に陣頭に倒れ、おまけに僕と白水と外に四人の兄弟が、その争議のため、牢獄の赤い煉瓦を滑ることになつたんだ。それは九月の末頃であつたらう。A工場の労働者たちは、切株浸水事件の後に、白水が積善會の積立金の會計報告等が一切無いことを鳴らし、且つ工場法扶助規則や未成年労働者使用等、規則違反が多いこと等を表面の理由として、資本家階級の間に、どんな策謀があるか探を入れ始めたんだ。N市は地方色の利己的な處であつた。そのためにも争議も、一種の地方色を持つてゐたのだが、僕は、最初の日の示威運動が済むと直ぐに警察へ引つ張られ、そのまゝ、未決監へ送られたのだ。争議の經過は、全て知らなかつたんだ。だが、僕等が警察へ検束された翌日、ドシャ降りの雨の中を、A工場の兄弟達千人が、警察への示威運動に來て、警察へ委員を送つて檢束の理由を聞く一方労働者軍は、雨の中でその響と和して××歌を合唱して呉れた時は、僕等五人は

る囚人の心にも似てゐた。

東京灣の波浪も、太平洋の餘波と合して高かつた。梅雨上りの、田舎道に暮の子が、踏みつぶされば歩けない程出ると同じやうに、澤山出てる筈の帆船や漁船は一艘もゐなかつた。觀音崎の燈臺、浦賀、横須賀などの燈臺や燈火が霧さうに霞いてゐるだけであつた。しけの匂が暗の中を漂つてゐた。落伍した雲の一面が全速力で追つかけてゐた。

それでも、もう本船が、酔つ拂ひのやうに動揺する、と云ふやうなことはなかつた。本船の燈臺を眺めて、港口標光を前に眺めながら、わが萬壽丸は横濱港外に明朝檢校までを假泊した。三千噸の重さと大きさとの、怪獸の唸りにも似た轟音と共に鐘は投げられた。船はその動揺を止めた。

一時に一切が靜になつた。一切の昇降と緊張とが、一時に沈静した。
「一切は明日なんだ。明日は幸福と解放の一切なんだ」と誰もが安心したので。
水夫等は、船首上甲板に立つてゐたが、鐘が投げられると共に、その各々の集へ飛び込み始めた。先頭の羽田がタラップを下り切りぬ中に、ボースンは怒鳴つた。

「オーイ、これからサンパンを卸すんだぞ」
恰も強い電波にでも打たれたやうに水夫達は
この言葉に打たれた。

岩見武勇傳に出て来る織守の神——その正
體は拂々である——の生贄として、白羽の矢を
立てられはせぬかと、戦々兢兢たる娘、及び娘
を持つてゐる親たちのやうな恐れと、哀れとを、水
夫達は一様に感じた。これは、夜横濱に着いた
が最後必ず起る現象であつた。そして又、船
長はいやでもおうでも夜横濱へつくやうに命令
するのであつた。朝着きさうな機嫌のときだけ
が、その通りに入港した。その他は必ず夜着く
やうに大吹沖か、藤浦沖かで彼女は散歩を強制
せられるのであつた。

古今共に拂々が、出るためには、夜を選ぶの
であつた。そして、悲しむべきことは、わが萬
壽丸に岩見重太郎が乗り合せてゐないことであ
つた。十一時、サンパンは、その非常に危険な
怒濤の中に卸されなければならなかつた。二人
の漕手が、水夫の中から掴み出されなければな
らなかつた。

この漕手に白羽の矢が立つたのは、艦船で銀
へ上げた三上と、船取の小倉とであつた。三上
は低能であつた。小倉は大人しかつた。白羽の
と妻を愛してはゐないことを、誇ぶる積りで
寄港地毎に遊廓に行つた。そこではよく、水夫
と一つ女を買ひ當てたものだ！
それは、全く面白い、滑稽な、喜劇の一幕を
演ずるのだが、今は、サンパンが用意されよう
としてゐる。

一五

水夫等は、ともの、三番のウキンチに二人つ
いた。ポトデツキに二人、各々のロープにつ
いた。そして波田は、サンパンに乗つた。それ
をタラップまで廻航するためであつた。可哀
さうなドンキーは、また横關室へ入つて、蒸
汽をウキンチへ送らねばならなかつた。火夫も
火口待つてゐねばならなかつた。

綱は少し宛繰り延べられた。それは板の上へ
卸されるのであるならば、サンパンにかゝつて
ゐる釣を、綱が緩んだ時に外しなすれば、サン
パンはそこに立派に坐つてゐるのだが、それが
波——ことにその夜の如く、大きく鼓動してゐ
る時——に向つて卸される場合は、非常に困難
であつた。波の絶頂に上つた時に、一方の釣だ
けを外すならば次の瞬間には、そのサンパンは
艇のやうに吊されてゐるだらう。それが、波の

矢は、岩見武勇傳の場合と違つて、大抵この二
人に、復讐として當るのであつた。

二人の漕手は、一里餘の暗黒の海上を、サン
パン止め——暴風雨にて海内通航危険につき港
務課より一切の小舟通行を禁止する——の暴化
を冒して、船長を日本波止場まで、「秘密」に送
りつけねばならぬのであつた。

船長は、「秘密」で、上陸して、その家庭へ
歸るのであつた。そして、その翌朝、「秘密」に、
ランチで本船へ歸つて、それから公然入港す
ると云ふ手順になつてゐたのである。

それ等の面倒で危険な、一人のために何にも
關係のない、もう二人の人間の生命を、危険に
向つて暴露する、この「秘密」の冒険で、船長は
十時間、或はもつと少くも八時間だけ、家庭に
於ける人となり得るのであつた。

船長は、船長室で支度をしてゐた。彼は、
彼の家庭について抱き得る、彼の思想を、この
船に對する他のあらゆる思想と、全然區別して
ゐた。彼は、「秘密」の彼の上陸の前には、對内
的にのみ、船長から、人間に變るのであつた。
彼は何もかもが、一切合切、妻のこと、子供の
こと、その他で持ち切つてゐた。殊に、妻のこ
とでは、彼は、「やきもち」をやいてゐたのであ

最低部まで卸されることは、不可能であつた。
釣が外れるであらう。もし釣が外れなければ、
本船のどてつ頭へその頭が、又はひよわいその
腹を打つ衝けて、碎けてしまふだらう。

ポトデツキで綱の操作をしてゐる二人の水
夫も、傳馬の中にあつて、しつかり、釣の外れな
いやりに押つた。波田も字義通りに「一生懸命」
であつた。彼は、本船の船腹を蛇の泳ぐやうに、
最高と最低との差を三間位に、うねりくねつて
ゐた。

今、傳馬は波の斜面上に乗つた。波田はともの
釣を外した。とこの時に、「スライキ、スライキ、
レツコ」と怒鳴つた。「延せ、延せ、打つ捨れ」と
云ふ意味である。傳馬への本船からの綱の絡の
如き役を勤めてゐた綱は今一方外され、どちら
も延ばされた。波田はすぐに、船首の方の綱を
も、うまく外すことができた。そして、傳馬は、
今や、本船と完全に獨立した小舟になつた。と
同時に、傳馬は、既に十間餘り押し流されて
ゐた。そしてそれは、盆の中で選り分けられる
小豆のやうに、ころ／＼した。

波田は、櫂を入れた。船は、眞つ黒い岩か何か
のやうに、そこにどつしりしてゐた。そして、彼
の小舟は忙しく轉んだ。寂しい氣持であつた。

彼はトランクに種々のものを押し込んだ。そ
して又出した。そして溜息をついた。「サンパ
ンの準備は何だつてこんなに手間取るんだ！
分り切つたことぢやないか、一度や二度のこと
ぢやあるまいし、チエツ！」だが、彼は、未だ催
促については我慢してゐた。そして彼は自分の
室を見廻した。

船内に於て一番綺麗な、廣い、潔つた、便利
な室ではあつた。が、彼にとつてそれは、ビー
ル箱の内側であつた。それは些も愉快なもの
ではなかつた。それは乾いた荒席のやうに、彼
の神體を塊つぽく、もや／＼させた。

ボーイがコーヒを持って来た。
「未だ、支度は能きないか、ボースンを呼べ！」
と彼は、ボーイに命じた。そして、ボーイに對
しても腹を立てた。「チヨツ！ こんな氣の抜け
たコーヒを持って来やがつて、コーヒの保
存法も知らないんだ、奴等は」彼は、煮えつく
やうなコーヒに喉を滑した。

「ソツと、出し投げに、俺は穿らなきやなら
ん。自動車は家へ知れない位の處で、歸して
しまはなくちや、そして……」船長は、絶えず
妻にやきもちを焼いた。そして、彼も、それほ
つた。

彼は全身の力を盡めて、櫂を押した。船のとも
を廻らうとした時、傳馬はなかく／＼その頭を、
どちらへも振り向けようとしなかつた。一日散
りに逃げて行く犬の子のやうに、無事に風に流さ
れようとして、波田に反抗した。けれども彼の
總身の努力は、その體に一杯の汗となつて滲
み出たやうに、傳馬の頭をやうやく風上に向け
ることが出来た。が、ともすればそれは横に吹
き流されさうであつた。

彼が傳馬をタラップにつけた時は、その體中
は洗つたやうに汗になつてゐた。波を削る風は
ナイフのやうに鋭かつたが、それが、快く彼
の頬を吹いた。彼は直ぐおもてへ入つて汗を拭
いた。

おもてへは、みな歸つて、船長が歸ることに
ついて、ものうさうに、一言か二言づつ批評を
加へてゐた。

三上と小倉とは、體中を台羽にくるんですつ
かり支度が出来てゐた。

「オーイ、行くぞ！ 一と、當番のコーターマス
ターがブリツチから怒鳴つた。
「チャ頼みます。御苦勞様、願ひます」と残る者
は二人に云ひながら、タラップまで見送つた。
二人の船頭さんは、船長の私用のために、

そのやうに見えた。けれども、小倉と三上との腕の汗えにも拘らず、全で港口に近づかうとはしなかつた。船長はじれ切つてゐた。「あの燈の邊が俺の家だ」と、乗つて二十分位の間は、思つてゐた。處が、いつまで経つても港口が近づかなかつた。然し、眞つ暗闇であつたが、櫓の音も、二人の鼻息も凄じい風の音を破つて彼にまでも聞えるのであつた。傳馬は、仙臺沖の艦舟で鍛へ上げた三上がともを押して、小倉が日本海艦隊で鍛へた腕で、わきを押した。然し、彼等は二人とも、本船を離れるが早いか、これは難かしいと直感したのであつた。櫓は、振り廻す鞭のやうにしばつても、傳馬は、港口から、流れ出る潮流に押し流されて、些も進まないのであつた。彼等は、港口までは、潮流を利用しようと思つた。そこで、船首を本船の方へ向けた。傳馬は進んだ。然し、それは潮流を横ぎるやうな作用と共に進んだのであつた。彼等は、本船を離れて三十分も経つた頃、どこに本船があるかを、片方の手で額を拭ひながら探して見た。本船は、黒く、小さく、港口の方に見えた。彼等は流されつゝあることを知つた。然し、

無期囚徒のやうに、習習的であり、機械的であつた。云はゞへし折られた腕か何ぞのやうにだらりとしてゐた。時々誰かの神經が少し覺めると、そこにはその神經を待つてゐた多くの不快な刺戟が、それをムズ／＼と探るのだつた。それは風の食ふやうな、又は鼓がうるさく耳の側で流くやうな、そんなけちな、そのくせどうにもいやで堪らない、下らない事柄許りが待ち構へてゐるのだつた。そして、この船室全體的構造と、彼等が一様に抱かされる共通な基本的な感じとは、他意に働まれ切つた囚人が、矢張り、ボンヤリ高い窓を覗めて、その馴れ切つた倦怠と無感覺とを、鈍く感じてゐるとよく似てゐた。船員たちは、こんなことが「労働だ」と思つてはゐなかつた。彼等は、自分が寝るも起きるも賃銀労働者であることは知つてゐた。けれども、それを超え意識の中にしつかり、握り詰めてゐる譯には行かなかつた。殊にその労働場が船であつたために、彼等は、一軒の家に住んでゐる様に心得がちになるのであつた。彼等は、えて、自分に課せられる不當な労働、支拂はれない労働を、ついつつかり、「つとめ」だと思ひ込んでしまふことが多かつた。

「一つ茶の飯を食つてゐるんだから」と水夫達は思つて、我慢してゐるのだつた。そして、それは、いもの連中、メーツ達をして、最上、最強の鞭にしてしまはせた。彼等は外のどんな手段でも、その「傳馬」共が、拗ねて頑強する時は、そのとつときの鞭を一つ食らはせれば、それで萬事はいゝのだつた。その中に、一人づつ、その疲れた中へ依りに行つた。どうしても、船長を送つた傳馬は、二時半か三時、でなければ、早くても歸らないんだ。このしきでは、いつまでも歸らないかも知れないのだ。大體倦り、船長も家を懸しがりすぎるのだ！

「あゝあ、人間がいやになつたわい」と西澤は、一番奥の彼の裏から唸つた。「どうだ、種馬になつたら」と、波田が混ぜつかへして、そのまゝ、死のやうな倦怠へと、一切は吸ひ込まれてしまつた。船長は、その家へ歸つたが、負傷に呻いてゐるボーイ長は浦の中に、荷造りされたやうに寝てゐた。

船長の二倍だけの冒險をしなければならなかつた。船長はボーイに、導かれてタラップ口へ出て来た。彼が何かを入れたり、出して見たりしてゐたトランクを、ボーイは宛ら貴重品でもあるかのやうに、匆々らしく持つてゐた。船長は、やきもちをやきながら、ローマの凱旋將軍シーザーの如くにサンパンに乗り移つた。船長以外の總ての者は、船のやうに重い鈍い心に押へつけられた。傳馬の機嫌は解かれた。とすぐに、それは、流された。眞つ暗闇の中に、小さなカンテラが一つボンヤリ見えた。その側から、小倉と三上との聲で、エンヤヨイヤ、エンヤヨイヤと、聞えて来るのだつた。水夫たちは、おもてへ歸つた。そして船長を送り届けてサンパンの歸るまでは、眠つてもよいのであつた。けれども、誰も黙つて、ベンチへ並んで腰を下して、狐につまみれでもしたやうにボンヤリしてゐた。過度労働のために、水夫たちは、無抵抗的に働かされてゐた。そしてそこには死のやうな倦怠以外に何もなかつた。一切の望みを失つた

一切の物がその息を潜め、その眼を瞑つてゐる。その時に、その何物も見得ない暗の中で、懸命に波浪と潮流とに對抗することは、その運命を、牢獄内に打ちしめるやうに決定された。無期徒囚のやうな神經になり終せた彼等であつても、なし得ない辛抱であつた。殊にそれは、この闇の中に、ボンヤリ坐つて時々、ゴシツカリしないかと思ふだけ怒鳴る船長の、利己心からのみ起つた一切だ、と云ふ感じが、いつの間にか、闇が産みつけでもしたやうに、二人の胸の中に食ひ入つてゐたのであつた。今は、二人の溜手は、その櫓に對しての意識の集中を離れて、船長と稱する不可解な、その曖昧な、暗黒な形相をしてゐて、サンパンの中に坐つてゐる、この生物に對して、何故俺達は、こんなに苦しまねばならないのだと云ふ考への周囲をさまよひ始めたのであつた。

それは、誰も見てゐないし、聞いてゐないし、感ずることもできない、全く暗黒な闇の中であつた。そこには、どんな叫聲をも一呑みにする嵐と潮の叫喚があつた。そこには、何物をも洗ひ流す處の急流があつた。そこには人間を骨ごと食つてしまふ鯨があるのであつた。「そして、あいつは、たつた一人だ。おまけに、あいつの腕の五本ぶり、俺の腕はある、あいつを五人掲げることが、俺は平氣だ！」だのに……

獲物の周りにわざと遊びたはむれて、なかなか飛びつかうとせぬ狼のやうに三上は、その考への周りをウロ／＼してゐた。小倉も同じやうな考へを別な方から嗅いでゐた。飢餓がある。疾病がある。不具がある。負傷がある。そしてそれ等の總てが死へ行く道になつてゐる。彼はこの道をブルジョアによつて、他の無数の労働者と一緒には追はれてゐる。それを追つて来るのは少數だ。追はれてゐるのはそれ等の幾千倍も幾萬倍もあるのに、その多くの労働者の群には、牙を削いて自分の後を振り向かうとする、たつた一人の仲間さへもないのだ。労働者は、壁にあつた蜘蛛だ。それは誰にも溶けてしまふんだ。たゞ一人の労働者、そ

れが十人に一人、十萬人に一人もないのだ。それで、それでこそ人間は、大量生産的に××され得るのだ。人間は自分のためには死ねないんだ。人間は、命令を好むものだ。命令の下には、死んで人間が死に得るが、自分からは一人の人間も、よく自分を殺し得ないものだ。一人の人間が生きてゐるために、何十萬の死んだ例がなかつたらうか。全世界の歴史が、この有難からぬ、或は有難い處の人間性の弱點によつて、血で染め上げられ、肉で書かれたものではなからうか。奴隷の歴史を読んで、その主人の暴虐に憤る前に、人は、その奴隷の無智と、無活氣なるを憐れないだらうか。われ等、賃銀労働者も、奴隷のやうに、農奴のやうに、われ等の子孫をして拳を握らしめないであらうか。それは、人間の力を以ては、意思の力を以てしては、いかんともなし難い處のものであるか。

彼が、人類の歴史を見て泣くやうに、彼は又泣かねばならぬ歴史を、書き足しつゝあるのだ。彼は、さう云ふ汚れた歴史に邪魔者として入ることは、今までできたのだ。又今でも出来るのだ。だが、それは能きない處に、人類の歴史が汚されるやうな大きな結果が持ち上るのだ。だが、血と肉とで積み上げられた歴史は、その生費

が甚しかつただけ、それだけ美しい花が咲くんだ。歴史が行く道を俺はついて行き、その歴史の樽を押せばいいのだ。

「おい！ 傳馬はどん／＼流れつちまふぢやないか、どうしたんだい！」

「船長！ 引き潮だから、いくら押ししても駄目だ。港口まで行きやあ、又流れつちまふだけなものだ。それよりや上げ潮を待たう方がいゝや。三上は未だ獲物の側にでもゐるやうに薄氣味悪く、ぞんざいな言葉を使つた。

「馬鹿なことを云ふな！ 夜が明けちまふぢやないか、しつかり押せ！」

「自分でやつて見るといゝや、これ以上俺達の腕にや合はねえんだから」三上は愈々打つつけるやうに云ひ切つた。

「何だ！ やらないと云ふのか！ よし！ 覚えて居れ！」船長も仕方なかつた。こんな眞つ暗がりの海の上で喧嘩をすれば自分が負けるに極つてゐるのだつた。彼は明日を待つことにした。

「何だ！ 覚えて居れ？ この野郎！ 手前は何だつて：今日の暴化がサンパン止めになつてる事を知らないか、この野郎、手前を海の中に叩き落すのは造作ねえんだぞ、どこひよつ

と云ふ！」三上は滑ぐ手を止めてしまつた。三上は、低能だと云はれてゐた。彼には種々な發作的の行動があるのだ。船長は、それを知つてゐた。それでいぢけ込んでしまつた。馬鹿に相手になつてこの暗い海へほんとに叩き込まれたら、全くそれつ切りだつてことは、十分に船長も知つてゐた。

「三上、さう怒るものぢやない。え、濱につけば、氣に入るやうにしてやるから怒らずに、一生懸命やつてくれ、え！」

「着けば分るんだね。よし来た！ 仙臺は又、ぼつ／＼と樽を押し始めた。

小倉は、をかしかつた。「着けば分る！」三上の野郎首を切られるのが分るだらう、馬鹿野郎奴！ 折角面白いところまで筋が通んだと思つたら「分る」で済ましちまやがつた。フ、これが「労働者」なんだ。誰にでも、たつた一言で綺麗に欺されちまふんだ。これだから、人間の歴史がいつでも、齒痒くて癢に障つて堪らないんだ。あ、分る、分る。全く一切がよく分る。

然し全く、心細い航海ではあつた。海はすぐその足の下で唸つてゐた。睡んでゐた。そしてその體をやけに擦つてゐた。

三上と、小倉とは、その生活の大部分がさう

であると同じに、今もたゞ機械的に働いてゐるに過ぎなかつた。けれども、彼等は、恐ろしく磨滅して来た。所謂「焼けて」来たのであつた。彼等は十分に營養を採つてゐる譯ではなかつたので、機械の油が切れて直ぐ焼けて来るやうに、彼等の肉體も焼けたのであつた。彼等は、珠に小倉は三上よりも體力が非常に劣つてゐたので、肩から背へかけた部分、大腸骨の部分などに、熱を感じて来たのであつた。それと共に、二人とも、非常な「だるさ」と、力の衰へることを感じた。彼等は、「まゝよ、なるやうになれ！」と覺悟を決めてしまつた。

船長も、今は強壓的に、頭ごなしにやつつける譯に行かなかつた。勿論彼は、その精緻なるピストルは本船に置いて来たのであつた。このために彼は、幾分かその臆病さの度が募つたのでもあつたが、何しろ、彼は、たゞ一人であつた。その権力——與へられたる——を保證し、それを暴力化せしめる處の背景が、全然、今、彼に與へられてゐなかつたのだ。

一方が一切を決定するのだ。民衆は、今恐ろしい勢ひで力を得つゝあるのだ。力が正しく働くか、力が悪く働くか、力が権取的に働くか、力が共存的に働くか、によつて、人類が

が甚しかつただけ、それだけ美しい花が咲くんだ。歴史が行く道を俺はついて行き、その歴史の樽を押せばいいのだ。

「おい！ 傳馬はどん／＼流れつちまふぢやないか、どうしたんだい！」

「船長！ 引き潮だから、いくら押ししても駄目だ。港口まで行きやあ、又流れつちまふだけのものだ。それよりや上げ潮を待たう方がいゝや。三上は未だ獲物の側にでもゐるやうに薄氣味悪く、ぞんざいな言葉を使つた。

「馬鹿なことを云ふな！ 夜が明けちまふぢやないか、しつかり押せ！」

「自分でやつて見るといゝや、これ以上俺達の腕にや合はねえんだから」三上は愈々打つつけるやうに云ひ切つた。

「何だ！ やらないと云ふのか！ よし！ 覚えて居れ！」船長も仕方なかつた。こんな眞つ暗がりの海の上で喧嘩をすれば自分が負けるに極つてゐるのだつた。彼は明日を待つことにした。

「何だ！ 覚えて居れ？ この野郎！ 手前は何だつて：今日の暴化がサンパン止めになつてる事を知らないか、この野郎、手前を海の中に叩き落すのは造作ねえんだぞ、どこひよつ

と云ふ！」三上は滑ぐ手を止めてしまつた。三上は、低能だと云はれてゐた。彼には種々な發作的の行動があるのだ。船長は、それを知つてゐた。それでいぢけ込んでしまつた。馬鹿に相手になつてこの暗い海へほんとに叩き込まれたら、全くそれつ切りだつてことは、十分に船長も知つてゐた。

「三上、さう怒るものぢやない。え、濱につけば、氣に入るやうにしてやるから怒らずに、一生懸命やつてくれ、え！」

「着けば分るんだね。よし来た！ 仙臺は又、ぼつ／＼と樽を押し始めた。

小倉は、をかしかつた。「着けば分る！」三上の野郎首を切られるのが分るだらう、馬鹿野郎奴！ 折角面白いところまで筋が通んだと思つたら「分る」で済ましちまやがつた。フ、これが「労働者」なんだ。誰にでも、たつた一言で綺麗に欺されちまふんだ。これだから、人間の歴史がいつでも、齒痒くて癢に障つて堪らないんだ。あ、分る、分る。全く一切がよく分る。

然し全く、心細い航海ではあつた。海はすぐその足の下で唸つてゐた。睡んでゐた。そしてその體をやけに擦つてゐた。

三上と、小倉とは、その生活の大部分がさう

たやうな、労働立法を制定して、額に烙印を捺すのが一等だ。鞭で打つのだ、耳を半分切り取ることだ。終身奴隷とすることだ。首に鐵の鎖を候めることだ。

船長は、三上が痛に陥つて堪らなかつた。それはあり得べからざることだ。想像だもつかないことなのだ。奴隷に等しいものが、「どうも、これは甚だ面白くない現象だ、さう云ふことは、根絶しなければならぬ。いや、全く法律が不完全だ」

一七

潮は今、引き潮の最頂點に達した。萬壽丸の傳馬も、三上と、小倉との經濟速力を以て、港口へ近づき始めた。十一時に卸された傳馬は、今、十二時半まで、眞つ黒暗の中に、吸ひつかれでもした様に一つ處に止まつてゐたのだつた。日本波止場まで一時間はかゝるのであつた。小倉は勘定してゐた。「一時半について、それから三時に船に歸つて、三時半に傳馬を巻き上げて、四時から、俺はワッチだ、チエッ！」

奇生！ 此處で、この儘へたばつて眠る方が気が利いてらあ、奇生！ 三上は、この時節のお目出度い、が然し實際的な、そして突発的な、突飛的な計畫を立てゝゐた。そして、その計畫は、船長が「一分」やうにして呉れれば、やらずに済むのであつたが、若し、俺を欺してもしたら、構はないから、やつてやらうとした、復讐的な意味をも含んだ處のものであつた。

三上はかう考へた。船長は俺を蛇度女郎買にやつて呉れる積りに相違ない。船長だつて俺が上陸毎に女郎買に行くのは、知つてゐるのだから、それに今夜は、あんな風に云つてたんだから、きつとサンバンは覆つといて、泊つて明朝歸ればいゝ。サアと云つて十圓は出すだらう。そこで、小倉は女郎買には行かないに違ひないから、奴を宿屋か何かに投り込んで置いて、それから……と彼はうっかり笑つた。「若し、萬が一、そのまゝうつちやらかしてでも行きやがつたら、その時は、蛇度やつてやるから」と、凄じい目附を、闇に向つて光らせて、「見せた」

てその性慾も、船員のやうな性的に不都合極る條件の下に置かれては、あらゆる機会を血眼で探し、それを溺れる者が、豪を振むやうに、しつかりと掴むのであつた。彼は、その原始的教養の持主として、又、その性慾に關する奇行の創造者として、船内に於ける人氣者であつた。

彼が、若しその執拗さを今少し制御することができたならば、彼の人氣は、もう少し深い意味に於けるものになり得た筈であつたが、何を云ふにも、その勘さには誰でも參つてしまつた。そして、彼のこの特徴は、彼が遊廓に行く時に、最もよく發揮された。西澤は、三上と一緒に遊びに上つたものだが、それは、いくら西澤が逃げても隠れても、三上が後から、踏いて行くことに原因したのだつた。そして、三上は、西澤の室の前に、胸ばひになつて、西澤の寝物語をすつかり聞いたりなどするのであつた。それは、何の爲であるかは誰にも分らない。たゞ、西澤は、「俺と一緒に上つた晩」から云つたと云ふのだ。此れ西澤が相手の女に向つて、「お前はさうして女郎にならうな身になつたんだ。いづれ、深い事情があるだらう」と、訊いた處が、その女郎買「妾」のうち、お父さんが百兩で貧乏だつた處へ、不

作が三年経いて、地主に挽米が取められずに、苦しみ抜いた擧句、遂に妾が身賣りをして、地主に義理を立てることになつたの」と云つたんだ。そして、その女奴鼻聲になつて、「世の中に義理程辛いものはないわ」と云つたんだ。

この話は三上の直接の、彼自身だけに關する露骨な淫猥な話よりも、聴衆に受けがよかつた。で水夫達は、西澤が全力を擧げて混ぜつかへすにも拘らず、三上を煽て上げて、その陸言の全部を繰返させた。

「さうすると、西澤のど助平奴、何と云ふかと思つたら、や、義理程辛いものは全くない。そして、その辛い義理を守るのは貧乏人許りだ。義理を守るから貧乏にもなるんだ。私の家も貧乏で、丁度お前さん位の妹がある。その妹も、矢張りお前さんの様に、この辛い商賣をして、私と一緒に信州の親達に仕送つてゐるんだ。私は妹からのたよりで、お前さんたちが、どんなに辛い境界を送つてゐるかよく知つてゐる。ま、年の明けまで辛抱なさいね。決して短氣を起したりなんかしないでね」つてやがるんだ。奇生！ 馬鹿にしてやがらあ、そしてたら女の奴しく泣きながら、「あんたのやうによく物の分つた、親切な人はありやしない。妾は、あなた

が妾の兄さんのやうな気がする」と云ひながら、何かしてゐる後は聞えなかつたが、今度は、西澤が、「俺もお前が、私の妹のやうに思へてならない」つてやがるんだ。それからもうほんのこつ／＼話になつて分らんから、俺は障子に、指に唾をつけて、穴を開けて覗いてやつたんだ。さうしたらお前と、三上一流の頭腦に映じた、その場の情景を、全く蘇ふところなく、すつかり、さすがの西澤も居堪れな程の、地響を以て、そこに再現してしまつた。そして最後に、「よく／＼こいつには、妹が澤山あつて、方々で女郎をしてやがるんだ。そして又、妹のやうに感じる女とどうして、俺はあゝ云ふことが出来るんだらう。ど助平奴だよ、あいつは」とつけ加へたのであつた。そして、この點に關しては三上の云ふことは眞實であつた。

わが兄弟たちは、船乗りになるまでに非常に多くの苦しい経験を嘗めて來てゐる。そして、小倉などは、一村の運命を擔つて志を立てようとしてゐた。地理的に云つても、社會的に云つても、海は最も低い處で、そこへ流れて來た「人間の屑」共は、現社會の一切の呪を引き受けて、來てゐるやうに見えた。女郎買をすることは、船員の常習であると云

はれてゐた。殊に下級海員は、そのために、全収入を消費するのだと、社會は例外なく考へてゐる。そして、それは、多くの場合事實である。が、それがどうしたと云ふのだ。彼等も女郎買をしたくはないのだ。愛人が必要なのだ。だが、今の社會で口の開いた靴を履いて、油だらけの茶つ葉服を着て、足の踵のやうに堅い手の皮を持つた、金をその癖持つてゐない、「海坊主」を、誰が一體相手になつて呉れるんだ！

一つ海の藻屑と消えるか、いつ片手を抜き取られるか、いつ、遠洋航路につくか分らない、無細工な海坊主「共」を、どこの「娘」が相手になるか。ブルジョア共は、その娘をダンスホールへ陳列し、プロレタリアの娘を、監獄のよりも高い煉瓦屏の取り繞らされた、工場の中に吸ひ込んでしまつて、その中の上出来なものを、自分等の玩弄物なる「妾」にしてしまふんだ。ブルジョア共は、人間を、自分たちを除いた一切の人間たちを、字義通りの「馬車」的貧窮奴隷にし度いと云ふ、本能的な慾求を持つてゐるんだ。そして、労働者は、生きたまゝ、何萬馬力の電動機に依つて運轉されてゐる「挽肉器」の中へ

と、スクールコンピュータで運び込まれるのだ。かうして、貧窮奴隷は最後まで、人間であり度いと云ふ希望と努力を挽き碎かれて、無情物か何ぞのやうに、ブルジョア文化の路傍へ投り出されるんだ。そして、それは、ブルジョア道路を永久的にするためのコンクリート中の一石塊となつて、永久に、道路の一部をなすやうに、計畫されてあるのだ。

だが、今はもうその計畫通りには行かないだらう！ われ等に教育がないと云ふことは、我等から、教育の機会を掠奪した奴等に責任はあるが、奴等に責任を負はせたとつてそれで、労働階級がどうなるんだ。今、我等自身で我等を教育するんだ。今、我等は、すべてを自分の手でやつて見せようと思ひ込んでゐるんだ。我等を教へ我等を導き、我等の理想を作り、我等の戦術を考へ、我等の道徳を定め、人類共同の社會を建設する。それ等は皆、われ等自身でやるんだ。そしてわれ等とは、總て額に汗して働くものことだ！

一八

傳馬は泣いた。そして船長は寒くて、二人は汗まみれになつて、日本波止場へついた。

船長は、五十錢玉を二つ握んだまゝ、ブルン／＼震へながら、そこへ突つ立つてゐた。早く歸りたいのになあ。チエツ！
「いくら要るんだね」 遂々船長は胡魔化し切れなくなつて訊いた。
「十圓」 三上は答へた。
「十圓！」 船長は、すつかり驚いた。二圓出したことが彼にとつては、逆も思ひ切つた無發だつたのに。三上は十圓を要求するのである。
「それや明日でよかないか」 船長は明日は一切を解決することを知つてゐた。

「明日は明日だ」と云つたが、三上の心中には、今、口から出した位では、とてもは切れ切れない激怒の情が、その全身の中に爆発した。

「今夜歸れば途中で凍えるわい！」と、彼は、船長の頭の上から、ハンマーでも打ち下したやうに怒鳴りつけた。
「手前は歸つて凍と寝る！ 俺達や歸りに凍えるわい！ この汗を見ろ！」

暗に見えなかつたが、二人は外は飛沫にかゝつて濡れ、内は汗で濡れ、乾いた處は、その衣類にも皮膚にもなかつた。彼等はそのまま、歸ると云ふことが不可能であることは、最初から感した處であつた。その合符は勿論、その仕事

船長は、飛び上つた。トランクも投げ上げられた。
小倉は、機軸を波止場に覆つた。そして二人ともその浮波止場に飛び上つた。

船長は、未だ十分その権力が裏づけられてゐなかつた。船長は、ポケットから、その金時計を出して、機械マツチで今が一時四十分であることを知つた。彼は自動車で十五分、二時には家へ歸りつける。で早く、「この油断のならないナラズ者」其を本船へ歸してやらねばならなかつた。

彼はポケットから、五十錢銀貨を二枚掴み出して、それが確に二枚であることを知つて、それを、小倉に渡した。

「蕎麥でも食つたら直ぐ歸れよ！ 晩くならんやうに」 さう云ふと彼は、そのままトランクを持つてスタ／＼歩き始めた。

「船長！」と三上は、思はず叫んだ。

船長はビツクリした。危くトランクを取り落さうとした程ビツクリした。そして何も考へる間もなく、三上は船長の前に立ち塞がった。
「どうしたんだ。分らねえや」 三上は唾むやうに怒鳴つた。

小倉は、靜に、黙つて、成り行きを見てゐる。

着さへもバリ／＼と凍つてゐたのである。

船長は十圓に非常な執着を感じたが、それよりも彼は矢張り、その命の方に願を上げた。彼は内ポケットから、十圓札を出して三上に渡した。そして、何か云はうとしたが、ハツと口を噤んだ。

そして、彼はそのまま、波止場を出て、仲の帳場へ行つた。

彼はそのまま、警察へ電話をかけようとして又止めた。今夜かけると、俺は家で寝るわけには行かなくなる。それに俺は今夜は上陸してはならない筈なんだ。それは胡魔化しはついて、兎に角、今夜は家へ！

仲の帳場は、同時に自動車屋を兼ねてゐた。船長は、自動車によつて、その家へと宙を飛んで歸つた。そして、途中の計畫をすつかり忘れて、自分の家の前まで自動車を乗りつけてしまつた。

彼は、暖かい家庭の人となつた。妻は、彼が遅くなつた事情は、「水夫の一人で三上と云ふ悪黨がワザとさうしたのであつて、おまけに主人から十二圓を強奪した。そのために主人は一時身が危険であつた。主人は、いつでも、家から出て行くと、今で、強盜殺人の中へシヨンボ

た。「俺はこの場合すべき事を知つてゐるんだ。ものは始まつてからでなければ済むものではない。だが、それは未だ始まつてゐないんだ！」
「小倉に金を渡しといたから、あれで何か食べて歸れ！」 船長は、自分の立つてゐる處が、未だ波止場であることは、非常に形勢を不利にする、考へてゐた。――逃げるには逃げられぬわい――

三上は、黙つて、船長の前に突つ立つてゐたが、聽て、身を引いた。

船長はホツとしながら歩きかけた。三上は又突然その前へ行つて立ち塞がった。

「今度は何か起る――と、船長も、小倉も咄嗟に感じた。

三上は萬壽丸で、一番強力だつた。横技のはじけさうな時でも、二人分の力持ちを、平氣でやつた男だ。

「忘れちやゐないね」と三上は唸つた。

「あ、さうか、さうか」と、船長は云つて、又ポケットへ手をつ込んだ。そしてガサ／＼懐てながら、又五十錢銀貨を二枚掴み出した。「スツカリ忘れてた」
「未だ忘れてるよ」 三上は押つかぶせるやうに云つた。

置かれてゐるやうなものだと思ひ込んでしまつた。その精神は、いつも今までの主人の口から、俺は船中で一番えらい地位を持つてゐて、船員ならどんな奴でもフン縛ることまでできるんだ。それで船では俺は、云はゞ陸で云ふ玉探のやうなものだ！ 俺は自由に手足のやうに船員を使ふんだ。そして俺がゐないと、あの大きな汽船が、全で動くことができないんだ。兎も、萬壽丸では不機嫌だ」と聞いてゐたのだ。で、今は、そのどちらでもあるのだらう。「船の中には、まともな人間としては主人だけだらう。後はナラズ者が揃つてゐるのだらう」と、考へた。二人は床の中で夜の明けるとまで話した。

一九

三上と小倉は、水から這ひ上つた犬のやうな恰好で、サンパン小屋の前へ行つた。そこは、ルンペンプロレタリアがサンパン押しとして、風のやうに、ウヨ／＼、小さな家の中に詰め込まれてゐた。そこは、晝も夜もなかつた。そこに集つてゐる者は聽てが、永劫の昔から、無限の未來まで、そこで寝轉んでゐると云ふやうな感じを興へた。彼等は、あらゆる悪徳と、自暴自棄と、さうして飢餓との頂點から、いつで

も、決して隠れたことが無かつた。死にかけた犬にも毒やだにがついてゐるやうに、飢ゑたる彼等の叫にも、飢ゑたる小賣商人が大福餅や巴釐などを、これも殆んど時なしに賣つてゐるのであつた。

その夜は、それ等の夜店も見えなかつた。三上と、小倉とは、その凄惨と、何れもから逃れるために、旅館か、食店を探さねばならなかつた。彼等は、それ以上、寒さにも、飢ゑにも堪へ切れないやうに感じた。彼等は、そのよく知つた地理によつて、夜更けまで、或は深夜でも、警備する飲食店が、どの邊にあるだらうとの見當はついてゐた。

それは彼等が今彷徨つてゐる海岸附近か、でなければ遊廓の附近であつた。彼等は、大通りに出た。そして十五六間も歩いた時、その横町に港町獨特の飲食店が未だ起きてゐるのを見出した。二人は直ぐ、そこに入つた。二人の異様な風貌も、その凍えた濡れたところなども、港町の飲食店は馴れてゐた。幸に、二人は、その一室へ、そのズブ濡れの靴を脱ぎ、その着物を乾かし得ることになつた。二十七八になる女中が直ぐ火へ火を入れて持つて来た。

「どうしたの、ちよいと、今頃、今入港したの！ さうぢやない？ まあ！ 随分濡れてね。若いからよ、ホ、い、脱いで乾かしなさいな。ね、着物を持つて来て上げるわ、泊つてくんでせう。勿論だわね。ホ、ホ、い、」

彼女は全くの親切からのやうにさう云つた。そして、下へ降りて行つた。どてらでも持つて来るのらしかつた。三上は勿論喜んだ。そして彼は勿論泊る氣でゐた。小倉も一人で歸るわけには行かなかつた。それに彼は三上の今夜の事件を、どう云ふ風に處置をつけるか、考へねばならなかつた。

船長は明朝になつたら、三上を懲戒下船命令を發して、一年間或は三年間位は乗船不可能にしてしまふだらう。それだけでなく、それだけで済めばいいが、事によると、脅取財で告訴するだらう。これ等に就いても自分としては何とか考へを纏めて置かなければならぬ。それに兎も角、こんなにズブ濡れのガツガツの飢ゑでは仕様がなぬ。そこで、二人は腹を積へることを考へた。

と小倉は註文した。「え、出来るわ、きつと、あなたの事だから。ホ、ホ、い、お籠子は？」と立ちながら、彼女は訊いた。「酒を持つて来るんだ。三上が受けた。」

「ホ、ホ、い、一切合切皆勿論、——だわね」と囁にしながら、下へ註文を通しに下りて行つた。二人は、どてらに着換へて、その着たもの全部を、柱にかけた。

彼等は人が懸しかつた。殊に女が懸しかつた。どんな動機からであらうとも、彼等に優しい言葉をかけて呉れる女性は、この地上に、若し生きてゐればその母か姉妹だけであつた。けれども、彼等は、それ等を全で失つてしまつてゐたか、全で知らなかつたか、又は、それを遙く遠くへ發して来てゐるのであつた。

彼等は女性を懸つた。そして、それが娼婦と淫賣婦とに別れてあつた。女の中でも最も弱い階級と、男の中でも最も虐げられた階級との間には、ブルジョアがそれ等に對する時と違つて、どこかに、共通な打ち解けた點があつた。それは、共同の敵を持つてゐる味方同志であつた。表面的の關係は買ひ、賣つた、ことになつても、彼等に極めて僅に残された人間性が、それを、人間的に引き戻す機會もあり得た。そして、彼等はどちらも、プロレタリアであつた。

彼女に荒んだ心に、落ちる一滴の涙は、どんなに悲しいものであるか。女は體て牛肉を餅に並べて持つて来た。そしてその後から今一人若い二十二三の女中がお燗のついた鏡子を持つて入つて来た。

「どうしてあなたは少しも飲まないの」と、若い方が、小倉に凭れかゝりながら訊いた。「その代り持つて来たらう——」

「とところが、僕は酒が飲めないんだ。船乗りらしくもないだらう。でも矢つ張り飲めないんだ。蟲が嫌ひと云ふんだらうね」と云ひながら、小倉は肉や葱などをつまみながら、頭は微ひつ放しの傳馬のことと、三上對船長との未解決のままの問題との方へ許り向いてゐた。

も虚心平氣にやつてのけたに違ひない。彼は、生れてから、直ぐにその生の母親に死に分れて、それつ切り、人間に愛があると云ふことはおろか、子供に乳があると云ふことすらも知らずに育つたのであつた。彼は極めて幼い時から、海邊へ出て、漁夫の手傳をした。そして自分の食ふ分は五分位の時分から自分で稼いだ。そして彼は小學校へ行く代りに、鹽船で太平洋に乗り出した。沖を通つて、山のやうな船の中に、洋服を着た人間が働いてゐるのを見て、「自分も洋服を着て働きたい」と云ふので、鹽船を捨てて、汽船乗りになつたのであつた。彼は、誰からも、ほんとに愛されたことのない人間であつた。

「あ、いよ。それぢや僕も泊らせて貰はうか。姐さん、僕はね、姐さんが嫌ひでなんぞないんだよ。抱きしめて、キッスしたい位だよ。だけど、僕にはね、僕が愛してると同じやうに僕を愛してる人があるんだよ。だから、僕は一人で寝るから、姐さんは、帳場の工合が悪かつたら、床を二つ敷いて、並んで寝ようね。そして寝物語りに、姐さんのほんとの戀人の話でも聞かうか」と云つて、淋しく氣の毒さうに小倉は笑つた。

「まあ！と立つて床を延べようとしてゐた女は、急に小倉の膝の上につゝ伏した。そして泣き入るのだつた。小倉はびつくりした。

「どうしたの。一體、え、そんなに帳場に都合が悪けりや一緒だつて、些も構はないから、泣くのはお止しよ。ね」

小倉は女を起さうとした。女は起きなかつた。そして痛も泣き續けるのだつた。

「およし、ね。泣くのはもうお止し。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなければ分らない。泣く程の事があるんだつたら膝とも

ことを暗示しようとした。

「まあ！あなたは若いおぢいさんね。あの人より若いんでせう。だのに息子の事でも氣にするやうに、あの人のことを氣にしているわ、でも、あなたは、いゝ人ね」と、だん／＼眞面目になりながら、女はそれでもひやかすのよと云つた調子を含めて云つた。

「どうしたんだ。大變遅いね、便所が」と、小倉は女に訊いた。

「あら！と女はわざと驚いて見せて、もうお寝みになつたんだわ、あなた未だ調子にいらつしやらない」

「もう幾時頃だらう」

「三時よ、もうぢきに。やすませよう。ね」

「だけど、僕今夜中に船にの男と一緒に歸らなければならぬんだがなあ」小倉は困つたやうに云つた。

「何故？ 妾がいやなの、だつたら妾代つてもいゝわ。そんなこと云はないでね。後生だわ」

女は、小倉が自分を嫌つて駄々をこねてるんだと思つて、困り切つてゐた。

「姐さん。間違つちやいけないよ。僕、姐さんが、嫌ひでなんかないやしないんだよ。たゞ、

「あ、いよ。それぢや僕も泊らせて貰はうか。姐さん、僕はね、姐さんが嫌ひでなんぞないんだよ。抱きしめて、キッスしたい位だよ。だけど、僕にはね、僕が愛してると同じやうに僕を愛してる人があるんだよ。だから、僕は一人で寝るから、姐さんは、帳場の工合が悪かつたら、床を二つ敷いて、並んで寝ようね。そして寝物語りに、姐さんのほんとの戀人の話でも聞かうか」と云つて、淋しく氣の毒さうに小倉は笑つた。

「まあ！と立つて床を延べようとしてゐた女は、急に小倉の膝の上につゝ伏した。そして泣き入るのだつた。小倉はびつくりした。

「どうしたの。一體、え、そんなに帳場に都合が悪けりや一緒だつて、些も構はないから、泣くのはお止しよ。ね」

小倉は女を起さうとした。女は起きなかつた。そして痛も泣き續けるのだつた。

「およし、ね。泣くのはもうお止し。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなければ分らない。泣く程の事があるんだつたら膝とも

110

「あ、いよ。それぢや僕も泊らせて貰はうか。姐さん、僕はね、姐さんが嫌ひでなんぞないんだよ。抱きしめて、キッスしたい位だよ。だけど、僕にはね、僕が愛してると同じやうに僕を愛してる人があるんだよ。だから、僕は一人で寝るから、姐さんは、帳場の工合が悪かつたら、床を二つ敷いて、並んで寝ようね。そして寝物語りに、姐さんのほんとの戀人の話でも聞かうか」と云つて、淋しく氣の毒さうに小倉は笑つた。

「まあ！と立つて床を延べようとしてゐた女は、急に小倉の膝の上につゝ伏した。そして泣き入るのだつた。小倉はびつくりした。

「どうしたの。一體、え、そんなに帳場に都合が悪けりや一緒だつて、些も構はないから、泣くのはお止しよ。ね」

小倉は女を起さうとした。女は起きなかつた。そして痛も泣き續けるのだつた。

「およし、ね。泣くのはもうお止し。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなければ分らない。泣く程の事があるんだつたら膝とも

「あ、いよ。それぢや僕も泊らせて貰はうか。姐さん、僕はね、姐さんが嫌ひでなんぞないんだよ。抱きしめて、キッスしたい位だよ。だけど、僕にはね、僕が愛してると同じやうに僕を愛してる人があるんだよ。だから、僕は一人で寝るから、姐さんは、帳場の工合が悪かつたら、床を二つ敷いて、並んで寝ようね。そして寝物語りに、姐さんのほんとの戀人の話でも聞かうか」と云つて、淋しく氣の毒さうに小倉は笑つた。

「まあ！と立つて床を延べようとしてゐた女は、急に小倉の膝の上につゝ伏した。そして泣き入るのだつた。小倉はびつくりした。

「どうしたの。一體、え、そんなに帳場に都合が悪けりや一緒だつて、些も構はないから、泣くのはお止しよ。ね」

小倉は女を起さうとした。女は起きなかつた。そして痛も泣き續けるのだつた。

「およし、ね。泣くのはもうお止し。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなければ分らない。泣く程の事があるんだつたら膝とも

「あ、いよ。それぢや僕も泊らせて貰はうか。姐さん、僕はね、姐さんが嫌ひでなんぞないんだよ。抱きしめて、キッスしたい位だよ。だけど、僕にはね、僕が愛してると同じやうに僕を愛してる人があるんだよ。だから、僕は一人で寝るから、姐さんは、帳場の工合が悪かつたら、床を二つ敷いて、並んで寝ようね。そして寝物語りに、姐さんのほんとの戀人の話でも聞かうか」と云つて、淋しく氣の毒さうに小倉は笑つた。

「まあ！と立つて床を延べようとしてゐた女は、急に小倉の膝の上につゝ伏した。そして泣き入るのだつた。小倉はびつくりした。

「どうしたの。一體、え、そんなに帳場に都合が悪けりや一緒だつて、些も構はないから、泣くのはお止しよ。ね」

小倉は女を起さうとした。女は起きなかつた。そして痛も泣き續けるのだつた。

「およし、ね。泣くのはもうお止し。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなければ分らない。泣く程の事があるんだつたら膝とも

でせう。ね、自分で人間を作つて置いて自分でこれはいゝあれは悪いと決めて置いて、そして、自分の作つた人間を、自分の作つた罪惡の中へ、全で陥穽にでも落すやうにして、恨め込んでしまふのは、それや神様の責任だわ。だから、妾の恐いのは、神佛ぢやないの。

「ぢや何が恐いんだね。小倉は眠くて堪らなかつたが、女の珍らしい言葉につい昂奮させられて起きてゐたのだつた。

「妾寒いから、あなたの傍へ入つてもいいでせう。ね、たゞ入るだけなのだから、ね、いゝこと」といひながら、女は帯も解かずに小倉の寢床へ入つて来た。そして床の隅に小さく黄金蟲のやうに固まりながら、

「妾達はね、ほんとに心から『愛さう』と思ふ人を見附けることができないのよ。

妾たちが、第一、選り好みする事がいけないつて、あなたも考へて？ 妾たちだつて、何かを見分ける力を持つことが悪いつてことはないでせうね。よし悪くつても、それはあるものなんだわ。だから妾達は、心から人を愛すると云ふことはできないのよ。だけれどもね、それは妾たちの愛するだけの『價値』のある男がこの世の中にならなかつてことぢやないのよ。さう云ふ人も

あるのよ。え、さう云ふ人もあるのよ。そしてね、随分癪にさへはることはね、それは全く腹の立つ、癪に障る生意氣なことなのよ、さう云ふ男はね、妾たちが、ほんとにしんみりして、その人と愛し合ひ度いと思ふ様な、さう云ふ人はね、いつでもきつと極り切つて馬鹿なのよ。馬鹿でのろまで、ぼろつとしてゐるの。でさう云ふ男はね、妾たちがその男を愛してゐるつてことが分らないのよ。そしてまた、その男は随分馬鹿ね。妾たちが見たいな女は、男性を愛すること、職業的以外にできないと云つたやうに、無關心なのよ、全く、馬鹿につける薬つてものは昔から、どこにも無かつたのね。

彼女は、全で夢遊病者か何かのやうに、天井を向いたつきり、その大きく開いた眼を、自分の頭蓋骨の内部でも覗視してゐるやうに、ちつと据ゑて、熱に浮かされてゐるやうに、早口に、熱心に、そして、一人で小火を消してもしてゐるやうに焦つて、慥と話した。そのくせ、彼女の場合はそこへ、紙でねぢつけられでもしたやうに、動かなかつた。

小倉は、よく話がつた。そして、自分が、氣取り屋で馬鹿であることを、十分にこつびどくやつつけられてゐることも知つてゐた。けれども、

「僕は、社會の、秩序と云ふ大きな看板に隠れて、自分の利慾のみを得ようとしてゐた。それは全くだ。」

「ほうら、白状してしまつたわ。あなたはね、高々船長位になつて、三上さん見たいな人を背めて、御自分は又、自動車か何かに乗つた電線車から、譯も分らない事を云つて苛められ度いの。お止しなさい。仰向いて唾を吐くのは止め

でも、それにしても、何と云ふ聰明な女だらう」と、彼はもうすつかり眠氣を奪はれてしまつて、女の言葉の方向の動くがままに、その被れ切つた意識を引摺り廻され、血みどろにされるのであつた。

「そして、ね、そんな馬鹿氣なことは、ある筈がないのだけれどね、妾たちも、又、馬鹿なのよ。何故だと思つて？ それはね、妾達はいつでも極り切つて馬鹿だけに惚れるのよ。その馬鹿はね、いつでも極り切つて、戸惑ひした雀のやうに間違つて飛び込んで来るだけなのよ。ホ、ホ、ホ、ね、小倉さん、あなたは御自分が買つて品行のいい、船乗りには珍らしい、堅い、善良な、そして一つあるのよ、人類のために人間だと思つてゐるのね。ね、さうでせう。さうよ、さうよ、妾にはね、あなたが自分で知らな

キチンとかぶつて、几帳面な、ガキ／＼と歩いて、一錢も人から借り倒さないで、乞食には、きつと一錢——一錢より少くも多くもないことよ——それつばかしかだけやつて、女と云へば、おかみさんだけしか知らないで、それも、全で家の雜巾と同様に無意味に乾し上げて、ね、若い中から、決して女郎買などしないで、その代り、小倉さんは航海學を讀んでせう。そして、高等海員の免狀を受けようと目論んでゐるわね。勉強してることね、あなたは。ね、いゝの、あなた見たいに、勉強して、そして、階段を上らうとして骨を折るのよ。だけれどね、その階段はね、滅亡への階段つてのよ。分つて。それをうまく昇つても、その階段自身が滅亡する運命になつてゐるし、それが又在る間は、その階段を支へる土臺の方で、無数の人間が失はれる滅亡の階段つてのよ。その階段でのが、一切の原なのよ。ね小倉さん。實は、ありもしない幻の階段のために、實在してゐる人間が、永劫に苦しむつてことはいゝことなの。あなたには分るはずだわ。あなたは、その階段から全でその焼けつくやうな眼を放したことがないんだもの。それは、あなたには分らねばならぬんだわ。あなたは、妾や、その他ありとあらゆる不幸な、あ

でも、それにしても、何と云ふ聰明な女だらう」と、彼はもうすつかり眠氣を奪はれてしまつて、女の言葉の方向の動くがままに、その被れ切つた意識を引摺り廻され、血みどろにされるのであつた。

「そして、ね、そんな馬鹿氣なことは、ある筈がないのだけれどね、妾たちも、又、馬鹿なのよ。何故だと思つて？ それはね、妾達はいつでも極り切つて馬鹿だけに惚れるのよ。その馬鹿はね、いつでも極り切つて、戸惑ひした雀のやうに間違つて飛び込んで来るだけなのよ。ホ、ホ、ホ、ね、小倉さん、あなたは御自分が買つて品行のいい、船乗りには珍らしい、堅い、善良な、そして一つあるのよ、人類のために人間だと思つてゐるのね。ね、さうでせう。さうよ、さうよ、妾にはね、あなたが自分で知らな

れが、どうしたつての、小倉さん、あなたは淫賣よりも、一生涯を通じての娼妓がお好きな一人であつたわ。ホ、ホ、ホ、だけれど、あなたは、さつき『僕が愛してると同じ様に僕を愛してゐる女がある』つて云つたわね。妾、妾、妾だつて誰にも劣らない愛を持つてゐるんだわ、だけれど、妾は前科者なのよ。ホ、ホ、ホ、世の中の人間は、自分を縛つてゐる鎖の鎖が、人をも縛つてゐると思ふと、安心して自分の鎖が軽くでもなるんだと思ふわ。それはね、奴隷道徳の鎖よ。因襲の鎖つてのよ。だけれどね、小倉さん。妾には、そんなことはないのよ。妾そんなこと、夢にも思はないんだけれど、例へばね、若しか、妾があなたを愛したくつても妾が淫賣ならその資格が無いとでも、あなたは云ひ度いんだわね。いゝえ、さうよ、ま、黙つてらつしやい。彼女が、小倉が何も云はうとしてもゐないのに、慌て、彼の云ふのを遮つた。

「妾はあなたに愛させて呉れるやうに、觀む資格も無いと思つてゐるのね。だけれどね、小倉さん、妾は幻の階段を追ふやうな利己主義者は、妾の方でいくら頼まれてもいやなのよ。それは意氣地なしの考へる生き方なんだもの。それは妾たちが、こんな取柄かしい商賣をするの

「でも、それいつあつたか。僕は海員手帳が預けてあるし行李もあるし、それいつあつたよ。小倉は全く困るのだ。彼は船長免状を取る試験のために、二度も沈没したりして、それに必要な履歴が實地として取つてあつた。それは海員手帳に記入されてあつた。」

「だから、さやうなら僕がさつきから云ふのに、いつまでも君が愚問々々、ついて来るからよ。君はサンパンを雇つて歸れ。そして、三

「だつて、君が僕だけが悪いことはないぢやないか、大體船長が無理なんぢやないか、だから、歸つたつて何ともないよ。歸つた方がいよ。小倉は、頻りに理便な方法をとることを三上にすすめた。」

「何でもかんでもいやだよ、俺は。若し歸る氣になつたら、出帆間に歸る。それまで俺は隠れて、船の様子を見ることにするよ。」

彼はかう云つてズン／＼歩いて行つた。小倉は夢でも見捨ててゐるやうに、ボンヤリしながら、三上の後から無意識に歩いた。

三上は波止場に来て、昨夜驚いた船の傳馬にヒョイツと飛び乗つた。小倉も乗らうとする、手を振つて「みんなに、出帆間にこれ——と云つて傳馬を指さして——で歸るからと云つてくれよ。なあ」と云ひながら、グーツと波止場を押して、歸れてしまつた。

「なるほど、三上は歸れない筈だ。船長を脅かしたんだもんなあ、それを歸れと云つて、昨夜一晩泊つた、俺は何と云ふ白痴だつたんだ。三上は、たとひ理由があらうがあるまいが、どのみちやつつけられるに決つてみたんだ。三上は、傳馬を質に入れるなんて、奴一流の計畫を立てて行つちやつた。が、それがどんな滑稽なやり方であらうか、奴が、のこ／＼船へ歸るよりは遙にましなこつた。知つてゐて、陥罪に首を突つ込むにや當らないもんなあ。小倉は行く先きを忘れた田舎者のやうに當惑氣にそこへ突つ立つてゐた。彼の役割は、この上もなく奇妙な、滑稽な云ひ様のない不思議なものになつて来た。」

「船の傳馬に乗つて来て、サンパンを備つて歸る！一體どうしたんだ。そしてこの責任は、三上と僕とに、あるんだからなあ。どうなるんだ、一體、まゝよ！ 歸つて見れやどうにかならんだらう。」

彼はサンパンを備つて、萬壽丸へ行くやうに

より、もつと／＼取かしの、墮落した、外道のやり口よ。

「だけどもね。小倉さん。若しあなたが、さうでなかつたら、若しあなたが立派な人間で階級なんぞ認めない人だつたら、妾は、妾は、あんな見たいな人に初めて會つたことを白狀してよ。そして、妾は、あなたを、世界中で一番強い、弱いの味方としてなら、妾はあなたを愛したいの。だけどもね、何だつて妾は馬鹿なんだから。あなたにはいい人があつたのね、妾、妾、妾だつて、妾はね、小倉さん。あなたが高等海員の試験を受けて、船長に立身するやうに、試験を受けてでも願つてでもなく、この商賣に、無理矢理に放り込まれたんだわ。妾の云ふことが分つて。ホホ、ホホ、ホホ。妾の云ふことはね、こんな商賣してても、それは妾の知つたことぢやないって積りなのよ。あなたが船乗りをしてるのも、妾がこんな汚らしいことをしてるのも、性質は同じなのよ。そしてね、妾の方が、ほんたうは、もつと尊敬して貰はなければならぬ。苦痛な部分を引き受けてるのよ。分つて？ 人間が生きたるためには、どんな苦痛でも忍ぶもんだわ。生きるためには、より早く死ぬ方法まで、飛びつくものよ。」

妾なんぞ死ぬまでに、ほんとに自分のしたいと思つたことの、反對のことばかしさせられて遂々死んぢやふんだ。自分の思ふ通りになることは一つだつてありやしないんだわ。妾はね、初めはね、あなたをたゞのお客と思つたの、そして次には坊ちゃんと思つたの、その次はほんとに物の分つたおとなしい人だと思つたの、そしてね、今ではね、あなたは、さうね、何だらう。何と云へばいいだらう。妾のお父さんだわ。妾を産んだ、妾の知らない、ほんとの妾のお父さんだわ、ホホ、ホホ、ホホ。妾お父さんに……」

二

その夜は全く悪魔につかれた夜であつた。人間の神経を幾で焼くやうに重苦しい、惱ましい、魅惑的な、夜であつた。極度の酔ひと、限りなき苦しみのと、どろ／＼に溶け合つたやうな一夜であつた。

三上にも、小倉にも、それは回視するに思ひないやうな、各々の思ひ出を、その夜は焼きつけた。それは水劫に覺れることのないほどの夜であるべきであると思はれた。それほどその夜は二人にとつて大きな夜であつた。

人間の一生のうち、その人の一切の事情

を、一撃の下に轉倒させる様な重大な事件があり、社會に於ては、全社會を驚動せしめるやうな大事件がある。そして、それ等の事件が必ず夜か晝かに行はれ、その事件とは全て關係なしに、夜になつたり、朝になつたりすること、個人として、社會として、その事件に當面したものに、馬鹿げた、不思議な感じを屹度起させるものだ。中には、あ、俺にとつて、あれほど重大なことがあつたのに、どうだらう、夜が明けたと思はせるのである。

三上と、小倉とは、各々が、そんな風な感じを以て、朝の六時に起きた。二人とも願はばつたい眼をしてゐた。

一夜は明けた。そして、重大なる事件は未解決の儘に、夜を持ち越して、明けたのであつた。それは、一夜を持ち越したために、事實の形を千倍もの太さにしてしまつた。一夜——五時間——傳馬留——水夫睡眠——何でもないことであつた。それは全く極めて平凡な話らないことであつた。

處が、その舞臺を、社會から、萬壽丸にまで縮めると、問題が由々しく大きくなるのだつた。

兎まれ、小倉は「階段」のことは忘れたにして

「萬壽はいつ入つたんだい」と、風小屋から、這ひ出した兄弟が訊いた。
「昨夜晩くよ」彼は答へた。
「今朝此處へ歸つてあつた傳馬は、萬壽のぢやなかつたかい」と、船頭は訊いた。
「こいつ等も知つてらへ、知つてる筈だ、七時だもんなあ、だが、一體昨夜のことは、ほんとにこの俺が経験したことたらうか、それとも、全く不思議だつたなあ」小倉は昨夜の女のことを考へてゐた。彼女は賢いそして「純潔」な女だつた。

二三

小倉は萬壽丸へ歸つた。當番のコーターマスタは、梯子を昇り切ると、すぐに、小倉を取つ捕へた。
「どうしたんだい、心配したぜ、昨夜は、流されやしなかつたか。そして傳馬はどうしたんだ。矢張りやられたのかい」
船に残つた者は、なるほど一切の事情を知らない筈であつた。そして、サンパン止め位の荒れに夜中のことだから、傳馬をやられた爲めに、夜歸れなかつたんだと、船員達は勝手に想像して氣を揉んでゐたのだつた。「傳馬は、船長を

上陸させて置いて歸りに、橋を渡る時に、打つ衝けて、壊れた——それほど古くも弱つてゐないんだが——と云へば、船員たちには、どうにかかうにか、三上が歸つて来ないで、サンパンの船頭が喋舌らない限り分りはしないんだが、儲それでは三上はどこへ行つたと云ふことにならぬ。何も隠し立てする必要もないから、すつかりぶち撒けた方がいゝだらう。それで悪かつたら、又その時のことだ」と、小倉は咄嗟の間に考へた。

「ナアに、やられはしないんだよ。妙なことになつちまつて困つたんだよ」小倉はほんとに、今そのことについて、口を切つて、「實際これは俺の考へてるやうに簡單に片のつく問題ぢやない、全く困つたことだ」と云ふことを痛切に感じた。
「どうしたんだ。一體、そして三上は？」
「三上が傳馬で、今朝歸つて来てる筈なんだよ」小倉は、三上が傳馬を賣り飛ばすか買入れるかすると云つた、その、進も實現出来さうもない、彼の計畫だけは云ふまいと決心した。
「冗談云つちやいけな。誰も歸つて来やしないぜ」
「それぢや、おもてでよく、すつかりの事情を

委しく話さう。一寸困つたことが起つたんだ。船長と三上とが喧嘩したんだ。それを、今おもてで話さう。昔あるかなあ」小倉はかう云ひながら、もうおもてへのタラップを降りて、驅けで行つた。

おもてでは、ボースンから、大工、水夫たち、全部が、いつでも入港の能きるやうに、準備を整へて、船長の歸るのを待つてゐた。それよりもつと、三上と小倉との消息について待ち切つてゐた。
「どうも済まなかつた。只今」と叫びながら小倉はそこへ歸込んで来た。
「どうしたい三上は？」
「借ては女郎賣をしやがつたな」
「傳馬で歸つたのかい」
「うまくやつてやがらあ」

「うまくやつてやがらあ」
各人が考へ、想像してゐたこと最初の言葉が、彼のまはりに、棧橋から船に落ちる石炭のやうに轟然と、同時に飛びかゝつた。
小倉は、かいつまんで昨夜の困難な航海から、船長の態度から三上の行爲から、宿屋——暖味屋とは云はなかつた——泊つて、凍りついた服を乾かして、今朝まで乾くのを待つてゐたこと、三上は、黙つて、宿を先へ出て、宿の者へ

は一足先へ船の傳馬で歸るからと云ひ置いて行つたこと、慌て、飛んで出て、波止場へ来たときはには、もう三上は影も見えなかつたこと、船長はどんな措置をとるか、打つ捨つては進も置かないだらうと云ふことなどを、簡單に、然し要領を握んで話した。

セーラーたちは黙つて聞いてゐた。さうして、三上が一足先へ出て、未だ歸つて来ないと云ふことを、小倉ほどに心配しないのみならず、寧ろそれをひどく痛快がつた。
「いつそ本船へ乗つて逃げたら面白かつたな」などと茶化しきへした。一向誰もその事に對して「かうしたらいいだらう」と云ふ意見を持ち出す者は無かつた。誰も、その單調でない、奇抜な話を聞いて、その話と、事件とに満足してしまつた。

小倉は、此處でも又彼が事柄を餘り簡單に見過してゐたこと、今では彼一人だけが、當の責任者に轉化したことを痛感した。
小倉は、非常に善良ではあるが、意志の弱い、そして所謂冷靜な、分別のある若者だつた。それで従つていつでも「事勿れ主義」であつた。その逃避的な彼が、旋風の事件の中心に捲き込まれたのだから、堪らなかつた。彼は何をどう

していいか、自分自身が何であるか、一體全體どうしたらいいんだか、藤つ張り一切が分らなかつた。

誰も、それまで打ち明けてもゐないのに、いつでも、その人間の最も重大な秘密なことになつて、自分の手で収まりがつかぬさうになる。誰も、決して許段それ程親密でもないやうに見える、藤原へ、相談を持ちかけるのが極り切つた例になつてゐた。小倉も、この例に依つて、藤原へ意見を求めようと思つた。

藤原は、今まで自分が中心になつてゐた、その話から、避けて、一方の隅で、黙つてその事件の話を聞いてゐた。そして、煙草を、尻からヤニの出る一ほどに、やけに喫かしてゐるのだつた。
「藤原君、君はどうしたらいいと思ふかい」と、小倉は藤原と向ひ合つて腰を下しながら訊いた。

「よくは未だ分らないけれど、僕の知つてる範圍では、君にも、三上君にも何等の責任はないと思ふよ」と彼は答へた。
「さうだらうか、だけど、三上は十回無理強ひ見たにして借りたものなあ。それに、昨夜は歸らないで、今日は傳馬をどつかへ持つてつちやつたしね。僕は今、一切が僕に責任がかゝつ

て来やしないかと思つて心配してゐるんだよ、それ僕にも責任はあるんだだけだね。どうしたらいいだらうか。船長が歸つたら、直ぐに謝りに行つたらどうだらう、ね」

小倉は途方に暮れてゐた。彼はその事柄が帳消しになるためなら今から、裸になつて、海へ飛び込めと云はれれば、さうすることの方を遙かに喜んで、且つ安心したであらう。彼は「これほどの問題が、未だ片附かない」と云ふ、宙ぶらりんの状態であることを、極度に恐れた。彼は、この問題が、「いつかは現れるが、未だいつかそれは分らないやうな状態で、一、二ヶ月も續くとすれば、彼は自分と三上との二つの行爲を括めて、道徳的にも、法律的にも——若しありとすれば物質的にも、一切合切を自分で責任を背負つた方がどの位樂だつたか知れなかつた。

「俺はもう、これが三年越し引き續いた事柄のやうに考へられる」小倉は、ヒステリーの女のやうに「傳馬」の事以外から頭を持ち出すことが能きなかつた。
「船長に謝りに行く？ それもいゝだらう。だが、お前、何を一體謝る積りなんだい。雇入れもしないボーイ長の負傷を打つ捨らかしとい

「自分だけは、夜中に上陸したことをかい。難破船の側をスレ／＼に涼しい風をして通過したことをかい。謝る理由と、事柄とがあるなら進んで謝るがいさ。だが謝ることの無い時に謝るのは、自分の正しさを誇示することになるか、又は、單なるオベツカに止まるよ。そんなに君が謝ることはないだらう。事の起りから、終りまで、冷静に考へて見給へ。勝敗は別として、理由の正邪はどつちにあるか、直ぐ分ることぢやないか。港務の許可なしに夜陸に乘じてコッソリ上陸したり、檢校前に上陸したりすることは、よし、どんな風の晩の宵の中であつても悪いことに相違はないだらう。だから順序として、その點から先づ謝るべきだらうよ」

藤原は、全つ切り他とは違つた見方をして居る。だが、あれも一つの見方だ。随分亂暴な見方だが眞實の見方だ。どうだらう。本たうに、本たうのことをやつても構はないだらうか。と、小倉は未だ考へを決め得ずにいるのだつた。

「藤原の云ふことは、昨夜の女の云つた處と、どこか似てる處があるぞと、小倉は、この時フト思つた。「あの女は賣玉だ！ だが、今はそれ處ぢやない。だが、あの女が他のことを三三上さんよりも毀潰しよ、あんたは」と云つたつて取りに出かけた留守であつた。

をばさんはゐた。下手な田舎屋の女形を思はせる色の黒い、袴せたヒヨロ／＼の、南瓜の巻びた花のやうな、女郎上りのをばさんだつた。一口に云へば「サンマ」のをばさんだつた。このをばさんはゐた。

このをばさんは親爺のおかみさんではなかつた。おやぢの世話で船に乗つて、今外國船に乗つて、こゝ四年程前ハンブルグから、近い中に歸ると云ふ手紙と、金二百圓とを送つて寄越した水夫の、おかみさんだつた。

そのおかみさんが、今歸るか、今歸るかと思つてる中に、二百圓と一年とが消えて失くなつてしまつた。そこで、三年許り前から、やもめの、こゝのおやぢのところへ、飯炊きに來て、亭主の歸るのを「網」を張つて待つてゐるのであつた。

「まあ、三上さんだつたわね。どうしたの、いつ入つたの？」

三上が、のつそり入つたのを見たをばさんは、長火鉢の前に吸ひかけの長煙管を置いて、くると入口の方を振りかへつて、さう云つた。

「おやぢはチャンス取りか？」三上はブーツキラ杯に訊いた。

「え、不相變、急いでるの？ それともゆつ

なあ、だがそれや全くだつた。俺はどうだ、自分のことさへ自分で考へが全つきりつかないぢやないか、三上は一人で立派にやつて行つた。俺には、俺の頭に反いて、尻尾を振るブルジョアの取引気分があるんだ。それが、すつかり、俺を臺なしにするんだ。俺は何故藤原君の云ふやうに、頭の命ずる通りに動かないのだらう、あゝ、矢つ張り俺は結婚なんだ！ 俺は、労働者階級の悲愴を、決斷と勇氣と犠牲のないことに歸してゐるが、就中、この俺がその中の最なるものだ。労働者階級を、裏切る唯一の卑劣者の典型を、俺は、俺自身の中に見出した。俺は、思想として全體を憤慨する前に、俺自身の取さした、臆病者の、事大主義者の、裏切者、利己主義者の、資本主義の番頭の俺を、先づ血祭に上げねばならぬ。俺は、俺の村を、ブルジョアの番頭になれば、救へると云ふ意見を捨て去るべきだ。俺の救はなければならぬのは、俺の村だけぢやなくて、この地上の一切だ」

小倉は元氣よく、全で今にも、ブルジョアに出つゝしきへすれば飛びつきさうに、かく考へたが、それは彼には絶対に不可能な事であつた。彼は、依然事大主義者だつた。一切が腐つてしまつても、圓くさへあればそれで、「安心」なの

くり出されて？ とをばさんは訊いた。

「急がねえよ、上らして貰はうと云つて、彼はもうそこへ上つてゐるんだつたが、長火鉢の前の座蒲團の上へ上らして貰つてをばさんの長煙管で、スバ／＼と煙草を吸ひ始めた。

「隨分御無沙汰ね、三上さん。あつちにはこんなに御無沙汰しやしないせう。憤られるからね」

「眞金町？ 毎航海さ、おやぢは遅くなるだらうね。今幾人ゐる？」

「十一人、裏に迫つて、口はないし、入る處はないし、親爺さん、困つてよ」と指で丸を拵へて見せた。十一人の船員たちが今休んでゐるのであつた。

「をばさんの御亭、未だ歸らないかい？」三上は訊いた。

「歸らないよ、未だ。向うで髪毛の赤い、青い眼の女房でも持つてゐたらうよ」

「その積りで浮氣をしてると、えらいことになるぜ。ハツハ、ハ、」

「相手さへあればね。ホホ、ハ、」

「僕は下船したんだから、當分又厄介になるよ。頼むよ、い、かい。チャット出かけて來るから、親爺が歸つたらさう云つといてくれよ」三上が

だつた。

小倉はその性格が煮え切らない處から、この事件の進展に對し、何等の役目を勤めることのできなないの木偶の坊に過ぎなかつた。

三上が船長に與へた、傳馬は、下級船員全體への復讐の形を船長によつて取られた。

そして、この事が、こゝに述べる處の、同盟罷業を惹起した。ブルジョアの番頭對、プロレタリア！ 船では、ブルジョアは決して船主としてのその姿を労働者の前へ現さなかつた。

三上は、傳馬を押して、一度神奈川沖まで出たが、又引きかへして、堀川へ入つた。彼は、神奈川沖へ出た時に、傳馬にペンキで書かれてあつた萬壽丸を、シーナイフで削り取つてしまつた。

彼は、翁町の、彼が泊りつけのボーレンの、サンパンの繋がる場所へ、その傳馬を繋いだ。そして、小林と云ふ、そのボーレンへ、のこ／＼上つて行つた。

ボーレンの親爺は、京のやうな彼の唯一の財産なるサンパンに、チャンス取りに泊つてゐる宿料なしの水夫を船頭に於て、沖へとチャンスをと

靴を履いてると、

「そして荷物は？ 小屋？ 親爺さんこの頃工面がよくないんだから、十でも十五でも入れないと、駄目だよ。分つてゐるね」と、をばさんは、駄目を押した。前金を十圓か十五圓は入れなければ、逆も置かないと云ふのであつた。

「大丈夫だよ。そんなことあ、云ふだけ野暮さ。ヘツヘツハ、ハ、」三上は表へ出て行つた。

彼は近所の質屋へ行つた。それは彼の常取引の質店であつた。

「いらつしやい、暫くで、お品物は？」と主人は訊いた。

「實はね、品物は此處まで持つて來られないんだが、二日だけ、傳馬で金を借りたいんだがね。ボースンが、融通して貰つたところへ、現金を返すんだが、それが今足りないんだ。船は今ドックに入つてゐる××丸だから、傳馬を返してあるんだ。それで、二日許り借り度いと云ふんだがね。利息はいくら高くて構はないつてんだ。どうだらう。見に行つて貰へんかね。そこに繋いであるんだが」三上は、これを昨夜傳馬に乗る前から計畫してゐたのであつた。そして彼は、その計畫を完全に信賴してゐたのであつ

自分だけは、夜中に上陸したことをかい。難破船の側をスレ／＼に涼しい風をして通過したことをかい。謝る理由と、事柄とがあるなら進んで謝るがいさ。だが謝ることの無い時に謝るのは、自分の正しさを誇示することになるか、又は、單なるオベツカに止まるよ。そんなに君が謝ることはないだらう。事の起りから、終りまで、冷静に考へて見給へ。勝敗は別として、理由の正邪はどつちにあるか、直ぐ分ることぢやないか。港務の許可なしに夜陸に乘じてコッソリ上陸したり、檢校前に上陸したりすることは、よし、どんな風の晩の宵の中であつても悪いことに相違はないだらう。だから順序として、その點から先づ謝るべきだらうよ」

藤原は、全つ切り他とは違つた見方をして居る。だが、あれも一つの見方だ。随分亂暴な見方だが眞實の見方だ。どうだらう。本たうに、本たうのことをやつても構はないだらうか。と、小倉は未だ考へを決め得ずにいるのだつた。

「藤原の云ふことは、昨夜の女の云つた處と、どこか似てる處があるぞと、小倉は、この時フト思つた。「あの女は賣玉だ！ だが、今はそれ處ぢやない。だが、あの女が他のことを三三上さんよりも毀潰しよ、あんたは」と云つたつて取りに出かけた留守であつた。

をばさんはゐた。下手な田舎屋の女形を思はせる色の黒い、袴せたヒヨロ／＼の、南瓜の巻びた花のやうな、女郎上りのをばさんだつた。一口に云へば「サンマ」のをばさんだつた。このをばさんはゐた。

このをばさんは親爺のおかみさんではなかつた。おやぢの世話で船に乗つて、今外國船に乗つて、こゝ四年程前ハンブルグから、近い中に歸ると云ふ手紙と、金二百圓とを送つて寄越した水夫の、おかみさんだつた。

そのおかみさんが、今歸るか、今歸るかと思つてる中に、二百圓と一年とが消えて失くなつてしまつた。そこで、三年許り前から、やもめの、こゝのおやぢのところへ、飯炊きに來て、亭主の歸るのを「網」を張つて待つてゐるのであつた。

「まあ、三上さんだつたわね。どうしたの、いつ入つたの？」

三上が、のつそり入つたのを見たをばさんは、長火鉢の前に吸ひかけの長煙管を置いて、くると入口の方を振りかへつて、さう云つた。

「おやぢはチャンス取りか？」三上はブーツキラ杯に訊いた。

「え、不相變、急いでるの？ それともゆつ

なあ、だがそれや全くだつた。俺はどうだ、自分のことさへ自分で考へが全つきりつかないぢやないか、三上は一人で立派にやつて行つた。俺には、俺の頭に反いて、尻尾を振るブルジョアの取引気分があるんだ。それが、すつかり、俺を臺なしにするんだ。俺は何故藤原君の云ふやうに、頭の命ずる通りに動かないのだらう、あゝ、矢つ張り俺は結婚なんだ！ 俺は、労働者階級の悲愴を、決斷と勇氣と犠牲のないことに歸してゐるが、就中、この俺がその中の最なるものだ。労働者階級を、裏切る唯一の卑劣者の典型を、俺は、俺自身の中に見出した。俺は、思想として全體を憤慨する前に、俺自身の取さした、臆病者の、事大主義者の、裏切者、利己主義者の、資本主義の番頭の俺を、先づ血祭に上げねばならぬ。俺は、俺の村を、ブルジョアの番頭になれば、救へると云ふ意見を捨て去るべきだ。俺の救はなければならぬのは、俺の村だけぢやなくて、この地上の一切だ」

小倉は元氣よく、全で今にも、ブルジョアに出つゝしきへすれば飛びつきさうに、かく考へたが、それは彼には絶対に不可能な事であつた。彼は、依然事大主義者だつた。一切が腐つてしまつても、圓くさへあればそれで、「安心」なの

くり出されて？ とをばさんは訊いた。

「急がねえよ、上らして貰はうと云つて、彼はもうそこへ上つてゐるんだつたが、長火鉢の前の座蒲團の上へ上らして貰つてをばさんの長煙管で、スバ／＼と煙草を吸ひ始めた。

「隨分御無沙汰ね、三上さん。あつちにはこんなに御無沙汰しやしないせう。憤られるからね」

「眞金町？ 毎航海さ、おやぢは遅くなるだらうね。今幾人ゐる？」

「十一人、裏に迫つて、口はないし、入る處はないし、親爺さん、困つてよ」と指で丸を拵へて見せた。十一人の船員たちが今休んでゐるのであつた。

「をばさんの御亭、未だ歸らないかい？」三上は訊いた。

「歸らないよ、未だ。向うで髪毛の赤い、青い眼の女房でも持つてゐたらうよ」

「その積りで浮氣をしてると、えらいことになるぜ。ハツハ、ハ、」

「相手さへあればね。ホホ、ハ、」

「僕は下船したんだから、當分又厄介になるよ。頼むよ、い、かい。チャット出かけて來るから、親爺が歸つたらさう云つといてくれよ」三上が

だつた。

小倉はその性格が煮え切らない處から、この事件の進展に對し、何等の役目を勤めることのできなないの木偶の坊に過ぎなかつた。

三上が船長に與へた、傳馬は、下級船員全體への復讐の形を船長によつて取られた。

そして、この事が、こゝに述べる處の、同盟罷業を惹起した。ブルジョアの番頭對、プロレタリア！ 船では、ブルジョアは決して船主としてのその姿を労働者の前へ現さなかつた。

三上は、傳馬を押して、一度神奈川沖まで出たが、又引きかへして、堀川へ入つた。彼は、神奈川沖へ出た時に、傳馬にペンキで書かれてあつた萬壽丸を、シーナイフで削り取つてしまつた。

彼は、翁町の、彼が泊りつけのボーレンの、サンパンの繋がる場所へ、その傳馬を繋いだ。そして、小林と云ふ、そのボーレンへ、のこ／＼上つて行つた。

ボーレンの親爺は、京のやうな彼の唯一の財産なるサンパンに、チャンス取りに泊つてゐる宿料なしの水夫を船頭に於て、沖へとチャンスをと

靴を履いてると、

「そして荷物は？ 小屋？ 親爺さんこの頃工面がよくないんだから、十でも十五でも入れないと、駄目だよ。分つてゐるね」と、をばさんは、駄目を押した。前金を十圓か十五圓は入れなければ、逆も置かないと云ふのであつた。

「大丈夫だよ。そんなことあ、云ふだけ野暮さ。ヘツヘツハ、ハ、」三上は表へ出て行つた。

彼は近所の質屋へ行つた。それは彼の常取引の質店であつた。

「いらつしやい、暫くで、お品物は？」と主人は訊いた。

「實はね、品物は此處まで持つて來られないんだが、二日だけ、傳馬で金を借りたいんだがね。ボースンが、融通して貰つたところへ、現金を返すんだが、それが今足りないんだ。船は今ドックに入つてゐる××丸だから、傳馬を返してあるんだ。それで、二日許り借り度いと云ふんだがね。利息はいくら高くて構はないつてんだ。どうだらう。見に行つて貰へんかね。そこに繋いであるんだが」三上は、これを昨夜傳馬に乗る前から計畫してゐたのであつた。そして彼は、その計畫を完全に信賴してゐたのであつ

「傳馬ちやちよつと困りますね。藏に入りませんからね。それに船の傳馬ちや騎更、何とも仕方がありませんね。どうぞ、それはまあ、何かまた別な品でも御座いましたら」主人は二もなく斷つてしまつた。

三上は、驚いた。彼は驚いたのである。彼は、未だ今度の事ほど細密に、長い間かゝつて、企てたことは無かつた。それは室蘭に碇泊してゐる頃からの計畫であつた。その計畫は、サンパンを占領すると云ふ點までは、彼の計畫通りに進行したのである。であるのに、最後の點に至つて、これほど何でもない問題が振まると云ふ、その事が彼を驚かした。「だが、この家は傳馬を扱ふのに馴れてゐないと見える」と、すぐ、彼は思ひかへした。

「さよなら」彼はそこを飛び出した。そして今までより少し彼は、歩いて歩いた。彼は歩きながら、これほどの船つき場でありながら、一軒もサンパン屋が店を出してゐないことを不便がつた。「神でさへ中古の夜店を出してゐるのに——」彼は全く残念であつた。

「傳馬は賣れねえや、急には駄目だな、だが、親爺になら賣れるだらう」小突きまはされた大のやうに、身も心もへト／＼になりながら、彼はポーレンの親爺を目標に持つて来た。彼には絶望がなかつた。

彼は夜十一時頃、ポーレンの表戸を開けた。おやちは起きてゐた。そして、彼が上つて行くのをじろりと眺めた。三上は、長火鉢の前へ、坐つて、煙草に火をつけた。そこは六疊の間であつた。隅の方には、船員が二人寝てゐた。おやちは暫く黙つて、これも煙草を吸つてゐた。

「おやちさん、俺あ今日下船したぜ。又、暫く頼むよ」三上は切り出した。おやちは妙な風に返事をした。船乗りが、下船してポーレンに休めば、次の船に乗るまでの間、そこに休んでその間に、口を探すが、その唯一の道であつた。

「さうか、遠洋航路もいゝだらう。だが、遠洋航路は履歴が美しくないといけないな。おまへの手帳を一寸見せな、預つとかう」

「あ！ 船員手帳！」と驚いて三上は腰を叩いた。「船に忘れて来たぞ」

「元談云つちやいけない。三上、俺は今日萬壽で、すつかり様子を聞いて来たんだぞ。いゝ加減にしる、傳馬まで乗り逃げやりやつて。どうしたい傳馬なんか」

「えー！ かうなりや痛だ、云つちまへ、畜生！ 傳馬は繋いであるよ」

「お前も横濱ぢや逆も駄目だから、神戸へでも行つて見たらどうだね、そのサンパンに乗つてさ。え」

「俺あ、萬壽が歸つて来るまで待つてるよ。濱で。船員手帳は俺のものだからなあ」

「萬壽の船長は、お前を監獄に放り込んでやる」と云つてたさうだぜ」

「船長が、然しさうはしないだらうよ。俺が監獄へ放り込まれる前に、奴が海の中へ叩つ込まれるだらうよ」

つて、萬壽が入港したら返すことにした。海員の雇入れは、その手帳が全く面倒であつた。極めて、嚴格なる手帳の下に、極めて嚴格に取締られて、そして、彼等程搾取される労働者は、多く他に例を見ないのであつた。例へば、三上は五年間汽船に乗つてゐて、漸く月給十八圓になつた許りであつた。話にならないのだ、全く！

而も、それに對して、命はおほつびらに投げ出してあるのだ！

二四

北海道萬壽炭坑行きのパイラー三本を、萬壽丸は、横濱から、室蘭への航海に、そのガラン洞の腹の中に吸ひ込んだ。それは甚だ手間の取れる厄介な積込みであつた。だが横濱には、そんな種類の荷役に馴れた仲仕は澤山あつた。従つて、水夫たちも安心して、その作業を手傳つた。

それに、チーフメイトもそれ等のことを知つてゐたから、それほど尋常もしなかつた。珍らしい荷物であつたので、退屈を紛らし、鞆調を破つて、その積込みの終へた時は、何か、愉快なことでも爲し遂げたやうに、水夫等は感じた位であつた。

横濱から、室蘭へは、萬壽丸は、その船體が室蘭から横濱への時の三倍の大きさに見えた。と云ふのは、荷が無いから、全でその赤い腹の殆んど全部を割き出して、スクルーで浪を蹴つ飛ばしながら海で行くのであつた。従つてデッキから水面までの距離が、うんと遠くなつた。おもての海水ポンプは、まるで空氣ポンプのやうに、シュー／＼と云ふ許りになつて終ふのだった。

かうなると、使所掃除人、波田は實に、その作業を百倍の困難さにされてしまふのであつた。彼は一々ともまで、淡水ポンプを汲みに行くか

それは見つかると大變八苦しかつたから、その方法は餘り取れなかつた——又は、石油罐にロープを結びつけて、海から吊り上げるのであつた。これは全くいやなことだつた。僅か石油罐一杯の水が、それ程重く、それ程いつまでも途中で、愚問々々してゐなくてもよきさうなものだと思はれるのだった。これを吊り上げるのが億劫さに、夕方一度使所に水を通すことを怠けると、パイプに一杯の糞が凍りついてしまふのだった。それが凍りついた日には、波田は字義通りに「糞を掘む」——船では詰まらない目に合ふことを糞を掘むと云ふのであつた。

パイプ——直徑一尺位の鐵管——は下水

湯が、その儘凍つたやうな形に於て凍るのであつた。それが凍つた際は、波田は、何よりも先づ機場へ下りて行つて熱湯を買つて来るのであつた。機場から、おもてまでの距離の遠さよ——、第一、機場までの上り下りが、大変であつた。殊に、熱湯の一杯入つた石油罐をアテ下げて、それを一滴も洩さないやうに、洩す下で火夫がやけどするのだ、その上、熱湯の油だらけの梯子を昇らなければならなかつた。これは周到な注意と、萬全の用意とでなされた。彼は、それだけの作業、バケツを持つて下りて、さらぬやうに洩さぬやうに、昇つて来る、それだけの作業を、夏の土用よりも熱い思ひで汗を滴らし、機場を一足出るとすぐに、凍つた便所の作業に移らねばならなかつた。

彼は熱湯と竹の棒とで、化学的及物理的の作用を應用して、頑固に凍りついた兄弟たちの汚い物を掃除する。彼は熱湯を打つかける前に、竹の柄を以て、猛裂に物理的の操作を試みた。——物理的の操作とはセコンドメートの口吻を借りたのである——そして、糞の分子と分子とが積空隙を生ずる時に於て熱湯を——この時決して物惜しみしてチビチビ空けてはならない、思ひ切つて——とつ

と一時に打ち空けるのである。と、忽ちにして、甚しい臭氣が、發煙筒の蓋でも開けたやうに、水蒸氣と共に立ち昇る。そしてこの水蒸氣が發煙筒と同じく、その煙までも黄色であるやうに感じられる。そして、この澄々たる蒸氣と臭氣とに伍して、ドーツと音がすれば、それは、汚物が流れ出した證據である。若し不幸にして音がなかつた場合は、波田はそれと同じことを、幾度か繰り返さなければならぬ。

波田は、その熱湯を汚物の壺の中へ注ぐや否や、彼は棒もバケツもそこへ打ち捨て、置いて、サイドから、汚物の飛び出すスカッパの活動の状態を眺めに行く。それは汚くない仕事であつた。そしていやな、困難な仕事であつた。それは丁度われ等が便所へかゝむのと同様不愉快なことであつた。それは又、勢よく、一切が飛び出すことは、われ／＼が便所へかゝんだ時と同様、腹の中が綺麗になることを意味し、且つ、快いことであつた。

痛快事であると思ふのであつた。「これで俺も氣持がいいし、誰かが又氣持がいいわい」波田は、その着物を洗つて乾すために、機場へ行つた。

そして彼は、その汚れた着物を洗ふ間に、「若し神が在るなら、糞壺にこそ在るべきだ」と思つた。「何故ならば、若し神や佛が在るとしたならば、彼等が愛する處の人間が豚小屋に住み、或は寺院の床下に、神社の縁下に住む時に、どうして、自分だけが、そのだだつ廣い場所を獨占することが能き得よう？ 若しさうしてゐる神佛でもあるならば、それは若見重太郎によつて退治されねばならない神佛であつて、決して眞物ではないのだ。今は、神佛よりも一段下であるべき人間でさへ、萬人がパンを得るまでは誰かが菓子を持つてはならぬ」と云つてゐるではないか、神は正に糞壺にこそ在るべきだ！」

波田によると神は恐ろしく、汚ない處にもぐることがあつた。「俺は便所に神を見た。それ以外で見たことがない」と波田は、いつ、どこでも主張するのであつた。

て、俺より先にいつでも便所を掃除してゐる！それは労働者だつた。賃銀を貰はない労働者の形をしてゐた！」

「で、若し、神様が、労働者でもなく、便所にもゐなかつたら、俺は、逆も上陸して寺院や社祠などへ、のそ／＼探しになんぞ出かけてはゐられないんだ。人間から現實のパンを奪つて精神的な食べられもしない腹も膨れない、パンなんぞやると云つてごまかすのは神ぢやないんだ。それやブルジョアか、その親類だ！」

これが波田の宗教観であつた。「その神様が賃銀を月八圓宛さへ得てれば、そのまゝ波田君なんだがなあ、惜しいことには、たつた一つ違ふんで困つたね——爺原はさう云つて笑つたものだ。」

船には、宗教を信するものは一人も居ないと云つてよかつた。ボースン、大工、この二人だけが、曇化時だけ窓臺の下に抽出しの中から、金力比羅大明神を引つ張り出して、利用した。彼等は若し、それがいくらでも役に立つなら、利用しなければ「損だ」と習慣的に考へたのであつた。

板子一枚下は地獄である。超人間的な神か佛のやうな「物」に頼りたい氣は、人には、特に

船員などにはあり得たのであるが、而も彼等は餘りに馬鹿々々しい、それ等のものを信じる氣にならなかつた。宗教は今では全く下らないものであるか、又は、その正體を抽象化したための神學や經典で、曖昧に説教的に職業化されてゐた。宗教は今や高利貸や、マーダラーの手先になつたり辯護人になつたりすることに依つてのみその生命を辛うじて保つてゐるにすぎなかつた。

二五

萬壽丸は、室蘭の荷役を早く済まして、碇泊中そこで船のマストや何かをすつかり壊つて、横濱へ歸つて正月をする豫定であつた。そしてその豫定は、一切のプログラムを最大速力でやつて、順當に行けば、辛うじて大晦日の晩横濱へ着くのであつた。

そんなわけであつたから、わが、團扇の様な萬壽丸は、豚の様な體を汗だくで、その全速力九ノットを出してゐた。そしてこの大速力の爲めに、船體はハシファイタインのエムロシアが、全速を出した時の様な、自震動をアル／＼と感じながら飛んで行くのであつた。何故、たつた

九ノットの速力でゆれるかと云へば、わが萬壽丸は、なるべく多く石炭を積張るべく、デッキから、ボツトム迄、どちらを向いてもガラン洞で、支柱がないためなのだつた。それはフワットボールの内部のやうなものだつた。

冬期の北海は霧が甚しかつた。汽船で鳴らす霧笛、燈臺で鳴らす霧笛のやうな霧笛。海へ轉り込んだフワットボールのやうな萬壽丸は、霧のために、目隠しをされたものであるから、九哩の速力をどうしても、もつと下げなければならぬ。苦であつた。けれどもそれは、正月のことを考へる時に、船長はこれから上速力を下げる時には行かなかつた。その代り彼は無暗矢無に霧笛を鳴らした。

それは何かの事變の前兆を知らせると云ふ、犬の遠吠に似てゐた。それを聞くものに、きつと不安な豫感に似たものを吹き込まれば置かぬ音色であつた。同じ汽笛でも、出帆の汽笛は寂しく、入港の汽笛は、元氣よく勝ち誇つた様に聞えるものだ。霧笛の場合は同じ汽笛でも、不吉な、落ちつかない、何だかソッパ／＼した氣持に人を引き込んだ。自らその線を曳いてゐる船長自身が、その音色に退つかけられるやうに後から後からと、線を曳いた。霧笛は、益々深く、

人から景色を奪ふ霧のやうに、その心から光と落着きとを奪ふのであつた。精密なる海圖と羅針盤とがあるとは云へ、又それが、日高が湖に泳ぐやうな比例で海が廣いとは云へ、兎も先が見えないと云ふことは、安心のないことであつた。殊に水夫等にとつては、全で盲人が杖を擔いで、文字通りに盲滅法に走つてゐるやうに思はれるのであつた。西澤と波田とは、ブリツヂに上つて、小倉の舵取りを見學してゐた。自動車の運転手がそのハンドルを絶えず、廻してゐるやうに、汽船の舵機も、前のコンパスと脱めつくりをしながら、絶えず、廻され調節されてゐた。一時間九ノツトの速力も、この船全體をその権力の下に支配する、船長の心理に及ぼす影響は、このブリツヂに昇つて、一望唯海波であり、一船これわが配下である時に、決して速い速力ではなかつた。團扇のやうなこの小さな船も彼にとつては偉大であつた。殊に斯く急の濃くかけた時は、船長は、二千噸のこの船を、二萬噸に擴大して見ることもできた。何故かならば、船全體が霧のために、漠然たる船影を以てぼかされ、それを想像を以て擴大するからであつた。

霧がりの中で、誰も見てゐないと知ると、急に二形許りの張つて、警察署長のやうな恰好に歩いて見ることが、大抵誰にもあるやうに、萬壽丸は、巨船の如くに氣取つて航行してゐるやうに見えた。が、それにしても不思議であつた。室蘭港口に控をしてゐる大黒島は、もうそこに來てゐなければならぬ警の時間であり、コムバスであり、海圖であつた。にも拘らず事實は、大黒島の燈臺も霧に消え、見えも聞えもしないのであつた。わが萬壽丸は九ノツトのフルスピードを以て、船長自身ブリツヂに立つて、小倉の舵を命合してゐた。波田と、西澤とは各々熱心に如何にして汽船の舵を取り、その方向を保つて行くか、と云ふことを眺め、心で研究してゐた。彼等は、何も見えない濃霧の中を、コムバスと海圖とだけで、夢中になつて飛んで行く船が不思議で堪らなかつた。萬壽丸は、その哀れな犬の遠吠を、絶えず吹き鳴らしながら、斯くして進んで行つた。霧の上に、夜の闇が、その霧を撒き始めた。

一切のものが今にも失明しようとする者の、最後の視力のやうにボンヤリしてしまつた。と、突然、ブリツヂに立つてゐる者は船長から、波田に至るまで急に飛び上つた。怖ろしい速力を持った巨大な軍艦が、その主砲を打つ放して、その轟音と共に、この哀れな萬壽丸の船を打撃して、突進して來たのであつた。それは全く咄嗟の場合であつた。「ハールポール」と船長は、舵機を操つてゐる小倉の前へ來て、飛び上り棟叫んだ。その聲は絶望的にブリツヂに響き返つた。機關室への信號機は「フルスピードゴースター」全速後退を命令して、チン／＼チン／＼とけた／＼と鳴り返つた。船長初め、小倉等ブリツヂにある總ては「打つ衝けた」と覺悟してゐた。波田に西澤は、何だかまるで譯が分らなかつた。これ等は息をつく間もない瞬間に一切が行はれた。そして、本船はグツと廻つた。波田も西澤も、船長までもが、その馴れに拘らずよるめいた程急進に。そして、今にも衝突しさうに思へた、山のやうな怪物、それは軍艦だと波田と西澤は思つてゐた。それは全速力を以て、全

で風のやうに左舷の方へ消え去つた。と、その怪物からは續け様にドンドン／＼と轟然たる砲聲が放たれた。哀れなる小犬の様な、わが萬壽丸は、今は立ち竦んでしまつた。云はれ、腰を抜かしたのである。無暗に非常汽笛を鳴らし、救を求め、そこへ鐘を放り込んだ。今、これほど萬壽丸を驚かした、軍艦のやうな速力の速い怪物は、百年一日の如く動かない大黒島であり、大砲は霧に消えてあつた。わが萬壽丸はその二十間手前まで九ノツトの速力で、大黒様のお尻の邊を視つて眞つしぐらに突進して來たのだつた。危かつた。鐘が入ると、皆は、期せずしてホツとした。大黒島の燈臺では、霧にも自分を目掛けて勇敢に突進して來る船を認めたので、危険信號を亂發したのであつた。幸にしてこの無法者は、間際になつてその亂暴を思ひ止まつた。萬壽丸は、動いては危いと許りに、立ちすくんだ盲のやうに、そこに投鐘して一夜を明すことになつた。奇妙な天烈なる一夜であつた。船も高級海員もソハ／＼してゐた。おもてのものだけは、一

夜を樂に寝ることができた。二六 翌朝萬壽丸は、霧に照り映えた、透徹した四圍の下に、自分の在る所を發見した。それは頗る危険な處へ、彼女は首を突つ込んでゐた。船員達は、自分の目の前に、手の届きさうな處に、大黒島の雪に覆はれた、鷲の爪のやうな岩石に向き合つて居り、左手に一體に海を黒く、魔物の眼のやうに染める暗礁を見出した。彼女は、その醜態を見られるのが恥かしさに、抜き足さし足で早朝、何食はぬ腹をして、室蘭港へ入つた。直ぐに石炭積込用の高架棧橋へ横付になるべきであつたが、ボイラーの荷役の済むまでは沖がかりになるので、室蘭灣の船んど真ん中へ、今抜いた許りの鐘を何食はぬ腹をして投じた。萬壽丸が屬する北海炭山會社のランチは、直ちに勢ひよくやつて來た。とも、おもてのサンパンも、赤毛布で作られた厚司を着た、囚人のやうな船頭さんによつて、滑きつけられた。沖賣らうの娘も逸早く上つて來た。水夫達は、ボイラー揚陸の準備前に、朝食

をするために、おもてへ歸つて來た。食卓には飯と味噌汁と澤庵とが準備されてある。一方の腰かけの隅には、沖賣らう——船へ菓子や日用品を賣込みに來る小賣商人——の娘が、果物や駄菓子などの入つた箱を積み上げて、いつ開かうかと待つてゐるのであつた。船員は、どんな酒好きな男でも、同時に菓子好きであつた。それは、監獄の囚人が、飯の代りに食べるアンパンを持つて通る看守を見て、看守はアンパンが食べられるだけ、この世の中で一番幸福な人間だと思ふのと同じであつた。監獄と、船中に於ては、甘いものは、ダイヤモンドよりも貴かつた。波田は、その全収入を擧げて、沖賣らうに奉公してゐた。彼は、船員としての因襲的な悪徳には染みない性格であつたが、「菓子で身をもち崩す」のであつた。彼は極めて貧乏——月八圓——であつた。それなのに、彼は金つばを三十位は、どうしても食べないではゐられないのであつた。然し、財政の方がそれほど食べることと許さないのであつた。彼は沖賣らうがいつそのこと來ねばいゝにと、いつも思ふのであつた。そのくせ沖賣らうの來ない日は、彼は元氣がないのであつた。全く彼は「甘いものに身を

持ち崩すのであつた。この場合に於ても彼は、ソーツと、自分の開から、状態を出して、その中に五十錢玉が一つ光つてゐることを見ると、非常な誘惑を菓子箱に感じた。

「どうしても俺は仕事と、金が一足要るんだがなあ」と考へはした。彼は、その全収入を菓子屋に奉公する爲に、仕事着は、二着つきり、靴はなく、如何な寒い時もゴム裏足袋の、パリ／＼凍つたのを履いてゐた。そして、ボースンの、ゴム長靴のベケを利用して、その腰の部分だけを、ゲートル流に履いてゐるのであつた。も一つ、彼が菓子以外に如何に金を出さないか、——用せないかと云ふことを知るには、彼の頭を見ればよかつた。全でそれは「はたき」のやうに延びて汚れ切つてゐた。ボースンはそれを氣にして、彼に、特に、一圓を理髪代として貸した——菓子屋の来た時に彼は月二割の利子を食ふ處のボースンの金を、一圓借りたのである、ボースンも彼には菓子代は決して貸さなかつたが、波田は理髪代と云つた——彼はそれで、一度に金つばを食つてしまつた。

なれば、それも何とかなるだらうさ、くよくくしたものでないや。彼は自分に言ひ諷をしながら、沖賣らうの姐さんの所有に屬する、菓子箱へと近づいた。「どうだね、うまい菓子があるかね」
「みんな、うまいかすだわね」菓子屋の姐さんは、東北辯全出して答へた。
波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れたなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて来なかつた。
室蘭では、東洋軒と云ふ、室蘭一の菓子屋が作るだけであつた。彼はそのケークホールへ、その恰好で平氣で押しかけるのであつた。
碌に食べた氣のない中に波田は五十錢の豫定額だけ食ひ盡した。それ以上は借款によるより外に道がないので、彼は止むを得ず、小倉が歸つて来るまで待つことにした。
波田にとっては、一切の慾望の最高なるものを菓子箱が占めてゐた。
若し三上があるとなれば、沖賣らうの姐さんは、ボースンと、大工と、三上との共同戦線の下に、可哀想に苛められるのであつた。彼女は、それを覺悟で、二重に狼腹をはいて、本船へ、彼女

のパンを得べく沖賣らうに来るのであつた。彼女は、實に氣の毒な程醜かつた。それは形容するのが憚憚な位に醜い女であつた。年は二十三四位に見えた。彼女は、女に生れたことが全く不都合な事だつた。彼女がその髪を延ばして置いて、鏡に向つてその髪を結ぶ時に、きつと彼女が自然を呪ふだらうと思はれた。彼女と一緒に本船の火夫室へ来る沖賣らうは、彼女とは全く違つてゐた。年は同年位であつたが、彼女は北國に見る美人型であつた。
彼女は、水夫たちから、殊に、彼女を見るも氣の毒な位に恥かしめる、ボースンや大工等は、彼女が、「印度猿」によく似てると、むきつけて、さうであることが、不都合極まることのようにほんきに、彼女を罵倒し、そして恥かしい目にかつた。
彼女は、それでも一緒になつて、キャツ／＼とはしゃやながら、自分の高賣の菓子箱の覆るのも忘れて、抵抗したりふざけたりするのだつた。
彼等は、薄暗いデッキの上を、小犬のやうに轉り廻つてふざけてゐた。
彼女が菓子箱の外に、彼女の肉をも賣ると云ふことを、波田は耳にしたことがあつたが、それ

は想像するだけでも不可能のやうに思へた。彼女は女性として男性に持たせ得る、どんな魅力もないやうに見えた。汚い男よりも醜い彼女であつた。

だのに、彼女は、矢張り、噂のやうに菓子以外のものも、提供することが、ズツと後になつて波田にも分つた。それはボースンの部屋であつた。
これは、蜘蛛と蜘蛛とが、一つ瓶の中で互に食ひ殺し合ふのによく似てはゐないだらうか。
だが、その日は、それ等のことは一切起らなかつた。彼女の菓子は、食事の済んだ水夫等によつて一つ二つ摘まれた。
ボースンと大工とは、彼女を、波田の寝箱の中へ押し倒すことだけは形式的に忘れなかつた。波田の寝箱の隣では、負債のために弱り、寄せたボイイ長が、未だ呻いてゐるのであつた。
波田は、ボイイ長に、朝鮮節を二本買つてやつた。ボイイ長は涙を流して喜んだ。
疾病や負債や死までが、生活に疲れ、苦痛に馴れた人々にとっては輕視されるものだ。生活に疲れた人々は、その健全な状態に於てさへ、疾病や負債の時と餘り遠くない苦痛に充されてゐるのだ。人間がそれ程であることは何

のためか、誰のためか、何故それ程に人間は苦しまねばならないのか、それはこゝで論ずべきことぢやない。
面白いことは、この沖賣らうの姐は、おもてのゴツクと後になつて、——四年もこの書かれた後——二週間だけ一緒になつて世帯を持つた。二週間の後女はゴツクのために酌婦に賣り飛ばされて、夕張炭田に行き、ゴツクは世帯道具を賣つて、ある寄郷の家へ入り婿となつて、彼自身沖賣らうになり、日用品や、菓子などを舟に積んで、本船へ持つて来るやうになつたことだ、が、これはズツと後の事だ。
水夫達の食事が終ると、ボースンは、チーフメートの處へ仕事の順序を訊きに行つた。
チーフメートは、クレインが来るから、それまでのあひだに、ボイラーの方を用意して置けと命じた。

ボースンはおもてへ歸つて来て「今からハッチの蓋をとるぞ」
そこで水夫等はデッキへと出て行つた。
おもてはストキから、ボースン、大工まで、全部出て行つたので、後は傷を負つて、空しく

二七

一週間餘りを暗室——それは殆んど暗室であつた——の、寝箱の中で悶え苦しんだ、ボイイ長の安井と、おもての通船のおやちと、それから、沖賣らうのその娘とだけになつた。
沖賣らうの娘は、波田の寝箱の縁へ腰かけてゐた。サンパンの船頭は、ストロウの前へ腰を卸して、皆黙々としてゐた。
おもての、デッキでは、ビームがデッキへ打つ突かる音や、ウキンチの廻る音などで、全で船全體が太鼓でもあるやうに響き返つた。
ボイイ長は、自分では大して自由にならない體を持ち扱つて退屈し切つてゐた。
「姐さん、わしに少し菓子を買れないか」ボイイ長は勞れ切つた聲で囁くやうに云つた。
「ア、びつくりしたよう。だれかをるだがよ、こゝに」と彼女は飛び上つて、ボイイ長の暗室を覗いた、そこにはボイイ長が確に寝てゐるのであつた。
「あ、見習ひさんでねえか、びつくりしただがよ」彼女は菓子箱を持つて来て、ボイイ長の前へ擴げて見せた。
ボイイ長はそれを三十錢買つた、さうして、うまさうに、食ひ食べるのであつた。
「船頭さん！ 俺今日陸へ上りたいが連れてつ

「お呉れよーボーイ長は船頭へ聲をかけた。
「あ、い、とも、お女郎買かい？」船頭は素
晴らしく大きい體の、氣のいい五十恰好の爺さ
んだつた。

「うんにや。わしや怪我したので、病院へ行
んだ」彼は今度こそ病院へ行けると思つた。

ボーイ長は思ふのであつた。「わしの怪我を
したと云ふことは、もう誰も彼もみな忘れて
しまつてゐるのだらう。わしの怪我をしたこと
は、全く他の人たちにとつては些細な事なんだ
らう。だが、それや餘り不人情だらうと思はれ
る。殊に、私の足は腫んでしまつて、痛くて堪ら
ないんだ。わしは今日は、何としても船長さん
に願つて、病院へ入院させて貰はにやならん。
私の體は、私が大切にしないで、誰が大切に
して呉れ手があらうか、私は船頭さんに病院ま
で負つて貰はう。私はもう、何から何まで
自分でやらなけりや駄目だと知つたんだ」
「船頭さん、室蘭にいゝ病院があるの？」ボー
イ長は訊ねた。

「あ、いゝ、病院があるよ、室蘭病院でのが、
山の手の高い處にあるよ」
「そこまで、波止場から、どの位の道程がある
の」

労働力を賣つて生活するこの青年も、今その
賣らうとする労働力が、大きな障害を與へら
れたことについては、どこかはつきりしない憤
懣を心の底に感ずるのであつた。彼は、負傷後
イヒチオールを二三回塗布され、足のガーゼを
二三度自分で取り換へただけであつた。彼は傷
の疼痛のために、非常に癢せてしまつた。彼の
その癢さは、彼の神経を、極度に疲勞させた。
水夫たちが、仕事に出て行つて、おもてに誰
もゐなくなると、彼は、今まで貯めてゐた苦痛
の叫びを擧げるのであつた。彼は、出任せに何
でも叫んだ。そして自分の聲に一生懸命聞き
入つた。彼の足の痛みは、負傷後五六時間を経
て、甚しくなつて来た。彼は、その濡れた靴
のやうに力なく疲れた體を、窓箱の中から危く
デツキへ落ちさうにまで悶え狂つた。

彼は狂人のやうに叫んだ。そして、それは、
彼自身でも、疼痛に對しては、非常にハツキリ
した意識を持つてゐたが、餘りに、そちらの方
へのみあらゆる神経を集めたので、自分の悶え
や叫喚には、ボンヤリしてゐるのだつた。
水夫等は歸つて来て、この苦悶の様を見ると
「餘り暴れると、却つて傷が悪くなるから、ちつ
と我慢してをれ」と、慰めるより外に道がなか

「さうさな、十二三町位なもんだらうな」
それでは連も一人の力で負つてなんぞ行けな
い。と云つて、此處では權でもなければ連も
駄目だが、それも一寸あるまいし、もし船長
が身を入れて呉れないと、今度こそは、自分は
航海中に死なねばならぬだらう。

「市立病院かい、それは？」ボーイ長は訊ね
た。

「市立ぢやないけれど、公立だよ」船頭さんは
答へた。「だけど、どうしてまた怪我などしたの
かい」と訊いた。

「ほらこの前の航海ね。室蘭を出帆する日か
らしてえらい暴化だつたらう。あの航海に、船
機の鎖とカバリーの間に食ひ込まれたんだよ」ボ
ーイ長はその時の様子を、こゝで初めて語り始
めた。

「その日、私はともの倉庫にキャベツを出しに
行つたんだよ。おもてのおやぢが、とつて来い
と云ふからね。で、キャベツを三つ穴へ入れて、
コック部屋の方へデツキを歩いてると、船が急
に傾いたんで、左の足をウンと踏ん張つたん
だよ。それがね丁度都合悪くデツキが凍つてた
もんだからこつて、つい鎖の方まで入つてしま
つたんだよ。その時に船機ががら／＼と動いた

つた。水夫等はボーイ長の負傷に對して、非
常に嫌惡の念を一様に感じてゐた。それは、彼
が怪我をしたのが、彼の過失だからと云ふので
はなかつた。又、負傷したのが彼だからと云ふ
のでもなかつた。それは、ボーイ長が自分の負
傷について、神経を全く疲勞させ、身を呪ひ世
を呪ひ、遂には絶望的に自分の足までも呪ふや
うな、それと全く同じ感情が、水夫等にあつ
たからであつた。水夫等は、それを意識すると
しないといふに拘らず、そこに、泣き喚き、狂ひ叫
び、のた打ち廻る自分自身の運命を、朝も夜も、
食事にも眠りにも、焼けた鐵でも當てられるや
うに、ジリ／＼と感ぜないではゐられなかつた
からである。それから逃れる術はなかつたので
ある。

水夫等は、自分の負傷のやうに、ボーイ長の
負傷によつて陰氣にされてゐた。そして自分の
負傷のやうに、いら／＼させられた。彼等は、
それから逃れようとして、焦つてゐた。冷淡な、
無關心な態度は、彼等が鈍らされた神経を持つ
てゐることと、も一つは、馴れてゐることと、
今一つは、その自分自身の運命を、あまりにハツ
キリ見せつけられることから、免がれようとす
る心から出たことであつた。

波田は、石油罐の二つに切つたので、便器を
捨て、彼と、ボーイ長の寝箱とが「形」をなし
てゐる隅へ置いてやつた。

安井は、誰も見えなくなると、その便器へ用を
足した。その時の彼の努力は全く、夥しいもの
であつた。彼は、用を達した後は、疲勞と疼痛と
で失心したやうな状態に陥るのであつた。

彼は、一切のことが、二度目であると云ふや
うな幻覺に囚はれるのであつた。それは丁度、
濁つた方解石を透して物を見るやうに、一切が
ボンヤリして二重に見えるのであつた。彼は、
ズツと遠い以前からの歴史も、また、たつた今
何か考へた利動的な考へも、二度目であるや
うに思つた。その一度は、どこで経験し、どこ
で考へたかと云ふことを、彼は考へ、測るの
であつた。さうして、そこには、彼の以前の生
活があつた。飢しい、寒い小作人の子としての
絶え間なき窮乏の生活が、それも、二重の形
を以て展開されるのであつた。小學校時代の暑
中休暇のことが、彼の今の負傷して寝てゐる状
態と、ゴツチャになつてしまつたりするのであ
つた。「丁度俺は二度目だ」と彼はぼんやり怪我の
ことを考へてゐるのであつた。「俺はあの時、
外の誰も休んでゐるのに俺だけは、父と二人

で田の草をとりに出かけたつけ。休まねばならぬ時に、俺は、煮え沸る田の水の中で草除りをしたつけ。俺は休む時を持つて生れなかつた。だが、あの時は怪我をしたつけ。そして休んだつけ。それから、彼の哀れな、彼れ切つた意識は、彼を夢中睡眠の田の草とりから、彼を嚴寒の萬壽丸へ引き戻してしまつた。そして彼はまた呻き悶え狂はねばならなかつた。彼はその疼痛の絶頂に於ては、感ずるのであつた。

「こんな苦痛をハッキリ味はねばならないつてのは、何て慘酷なことだらう。それよりも、もつとひどい苦痛を、もつとぼんやりの方がいゝのに」などと、會體の知れぬことを感ずるのであつた。だが然し、必要もないのに、彼に、これほど長い間苦痛を、わざと見せつけることは、明らかに、船長の冷酷から来たことであつた。船には、その船に對して、會社から、傷病費の豫算が請求に應じて提供されてあるのだ。だがそれは、高級海員の家族の病氣療養費、或は特別収入と云つた方が正當であつた。そして、そのための支出から、かくの如き場合の負債は、船長によつて「節減」せられるのであつた。船に於ける一切の事は、船長だけが土耳古の

「今日と云ふ今日は交渉しよう」と決心した。そしてそれは藤原に相談すべきであると思ひ決めた。

二八

一方水夫等は、ボイラー揚陸のために、ハツチの蓋をとり、ピームを外した。そして彼等は、マストの内部にとりつけてある足場を傳つて、ダンブルの中へと降りて行つた。それは嚴重に荷造がしてあつた。水夫等は、それが航海中ゴロゴロ暴れ出さないやうに、それをしつかり据え、方々から引つ張るための作業の困難で、連も面倒臭かつたことを思ひながら、それを取り外すのだつた。取り外しは、取りつけから見ると、比較にならぬ程手軽に行つた。

クレインは今、室蘭驛の機關庫の見える方から、その怪物のやうな團體を、遠々とランチに引つ張られて、萬壽丸を目がけて近づいて來るのであつた。四角な浮箱の上に、二十五噸の重さの物を引つ張り上げるだけの力と、骨組とを持つた鐵の腕と、ウキンチが装置されてあるのだ、けし粒ほどの小蟻が黄金蟲か何かを引つ張るやうに、小蒸汽はそれを曳きたやみつゝ、じりじりと近づいた。

回々教の殿堂内に於ける、サルタンと同様に知つてゐるだけであつた。より緊密でないことが高級海員に知られてゐた。そして、労働者たちは、自分たちに會社から支給される食料費がいくらであるか、それすらも知らなかつた。

若し押らうとするならば、押られる者が「何か」それは極めて詰らぬことではない、二と二を加へると四となることでも——知つてゐると云ふことは、それより悪いことを、押るものが見つけるのが困難であらう。詰り何でも知らなきやいゝのだ。知つてゐると理窟が多くて困るのだ！ かくておもての「ゴロツキ」共は、完全に何も知らなかつた。自分の手帳まで事務所に取上げられて仕舞ふのであつた。そして、序に判も。かくて、彼等は、ゴロツキにされてしまふのであつた。

そこでは、何でもふんだくる者が紳士であることは、十八世紀の英國のゼントルマンと些も變ることではなかつた。そして奪はれるものは、いつでも、ゴロツキであるのだ！ 全く奪はれるものは、いつでも、ゴロツキであるのだ！ 奪ふものと奪はれるものとのある間、ゼントルマンとゴロツキとは絶えないのだ！ 「生存権すら主張が出来ない」ことは、どんなに、ボーイ長を

船の方では、いつでも、引き上げられるやうに、ボイラーはそのあらゆる拘束から釋放された。今はたゞ大きな腕が、自分をその牢獄から引き出して呉れるのを待つ許りだつた。

クレインは近づいた。そしてその偉大な腕を、ヌツと本船のハツチの上へ差し延べた。それから、ワイアロープがブラ下つて來た。そのロープの先端には人間の腕廻りほどの太さの鉤がついてゐた。この鉤自體が一人では連も動かさないものであつた。そこへ持つて來て室蘭では、この種の荷役に馴れた仲仕がゐなかつた。その巨大な鉤が上からブラ下つて來て、下から何でもひつかへりさへすれば、引き上げようとしてゐるのに、仲仕はたゞ間違々々するだけであつた。

水夫たちも荷役に手傳つた。が、何にしても足場は、ボイラーの圓いベンキ塗りの上である。這ることこの上もない處へ、それを縛るワイヤロープは、腕の太さほどあるものであつた。間違つくとワイアに、跳ね飛ばされねばならぬ破目になるのであつた。おまけに鉤は一人で動かさない奴であつた。従つて作業が甚しく困難であつた。

處が、船長が、このボイラー揚陸に當てた

肯立たせたことだらう。そこに人間の生命の疾患に對して、病院がいくつも變を並べてゐるのに、彼はそのまま、横濱から又船で戻つてしまつたのだ。そして、それは船長が自分の船のボーイ長が怪我をしたことなどは、チーフメートから聞いたまゝ「忘れてしまつた」ことが原因かも知れないのだ。又はそんなものを病院なんぞに入れることは勿論、その怪我が癒らねばならない「必要を認めない」ことに起因するかも知れないのだ。そして、きつとさうなのだ。

それは確にさうあるべきだ。何故かならばそれは「階級」と「身分」とが違ふからであつた。それは又何故かならば「階級」と「身分」とは人間と猿とを距てるよりも、もつとひどく人間と人間を距て、離したからだ。かくて、ボーイ長の負債は、水夫等に何とはなしに、陰險な印象を與へ、白内障の眼に於ける障害のやうに、いくらか拭いても、除れなかつた。そして、それはこのゴロツキ共を、捕虜に紛れ込んだ針のやうに、時々チク／＼とつゝ、突いた。且つ針は、いつかは餘りの痛さに「ゴロツキ共」を飛び上らせずには置かないのであつた。ボーイ長は、自分にとつて何よりも尊い自分の生命のために、相手は船長であれ何であれ、

時間は、極めて短いのであつた。それはチーフメートも心得てゐた。チーフだつて正月は横濱でしたかつたことは云ふ迄もないことだ。従つて、これも、ボイラーを急いでゐた。かくの如く二重にボイラーは急がれてゐたが、仲仕は人数が少い上に、横濱の仲仕ほど馴れてゐなかつた。なか／＼仕事は捗らなかつた。チーフメートはハツチに片足を載せて、

「そのワイアを引つ張るんだ！ 異ふ！ そつちからこつちへだ！ ボースン、そのワイアをあれへかけて引つ張るんだ、それ、シヤツクルが外れた！ 駄目だ！ ボースン！ 馬鹿！ 違ふ！ そらホツクを掛けて、ヒーボーイ、チュッ、また外れた。スライク、スライク！」彼は眞つ赤になつてせり賣りの商人のやうに怒鳴りまゝつた。

彼のこの焦躁にも拘らず、ボイラーはクレインからのホツクに、些も引つかへらうとしなかつた。チーフメートは、自分の聲で、ホツクをワイアに引つかけようとしてもするやうに、だんだんその聲を大きく張り上げた。そして、鉤の大きいのは、ボースンや水夫達の責任でもあつたやうに、ボースンや水夫たちを口汚く罵り始めた。

紳士の番頭はその地金を現した。
 「大工、何故開へ行く、そのワイアを抜くんだ！
 ボースン、何だ、まいいいぶる見たいに、ゲ
 ルグル廻つてやがつて、グル／＼廻つたつて、
 ボイラーは上りはしないぞ、どこへ行くんだ、
 そら、馬鹿！」全でボースンが馬鹿であること
 をはやし立ててゐるのであつた。
 ボースンが、上から見るとたゞ、ボイラーの
 周りをグル／＼廻るだけのやうに見えると同様
 に、チーフメイトはボースンの周囲をグル／＼
 廻りながら、ボースンが馬鹿であることを、ハツ
 キリ飲み込ませてしまつたより外には、何もし
 なかつた。
 ボースンは慌てゝしまつた。どこから手を出
 していいか、分らなくなつてしまつたのだ。
 藤原はボイラーの上に乗つて、鉤が當然引つ
 かゝるやうな状態になつて来るのを待つてゐ
 た。そして彼は、善段から、節りに意地のな
 い、ボースンや大工が、チーフメイトに「美味
 罵られてゐるのに對して、騎更腹を立てた。
 「ほんとに貴様等は馬鹿だ！ 奴隷でもそれ程
 卑屈ぢやないぞ！ 水夫等から月二割も搾りや
 がつて、豚奴！ チーフメイトの野郎、なにか
 俺に云つて見る！ 思ひ知らしてやるから、高

利貸の丁稚奴！」
 彼は、それこそ、抜けたボルトのやう
 に、ボイラーの上へ突つ立つてゐた。
 ホツクはうまく彼と、向ひ合つて立つてゐる波
 田との間へ下りた。波田は腕程の太さの、ワイ
 アの鉤穴を持ち上げた。それは一秒間とは持ち
 續けることの能きない重さであつた。藤原は、
 ホツクを、彼の體の重みを凭せて、波田の持つ
 てゐる鉤穴の方へ搖がした。それは丁度そこへ
 行つたが、少し足らなかつた。
 駄目だつた！ 嵌らなかつた。
 「何だ、ボケナス、どうして嵌めないんだ！ 馬
 鹿！ 止せッ！」チーフメイトは頭から、スト
 キへ罵聲を吐きかけた。
 「波田君、降り給へ！ チーフメイトが止せと
 云ふ命令だ！」そのまゝ藤原は、ボイラーからワ
 イアを傳つて飛び下りた。波田も續いた。
 「どうした、ストキ、どこへ行くんだ！ 畜生！
 チーフメイトは全で狂つてゐた。
 藤原は下へ降りて、西澤をデツキから見えな
 い處へ呼んだ。
 「君、仕事があればやれるかい、馬鹿とか、止
 せとか、怒鳴り散らされて？ え？ 止さうぢ
 やないか、俺達あ、船を棧橋まで着けないで下
 んやりしてしまつた。
 二九
 チーフメイトはデツキから、「ボースン！」と
 怒鳴つた。
 ボースンは、愈々慌て、愈々急にその禿頭
 を撫でて、頼むのであつた。「ソラ怒鳴つて！
 後生だからこのボイラーだけ上げてくれ。その
 後でいくらでも話はつくぢやないか、ホラ、また
 喚いた。頼む、ストキ、西澤、な波田頼む」
 彼はこんなことを喋りながらも、チーフメ
 イトの聲に應じて、その度に、マストの梯子ま
 で驅けて行つては、又、驅けて歸るのであつ
 た。「ね、おい、やつてくれるだらう。な、お
 い、頼んだぜ」
 「俺たちチーフメイトの命令で止めただけの
 もんだ。ボースンからやつて云はれたつてど
 うも、やるわけにや行かないぜ」ストキは頑強
 つた。
 「困つたなあ、ほんとに、チョッ！ 頼む、わ
 しは今一寸チーフメイトさんが呼んでるから上
 つて来るから、その間頼むよ。いゝかい。俺を
 助けると思つて、な」
 ボースンは發育不良な、旅藏人のジョーカー

船しちやばう、馬鹿々々しいや！ 奴隷ぢやね
 えや」藤原はジロリとボースンを睨んだ。
 「止せ！ 止せ！ 全く、こんなボロ船いつだ
 つて下りるぜ」西澤も賛成した。
 「ストライクか、それや、是非やらにやならな
 いこつた」波田も賛成であつた。
 チーフメイトはデツキの上で、餅を喰につめ
 てもしたやうに、慌てゝしまつた。
 ボースンは下で癢を起しうに青くなつた。
 「ストキ、どうしたんだね、何か腹の立つこと
 でもあつたのかね」ボースンは全でチーフメ
 イトが一人出来た、と云つた様にツツ／＼しな
 がら訊いた。
 「ボースンは些も憤つてゐない様だね。俺たち
 も、チーフメイトから、仕事を止めると命令さ
 れたから、今やめた迄の話さ。そして、荷役の
 加勢はもう止さう、と云ふことに決めたんだ。
 陣から、そのために来た仲仕があるからね。そ
 れに、仲仕の前で、あゝ我鳴られぢや仕事も能
 きないしね」藤原は答へた。
 「そんなことを云はしないで、頼む、後で何と
 も話をつけるから、氣を直してやつてくれ、わ
 しなんぞはどうだ、まるで畜生だが、頼む、な、
 見たいな恰好で、マストにとりつけてある梯子
 を上つて行つた。
 三人の水夫は、そこに腰を下してしまつた。
 彼等は、彼等の力が偉大であると云ふことを知
 つた。僅か三人のセーラーであつた。而も、そ
 れが、たゞ何とも云はずに、ボイラーから下り
 ただけであつた。それだけなのに、このボイラ
 ーが動かさず、あのクレーンが空しく持ち、仲仕
 が徒手傍觀し、本船の出帆が後れ、チーフメ
 イトは青くならなければならぬ。
 そして、これは、たゞ労働を一時中止すると
 云ふだけの簡単な理由からなのだ！ そしてこ
 れは、社會の一切の根本は、労働者の労働によ
 つて、維持される、と云ふことを語るものだ。
 極めて簡單であるのに、我々の知らされぬ、
 唯一の事實なんだ！
 水夫たちはそんな風に感じて、煙草に火をつ
 けた。
 藤原は、西澤と波田とに、「これは未だ何でも
 ないんだ。僕等は、こんな詰らない理由でスト
 ライクには移れない。これは、労働者の發作的
 の痲痺だ。ストライクは發作的に無計畫に起れ
 ば、必ず失敗するものだ。然し、これでも、事
 に依ると本たうのストライクの、口火にはなる

「大工、何故開へ行く、そのワイアを抜くんだ！
 ボースン、何だ、まいいいぶる見たいに、ゲ
 ルグル廻つてやがつて、グル／＼廻つたつて、
 ボイラーは上りはしないぞ、どこへ行くんだ、
 そら、馬鹿！」全でボースンが馬鹿であること
 をはやし立ててゐるのであつた。
 ボースンが、上から見るとたゞ、ボイラーの
 周りをグル／＼廻るだけのやうに見えると同様
 に、チーフメイトはボースンの周囲をグル／＼
 廻りながら、ボースンが馬鹿であることを、ハツ
 キリ飲み込ませてしまつたより外には、何もし
 なかつた。
 ボースンは慌てゝしまつた。どこから手を出
 していいか、分らなくなつてしまつたのだ。
 藤原はボイラーの上に乗つて、鉤が當然引つ
 かゝるやうな状態になつて来るのを待つてゐ
 た。そして彼は、善段から、節りに意地のな
 い、ボースンや大工が、チーフメイトに「美味
 罵られてゐるのに對して、騎更腹を立てた。
 「ほんとに貴様等は馬鹿だ！ 奴隷でもそれ程
 卑屈ぢやないぞ！ 水夫等から月二割も搾りや
 がつて、豚奴！ チーフメイトの野郎、なにか
 俺に云つて見る！ 思ひ知らしてやるから、高

利貸の丁稚奴！」
 彼は、それこそ、抜けたボルトのやう
 に、ボイラーの上へ突つ立つてゐた。
 ホツクはうまく彼と、向ひ合つて立つてゐる波
 田との間へ下りた。波田は腕程の太さの、ワイ
 アの鉤穴を持ち上げた。それは一秒間とは持ち
 續けることの能きない重さであつた。藤原は、
 ホツクを、彼の體の重みを凭せて、波田の持つ
 てゐる鉤穴の方へ搖がした。それは丁度そこへ
 行つたが、少し足らなかつた。
 駄目だつた！ 嵌らなかつた。
 「何だ、ボケナス、どうして嵌めないんだ！ 馬
 鹿！ 止せッ！」チーフメイトは頭から、スト
 キへ罵聲を吐きかけた。
 「波田君、降り給へ！ チーフメイトが止せと
 云ふ命令だ！」そのまゝ藤原は、ボイラーからワ
 イアを傳つて飛び下りた。波田も續いた。
 「どうした、ストキ、どこへ行くんだ！ 畜生！
 チーフメイトは全で狂つてゐた。
 藤原は下へ降りて、西澤をデツキから見えな
 い處へ呼んだ。
 「君、仕事があればやれるかい、馬鹿とか、止
 せとか、怒鳴り散らされて？ え？ 止さうぢ
 やないか、俺達あ、船を棧橋まで着けないで下
 んやりしてしまつた。
 二九
 チーフメイトはデツキから、「ボースン！」と
 怒鳴つた。
 ボースンは、愈々慌て、愈々急にその禿頭
 を撫でて、頼むのであつた。「ソラ怒鳴つて！
 後生だからこのボイラーだけ上げてくれ。その
 後でいくらでも話はつくぢやないか、ホラ、また
 喚いた。頼む、ストキ、西澤、な波田頼む」
 彼はこんなことを喋りながらも、チーフメ
 イトの聲に應じて、その度に、マストの梯子ま
 で驅けて行つては、又、驅けて歸るのであつ
 た。「ね、おい、やつてくれるだらう。な、お
 い、頼んだぜ」
 「俺たちチーフメイトの命令で止めただけの
 もんだ。ボースンからやつて云はれたつてど
 うも、やるわけにや行かないぜ」ストキは頑強
 つた。
 「困つたなあ、ほんとに、チョッ！ 頼む、わ
 しは今一寸チーフメイトさんが呼んでるから上
 つて来るから、その間頼むよ。いゝかい。俺を
 助けると思つて、な」
 ボースンは發育不良な、旅藏人のジョーカー

船しちやばう、馬鹿々々しいや！ 奴隷ぢやね
 えや」藤原はジロリとボースンを睨んだ。
 「止せ！ 止せ！ 全く、こんなボロ船いつだ
 つて下りるぜ」西澤も賛成した。
 「ストライクか、それや、是非やらにやならな
 いこつた」波田も賛成であつた。
 チーフメイトはデツキの上で、餅を喰につめ
 てもしたやうに、慌てゝしまつた。
 ボースンは下で癢を起しうに青くなつた。
 「ストキ、どうしたんだね、何か腹の立つこと
 でもあつたのかね」ボースンは全でチーフメ
 イトが一人出来た、と云つた様にツツ／＼しな
 がら訊いた。
 「ボースンは些も憤つてゐない様だね。俺たち
 も、チーフメイトから、仕事を止めると命令さ
 れたから、今やめた迄の話さ。そして、荷役の
 加勢はもう止さう、と云ふことに決めたんだ。
 陣から、そのために来た仲仕があるからね。そ
 れに、仲仕の前で、あゝ我鳴られぢや仕事も能
 きないしね」藤原は答へた。
 「そんなことを云はしないで、頼む、後で何と
 も話をつけるから、氣を直してやつてくれ、わ
 しなんぞはどうだ、まるで畜生だが、頼む、な、
 見たいな恰好で、マストにとりつけてある梯子
 を上つて行つた。
 三人の水夫は、そこに腰を下してしまつた。
 彼等は、彼等の力が偉大であると云ふことを知
 つた。僅か三人のセーラーであつた。而も、そ
 れが、たゞ何とも云はずに、ボイラーから下り
 ただけであつた。それだけなのに、このボイラ
 ーが動かさず、あのクレーンが空しく持ち、仲仕
 が徒手傍觀し、本船の出帆が後れ、チーフメ
 イトは青くならなければならぬ。
 そして、これは、たゞ労働を一時中止すると
 云ふだけの簡単な理由からなのだ！ そしてこ
 れは、社會の一切の根本は、労働者の労働によ
 つて、維持される、と云ふことを語るものだ。
 極めて簡單であるのに、我々の知らされぬ、
 唯一の事實なんだ！
 水夫たちはそんな風に感じて、煙草に火をつ
 けた。
 藤原は、西澤と波田とに、「これは未だ何でも
 ないんだ。僕等は、こんな詰らない理由でスト
 ライクには移れない。これは、労働者の發作的
 の痲痺だ。ストライクは發作的に無計畫に起れ
 ば、必ず失敗するものだ。然し、これでも、事
 に依ると本たうのストライクの、口火にはなる

「だ、今、今は仕事をしなければならぬんだらう。今は、室蘭に休んでる者があつたか、ハツキリしてないから、今は仕事をしなければならぬんだらう。その代り、今夜上陸した時に、僕等は休んでる者が有るか無いかを探ることが出来る。で、若し有ると云ふことになれば、出帆の際に船を動かさないことが出来るだらう。横濱まで、電報でセーラーを呼ぶにしても、いくら早くても、四日や、五日はかかるだらう。おまけに正月だ。正月早々なんだ。ね。それに、ボーイ長を今日どう云ふ風に取扱ふか、それを見なくちゃ、若しボーイ長に對して、全然船から救護しないと云ふことになれば、僕等は機関部の方にも機を飛ばして、全船の問題とならなければならぬと思ふ。」

まづいのは、三上の問題が、未解決で残つてることなんだ。船長側では、それを仕掛の種に使ふだらうと思はれるんだがね。

要するに、ほんとに、僕等の力がその一切を現し得るのは、一切の奴隷的條件が、僕等に痛切に感得され、彼の野心的殺戮振りが暴露される時だけなんだ。その時は、當分来ないか、

強してゐるのであつた。小倉も頭はよかつたので、一年餘りでナショナルリーダーを五まで上げてしまひ代数は高次までやつてしまつたのであつた。そして、船長にしろチーフにしろ、頭腦が明晰な爲に、その地位を得たのではないことを知つたのだつた。だが、小倉は、自分の位置を、高めることによつて、酷使と隷屬と侮辱とから、逃れようとしたのであつた。そして、それは結局彼一人を救ふことすら至難であり不可能であることがあらゆる努力を盡して後、彼を敗殘の身にしたことに依つて分つたのであつた。彼は非常に壓迫を憎んだが、身を挺して反抗しようとする代りに、権力の壁にくつついて身を隠さうと企んだため、卑怯になつたのだと、水夫達から云はれてゐた。

ボーソンはデツキから下りて来た。そして三人が煙草を喫んでゐる處へ来て、チーフメイトは非常に憤つて、直ぐに下船を命ずると云つてゐたが、自分はやつと頼んで、止めて貰つて来たから、どうか、一服したらすぐに荷役にとりかゝつて貰ひ度い、さうしないと、チーフメイトは、すぐボーレンへ代りを行く氣であるのだから、と云つて来た。

藤原は、産業準備軍が海員に於ては、組織的

に、ボーレンに依つて動員準備されてゐる、且つ事情不明のためストライク、ブレイキングが平氣で所はれることを知つてゐた。そしてこの場合もそれが行はれ得ることを知つてゐた。で、彼は、仕事につくことが得策であることを知つた。

「それぢや、一服したらやると、チーフメイトへ返事して来てくれ」と、諷なくストキが承諾したので、躍り上つたボーソンはデツキへ上つて行つた。

藤原は、西澤と、波田とに、形勢は全く不利であるから、これは時期を見なければいけない、これほどの少数で、完全に勝つためには機會を握ることが第一だ、その時は今ではない。だから、その時を待つて力を示すために、今は忍んだ方がいゝ、それに今はなんでもないことなんだからと、種々と話をした。

「だが、今はいゝ時だがなあ、正月前だし、横濱にはギリギリに歸れるかどうか、と云ふ時なんだからなあ。條件が揃つてゐるんだがなあ、たい冬であるつてことが悪いだけだ。ボーイ長は雇入れなしで負傷させて打つ捨てであるし、俺達は、全く馬車馬か奴隷かで甘んずるなら、それでもいゝだらうけれど、――それに、

いま時分、室蘭に休む者はありやしないと云ふんだがなあ」と波田は主眼論を唱へた。

「だから、今は仕事をしなければならぬんだらう。今は、室蘭に休んでる者があつたか、ハツキリしてないから、今は仕事をしなければならぬんだらう。その代り、今夜上陸した時に、僕等は休んでる者が有るか無いかを探ることが出来る。で、若し有ると云ふことになれば、出帆の際に船を動かさないことが出来るだらう。横濱まで、電報でセーラーを呼ぶにしても、いくら早くても、四日や、五日はかかるだらう。おまけに正月だ。正月早々なんだ。ね。それに、ボーイ長を今日どう云ふ風に取扱ふか、それを見なくちゃ、若しボーイ長に對して、全然船から救護しないと云ふことになれば、僕等は機関部の方にも機を飛ばして、全船の問題とならなければならぬと思ふ。」

まづいのは、三上の問題が、未解決で残つてることなんだ。船長側では、それを仕掛の種に使ふだらうと思はれるんだがね。

要するに、ほんとに、僕等の力がその一切を現し得るのは、一切の奴隷的條件が、僕等に痛切に感得され、彼の野心的殺戮振りが暴露される時だけなんだ。その時は、當分来ないか、

強してゐるのであつた。小倉も頭はよかつたので、一年餘りでナショナルリーダーを五まで上げてしまひ代数は高次までやつてしまつたのであつた。そして、船長にしろチーフにしろ、頭腦が明晰な爲に、その地位を得たのではないことを知つたのだつた。だが、小倉は、自分の位置を、高めることによつて、酷使と隷屬と侮辱とから、逃れようとしたのであつた。そして、それは結局彼一人を救ふことすら至難であり不可能であることがあらゆる努力を盡して後、彼を敗殘の身にしたことに依つて分つたのであつた。彼は非常に壓迫を憎んだが、身を挺して反抗しようとする代りに、権力の壁にくつついて身を隠さうと企んだため、卑怯になつたのだと、水夫達から云はれてゐた。

ボーソンはデツキから下りて来た。そして三人が煙草を喫んでゐる處へ来て、チーフメイトは非常に憤つて、直ぐに下船を命ずると云つてゐたが、自分はやつと頼んで、止めて貰つて来たから、どうか、一服したらすぐに荷役にとりかゝつて貰ひ度い、さうしないと、チーフメイトは、すぐボーレンへ代りを行く氣であるのだから、と云つて来た。

藤原は、産業準備軍が海員に於ては、組織的

に、ボーレンに依つて動員準備されてゐる、且つ事情不明のためストライク、ブレイキングが平氣で所はれることを知つてゐた。そしてこの場合もそれが行はれ得ることを知つてゐた。で、彼は、仕事につくことが得策であることを知つた。

「それぢや、一服したらやると、チーフメイトへ返事して来てくれ」と、諷なくストキが承諾したので、躍り上つたボーソンはデツキへ上つて行つた。

藤原は、西澤と、波田とに、形勢は全く不利であるから、これは時期を見なければいけない、これほどの少数で、完全に勝つためには機會を握ることが第一だ、その時は今ではない。だから、その時を待つて力を示すために、今は忍んだ方がいゝ、それに今はなんでもないことなんだからと、種々と話をした。

「だが、今はいゝ時だがなあ、正月前だし、横濱にはギリギリに歸れるかどうか、と云ふ時なんだからなあ。條件が揃つてゐるんだがなあ、たい冬であるつてことが悪いだけだ。ボーイ長は雇入れなしで負傷させて打つ捨てであるし、俺達は、全く馬車馬か奴隷かで甘んずるなら、それでもいゝだらうけれど、――それに、